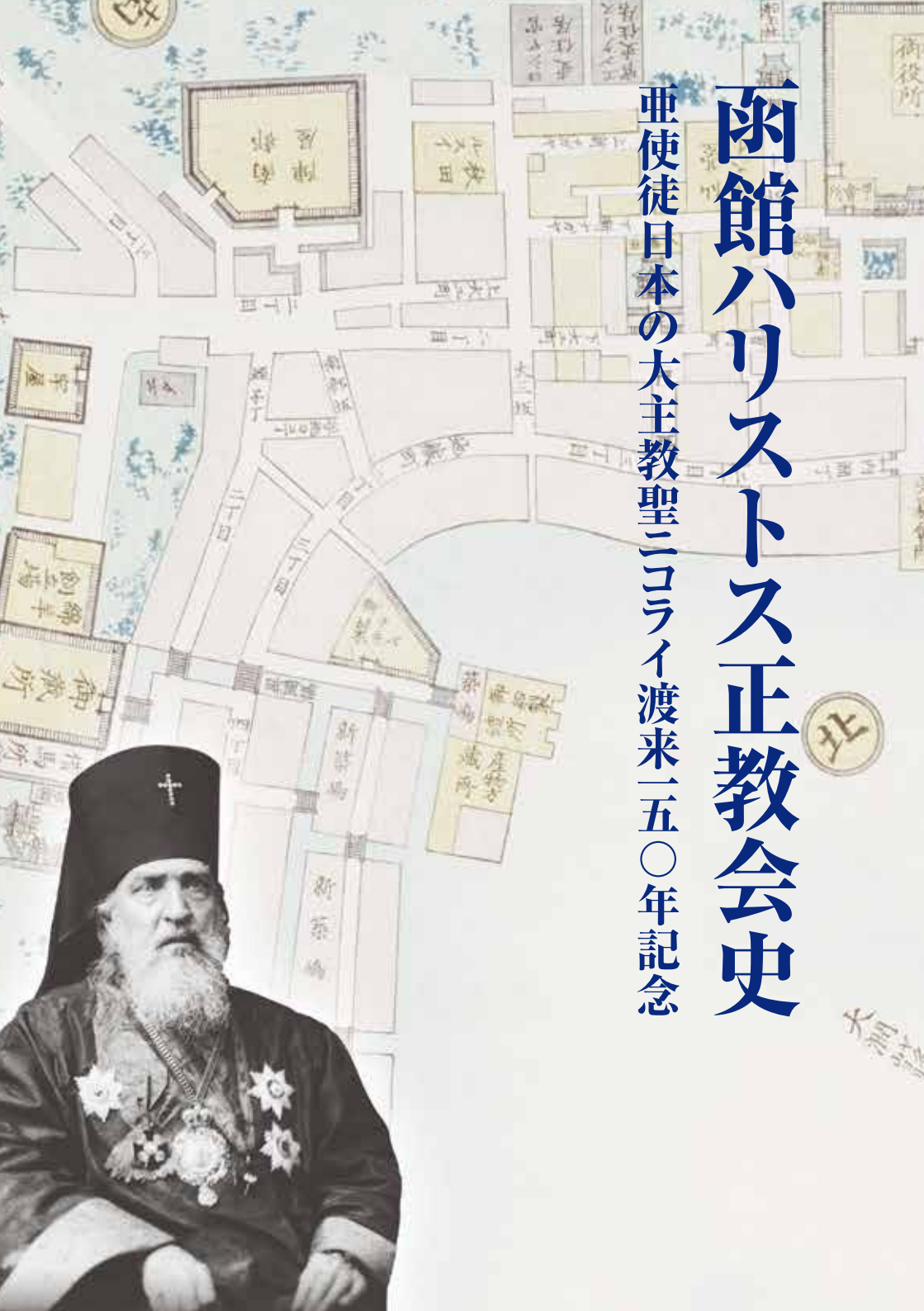


函館ハリストス正教会史

亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来二五〇年記念



大日本正教會略圖

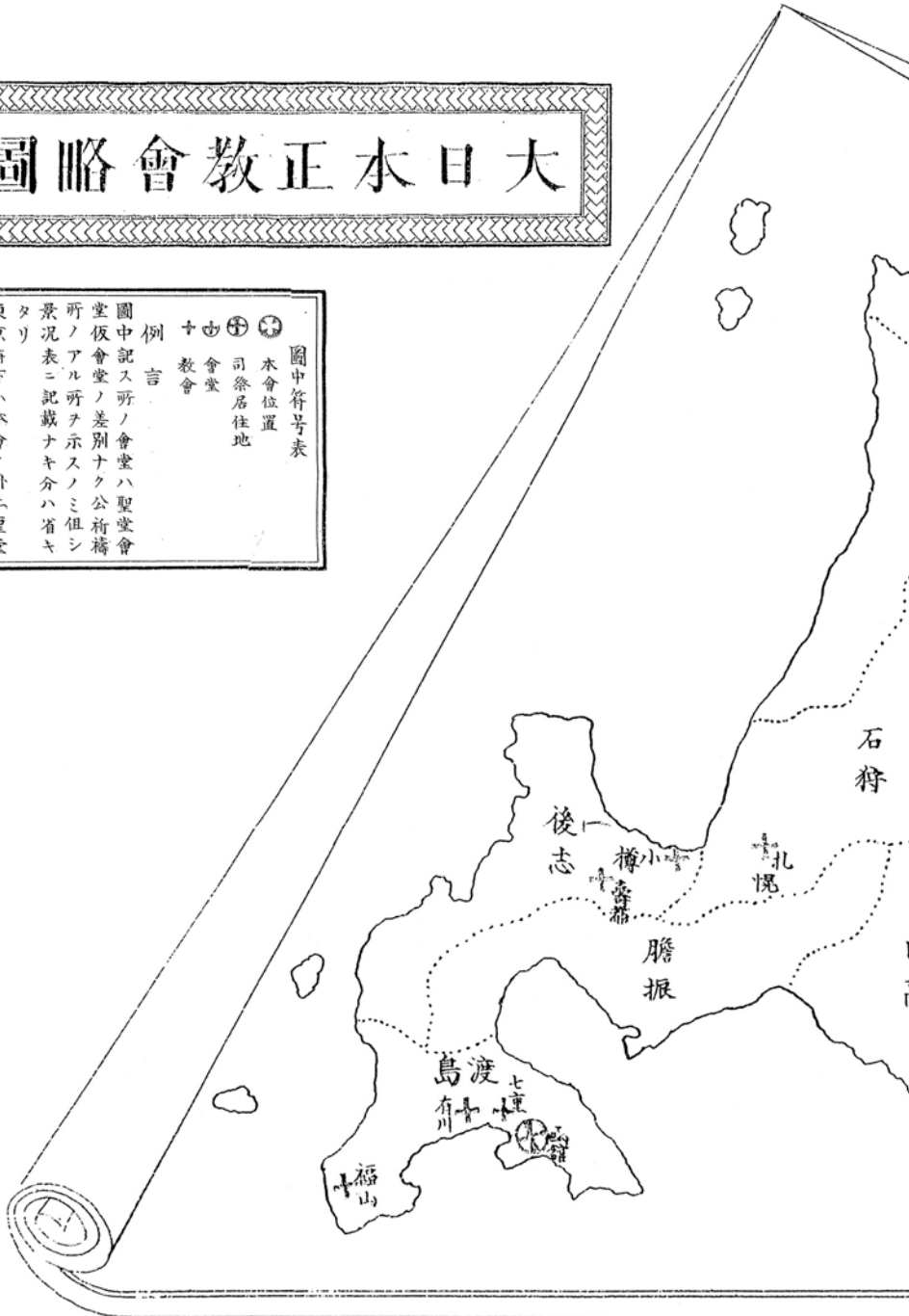
圖中符号表

⊕ 本會位置
⊙ 司祭居住地

⊖ 教會堂

例言

圖中記ス所ノ會堂ハ聖堂會堂
 坂會堂ノ差別ナク公禱禱所
 ノアル所ヲ示スノミ但シ景況
 表ニ記載ナキハ省キタリ
 東京府下ハ本會ノ外ニ聖堂七
 會堂アレド紙幅ノ狹隘ナル
 チ以テ記セス



※「大日本正教会公会議事録」(明治15年)より



天塩

北見

十勝

釧路

根室

千島

函館ハリストス正教会史

亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来一五〇年記念

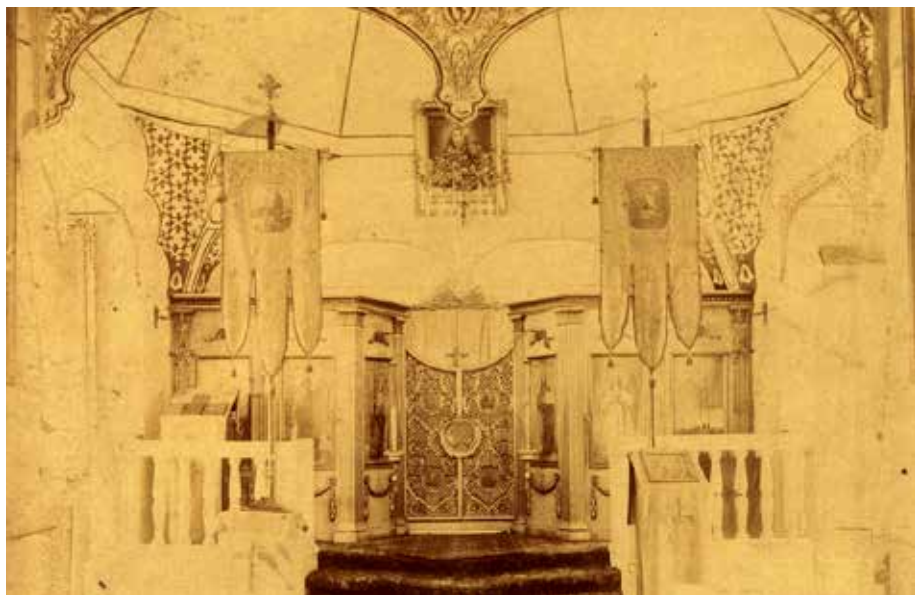
函館正教会
幾星霜



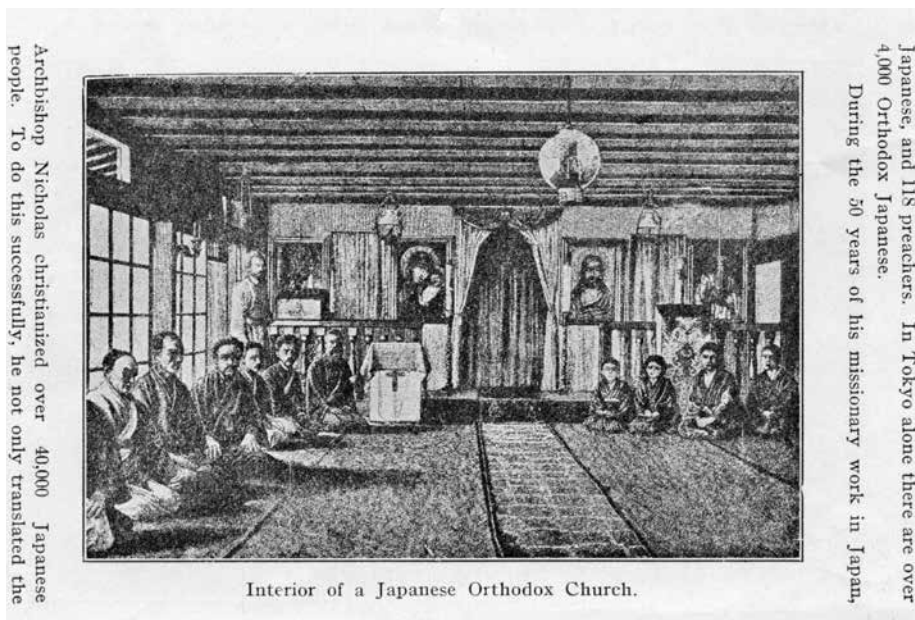
1 箱館復活聖堂〔初代聖堂〕外観



2 正門より箱館復活聖堂〔初代聖堂〕を臨む



3 箱館復活聖堂[初代聖堂]内観



Archbishop Nicholas christianized over 40,000 Japanese people. To do this successfully, he not only translated the

Japanese, and his preachers. In Tokyo alone there are over 4,000 Orthodox Japanese. During the 50 years of his missionary work in Japan,

Interior of a Japanese Orthodox Church.

4 英語の雑誌に掲載された日本の正教会聖堂内部(ニキタ近藤神父遺品)



6 大主教聖ニコライ 1907年頃



5 箱館渡来当時の聖ニコライ



7 願乗寺川より函館山を望む(山腹に初代聖堂が見える) 1870年代



8 バトル山懸神父時代の信徒たち



9 聖ニコライと日本各地の神品 1895年頃



10 2代目聖堂（現在の聖堂）の成聖式 1916年



12 聖堂成聖10周年記念式典 1926年



11 建設中の聖堂 1915年



13 函館ハリストス正教会復活聖堂



14 函館山中腹から見た聖堂



15 聖堂内観



16 信徒会館 (2006年度函館市都市景観賞選定)



17 司祭館



18 函館ハリストス正教会墓地

函館ハリストス正教会史
——
目次

第一部 函館ハリストス正教会のあゆみ

第一章 安政から明治

- 一 箱館開港 8
 - 二 初代ロシア領事ゴシケーヴィチの着任と初代教会 10
 - 三 聖ニコライの着任 15
 - 四 ロシア病院と新島七五三太(襄) 20
 - 五 最初の洗礼機密 23
 - 六 誦経者サルトフ／ロシア人墓地／ゴシケーヴィチ領事の帰国 26
 - 七 仙台藩士の来函／聖ニコライの一時帰国 31
 - 八 宣教団長聖ニコライによる福音伝道開始 34
 - 九 修道司祭アナトリイ(チハイ)の時代 38
- 一八七二年(明治五)～一八七九年(明治一二)
- 一〇 司祭テイト小松韜藏の時代 49
 - 一一 一八八二年(明治二五)～一八九一年(明治二四)
 - 一二 司祭ペトル山懸金五郎の時代 58
 - 一三 一八九一年(明治二四)～一九〇〇年(明治三三)
 - 一四 臨時管轄司祭ペトル飯野成章の時代 68

- 一九〇〇年（明治三三） 一〇月～一九〇一年（明治三四） 九月
一三 司祭アンドレイ目時金吾の時代 68

一九〇一年（明治三四）～一九二二年（明治四五）

第二章 大正から昭和（終戦まで）

- 一 司祭モイセイ白岩徳太郎の時代 111

一九二二年（明治四五） 八月～一九四一年（昭和一六） 一二月

- 二 司祭イアコフ藤平新太郎の時代 168

一九四二年（昭和一七） 二月～一九四六年（昭和二一） 一月

第三章 戦後から新たな時代へ

- 一 司祭ニキタ近藤昇太郎の時代 180

一九四七年（昭和二二）～一九五九年（昭和三四） 七月

- 二 司祭イアコフ出原惣太郎の時代 192

一九五九年（昭和三四） 八月～一九六一年（昭和三六） 六月

- 三 司祭イオアン厨川勇の時代 193

一九六一年（昭和三六） 一〇月～一九八〇年（昭和五五） 六月

- 四 臨時管轄司祭ロマン大川満の時代 204

一九八〇年（昭和五五） 八月～一九八一年（昭和五六） 七月

五 司祭ニコライ築茂三郎の時代 205

一九八一年(昭和五六)八月～一九九一年(平成三)七月

六 司祭アレキセイ松平康博の時代 218

一九九一年(平成三)八月～一九九四年(平成六)七月

七 司祭アントニイ石動昌夫の時代 220

一九九四年(平成六)八月～一九九五年(平成七)四月

八 司祭イオフ馬場登の時代 222

一九九五年(平成七)十一月～二〇〇八年(平成二〇)七月

九 新たな時代に向かって 231

第二部 函館ハリストス正教会史に寄せて

渡来一五〇年を祝して 238

聖ニコライ渡来一五〇年を迎えるに当たって 241

函館ハリストス正教会史発刊に寄せて 242

私と教会の出会い 243 聖堂での祈りの四〇年 245

聖堂公開への道 246 感謝 248

ハリストス正教会との出逢い 249 父から受け継いだ信仰

教会の思い出から 253 251

第三部 函館ハリストス正教会の諸相

重要文化財としての復活聖堂 258

函館ハリストス正教会のイコンに見る「聖ニコライのイコン観」 277

函館とハリストス正教会 —— 架け橋の人々 —— 290

在箱館初代ロシア領事「ゴシケーヴィチ」 296

日本人最初の司祭「澤邊琢磨」 298 プラントハンター「須川長之助」 302

ロシア語学校の設立と函館ハリストス正教会 307 露 探 310

旧教徒と白系ロシア人 314 函館ハリストス正教会ゆかりの人々 318

年表 参考・引用文献 写真・図版一覧

函館ハリストス正教会関係年表 322

函館ハリストス正教会復活聖堂聖鐘関係年表 344

参考・引用文献 345

写真・図版一覧 362

あとがき 364

「函館ハリストス正教会史」刊行に寄せて

仙台の主教 セラフイム

聖ニコライは船上から初めて日本の山々を望んだ時の思いを次のように記している。

「神の福音を受くる事を希望して今日まで福音の宣傳者を待つて居った約地やくち―是れ自分の花嫁であると感じた」（回想の日本」大主教ニコライ師演説集）。神の摂理によつて日本の「光照者」となった聖ニコライが初めて踏んだ日本の地こそ函館であった。聖ニコライの後継者であるセルギイ府主教は、日本正教会の伝道はここから始まったのであり、「日本正教会の揺籃ウイフレム」としている（「正教新報」七一―号 M43・7・15）。

聖ニコライの伝道により初めて信者を生み出した函館正教会の歴史は、日本正教会の歴史と重なる。聖ニコライの五十年に渡る「約地」日本での活動の原点が函館であり、基本的な宣教方針はここで固められた。

約十二年間をこの地で過ごした聖ニコライが祈り、学び、宣教をし、生活した場所こそが現在の函館正教会の境内地である。見た風景さえも時代を超えて同じであり、我々もこの場所で同じ体験をしなければならぬだろう。

聖ニコライの渡来百五十年を記念して函館正教会の先人たちの歩みが綴られたことは意義深い。聖ニコライの初期の活動の詳細が新資料により明らかにされ、さらに福音という播かれた種が教会という体に育ち、時代を生き抜いて来た記録は、今の我々に多くのことを教える。

函館正教会が日本正教会にあつて特別の位置と役目を荷つていることを教会史から学び、自覚していくことを願つてやまない。

第一部 函館ハリストス正教会のあゆみ

第一章 安政から明治

一 箱館開港

—— ロシア史の中でキエフが「ロシアの町々の母」と呼ばれているのになぞらえていえば、「函館のハリストス正教会は、まさに、「日本の正教会の母」と呼ばれるにふさわしい」——

「函館²は、日本で最初の正教会の聖堂が建てられた街である。

なぜ、函館がそのような場所となったのか。それは幕末の日本をとりまく諸外国の情勢と無縁ではない。当時、最初に箱館に開港を求めてきたのはアメリカであった。アメリカは一八二〇年（文政三）頃、カムチヤツカから千島列島にかけて、鯨がたくさんとれる漁場を発見していた。津軽海峡を通過するアメリカの捕鯨船にとって、箱館は恰好の停泊地であった。

一八五四年（嘉永七）、幕府はアメリカとの間に日米和親条約を締結し、アメリカの船舶への薪水給与のため、下田と箱館を開港することになる。条約によれば開港は翌年からであったが、アメリカ側全権であったペリー（東インド艦隊司令長官）は、神奈川で和親条約を締結すると早速同年四月、ポーハタン号に乗船して箱館に入港した。姿見坂下において、アメリカの船舶への便宜、宿舎、乗組員の遊歩の自由など箱館での対応を協議したその場所には、今日、「ペリー会見所跡」の案内パネルが建っている。

ペリー来航の後、同年秋には、ロシアの使節プチャーチンがディアナ号に乗船して箱館に来航した。プチャーチンを全権とするロシア帝国は一八五五年二月七日、伊豆の下田で幕府と日露和親条約を締結する。この条約で両国は、ロシア船の補給のために箱館、下田、長崎を開港することと、ロシア領事を日本に駐在させることを取り決めている。

ロシアが箱館開港を望んだ理由は、ロシア艦隊がロシア極東海域における海上輸送の円滑化をはかるために日本の不凍港を必要としており、箱館は食糧や石炭を補給し、休養をとるために不可欠の寄港地だったからである。当時のロシア極東海域では、ニコラエフスクが主要港であったが、冬期間はサハリンとの間の宮海峽が凍結して使用できなかった。ウラジオストクには、この頃まだ街が形成されておらず、単なる湾であった。

ちなみに、ロシア最初の遣日使節ラクスマンは、既に一七九三年（寛政五）に大黒屋光太夫らを連れて箱館に寄港している。

一八五八年（安政五）、幕府は列強五か国（米、英、仏、露、蘭）と修好通商条約（安政の五か国条約）を締結し、箱館、兵庫、神奈川、長崎、新潟を貿易港として開港することとなった。箱館の開港は翌一八五九

年（安政六）六月二日（新暦七月一日）である。現在、七月一日は函館港の「開港記念日」となっている。

貿易港の開港に先立ち、先の日露和親条約により、一八五八年（安政五）一月には、初代ロシア領事ゴシケーヴィチが箱館に来航し、実行寺に仮止宿した。イギリスは、一八五九年八月に領事ホジソンが初代総領事オールコックと共に箱館にやってき



19 初代領事ゴシケーヴィチ

て、称名寺に仮止宿、アメリカは、ゴシケーヴィチより一年早い一八五七年（安政四）に貿易事務官ライス（一八六五年一月、正式に箱館駐在の初代アメリカ領事に就任）が浄玄寺に仮止宿することとなる。

称名寺、実行寺、浄玄寺は、一八七九年（明治一二）の大火で焼失して現在地へ移転するまで、現在のほぼ弥生小学校の敷地辺りに門を並べて建っていた。

このようにして、箱館は外国に門戸を開くこととなり、その後市中に居留する外国人の数が増えるにつれて、外国の衣食住などの文化、宗教、医療、技術などがもたらされ、先進的な活気のある街となっていく。

二 初代ロシア領事ゴシケーヴィチの着任と初代教会

——「ロシアの風」が箱館の町に吹き始めた³——

一八五八年（安政五）、箱館に着任し、一八六五年（慶応元）、箱館を離れるまでの七年間を初代ロシア領事として勤めたゴシケーヴィチとは、どのような人物だったのだろうか。

箱館に着任するまでの略歴は次の通りである。

ゴシケーヴィチ（イオシフ・アントノヴィチ）は一八一四年、ミンスク郊外（現在のベラルーシ共和国ゴメリ州）で司祭の家庭に生まれる。ミンスク神学セミナーを優秀な成績で卒業し、サンクトペテルブルク神学アカデミーに入学、一八三九年に卒業した。卒論のテーマは「痛悔機密の歴史的考察」であった。一八三九年から一八四八年までロシア正教会中国宣教団に在籍し、中国から帰国した後、一八五〇年よりロシア

外務省アジア局に勤務する。一八五三年（嘉永六）パラダ号で日本を訪れるプチャーチンの使節団通訳として来日し、一八五五年二月七日、下田における日露和親条約締結に同席した。一八五七年、ロシア皇帝の許可を得て日露辞典「和魯通言比考」を刊行（デミードフ賞を受賞）、同年、皇帝の命により在日ロシア帝国領事の辞令が出される（ゴシケーヴィイチについては、第三部「在箱館初代ロシア領事『ゴシケーヴィイチ』参照」。

ゴシケーヴィイチ領事一行を乗せたロシア船ジギット号が箱館港に入港したのは、一八五八年（安政五）一月五日のことであった（露暦一〇月二四日）。ゴシケーヴィイチ領事、領事の家族、書記官オワンデル、医師アルブレヒト、医師の妻、修道司祭フィラレート、海軍武官ナジモフ大尉、下男四人、下女二人で、一行は一五人であった。当時一五人という規模で領事館員を派遣してきたのはロシアだけで、「他国にはない充実したメンバー」であった。しかし一五人全員を実行寺に泊めるわけにはいかず、高龍寺にも分宿することとなった。

この一行一五人の中に見える「修道司祭フィラレート」とは、シベリア小艦隊所属の司祭で、一八六一年（文久元）春頃まで、在日本領事館付属聖堂のいわば臨時管轄司祭の立場で奉職している。実は、ゴシケーヴィイチが初代領事の辞令を受けた二か月ほど後に、領事館付属聖堂の初代管轄司祭としてペテルブルクの宗務院から辞令を受けた長司祭ワシリイ・マホフは、領事一行と一緒に日本に向けて出発することができなかった。つまり領事一行がペテルブルクを出発した時、一行の中に領事館付属聖堂管轄司祭の姿はなかったのである。ニコラエフスクまで来た時、日本を目前としたゴシケーヴィイチは、東シベリア沿海州軍務知事カザケーヴィチ海軍少将に、領事館付司祭の件を相談したものと思われる。その答えとして、カザケーヴィチ海軍少将がゴシケーヴィイチ領事に宛てた書簡は次のようなものである⁴。

函館のロシア帝国領事へ

九月一〇日付け第二六号による貴官からの文書に従って、私は直ちにコルヴェート・クリペール艦隊「シベリア小艦隊」で「ニコラエフスク」に到着した修道司祭フィラレートに、アメリカカ号に乗船して日本に出発し、在函館の我が国領事館付きとして、同領事館の司祭が任地に到着するまで残留するようにと命じた。以上、謹んで報告するものである

海軍少将 カザケーヴィツチ

翌一八五九年（安政六）正月、実行寺境内地に三間×五間一五坪の「祭祠堂」と呼ばれる祈祷所が領事一行のために普請された。また同年六月、領事館付属聖堂の初代管轄司祭である長司祭ワシリイ・マホフがロシア船「アスコリド」号で着任した。同じ船で、長司祭ワシリイ・マホフの息子、イワン・マホフも箱館に來航した。イワン・マホフは外務省アジア局に勤務する九等文官であったが、父ワシリイ神父の箱館行きが決定した後、父を助ける誦経者（一説には堂役）として父の任地へ派遣されることが決まった。一八六一年（文久元）に箱館で印行された子供用のロシア語教科書「ロシヤノイロハ」を書いたのは、このイワン・マホフである。

ゴシケーヴィチ領事は、一八五九年七月一九日付の外務省アジア局への報告書の中に、ムラヴィヨフ・アムールスキ―伯爵（東シベリア総督）の艦隊に乗って、領事館に着任を命じられた長司祭マホフとその息子のマホフ九等文官が、六月一日（露曆）に箱館に到着したと書いている。

ちなみにこの「アスコリド号」の航海士の一人が、この時、箱館で永眠しており、現在の船見町にある「ロ



- 21 ゴシケーヴィチ領事より外務省アジア局への報告書（マホフ神父と息子の九等文官マホフが同じ船で箱館に着いたことが記されている）
（伊藤一哉氏〈北海道新聞〉提供）
- 20 宗務院から海軍省への連絡文書のコピー（箱館の領事館付属聖堂管轄司祭として長司祭ワシリイ・マホフを任命したことを連絡している）
（伊藤一哉氏〈北海道新聞〉提供）

シア人墓地」に埋葬された第一号となっている。墓碑には「父と子と聖神の名によるアミン この碑の下に戦艦アスコリト号航海士 神の僕ゲオルギー・ポリスケウ イッチの遺体を葬る 一八五九年六月二六日死去 行年三五歳」とある。

ゴシケーヴィチ領事は、本国政府よりロシア領事館建設用地を探す際の条件を与えられていた。それは、市街地に位置し、然るべき快適さを備え、領事館の付属建物などを建設するために十分な広さがなければならないというものであった。一方、奉行所はロシア領事館建設用地として、当時は郊外であった現在の函館市役所近辺の地峡に土地を与えようとしていた。結局ゴシケーヴィチが本国からの指示に適合候補地として自身で見つけた土地は上大工町、即ち現在の元町の函館ハリストス正教会の境内地であった。奉行所（現在の旧函館区公会堂の場所）から三〇〇メートルほどのところにあり、箱館港とその周辺の全景、さらには先の東の海まで見渡せる場所である。奉行所との根気強い交渉の結果、ゴシケーヴィチは初志を貫徹し、ここが日本で最初のロシア領事館の土地



22 ロシアの国旗が見えるのがロシア領事館 現在のハリストス正教会の場所 「奥州箱館之図」(全体と部分拡大)

となり、日本で最初の正教会の聖堂が建てられた土地となったのである。

一八六〇年(万延元)、現在の函館ハリストス正教会の境内地に、聖堂が移築され、領事館、司祭館、学校などが建てられた。初代聖堂は木造で、一八六三年(文久三)の聖ニコライの報告⁵によれば、「縦横等しい長さの十字架の形をしており」、鐘楼があり、鐘楼には日本の鋳物工場で作られた大鐘が一つ、小鐘が四つあった。この鐘は聖ニコライが、ゴシケーヴィチ領事の指示でロシア軍艦から募金した硬貨を溶かして鋳造したものである。日本人が五つの鐘の鳴らし方を習得するまで、聖ニコライは入堂する時に自分で鳴らし、退堂する時にまた自分で鳴らしていた時期もあった⁶。この聖堂は主の復活を記憶して建てられた「復活聖堂」であった(初代聖堂建築の詳細と現在の二代目聖堂の建築については、第三部「重要文化財としての復活聖堂」参照)。「かつてこの国に存在していたけれども滅ぼされてしまったキリスト教がふたたびこの国に現れてきている」という意味をこめて「ゴシケーヴィチ領事がこの名を与えたのであった。

聖堂の移動が完了したのが一八六〇年(万延元)の秋で、同年一月一三日、修道司祭フィラレートによって成聖式が行なわれ、また最初の聖体礼儀が行なわれた⁷。

三 聖ニコライの着任

—— そうだ、自分が行くべきではないか、とわたしは心に決めました。その日の夕方の祈禱のときには、
すでにわたしの心は日本に向かっていたのです。——

領事館付属聖堂初代管轄司祭ワシリイ・マホフは着任当時六〇歳を超える高齢で、心臓病の悪化により体調もすぐれず、既に着任した年の秋、宗務院宛てに解任の嘆願書を提出している。ワシリイ・マホフ神父は一八六〇年（万延元）七月（一説に翌年の早い時期）に箱館を離れた。箱館の領事館付属聖堂は、新しい管轄司祭を必要とすることとなった。

ゴシケーヴィチ領事はその経歴からも解るように、司祭の家庭に育ち、自らも高等神学教育を受けた人物であったので、職務は外交官であつても、日本での宣教の可能性を見極め、配慮することを忘れなかった。彼は領事館付属聖堂の管轄司祭として着任する人間に、日本での宣教師として相応しい人物であることを求めた。ゴシケーヴィチは宗務院への手紙の中で、新しく着任する司祭は「神学大学の課程を卒えて、単に宗教的活動のみでなく、学問においても有能であり、さらにまたその日常生活によって、日本人に対してのみならず当地に居留する外国人にも、わが国の聖職者について良い印象を与えることのできる、そのような人物」でなければならぬと記した。

ゴシケーヴィチの要請を受けて、宗務院は当時のロシア帝国内の全ての神学大学（神学アカデミー）に公募文を出した。ペテルブルク神学大学で公募に応じた者は一〇人から一二人であつたという¹⁰。ゴシケーヴィ



23 来日当時の聖ニコライ

イチ領事の願いを聴き入れて主・神が日本へ遣わした人物、それが修道司祭ニコライ・カサートキン（一九一二年、東京神田駿河台にて永眠。一九七〇年、「亜使徒日本の大主教聖ニコライ」として列聖される。本章では以下「聖ニコライ」と記す）であった。

一八六〇年（万延元）八月、聖ニコライは日本へ向かって出発する。

同年一〇月にニコラエフスクまで辿り着いた聖ニコライは、この地で越冬することとなる。「日本正教傳道誌」（以下本節の引用は同書から引用した）には「此越年こそ、これ実に主・神が師をここに留めて、彼をして其前途に於ける異邦宣教の希望を益々堅固ならしめ、其心を練磨せしむるの好機会なりしなれ」と記されている。それというのも、聖ニコライはこの地において異邦宣教の大先輩であるカムチャツカ、クリル及びアレウト教区の大主教インノケンティ（ヴェニアミノフ）に親しく接し、薫陶を受ける機会を得たのである。大主教インノケンティはアレウト語（アリユート語）とヤクート語に聖書を翻訳し、カムチャツカ、ヤクート、プリアムリーエ、北アメリカの諸地方の最初の主教となった人である。一八六八年にモスクワ及びコロムナの府主教となり、一八七九年に永眠した。一九七七年、シベリア及びアメリカの使徒としてロシア正教会及びアメリカ正教会において列聖されている。聖ニコライ二四歳、聖インノケンティ六三歳の時の出会いであった。

日本の隅々に至るまで主の福音を伝えようという希望を胸に、一八六一年（文久元）七月一日、聖ニコライはロシア船「アメリカ号」にて箱館港に入港する¹¹。ペテルブルクを発つてから、約一年が経っていた。

聖ニコライの箱館時代は、遠からぬ未来において着手すべき日本伝道の準備期間であった。日本語を学び、広く和漢の書を読み、歴史・風俗、社会制度なども研究した。そして日本を知れば知るほど、伝道の希望は



Святитель Иннокентий (Вениамин)
с сыном Гавриилом и внуком Евсебием

24 府主教インノケンティ(ヴェニアミノフ)、
息子ガヴリイル、孫エフセヴィと共に

信念となり、その信念はさらに深まっていくのであった。

箱館に着いてからわずか三年程の間に読んだ書物の中に「古事記」、「日本書紀」、「日本外史」、「大伴金持忠孝図会」などの書名を見ると、聖ニコライの尋常ならぬ才能に驚嘆するが、そこにはまた尋常ならぬ忍耐と努力があった。

ニコラエフスクにおいて、聖ニコライに異邦伝道の手ほどきを授けた大主教インノケンティ(ヴェニアミノフ)は、翌一八六一年(文久元)九月、箱館に寄港し、聖ニコライとの再会を果たしているのだが、その折、聖ニコライの机上にフランス語の書籍があるのを見て、「目下当地に余り役にも立たぬ此外国語の書籍は悉く皆放棄してしまつて専心一意日本語研究に従事する様致すのが宜しい」と言った。

聖ニコライはこの言葉を深く心に刻み、後日、既にモスクワの府主教となつていたインノケンティ座下に次のように報告している。

その後、今日に至るまで数年間、日本語研究について種々工夫を凝らし一方ならぬ苦心をした次第です。日本語は世界各国の国語中、最も困難なるものであつて、初めてこれを研究する外国人にとつては実に解し得べからざる謎同然です。しかし、恒久忍耐を以てすれば、いかなる困難も征服し得るものです。¹²⁾

また、一昼夜が一〇〇時間であつたなら一〇〇時間全てを日本語研究に費やすであらうに、一昼夜が一〇〇時間でなくて残

念だと書いている。さらにこの手紙の中で、聖ニコライは、漢文より福音書、使徒行実、使徒七公書、聖使徒パウエルの或書札、聖史提要、東教宗鑑、日誦経文を訳し、教会スラヴ語より帰正式、洗礼式等を訳したことを報告している。

また、日本人のためのロシア語教育にも携わり、短期間にして多くの成果を上げている。この方面の活動は、ロシア領事館が当初より積極的に支援していた。初代領事ゴシケーヴィチの配慮により、イワン・マホフが箱館奉行配下の役人の子弟たちにロシア語を教えたのが始まりで、その頃は、役所で働くロシア語通訳の養成が主目的であった。イワン・マホフ帰国の後は、聖ニコライが学校の先生となった。一八六三年（文久三）には、聖ニコライの下にはロシア語を学ぶ年齢の様々な六人の日本人の子弟がいたという。ゴシケーヴィチが一八六五年（慶応元）に帰国した後も、後任の領事ビュツツオフが聖ニコライのロシア語の授業のために必要な教科書を外務省アジア局に無心するなど支援を続けている。一八六九年（明治二）に聖ニコライ自身が外務省アジア局に提出した報告書には、「露日会話集」を作成し、「ロシア文法」を日本語に翻訳し、さらに「露日辞書」の編纂を行なっていることが記されている。¹³

一八六六年（慶応二）、聖ニコライは嵯峨寿安や小野寺魯一の協力を得て、日本語とロシア語を併記した教科書「魯語和訳」を編纂している。¹⁴

一八六八年（明治元）に聖ニコライが作成した「宣教規則」には「若き人を魯語を教へて魯西亜の宗学校に遣すべし、此の目当は学業出来の上、日本に帰り学校を建て、宗法と其他の学文を教ふ、其外宗教の書籍を翻訳す、又別の若き者を魯西亜の医学校に遣し、医学成就の上帰て病院を建て治療し且学校を建て医学を取立る事」とある。この頃既に聖ニコライには将来現実のものとなる「翻訳局」が見えていたのであろう（当時の正教会が箱館におけるロシア語教育に果たした役割については、第三部「ロシア語学校の設立と函館ハ

リストス正教会」参照)。

初代領事ゴシケーヴィイチも二代目の領事ビュツツオフも、様々な面から聖ニコライを支援した。特にゴシケーヴィイチにとって、聖ニコライはペテルブルク神学大学の後輩である。聖ニコライは後にロシアへの手紙の中で次のように記している¹⁵。

彼「初代領事ゴシケーヴィイチ」は当時既に白髪の老人として、余を遇する実に父の如くなりき、而して余が其家庭に臨むや恰かも生家に在るが如く、……余の望む所の人には必ず紹介するの労を惜しまざりき。或時彼が毎年の例に依り外交事務を帯びて、江戸表に上ることありし際の如き、余を携へて当時幕府の枢機に干與せし老中等に余を紹介せし事さへありき。余が日本人に対する其基督教傳道の第一着手は抑も彼が在職の時代なりしなり、而して彼は誠意を以て此の擧を賛成し、且之を喜びつゝありしなり。

ゴシケーヴィイチは、かつて領事館付属聖堂付司祭を求めて宗務院に宛てた手紙の中で自らが記した宣教師の人物像を聖ニコライに見出し、主・神に大いに感謝したことと察せられる。

二代目領事ビュツツオフも聖ニコライに懇意に接した。一八七二年(明治五)、聖ニコライが宣教団の本部を東京に置くべく上京し、現在の神田駿河台の土地にそれを実現できたことについて、聖ニコライは「我が宣教館が東京の中央なる高台の上に於て、他に求むるも得べからざる最良の地位を占むるを得しは、是れ一にビュツツオフ氏の厚意と親善とに負ふ所ありしなり¹⁵」と記している。

四 ロシア病院と新島七五三太（襄）

ロシアが在日領事館のために派遣した一五人の人員の中に司祭の他、医師が含まれていたのは前述した通りである。ロシアにとつて、領事一行の中にいる司祭の存在意義が、決して自国領事館の敷地内だけを視野に入れたものではなかったのと同じように、医師も領事館員だけのためのものではなかった。ロシアは自国の医療技術をわけへだてなく当時の日本人に伝授し、その恩恵を分かち合おうとした。

ゴシケーヴィイチは着任の翌一八五九年に、当時の亀田川万年橋付近に仮のロシア病院を開くも、一八六一年（文久元）に焼失、その後、領事館敷地に隣接して（現在の日本聖公会函館聖ヨハネ教会の土地）に一八六三年（文久三）、ロシア病院を建てる。この病院は一八六六年（慶応二）に焼失するまで多くの日本人の治療に当たった。「ロシア病院の開設によつて日本人民への医療における恩恵は、言葉に言い尽せないほど数多くある。なかでもロシア病院の存在は、日本人による箱館医学所の設立や活動に大きな弾みとなったばかりか、それ以後、日本独自の医療に大変革をもたらしたことは特記に値する¹⁶」といわれるように函館の医療に大きな影響を及ぼした。

初代医師アルブレヒトから医学を学んだ日本人は深瀬洋春、永井玄栄、下山仙庵らで、一八七四年（明治七）に頓死した誦経者サルトフの病理解剖の際、立会人となった深瀬鴻堂は、深瀬洋春の弟である。

一八六四年（元治元）、日本の近代化とキリスト教研究のために先進諸国へ渡ろうと、その方法を模索していた新島襄¹⁷が箱館にやってくる。箱館に着いた新島は紆余曲折の後、聖ニコライの前に姿を現す（同年五



26 「新島襄 海外渡航乗船之 處」の碑 (函館市大町)

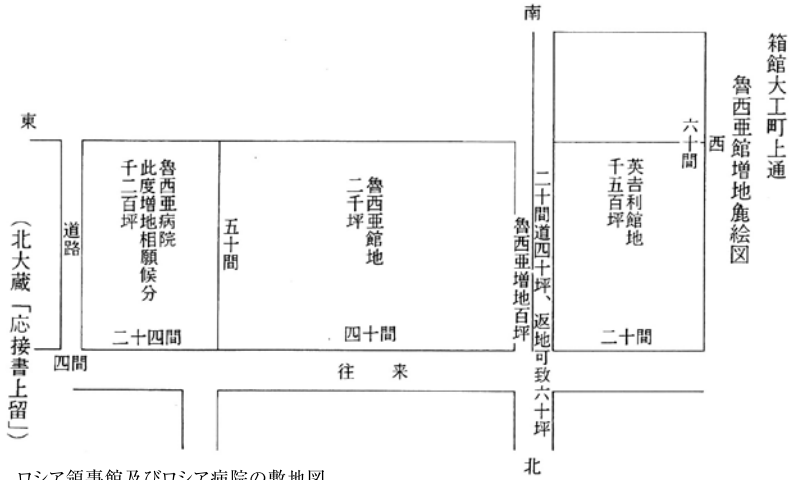


25 新島襄手描きのロシア病院見取り図

月三日)。そして六月一五日に伝手あつてアメリカ商船ベルリン号に乗り込み箱館を出帆するまでの間、ロシア領事館の敷地内に滞在し、聖ニコライの日本語の家庭教師を勤める傍ら、ロシア病院で眼の治療を受けている。ロシア病院について新島が観察し、記したところは次の通りである¹⁸。

この病院には診察室が一間所、病室（四人部屋或いは七人部屋）が十二室、士官及びマドロスの部屋が

各一室、患者が散歩しうる花園があり、当初入院するためには沖之口の役所に届けねばならなかつたが、最近直接医師に診てもらい、入院が決められるようになった。入院すると、ベッド、食卓、蒲団、襦袢、股引まで貸与され、三度の食事は病気の種類によつて異なるが、共通の食物は、煎た牛肉を細くたき、丸め、豚の油にて揚げた物或いは鶏卵、ソップ（牛骨を十分の水で煎じ、莖等を刻み入れ、其に僅かの塩を加えたもの）等だった。医師は朝七時に出勤して入院患者を回診し、後は外来患者を診察する。施薬は午後二時から四時まで。ロシア皇帝から経営維持費が全額支給されるので、乞食のような貧しい者にも病状に応じて高価な薬を与え、唯病気が全快した者の魯人を慕うのを望むだけである。右様の手厚い取扱いだが、一切謝金を要せず、全く施しである



27 ロシア領事館及びロシア病院の敷地図

新島には「函楯ニ於テニコライニ寄スルの書」と封筒に表書きされた書簡が残っている。¹⁹ 聖ニコライ宛てに当時の心中を吐露したものであるが、渡そうとして結局は渡さなかったものと見られている。当時の日本の政治の乱れ、民衆の困窮した生活を憂い、その原因は人々が神の道を知らないからであると、無理やり富国強兵を唱えてもヨーロッパ先進諸国には敵わないのだから、まずはキリスト教を学んで己を磨き、「独一真神の道」を知れば、国家の情勢は自ら整っていくであろうと書かれている。

新島は五月二四日に聖ニコライに密航の意図を打ち明けたが、思い留まるように説得される。六月一四日、新島がロシア領事館を去る日、聖ニコライは留守でいなかった。新島は短い札状を残してロシア領事館を後にした。

六月一五日、新島が既にベルリン号上で書いた日記には、「米利堅船ニ乗し箱館港を出帆す。但沢辺数馬富士屋卯之吉の周旋に依而し此之行を得たり。此二友骨に徹し忘るべからず。」²⁰と記されている。

ここに記されている「沢辺数馬」こそ、後に箱館において聖ニコライが洗礼した最初の日本人の一人であり、日本正教会の

最初の司祭となったパウエル澤邊琢磨である。

ちなみに当時のロシア領事館とロシア病院の敷地については次の通りである。「函館市史」通説編第一巻に、一八五九年（安政六）から一八六五年（慶応元）までの「外国人居留地坪数並地税調」が掲載されており、その中に「安政六年未年四月貸渡 合坪二千坪一ヶ年地税 洋銀二百四十弗 上大工町 魯領事」とある。

つまり領事館の土地に関しては、最初、一八五九年（安政六）にロシア領事館の敷地として奉行所から貸し与えられた土地は二〇〇坪（五〇間×四〇間）であった。その後、一八六〇年（万延元）に、この土地の西側（現在の遺愛幼稚園側）に更に一六〇坪が増貸されている。さらにその後、ロシア病院建設用地として、領事館の東側（現在の聖ヨハネ教会側）に隣接した二二〇坪（五〇間×二四間）が増貸された。この時に道路敷地として従来の敷地より六〇坪を返還することになり、西側の六〇坪が返還されている。「ロシア領事館及びロシア病院の敷地図」（図版27）が表している通りである。²¹

ロシア病院の敷地については、一八六六年（慶応二）にロシア病院が焼失した後、一八七五年（明治八年）、当時の管轄司祭アナトリイ神父が「二一七号」と呼ばれるこの土地の使用権を奉行所に返上している。

五 最初の洗礼機密

聖ニコライの「箱館からの手紙」²²には、「私が当地へ着いてから四年経つてようやく神は、わたしに一人の日本人をお遣わしになった。……一年後、かれは一人の仲間を見出した。そしてさらに一年経たないう

ちに、かれらは三人めの同志を見出した」との記載がある。

ここで、神が聖ニコライに遣わした「一人の日本人」とは元土佐藩士で神明社宮司の澤邊琢磨、一年後に見出された「一人の仲間」とは金成出身の医師酒井篤礼、そして彼らが見出した「三人めの同志」とは能登半島狼煙村の出身浦野大蔵（立三）である。²³

この三人の中で、前者二人については「日本正教傳道誌」（以下この節の引用は同書による）などに詳しい記述があるが、三人目の浦野大蔵については資料を目にすることがあまりない。浦野大蔵は戸籍上の名前を立三と言い、一八四一年（天保一二）に能登半島の狼煙村で、医師、浦野柳齊の二男として生まれ、二〇歳前後で箱館へ移住した。後に宮古の金浜村に移住して医療に専念することとなる。一八九三年（明治二六）六月、聖ニコライは東北巡回の折、金浜村の浦野大蔵の家に寄っている。大蔵の妻はシカといい、二人の間には子供が七人あった。

話を元に戻すと、神が聖ニコライの下に澤邊琢磨を「お遣わしになった」次第は、次のようなものである。その頃箱館に諸方から集まってきた攘夷主義の浪士たちと親交が深かった神官澤邊は、外国の宗教の司祭である聖ニコライに対して「論難を試み、もし答弁の明確ならざるに於いては、天誅を加うるも亦その所なりと思考」した。そして腰に大小を差し挟み、殺気を含む憤然たる相貌にて聖ニコライの前に現れたのであった。

結局、論難を試みたものの、答えに窮したのは澤邊の方であり、教理を聴けば、キリスト教の神は古来日本人が信仰してきた八百万の神のようなものではなく、天地万有の始原者であるとのこと。澤邊は教理に感じ入り、「一応研究せざるべからず」という結論に至ったのである。

澤邊は聖ニコライのもとに熱心に通い、正教の教義を研究した。それまで澤邊と親交のあった攘夷の志士

たちは、昨日まで邪教排斥のスローガンを共に掲げてきた澤邊が、今やその主義も信仰も一変し、キリスト教を自ら信奉するばかりか、他人にも進んで宣教する様を見て、神明社の宮司は発狂したと思う人もいたというのも、傍から見れば無理もない話である。聖ニコライとの出会いが、純朴な熱血漢澤邊に真理を見出す心の目を開いたのである。

神明社しんめいしゃは現在、幸坂を上りつめたところにあり、山上大神宮やまのうみだいじんぐうと称するが、当時は同じ幸坂の下の方、現在の函館北消防署弥生出張所付近にあった。当時は浄玄寺、称名寺、実行寺が弥生小学校の場所にあったので、そのすぐ上辺りになる。ここから澤邊は領事館の聖ニコライのもとに通った。一八六四年（文久三年）一月、聖ニコライが箱館奉行所に願い出た、澤邊の来訪許可申請の書類が残っている。その表向きの理由は、自分ニコライが「日本文章を学ばんため」というものであった。²⁴澤邊琢磨は、坂本龍馬の従兄弟にあたる山本代七の息子である。

澤邊は、酒井篤礼に真理の神を伝えようと試みる。酒井は「その性質温良にして、しかも剛直、一度その心を決して業を挙ぐるや、専心誠意一切の他事を排して勇進せんとするの気骨ありて、澤邊の敬愛する所の人」であった。一年後、酒井は自ら聖ニコライの下に至り、正教の教理を学ぶこととなる。

同じようにして、浦野大蔵、鈴木富治が正教の教理を聴聞するようになる。

折しも一八六七年（慶応三）、徳川慶喜は政権を奉還して王政の復古を觀るに至るが、キリスト教に対する方針は明治新政府も幕府と同じで、信仰を禁令とした。列国の在日公使らはこれに抗議したが、日本政府はこれを受付けなかった。一八七三年（明治六）になってようやく切支丹禁制の高札が撤去されるが、「一般熟知のことにつき」という歯切れの悪さで、実際にはそれ以降もキリスト教に対する弾圧は暫く続くような時勢であった。箱館では大政奉還により旧奉行が去り、新政府の奉行が赴任することとなったが、新奉行

は京都の公卿ゆえ、キリスト教に対する弾圧は非常に厳しいものとなるだろうという風聞が広まった。もともと窘逐を畏れるような澤邊たちではなかったが、折角日本に播かれた種が無に帰すことを危惧し、彼らは聖ニコライのもとを訪ね、彼らに洗礼機密を授けて、暫く箱館を去らせてくれるよう頼んだ。聖ニコライはこの願いを祝福した。

一八六八年（明治元）五月三〇日、聖ニコライは誦経者サルトフを見張りに立て、司祭館の居間において洗礼機密を行った。後の澤邊の回顧談によると、洗礼は夜行われた。澤邊琢磨はパウエル、酒井篤礼はイオアン、浦野大蔵はイアコフの聖名を受けた。

聖ニコライは、日本で初めて行った日本人の洗礼のことを、モスクワの府主教インノケンティに手紙で知らせた。

受洗後、パウエル澤邊、イオアン酒井、イアコフ浦野、イオアン酒井の妻多（後、エレナ）、娘澄（後、テクサ）、澤邊の従者退蔵は船で青森の大間へ逃れた。そこからイオアン酒井は妻子と共に郷里の金成に向かい、パウエル澤邊とイアコフ浦野は江戸に向かった（澤邊琢磨については、第三部「日本人最初の司祭『澤邊琢磨』参照」）。

聖ニコライは、この年（一八六八年）、彼等三人に洗礼を施すより前に、布教の方針を掲げた「宣教規則」を作成している。聖ニコライの目には、この頃既に日本における正教伝道の展望の青写真が見えていたのである。

六 誦経者サルトフ／ロシア人墓地／ゴシケーヴィチ領事の帰国



28 誦経者サルトフ(写真台紙の裏面に「明治七年函館魯学校教師サルトフ」とある)

最初の日本人三人の洗礼の時、見張りに立っていたという誦経者サルトフは、一八六三年(文久三)、箱館に着任した。

一八七一年(明治四)三月のニコライの日記には、サルトフが休暇をとるので、函館の教会を任せるものがない、と記されている。この頃、一旦ロシアに帰国したようである。

サルトフの再来函は、一八七三年(明治六)の夏頃、東京経由である。既に東京に宣教団の本部を移していた聖ニコライとも再会している。実は、この再来日は、官立函館学校のロシア語教師(開拓使雇教師)となるように請われてのものであった。

経緯は次の通りである。

時の開拓次官・樺太専務であった黒田清隆が、雑居地である樺太統治のためにはロシア語に通じることが不可欠であることを痛感し、ロシア語に通じた官吏育成のため、当時ロシア領事館が開設されていた函館にロシア語の学校を開設しようと、伺書を太政官に提出し、承認される。一八七三年(明治六)二月一〇日、

東京から届いた設置認可書簡の中には「御地居留魯僧ニコライ義倭語をも相通じ、兼ねて書生教授の手續申込書有之義に付、同人を教師に御雇相成候方可然」とあり、「彼の語学を教うる外、教法無用」(語学を教えるだけで、宣教は無用の意)の条件で、聖ニコライが開拓使の御雇教師に推挙されていた。しかしこの頃、聖ニコライは既に函館を離れ、上京していた。そこで白羽の矢が立ったサルトフが官立函館学校に着任してからは、生徒が増え、教育内容が充実し、九月には露語学校とし

て独立開校するに至る。

函館にあつて、サルトフは本業の露語学校の教師として、またその傍ら教会の誦経者として勤め始めたのであるが、その矢先の一八七四年一月二十九日、サルトフは突如永眠する。死因は「劇症の中風で、脳中の血管に出血した為」であつた²⁵。

サルトフは富岡町の路上で頓死したという記述を諸所の書物で目にするのであるが、「これは根も葉もない話で、同日午前十時頃書齋で急に倒れたので、函館病院外科部長エルトリツチ氏と深瀬鴻堂氏が前後往診にきて手当を加えたが、既に事切れていた」とモイセイ馬場脩はその著書「函館外人墓地」に記している（モイセイ馬場脩については、第三部「函館ハリストス正教会ゆかりの人々」参照）。

病理解剖に渡されたサルトフの解剖同意書にサインをし、遺品を引き取り、後始末を行ったのは大町築出島（大町の外国人居留地）でホテル「ニコラエフスク」を営んでいたピョートル・アレクセーエフの妻ソフィヤであつた。ホテル「ニコラエフスク」とは、大町築出島に奉行所からロシア領事ゴシケーヴィチの名義されたホテルである。主人のピョートルは聖ニコライが一八七二年（明治五）に東京へ移るのに先駆けて宣教師の仕事を手伝うために上京したが、間もなく東京で永眠し、聖ニコライによつて横浜の外国人墓地に葬られた。サルトフが永眠した時は、既にピョートルも永眠した後で、ソフィヤが一人でホテルを切盛りしていたのである。ソフィヤは、聖ニコライ上京後、函館教会の管轄司祭となつたアナトリイ神父の下に正学校で教えていたこともある。

そして聖ニコライの日記によれば、なんと「彼女は一八五八年以来日本にいる」というのである。一八五八年（安政五）と言えば、ゴシケーヴィチ領事一行が箱館に着いた年で、一八六一年（文久元）に聖ニコラ

イが箱館に来た時には、既にいたということである。実は、彼女は前述のゴシケーヴィチ領事一行に記載されている「下女二人」のうちの一人であり、彼女とピョートル・アレクセーエフの婚配式は聖ニコライが行っている。²⁶

ホテル「ニコラエフスク」では一八七六年（明治九）から一八七八年（明治一一）頃にダニイル須川長之助、ニキタ倉岡馬之助、エレナ酒井ゑい等が日本人スタッフとして働いている（須川長之助については、第三部「プラントハンター『須川長之助』参照」）。

サルトフは、船見町から函館港を望むロシア人墓地に埋葬された。墓碑には次のように記されている。

「在函館ロシア帝国領事館付属聖堂 読経者 ヴィサリオン・リウオウイッチ・サルトフ 一八七四年一月十七日死去 行年三六歳 主よ彼の霊に安息を与え給え」（日付は露曆）。

ロシア人墓地で、サルトフの隣に在るのがゴシケーヴィチ領事夫人エリザヴェータの墓である。墓碑には「一八六四年九月五日永眠 四三歳」と記されているが、同年の三月四日付の報告書にゴシケーヴィチが「私の妻が死んで、その後すぐ私も病気になる」と書いており、エリザヴェータの永眠日は墓碑に記されているよりも早かったようである。

モイセイ馬場脩の前掲書「函館外人墓地」は、函館外人墓地の墓石を調べてまとめたものだが、その中には次のように記されている。

旧ロシア帝国函館領事館付属聖堂であった函館復活聖堂は、明治四十年の大火で焼失して、大正五年、現在の聖堂の完成を見たが、この際、旧聖堂の焼跡からパン焼カマドの様にレンガを積んだ跡から白骨が出て、大騒になったことがあった。……兎に角白骨は山背泊（現在の船見町）のロシア人墓地に移葬され

た事件があった。……夫人の死亡前には、本墓地には既に二十三名の露國海軍の兵員が埋られて、現在のロシア人墓地の輪郭が大部分出来上がっていたにもかかわらず、此所には葬らずに、特に聖堂の一隅に埋葬したのは、当時の治安状態の不安を懸念したと言うよりも、寧ろ領事の夫人に対する限りなき愛着の念によったものでもあろう。然し夫人の白骨移葬の際、立合った人々も既に物故して、その跡は今日迄皆目解らない状態にある。

一九〇七年（明治四〇）の大火で、旧聖堂の焼跡から白骨が発見された時、靴などの副葬品からエリザヴェータであることが判った。現在の信徒会館の東側とみられる。また、現在のエリザヴェータの墓石は、イオアン厨川勇神父の尽力で建てられたものである。

一方、エリザヴェータが永眠したロシア領事館は、翌一八六五年（元治二）二月、イギリス領事館から出火した火事で類焼する。当時、イギリス領事館は現在の遺愛幼稚園の場所にあった。ロシア領事館では、領事、領事秘書、コストロフ海軍少佐、医師の住いの建物が焼けた。

火災は深刻な損失をもたらした。領事館は寄る辺を無くした。再度仏教寺院に仮住まいするのは危険があった。……ヨシフ・アントノヴィッチ「ゴシケーヴィチ領事のこと」は職員全員と共に露米会社の船に移り、ほどなく日本を後にした。この時点でロシアは自国の領事を箱館から召喚せざるを得なかった。²⁷

ゴシケーヴィチは妻の眠る日本を後にして、ロシアに帰国した。官位を退いてからは、故郷ペラルーシに戻り、一八七五年一〇月五日、ヴィリノ（現、ヴィリニユス、リトアニア共和国の首都）で永眠した。

ちなみに、聖ニコライがペテルブルクからシベリアを横断し、箱館に着任する間もずっと記していたとされる日記が火事で焼失したという火事が何時の火事であるか、ということについては諸説ある。箱館（函館）に火事が多すぎたのがその一因である。一九〇七年（明治四〇）の大火で焼失したという説もあるが、聖ニコライは一八七二年（明治五）に、宣教団の中心を東京に置くべく離函しており、一九〇七年まで自分の日記を函館に置き去りにしておいたとは考え難い。

一八九一年（明治二四）の臨時公会議事録に、パウエル澤邊神父の回顧談が掲載されているが、これによると「魯館は不幸にも火災に罹り僅かに師の衣類数品を出せしのみにて他は皆烏有に属したり。其時予は実に愀然措く能わざりしが師は自若として翌日より其事務を始め、且つ言われる様焼けたものを何うするかと。此一言は大に予の為に力を与えたり」という出来事があったのが、澤邊がロシア領事館の聖ニコライの下で正教教義を学び始めた後であり、洗礼を受ける前であることが文脈からわかる。つまり一八六四年から一八六八年の間ということになる。この間、領事館が罹災した火事は、一八六五年（元治元）、イギリス領事館から出火した火事の類焼によるもののみである。もともとこの火事で聖ニコライの日記が焼失したと明記されている資料がある訳ではないので、これも推測の域を出ない。

七 仙台藩士の来函／聖ニコライの一時帰国

ゴシケーヴィイチ領事と領事館一行が帰国した一八六五年（元治二）頃は、攘夷の機運が高まり物騒な政情であった箱館も、明治維新を迎えると、次第にその雲間から欧米の文明を学ぼうとする精神的な開国の光が

差し始めた。世の中の変遷を敏感に捉えていた者たちは、新たな国造りのために相応しい精神的な拠り所を求めたのである。

一八六九年、(明治二)聖ニコライは仙台藩脱藩の浪士たちと知り合う機会を得る。

幕府軍の脱兵と結び再挙を謀ろうとする浪士たちが函館に集まって来たのである。彼らは函館にて憂国の士として名を馳せていた澤邊琢磨を訪ねる。澤邊は国家を憂うる精神こそ昔と変わることはなかったが、澤邊が日本帝国の前途を思い、彼等に説いて聴かせた持説とは「国家の革新は人心の改造よりせざる可らず。人心の改造は宗教の改革よりせざるべからず。宗教の改革はハリストス教を以てせざるべからず」というもので、一同は意外の感に打たれることとなる。

しかし、その中でも金成善左衛門成次と新井常之進は、聖ニコライに会い、その話を聴くに至って大いに心服し、国家の改革は真理なる正教の教えによるべきであると確信して、奥羽の要鎮である仙台に帰って行った。仙台に戻った金成と新井は、知人・同志を訪ね、正教のこと、聖ニコライのことを話した。この時啓蒙された者は、高屋仲(後、イアコフ、司祭に叙聖)、小野莊五郎(後、イオアン、司祭に叙聖)、笹川定吉(後、ペトル、司祭に叙聖)、津田徳之進(後、パウエル、伝教師)、大立目謙吾(後、ペトル、伝教師となり退職)、大條金八郎(後、マトフエイ)等であった。

最初の日本人信徒三人の洗礼の後、福音宣教の時期が到来したことを確信した聖ニコライはモスクワの府主教聖インノケンティに、伝道の祝福を得るための帰国願を出す。澤邊に後事を頼み、ロシアに一時帰国したのは一八六九年(明治二)のことである。

「後事」とは、ひと言で言うものの、一八七一年(明治四)三月二二日(露曆²⁹)に聖ニコライが戻るまでの澤邊の苦労は並大抵のものではなかった。



29 パウエル澤邊琢磨神父

一八七〇年（明治三）一月には、新井常之進が函館に戻る。その後、五月には小野莊五郎・笹川定吉、大立目謙吾の三人が仙台より来函した。八月には津田徳之進、柳川一郎（永沼、後アンドレイ、伝教師となり後に退職）、大條季治（後、パウエル）の三人が函館に向けて仙台を出発し、途中で但木良治と影田孫一郎（後、マトフェイ、司祭に叙聖）が合流して、彼ら合計五人は九月に函館港に着く。そして新井・小野を除く残り全員澤邊の住まいに同居することとなった。当時の函館は前年五月、戊辰戦争最後の戦いである五稜郭の戦いをもって箱館戦争にピリオドを打ったものの、未だ戦禍の跡生々しく、澤邊の家も類焼したため、神明社内の二階屋作りの板蔵を住まいとしている状況であった。しかし澤邊はこのようなことは一向に気に掛けず、この志士の一行を、正教を以って人心を統一し、事を天下に成す同志として家族のように懇待した。彼らは日々旧約聖書、信経を読み、正教の教えの真理に近づこうと熱心に教理を研究した。

この年の冬、小野莊五郎と新井常之進は、一旦仙台に戻る。この時、小野は高屋伸を芋里村に訪ね、自分の言葉で「神の存在の事、神の子の事、神の子が人類救贖のために一処女より人体をとりて生れ、三十三歳にして十字架の刑を受けて死し、後三日にして復活せりと28の教義」を解くまでに正教を理解するに至った。

一方、函館では依然、澤邊の下で教理の研究が続けられていたが、仙台から来た者たちは次第に生活費が尽き、澤邊もそれを察しないではなかったが、自らが赤貧を洗う生活であれば、秘蔵の刀を売って彼等を補助するの資に供するなど、非常の苦心をした。聖ニコライがいつ戻るかもわからず、澤邊に一方ならぬ苦心配慮を強いるのも心苦しく、笹川と影田は一旦仙台に戻ることを澤邊

に相談すると、澤邊は自身、聖ニコライが戻るまではいかにしても彼等を留め置こうと決心していたところなので、この申し出に非常に心を傷め、彼らを留めた。しかし、笹川と影田等は厚くその情誼に感謝して、帰国することを決めた。津田と柳川は函館に残ることを決め、澤邊は幾分か心を慰められた次第であった。

澤邊は洗礼を受けてからは一切、神明社の社務には関係を断った。聖ニコライは一八六九年（明治二）にロシアへ一時帰国する直前まで、僅少の額をもって彼を補助したが、これは海中に一滴を投ずるようなもので、澤邊家の家計は困難を極めた。「彼等が如何に貧困を忍び居るかを想ふ時は我が心は言ひ表はし難き苦痛に迫る、澤邊は古ぼけた暗き土蔵（神社の付近に在る）の中に生活し彼の家族の爲めにも此住居は狭くあったのに余程久しく十人の食客が此処に寄食して居た³⁰」と、この当時の澤邊家の様子について聖ニコライは記している。

その様な訳であつたから、一八七一年（明治四）三月二二日（露曆）、聖ニコライが再び函館に戻つた時、澤邊の喜びは如何ばかりであつたろう。同日夜、聖ニコライは彼の帰りを函館で待ち侘びていたパウエル澤邊、妻マリヤ澤邊、津田、柳川、後藤謙三（後、イアコフ）等と会い、澤邊から留守の間の報告を受けた。

聖ニコライはロシアで日本の情勢を伝え、伝道のためには好機である故、日本伝道を目的とする伝道会社を組織することを許可してくれるよう、宗務院に請願した。宗務院は聖ニコライの請願を受けて、一八七〇年、日本宣教師団の設立を認可し、聖ニコライを掌院に昇叙して、その宣教師団長とした。

八 宣教師団長聖ニコライによる福音伝道開始



30 函館での仙台藩士

一八七一年（明治四）、聖ニコライが函館に戻り、津田徳之進、柳川一郎は澤邊宅よりロシア領事館の敷地内に移った。仙台からは小野莊五郎、笹川定吉、儒学者眞山温治（後、パウエル）、大立目謙吾、大條季治、小野虎太郎（後、ペトル）、小松韜藏、影田隆郎も来函した。やはり領事館の敷地内に居住して正教の教理を研究することとなった。函館で医を業としていたイオアン酒井も医業を廃して専ら福音伝道に携わることを希望するようになった。

彼らは日夜、正教の教義を研究した。また聖ニコライは予てから欲していた石版印刷器をこの度の帰国で携えて来ており、印刷方法が書いてあるものを見ながら菓を調査し、高屋、大立目らに版下を書かせ、津田、大條、岡村らを相手に、自ら職工となり、日本語を学んで初めて訳した天主経、日誦経文、東教宗艦、教理問答などを印刷した。聖ニコライが澤邊、関と共に和訳した「聖經実績録」や、聖ニコライが海野隆平（鈴木）と共に和訳した「露和字彙」は写本として伝えた。この「露和字彙」は、東京の神学校でも学生たちが写し伝え、一八八一年（明治一四）、文部省編輯局出版の「露和字典」が出るまでこれを用いた。

聖ニコライによって函館にもたらされた石版印刷について、「江馬印刷株式会社百年史」の第三章「宮城県の近代印刷 ギリシャ正教と石版」には、次のように記されている。

仙台藩旧藩士笹川定吉の「第二函館紀行」には函館において明治四年十月七日「石版ズリコノ日ヨリ始」と記されており、ニコライ師の訳した「日誦経文」「教理問答」「聖書入門」「祭日記憶録」「聖經実績録」などを一ヶ月ほどの短期間で刊行して、伝導の準

備を行ったとなつてゐる。……〔中略〕……日本へは万延元年……〔中略〕……日普和親条約締結のために来朝したプロシアの使節オイレンブルグ伯が、電信機、写真機とともに十三代將軍・徳川家茂に石版印刷機と石版石を献上したのが始まりである。印刷機と石版石は開成所に払い下げられ、絵図調べ方川上万之丞が研究を命じられた。しかし技法は西欧の技術に達することができなかった。……〔中略〕……また明治元年、横浜の下岡蓮杖はアメリカに石版機械、石版石を注文し、米人建築技師ビジンから石版の製版印刷の技術を習得し、日本で初の砂目石印刷をしたといわれている。さらに明治三年、東京の銅板技術者松田敦朝は、イギリスから石版機械、石などを買い入れ日本橋に石橋銅版印刷を開業している。これらが一応の石版印刷の歴史である。

ところで石版印刷の簡単な歴史を記述したが、これまでの宮城県印刷の歴史の中に北から入ってきたギリシャ正教ニコライのもたらした石版印刷のことは問題にされていなかった。しかしギリシャ正教を繙くと、数々の西欧の文化の紹介が、明治維新後の日本の産業の基礎的役割を果たしていたのである。印刷についてもわかりである。北から、つまり北海道から入ってきたものが抜けていたのは、あまりにも資料が少なかったからかも知れない。

このような時代の背景を考えると、一八七一年（明治四）、聖ニコライによって正教会が石版印刷を用いた伝道を始めたことは、実に時代の先端を行く画期的なことであった。ちなみに、前述の引用文の中に「ギリシャ正教を繙くと、数々の西欧の文化の紹介が、明治維新後の日本の産業の基礎的役割を果たしていた」とあるのは、初代領事ゴシケーヴィイチや医師ゼレンスキイから木津幸吉や田本研造に伝えられた洋服の仕立てや写真の技術、また医師アルブレヒトから伝えられた医療技術などを指していると思われる。

一八七一年（明治四）秋、イオアン小野莊五郎、イアコフ高屋仲、ペトル笹川定吉、ペトル大立目謙吾、マトフェイ影田孫一郎、パウエル眞山温治、パウエル大條季治、アンドレイ梁川一郎、ペトル小野虎太郎、パウエル津田徳之進、ティト小松韜藏、パウエル岡村伊賀藏らが洗礼を受ける。代父はパウエル澤邊であった。

前述の「江馬印刷株式会社百年史」の中にも「十月十二日仙台藩出身者の十二人は洗礼を受け……」と記されている。ただ、洗礼が行われた日付は、仙台正教会の「銘度利加」³¹には「十一月二六日」、「大主教ニコライ師事蹟」には「十月二十六日」となっている。そして一二月、聖ニコライはイオアン小野莊五郎、ペトル笹川定吉、イアコフ高屋仲を仙台における布教に送り出す。

「聖ニコライは」これより初めて日本内地の布教に遣わされんとする彼等に向かい、最も懇に福音の道を説かれ、且布教上の事に関して懇切なる注意を与えられたり。当時函館に於いて布教を開始し、同港及び仙台の旧藩士より信徒を得る僅か数名に過ぎず。今や神の恩佑によりてこの膝下に集りたる者を伝道のため再び散ぜしむるは、恰もこれ母雛の翼下にある雛鳥を散ずるに均しかりき。今、神国の福音を伝えしめんがために、彼等を茫洋たる異教者に遣わさんとするは、これ実に師が日本に來たりて、日本内地に然かも日本人をして布教に従事せしめんとするの始めての業なりき（一八七一年十二月）²⁸。

このようにして日本の本州における日本人による正教伝道は始まった。これより日本全国に伝道を開始するためには、その中枢を日本の首都に置くことが必須であると判断した聖ニコライは、一八七二年（明治五）

二月、函館から東京に居を移した。

九 修道司祭アナトリイ（チハイ）の時代

一八七二年（明治五）～一八七九年（明治一二）

—— アナトリイ司祭に養われたる教会の風習は、今尚、信徒の間に遺存して教会の美風をなせり。²⁸ ——

聖ニコライが東京へ発つに先立って、修道司祭アナトリイ（チハイ）がロシアより着任する。³²
アナトリイ神父の来日までの略歴は次の通りである。

アナトリイ神父は聖ニコライよりも二歳年下で、一八三八年キシニョフ主教区の堂役ドミトリイ・チハイの息子として生まれる。キシニョフ神学校在学中にアトスのザスラフ修道院にて修道の誓いを立てる。修道院で四年を過ごす。一八六七年、キシニョフ神学校卒業後、一八七一年、キエフ神学大学を卒業した。同年、請願を許されて日本の正教宣教師の一員として修道司祭に叙聖される。函館の教会を管轄したのは一八七二年から一八七九年（明治一二）までだった。

聖ニコライは「篤実温厚なる宣教師にて、特に神学、哲学等に精通したるの学者なる」アナトリイ師に函館方面の伝道と生徒の教育を一任して、上京した。

アナトリイ神父は、着任早々函館市中における伝道体制を整えることに着手した。領事館敷地内の学校を伝教者養成の学校とし（一八七三年に私立「伝教学校」となる）、信徒たちはマトフェイ影田孫一郎、イオア

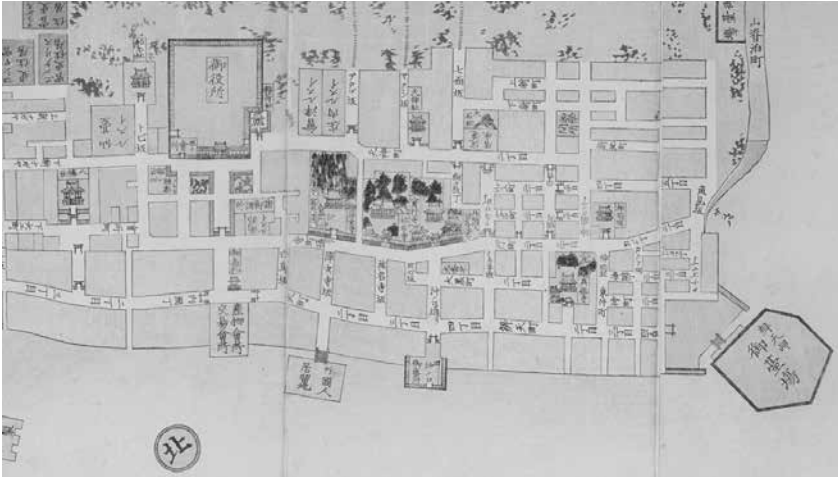


31 修道司祭アナトリー
1873年頃

ン酒井篤礼、パウエル津田徳之進の三人を伝教師として選出した。パウエル津田は大町の屋号「山吉」方に講義所を設け、イオアン酒井は恵比須町の屋号「カギ三」方に出張、マトフェイ影田は天神町の越後屋（イオシフ真野）並びに腰山方に伝教所を定めて布教に従事した。聴講者は日々数を増し、伝教師も信徒たちも心を同じくして布教に尽力した。一八七二年（明治五）三月二三日の復活祭には、三〇人前後の信徒と数十人の未信徒が聖堂に集まって主の復活を祝った。翌日から始まる光明週間には毎日鐘を鳴らし、多くの人々が来堂した。伝教学校の生徒が入堂者の整理に当たり、一〇〇人くらいずつ入替えながら正教の要理を話して聴かせた。

ちなみに、函館正教会は、この前年（一八七一年）に日本で最初の正教の復活祭を祝った。この時、わずかに七人の日本人と一四人の外国人のみであった。数個の紅卵を供えてあるのを見て、当時函館にいた津田たちはこれを「珍奇」と思ったという。

〔函館に於ける正教信徒に対する窘逐〕 人々の間に正教会の名が伝播し、さまざまな風聞が伝えられていく中、この状況を危惧したのは開拓使の官吏たちであった。前述したように翌一八七三年（明治六）二月に切支丹禁制の高札が撤去されるという時勢にも関わらず、当時の官吏たちの対応は、旧幕府時代の役人として変わらず、宗教に対する見解も祭政一致主義を通して民衆の宗教を支配しようというものであった。ようやく大日本帝国憲法に信教の自由が定められたのが一八八九年（明治二二）のことであり、それも自発的なものではなく、西洋諸国との交際の都合によるというのが主



32 外国人居留地周辺 大町[外国人]居留地、弁天台場、奉行所、ロシア領事館、実行寺などの当時の位置関係を確認することができる 「官許 箱館全図」(部分)

な理由であった。

結局、ペトル腰山は公職を停止、イオシフ真野は親族預かりを命じられ、イオアン酒井は捕縛されて町会所の獄屋に投獄、パウエル津田とマトフェイ影田は弁天台場の獄に投ぜられた。白洲のでの尋問のやり取り、また獄中生活については、「日本正教傳道誌」に詳しい。

正教会信徒捕縛の報が市中を駆け巡った。聖堂拝観に来る者はなくなった。人々は正教会と関わることを畏れて遠のいた。

しかし一方、教会ではこの窘逐事件を機に、信徒たちの信仰は一層堅固なものとなった。イオアン酒井の妻多恵(後、エレナ)、長女澄(後、テクサ)、次女実(後、マトロナ)は、酒井入獄の三日前に刈敷から函館に着いたばかりだった。戸主が入獄し、忽ち衣食住に窮する所となった。信徒たちは、主ハリストスの名のために迫害に遇うことを名譽とし、その家族を援け、慰めた。「日本正教傳道誌」は当時の様子を、「斯くの如くにして、少数信徒よりなれる函館に於ける一小教会は、主の御名のために窘逐を忍び、信仰の堅固なる磐上に樹てられ、且信徒は互いに愛を現し、これにより



33 出獄紀念 左よりパウエル津田、マトフェイ影田、イオアン酒井、ペトル鈴木 1872年

て信仰に基づく愛の心を実行したりしかば、人々始めて信徒相互の愛を感じ得たり」と記している。

この時、仙台、函館において起こった正教信徒審逐事件は、ドイツ公使をはじめ列国の公使が日本政府に抗議するところとなった。ほどなく中央政府より正教信徒放免の命が伝えられ、一八七二年（明治五）五月三十一日、二か月ぶりに、マトフェイ影田、パウエル津田、イオアン酒井（以上、入獄）、イオシフ真野（親族預かり）の四人は刑務局の白洲に召出され、「特命に依りて赦免せらる」との宣告文を以て直ちに赦免されたのであった。

彼らは真つ直ぐに伝教学校に帰り、アナトリー神父を始め、信徒たちに悦び迎えられ、主・神の御旨のいと深く、これによって益々信仰を養われたことに感謝の祈禱を捧げた。

悦びも束の間、開拓使では、捕縛した者とこれに関係のある者を本籍地の役所に照会して、召還するよう命じた。これによって、イオアン酒井、マトフェイ影田、パウエル津田、テイト小松、アンドレイ柳川、ペトル小野、ワシリイ涌谷、ボリス阿部、ニコライ牧野、アンドレイ今田、ロマン柴田等は、アナトリー神父の祝福を受け、函館の信徒に別れを告げて函館港を出帆したのであった。

この時、イオアン酒井は、三女信を身籠っていた妻ゑいと娘二人を函館に残すことを選んだ。後に、信の夫イオアン小野帰一神父（後、ニコライ小野主教）は次のように記している。³³

尊母「酒井ゑい」はわが正教婦人の初実の果でありまして、明治の初

年ハリストス教が迫害を受くる時分には、つぶさに辛酸をなめました。

夫君は国禁を犯して基督教を奉ずるといふ廉で獄に繋がれましたから、その夫人としての尊母にも官憲の注目はなはだしく、一定の家に安居することも出来ず、二人の幼女を抱へ、あまつさへ第三子妊娠中でありながら、知人を便り便つて、ほとんど流浪に等しい寄る辺なき身を、或は他人の床下に、或は知人の屋根裏に夜を昼を送りなどして、果ては米塩の資にさへ差支えをきたし、内には飢餓の苦痛あり、外には殺害の恐怖あつて、夜は夜の安息も得られず、昼も昼の明るさを味はされず、闇から闇にと迫害を忍んでおられました。

エレナ酒井多いにしても、マリヤ澤邊タネ子にしても、日本正教会黎明期の十字架を夫と共に担った女性たちの人生は苦難と忍耐の連続であり、その舞台は函館であつた。

幕末から明治初年にかけて横浜や長崎、函館や仙台でキリスト教信徒に対する迫害が起こった背景には、次のような状況がある。³⁴

プチャーチンは下田条約の交渉のとき、幕府が要求したロシア人のキリスト教布教の禁止条項に反対し、また安政四年長崎に再来したときも、日蘭両国が交渉中の追加条約案文中に同様の規定があることをオランダ領事クルチウスから聞いて、これを撤回させた程であつた。その結果日本人のキリスト教信仰は禁止されながらも、外国人宣教師の布教については規定がないという矛盾した状態が各国との通商条約締結後も続いたのである。

函館では、パウエル澤邊、パウエル岡村、ダミアン五十嵐、アレクセイ山中、イオシフ真野、ペトル鈴木、テイホン三浦等が市中で伝道を続けた。

一八七三年（明治六）、函館正教会では東京からの聖ニコライの祝福の下、議員の選挙が行なわれた。現在の執事会である。当時伝教者の職にあつた者は、ペトル大立目、マトフェイ影田、アレクセイ山中、イオアン酒井、ペトル河田、アレクセイ樋渡、ロマン柴田、パウエル岡村、キプリアン林、スピリドン大島らであつた。また一般信徒の中から選定された議員は、ダミアン五十嵐、ウラディミル鈴木、ニコライ小野寺、パントレイモン東浦ら一〇人で、婦人の中からも数人を選んで男子信徒の参助にあたるようにした。この時選挙された婦人は、アンナ小野、エレナ酒井、エレナ五十嵐、ハリテナ小野寺、エレナ野村、マリヤ越山らで、アンナ道家がかれらを統率した。

彼女たちはこの年婦人会を結成した。婦人の信仰を養い、慈善活動を行つた。「日本正教傳道誌」には次のような記述が見える。

一八七四年も冬には、男子の教会に於ける勢力衰え、却て女徒会の勢い甚だ盛んなりき。この婦人会創立の際より今日「二九〇〇年当時」に至るまで、教会内外の事を慮り熱心に奉仕する信徒は、アンナ小野、エレナ酒井、エレナ五十嵐、エレナ野村、アレクサンドラ倉岡ら。また若い世代にも教会に熱心な者が少なからずおり、婦人会は益々盛んになっていく。

この年の復活祭は一五〇人から一六〇人の参拝者があつた。

アナトリー神父は、教会財務にも深い注意を向けた。貧しい信徒のために教会公産の積立法を設けた。一

度は、二〇〇円ほど積立てられた時に、信徒補助の目的で使い、もう一度は四〇〇円ほど積立てられた時に、同じく信徒補助の目的で使った。教会の基本財産にも注意を払い、不動産を持つようになった。曙町に宅地二二四坪と家屋二棟（一八八八年購入）、宝町に宅地三三坪、家屋一棟（一八九〇年購入）などで、この教会資産は、かつて教会の執事だったザハリヤ山中量平の尽力によるものだという。

アナトリー神父は、初めは教会スラヴ語で奉神礼を行っていた。信徒が次第に奉神礼を理解するようになると、アナトリー神父は初めて日本語で奉神礼を行った。初めはわずか「主、憐れめよ」の一句を日本語で唱し、または「我等安和にして」など短句のものを日本語にて唱えた。次第に日本語の奉神礼が完備し、ヤコフ・チハイが来函して聖歌の翻訳、編曲にも携わり、奉神礼に大きく貢献した。

詠隊教師ヤコフ・チハイ ヤコフ・チハイは、アナトリー神父の実弟で、サルトフの永眠後、詠隊教師として一八七四年（一説に一八七三年）、函館に着任した。函館でアナトリー神父から洗礼を受け、函館の伝道学校で学んだ人の中に長司祭シメオン三井師がいる。三井師が後年当時の思い出を綴った「回想断片」の中にヤコフ・チハイから聖歌の授業を受けたことが記されている。ヤコフ・チハイは函館を離れた後、一八七六年（明治九）、東京で日本人女性エレナ横井と結婚している。現在も日本正教会では、ヤコフ・チハイの作曲による日本語聖歌が歌われ、親しまれている。日本正教会聖歌の黎明期に多大な貢献をした人である。一八八六年（明治一九）二月二五日、四三歳の若さでロシアで永眠した。

チハイの永眠を伝える「正教新報」第一七五号（明治二二年三月一五日発行）には次のように書かれている。



34 詠隊教師ヤコフ・チハイ

……当時我教会には祈禱に唱歌の設なくして奉事の式未だ備らざりしが氏始めて聲調を按へ曲譜を製りて子弟に唱歌を授け神を讚美し主を讚榮する者をして深く正教会歌唱の美を盡し善を盡すを知らしめかくて聖堂奉事の式漸く序あるにいたれり今聖堂に於て用ふる所のヘルワイムの歌譜は氏が多年の経験により我国人の性に応じて作りたる者にて耳を具へて聞く者はその調の微妙なるを感じざるなしこの他自作の譜蓋少なからず。

東京に於ける日本正教会最初の布教会議

一八七四年（明治七）五月、聖ニコライは日本正教会最初の布教会議を開き、伝教者を東京に召集した。出席者は聖ニコライ（掌院）、伝教者イオアン小野、伝教者イアコフ高屋、伝教者パウエル佐藤、伝教者ダニイル影田、伝教者パウエル津田であった。伝教規則と伝教者の配置が決まった。

函館地方は、アナトリー神父の管轄の下に、パウエル岡村、アレクセイ山中、ペトル河田、アンドレイ小関、ロマン柴田の伝教者が配置された。

日本における正教の伝道は、函館を起点として東京・仙台・盛岡地方に及び、さらにこの諸地方を起点として、その近隣に多くの教会が起こった。特に東京は日本正教会の主教座となった。日本正教会の本会が東京に定められたことよって、上野州、信越地方、また東海道地方、さらには大阪での伝道が容易となった。

日本で最初の神品機密 函館は日本で最初の神品機密が行なわれた場所でもある。

一八七五年（明治八）、カムチャツカ、クリル及びアレウトの主教パウエルが函館に来航し、七月二二日にパウエル澤邊を司祭に、七月二五日にイオアン酒井を輔祭に叙聖した。

カムチャツカ、クリル及びアレウト教区との関係 箱館復活聖堂を初めて主教品が訪れたのは、前述の一

八六一年（文久元）九月、大主教インノケンティ（ヴェニアミノフ）で、生神女誕生祭に奉神礼を行った。二回目は、一八七二年（明治五）七月に来函した主教ヴェニアミン（ブラゴヌラヴォフ）で、生神女就寝祭に奉神礼を行った。これら二回の奉神礼は日本において初めて主教品が行った奉神礼であり、参拝者はその厳かな祈禱に感動しない者はなかった。

在日ロシア帝国領事館付属教会として始まる日本の正教会は、ロシア正教会に在日宣教団が結成されると、組織的にはロシア正教会の宣教団に属することとなったが、カムチャツカ教区の主教によって牧されていた。日本の正教会がカムチャツカ教区に属していたわけではないが、カムチャツカ教区の主教が日本にある教会を牧する謂わば「担当」の主教だったのである。この状態は、一八八〇年（明治一三）、聖ニコライがレーヴェリの主教になるまで続く。

聖ニコライが主教ヴェニアミン（ブラゴヌラヴォフ）宛ての手紙の中で「固より吾宣教館は座下の管轄指導を受くる譯なれば³⁵と書いているのは、この意味である。一八七五年にパウエル澤邊の司祭叙聖がカムチャツカのパウエル主教によって行われているのも、一八七八年にイオアン酒井らがカムチャツカのマルチニアン主教から司祭叙聖を受けているのもこれによる。

当時の日本の奉事経の重連禱などに「我等ノ大主教（マルテナアン）」と記憶されているのは、このマル



35 日本で最初の神品機密を行ったパウエル主教

チニアン主教である。この教区は一八四〇年に形成され、一九一六年までの正式な名称を「カムチャツカ、クリル及びアレウト教区」という（現在、「ペトロパヴロフスク及びカムチャツカ教区」）。

「アナトリー神父離函」この頃は、北海道において、教会は函館正教会のみであり、司祭もロシアより修道司祭モイセイ（コステイリヨフ、在日期间一八七四年〜一八七五年）、修道司祭エウフイミイ（チェトイルキン、在日期间一八七四年〜一八七八年）が短期間滞在するが、常任管轄司祭としては、アナトリー神父一人だけである。一八七七年（明治一〇）の北海道の景況は、函館に信徒およそ七〇余戸、有川大野諸村に二〇人余、福山二六人、北海道各郡に散布する信徒五六人である。有川（現在、上磯正教会）における最初の信徒は、イオアン大村、ペトル田中、パウエル寺澤の三人で、洗礼を受けたのは一八七六年（明治九）三月のことだった。ダミアン五十嵐が専ら伝教に努めて開拓した地である。有川に最初の会堂が建てられたのは一八八四年（明治一七）のことである。

「日本正教傳道誌」には、次のように記されている。

函館は北海道と本州との咽喉の地なれば、従って当教会より北海道内地に移住する者甚だ多く、又当地の人としては本州よりの移住者のみなれば、時々その郷里に帰還する人も多く、数年前までは、常住者の稀なるがため、当地教会の進歩を妨げたりしも、またこの移住者は北海道の内地、もしくは本州の内地に移住して、その教会の勢力となり、特に北海道内部の教会の起源には深き関係を有せり。故に当地の

教会は最も古き教会なるに、今日尚依然たる形勢なるも、これを以て教勢の退歩というべからざるなり。この日本教会の母たるの教会は既に多くの子を生みて、その子たるの教会は今日盛んに進歩し、また函館教会は教勢の進歩を妨ぐる内情なきにあらざりしも近年組織整備して、イサイヤ村木、アレキサンドル細川らに次ぎて、現今ペトル小原、ゴロト茂木の両伝教師専ら布教に尽力し居れり（一九〇〇年）。

アナトリー神父は、一八七九年（明治一二）、公使館付の司祭に転任して東京に移る。アナトリー神父が函館を去る時の様子が、「日本正教傳道誌」に次のように記されている。

師は当会に八年の間在職せられしかば、この間親しく信徒に接してその信仰を養い、教会の風習を養われたり。されば函館教会は最も幸福なる教会にて、アナトリー司祭に養われたる教会の風習は、今尚、信徒の間に遺存して教会の美風をなせり。又同司祭は永くこの教会に居られしかば、師父信徒間の交情は、真に父子の如き関係ありて、その愛最も深かりき。故にアナトリー司祭は公職のため、同会の信徒に別れ東京に赴かんとする際に、信徒を会して祈禱を献げて後、衆信徒に向かい、兄弟姉妹よ、予は此教会に職を奉ずる事、茲に八年間なり、この長年月間には、兄弟姉妹に対して多くの罪を犯せり。今別れんとするに当たりて願くは予にこの罪を赦されよ云々と。かくて膝を衆信徒の前に屈して其罪の赦しを請われしかば、集れる信徒は師父の謙遜に感じ、この良牧師に別るるを悲しみ泣かざる者なかりしと。

アナトリー神父に次いで函館管轄となつた司祭は、ガヴリイル・チャエフ神父（在日期間一八七八年〜一八八二年）、修道司祭ドミトリー（スマルノフ、在日期間一八八〇年〜一八八二年）の諸師であつたが、いず

れも在函期間は長くなかった。

一〇 司祭テイト小松韜蔵の時代

一八八二年（明治一五）～一八九一年（明治二四）

北海道の広大な牧野に神の恩寵を説いて廻った大伝道者³⁶



36 テイト小松韜蔵神父

テイト小松韜蔵神父は、一八八二年（明治一五）の公会で司祭に選出、叙聖され、任地は函館となった。同年八月、聖ニコライは、函館正教会の管轄として初めての日本人司祭となるテイト小松神父を氣遣つてのことか、やはり函館に配置された副伝教者ワシリイ山岡を伴つて、海路函館に赴いた。同年の正教会公会議事録によると、師の管轄範囲は北海道内の函館、有川（現、上磯）、七重（現在の七飯町の一部）、福山、寿都、小樽、札幌、本州は主として秋田県下の花輪、十二所、毛馬内、荒川、大湯、大館、曲田。即ち北海道の西部海岸から道央、本州の日本海岸北部まで、更に翌年は久保田（現、秋田）、雄勝、仙北地方まで管轄している。「日本正教傳道誌」には、「テイト小松神父はしばしば津軽海峡を渡り……「中略」……東西奔走その辛勞もとより筆舌の尽くす処にあらざりき」とある。



37 正教女学校（境内の南東の角にあった）

函館に着任した小松神父、山岡副伝教者は、信徒たちに温かく迎えられた。既に当地に配属されていた松本副伝教者と共に三人による布教体制が整えられた。市内に多くの出張講義所を設け、境内の正教小学校も男女の生徒合わせて七〇余人で、教官は加藤氏、他四人。エレナ川股及び一、二人の信徒が女生徒に裁縫を教えた。加藤氏は長く教育に従事し、生徒を訓導してきた人なので、授業上の事に老練であり、校務のこともよく心得ており、万事においてよく届いていた。

同年には、エレナ酒井多いが函館正教会女徒親睦会を創立している。函館正教会においては、所謂「婦人会」の創立が一八七三年（明治六）であり、この年結成された「女徒親睦会」というのは、女性信徒の「学びの会」のようなものであった。

後に「婦人会」という名称に統一され、「婦人会」を開く際には先ず、神父または伝教者による講話があり、その後、諸事についての会議を行うという形が定着した。神父による講話には、男性信徒も参加した。現在に至るまで「婦人会」は、このようにして行われている。

一八八三年（明治一六）四月二八日の復活祭は大雨にも関わらず、二五〇、六〇人の信徒が参拝した。敷地内には百数十個の毬燈を十字形に組立て、その中央に一丈余りの大十字架の角燈を灯したものが闇の中に美しく映えた。復活祭の祈禱が終わり明け方頃になると、市内から未信徒が参堂し始め、その数は数千人に及んだので、神父と伝教者は夜の七時まで案内・説明に追われ、休む間もなかった。この日から五月一日まで三日間引き続き拝観を行ったところ、この間に集まった者は概ね二千数百人ほどになった。

当時、市内に設けた講義所には、三〇人から六〇人ほどの聴講者があつたが、ある時期、洗礼を受ける者が少ない状況が続いた時があつた。すると、信徒たちは宣教拡大の不振の原因を自らの勉強不足と捉え、集まつて教理、聖書を学び励むのであつた。

一八八四年（明治一七）の「正教新報」第七六号（明治一七年二月一日発行）には次のような記事が見える。

同会の女徒親睦会も追々盛んに至り本年の初回には六〇余名の女徒集まり交わるがわる講義をなして退散したるより且つ右の女徒方は裁縫に巧みなる同会の千葉アンナ姉を教師として裁縫洗濯洗い張り西洋洗濯などを教ゆる一の教場を設けて同市中の寡婦などに自活の道を与えんことを計り居らるるよし殊勝というべし。尤も追々女学校を設立せんとてそれがために女徒の積み金もはや二百余円に至りしという。また同会の寄宿生外来の小学生徒らは一月の遊びにとて昨年中出版なりし「初実の果」の間答をカルタに作り日々その勝敗を争い楽しみ居る中、生徒はもはや「初実の果」を暗唱するに至りしという。

一八八四年（明治一七）、境内に裁縫女学校（後の正教女学校）が設立される。生徒は三〇人であつた。

一八八五年（明治一八）の「正教新報」第一一四号（明治一八年九月一日発行）には、函館正教会の学校についての記事が掲載されている。この記事は、同年八月に函館を巡回した聖ニコライが、帰京後、函館正教会の様子を正教新報の記者に語つたものである。

教会の兄弟姉妹平安にして男女の小学生徒現員二二人ありて男学校は校長佐藤マツフェイ氏之を司り

三人の教師と四人の助教師が教授せられ、女学校は酒井司祭の令閨エレナ姉校長にして一人の女教師とエレナ姉の令嬢テクサ、マトロナの両姉が教授を助けらる。両校とも校長の注意行届き誠に能く治まり生徒の進歩も著しく且つこの学校はもとより普通小学校を教授さるれど、教会の小学校なれば殊に正教の教理を授けらるることなれば、学校の治まりかた、生徒の進歩、何れも他に優れて見ゆる故今日にては教会内の子弟のみならず異教人の子弟にて入学する者甚だ多く、その子弟が此校に通学して正教を学び信徒となり、遂には父兄も感化を受けて信徒たらんことを望むに至る有様にて厚く異教人の信用を受け、入学者益々多くなり。女学校の如きは甚狭くして生徒入るるに足らざれば、此度一棟の学舎を新築することに着手せられたりという。

後にこの正教学校は、一九三四年（昭和九）二月四日、函館教育会五〇年記念式典の際、私塾其他学校創立経営の功労者として認められ、感謝状を授与されている。この時、函館の教育会に貢献した関係者ら二七四人が表彰された。³⁷

根室県下シコタン島の布教 一八八二年（明治一五）二月から一九八六年（明治一九）一月までの北海道は、函館県、札幌県、根室県という行政区域に分かれる「三県時代」で、北海道の玄関口となっていた函館県の人口が一番多かった。一八八二年（明治一五）に、小松神父が函館管轄になった年に、公会議事録の中には司祭テイト小松管轄部として、すでに「千島連嶋」の文字が見えるのであるが、なにぶんにも全道と仙北地方を管轄して文字通り東西奔走している小松神父としては、シコタン島を訪れるのは、一八八五（明治一八）年のこととなる。この年、「寿都、黒松内、根室、シコタン島」地域に谷パウエルという副伝教者も

配置される。

一八八五年（明治一八）の公会後、聖ニコライは八月七日付でシコタン島（「志古丹島至聖三者教会」）の信徒たちに、管轄司祭と伝教者が配置された事、シコタン島より神学生を東京に送る事などを手紙に書く。翌八日には聖ニコライ自ら海路、函館に赴き、おそらくこの手紙を小松神父に手渡し、指示を与えて、一兩日の滞在ですぐに東京に戻っている。聖ニコライはシコタン島のクリルアイヌ信徒たちのことを、常に心より慮っていた。この八月七日付の聖ニコライの手紙の全文は「正教新報」第一一三号（明治一八年八月一日発行）に掲載されている。

当時のクリル諸島（千島列島）の正教伝道の概略は次の通りである。³⁸

露人アレキサンドル・ルダコフ氏著の教会史の記す所なりとて、左の一文を引用せり、「彼の東洋の教化者として有名なる『イルクトスク』の大主教聖インノケンティ師の西比利亜に宣教を開始するや、師は部下の宣教師をして『カムチャツカ』方面をも教化せしめんと欲し、聖堂を建て、学校を起し日夜伝道に従事せしかば、一七五〇年に至り『カムチャダル』族の諸酋長は多数の部下と共に欣然として領洗せり」。その後、千島列島に数名の司祭が派遣され、聖堂が建てられ、正教の信仰に進む者が増えていく。そして一八七〇年（明治三）にハララヒイ師父の巡廻があったのが、ロシア教会管区の司祭の巡廻としての最後だったという。一八七五年（明治八）に樺太千島交換条約が結ばれ、千島列島が日本の領土になると、正教信徒であるクリル人「クリルアイヌ」たちは日本の国民となった。一八八四年（明治一七）、シムムシユ島に居たクリル人九七人は全員が色丹島に移住した。

小松神父が聖ニコライの祝福の下、色丹島の彼等を巡廻したのは、この翌年のことであった。一八七〇

年のロシア正教会司祭の巡廻が最後だったとすれば、それから一〇年以上が経っていた。

「我がテイト小松師父は色丹に巡廻せられ、諸機密を執行せり、十数年間領聖を渴望して能わざりし彼等の喜び言動に現れ、全員告解領聖の機密を受けしを感謝せり」。

函館教会の美拳 「函館教会の美拳」——これは「正教新報」第一九二号（明治二十二年一月一日発行）

の中の記事の見出しである。「函館教会に於いて今般曙町に地所家宅を購求して同会の共有となし、従来の供給法に由らずして教会を維持するの法をたてられたりというは極めて美拳なり。その趣意書並びに寄附金額左の如し」という文章から記事は始まっている。信徒らの討議の結果、曙町八番乙宅地二二四坪〇九勺並びに同所建屋二棟屋積合計六一坪を購求して教会の財産とし、ここから生ずる利益を会費とすることに決めている。もちろん、それまでの蓄えで簡単に取得できる金額ではなく、「趣意書」の中では、発起人となつた信徒六人が、「榮を神に帰し、愛を人に顕す」行為であるとして、土地購入のための献金を行なうことを信徒に奨励している。献金者の名簿を見ると筆頭が「金二五円 掌院アナトリイ」、「金一〇円 司祭テイト小松師」から始まり、六一人の信徒が応分の献金を行っている。また既にもこの頃には千代田村（現在の北斗市の一部と思われる）に田園を購入している。

この関連で、聖ニコライは、一八八九年（明治二二）一月二日の日記に、日本の教会が今日まで教役者の扶養のために何一つせず、宣教団におんぶしたままであることを憂い、教会が不動産（資産）を持ち、その収益で教役者を扶養するべきであると説いている。そしてこの文脈の中で、「しかし、函館では土地の他に教会の家作も買い、そこからの上がりが聖職者の給与に充てられている。……町ではすでに函館教会によって示された例に従うよう、信徒に提案する必要がある」と記している。



38 セルギイ・グレボフ神父

セルギイ・グレボフ神父と修道司祭アルセニイ（ティモフェーエフ）一八八九年（明治二二）の公会で、札幌地方における伝道に力を入れることが急務であるという認識の下、これまで北海道からシコタン島までの範囲の牧会を孤軍奮闘してきた小松神父への援軍として、セルギイ・グレボフ神父が函館に常駐するようになる。同師は一八八八年（明治三一）、アルセニイ岩沢丙吉と共に「露西亜文法」を発行している。日本の多数の露語学習者に最良書とされ、ロシア語史に一ページを飾る著作である。同師は翌一八九〇年（明治二三）九月に東京公使館付となつて函館を去るまでの一年間だけ函館に居り、その後は、修道司祭アルセニイ（ティモフェーエフ）師が代わつて函館に着任している。

また、全道には、伝教師、副伝教師、伝教生徒が各地に手厚く配置されており（もともと、それも小松神父の希望を一〇〇パーセント適えられる人員数ではなかったが）、彼らの力が神父たちの大きな援けになつていたことは否めない。ちなみに、一八八九年（明治二二）当時、小松神父、セイルギイ神父の管轄の下北海道に配置されていた伝教者たちは次の通りである。

〔函館・有川〕伝教補助兼教員 平井ワシリイ、鈴木アンドレイ、目時イサイヤ、湊フェオドル

〔札幌・小樽・幌内・石狩〕伝教者 松本パウエル、副伝教者 小田島ペトル

〔根室・和田村・シコタン島〕副伝教者 東海林シモン、伝教生徒湊モイセイ

〔寿都・黒松内・永豊・岩内〕副伝教者 湯村ペトル

北海道に一八九〇年から一八九三年まで奉職した修道司祭アルセニイ

(ティモフェーエフ)師は、少々変わった経歴の持ち主である。

ペテルブルクでトルコ人の家庭に生まれ、名前をアリハン・ベク・ムルザと言った。父親が永眠した後、ロシア国籍を取り、アポロンという聖名で正教会の洗礼を受ける。ティモフェーエフという名字は代父の名字である。一八九〇年、ペテルブルク神学アカデミー(神学大学)卒業と同時に修道司祭となり、日本宣教団に配属される。一八九三年にロシアに帰国し、一九〇二年にヴラジミール・ヴォルインスク教区の主教となる。一九一五年に主教職を引退しているが、ロシア革命の一九一七年に永眠したと推定される。

境内地の建造物の老朽化 一八九〇年(明治二三)五月三日付で聖ニコライがロシアの海軍少将マカロフに宛てた手紙の中に、函館の教会について、「……函館の聖堂と宣教団の建物は築三〇年以上になる木造建築です。全く老朽化しました。床下は腐り、住むのは危険ですし、教会で奉事するのも危険です。特に強風や地震の時など。新築する必要があります。現在のような簡単で安い木造のものでも良いのですが。……」という記述が見える。

この記述を見ると、当時の木造建築のこと故、築三〇年ほど経てば、このような状態になるのも無理からぬことであろうと思うのだが、実のところ、一八七四年(明治七)、築一三年から一四年程度で既に次のような状態にあつたらしい。

その老朽ぶりを証言する記事がある。それによれば「我が尊敬する宣教師殿がここでひどいリューマチにかかり、時として奉神礼を執り行うことができなくなるほどだというのは、誠に同情を禁じえない。アナトリー師は函館から三十里ほどのところにある温泉場に数日間も出掛けなくてはならない有り様だ。病

は悪しき環境に由来する。アナトリー師の住んでいる家は板張りで、二重張りになってはいるものの、漆喰は薄くしか塗っていない。内側は壁紙が張ってあるだけなので四方からすきま風が吹き込んでくる。冬など風が床下から吹き上がってきて、敷いた藁藎を吹き上げるほどだ」(一八七四・四三・三七八)

ロシアがいかに寒い国であるとは言え、寒いのはあくまでも戸外の話であって家の中は十分過ぎるほどに温かいことを思えば、宣教師たちが味わった、日本家屋での北国の生活の辛さは想像するにあまりある。彼らの多くが健康を害したことを理由に草々と帰国していったのも、あながち口実とは言えないだろう¹。

しかし、公平を期すために聖堂の内装や外装について言及すれば、一九〇六年(明治三九)に函館を訪れたペトル石川喜三郎の巡回記に「祈祷所は諸人の知る如く温雅なる建築の聖堂にて、堂内の構造裝飾等は如何にも高尚にて」と記されており、当時の限られた建築事情にあつて、「堂の美なる」ために最善を尽くした様子が窺われる。

また、ロシア正教会「宣教協会」の機関雑誌「宣教師」(一八七四年第三一号)には、函館復活聖堂の様子が次のように報告されている。

先の領事、ゴシケーヴィチとニコライ師のご尽力と、わが国の軍艦やロシア、とりわけペテルブルグからの寄進のお蔭をもって、函館の正教会は、とりわけその内装は、十分の美観を呈しており、外国の者も、他教派の者もみなその華麗さに目を見張っている。この教会には二百人あるいはそれ以上を収容することができ、また、公祈祷の祈りなど、参拝する信者やあるいは好奇心に駆られてやってくる日本人などで教

会は一杯になり、それが半分以下になるような場合はめったにないほどだ¹。

一 一 司祭ペトル山懸金五郎の時代

一八九一年（明治二四）―一九〇〇年（明治三三）

一八九一年（明治二四）、東京では三月に東京復活大聖堂の成聖式が行なわれ、この年の公会は、成聖式に併せて臨時公会として行われた。この臨時公会で、浅草教会の伝教師を務めていたペトル山懸金五郎が司祭として函館に着任する。小松神父は札幌、小樽、寿都、黒松内、根室、福山、江差を管轄することとなる。アルセニイ（ティモフェーエフ）神父は、昨年に引き続き函館に常駐している。

この年にはまた、詠隊教師イサク増田作太郎が函館に着任している。彼はその後五〇年間余りを函館で勤めることとなる。デミトリイ・リヴォフスキイの弟子で、ヴァイオリンの演奏も行なった。教会外の人たちからも「増田先生」と慕われ、アポロ音楽会、増田音楽会など数々の活動を通して函館の音楽界をリードする存在となる。

テイト小松神父が函館に赴任した時と同じように、今回ペトル山懸神父が函館に赴任するに当たり、再び聖ニコライは山懸神父の赴任時に合わせて、北海道を訪れている。一八九一年（明治二四）八月四日から八月二二日までの間、函館、有川、福山、江差、寿都、黒松内、岩内、小樽、札幌などを巡回する。

この間の聖ニコライの日記より函館に関連する部分を抜粋引用する。



40 詠隊教師デミトリイ・リゾフスキイ



39 ベトル山懸金五郎神父

41 詠隊教師イサク増田作太郎

八月四日（火曜）。夕方前に墓地に行ってきた。ロシア人の墓地はすべて生い茂った木々の陰にあったが、その木々はわたしがかつて植えた細い苗木が成長したものだ。葉ずれの音がなんと心地良いことか！

八月八日（土曜）。きょう九時にここでパニヒダが行なわれた。アルセニイ師の司祷はとても良かったし、聖歌も悪くなかった。日本語で「永遠の記憶」と唱和されるのを初めて聞いた。東京でもそろそろこれをパニヒダで唱和する必要があるだろう。

八月二二日（土曜）。朝の六時から聖体礼儀があり、それに続くパニヒダでも、聖歌隊員はほとんど全員が、こんどもとてもきちんと四声で歌っていた。聖体礼儀でわたしは「死者の記憶」について話した。

一八九二年（明治二五）の公会で、アルセニイ（ティモフェーエフ）神父が札幌の管轄司祭として転出する。函館に山懸神父、根室に小松神父が配置され、北海道はこの年、初めて道東、道央、道南に管轄司祭が一人ずつ常駐する三管轄司祭体制となる。

しかし、それも長くは続かず、翌一八九三年（明治二六）の

公会で、小松神父は根室から白河へ転出、代わりにニコライ桜井宣次郎神父が根室に赴任した。アルセニイ神父は一八九三年（明治二六）ロシアへ帰国する。函館は山懸神父が管轄司祭として続投した。

酒井糸いと三姉妹 一八九五年（明治二八）九月二四日の聖ニコライの日記に次のように記されている。

きょう桜井神父の話で、テクサ萩原の運命について思い出し、さらに新たなことも知った。テクサはわたしたちの敬虔な司祭、故イオアン酒井「篤礼」神父の長女だ。彼女は、かつてこの女学校の誇りだった。それから、テクサは函館の宣教団の学校で教師をしながら、母「エレナ酒井糸い」のところで戒律を守って生活していた。彼女は永遠に自分を神に捧げることを考えていた。……しかし、最も優秀な函館の医師の一人である萩原（かれは信濃の田舎の出身だ）がテクサに求婚したとき、彼女は意志を貫徹しなかった。萩原を正教徒にさせようという望みを持って、異教徒の彼に嫁いだ。私が四年前に函館に行ったとき、すでに立派な若い奥方、大きな家の女主人になったテクサに会った。夫にも会ったが、かれは微笑みながら、私の信念どおり、正教に身を捧げることを約束した。

日記にはこの後、萩原医師が札幌に近い流刑囚の監獄の医者となって転勤し、その地で永眠したこと「一八九四年（明治二七）」、テクサは、その後以前と同じように函館の宣教団の住居で母糸いと共に暮らしていること。生活費は糸いの兄、医者のアコフ後藤氏が援助していること。後藤氏は今、函館でいちばんの医者であることが書かれている。その後テクサは再び東京女子神学校の教師となって上京する。

テクサが永眠した一九〇四年（明治三七）一月八日の翌日、聖ニコライは日記に次のように記している。



42 テクサ 酒井澄

故イオアン酒井神父の娘テクサ酒井（結婚して荻原）が亡くなった。彼女はここ東京の宣教団の女学校の舎監および教師をつとめた。日本の女性信徒のなかで最も敬虔なハリスチアンであった。長いこと市内の病院で闘病生活を送っていたが、肺病で亡くなった。彼女は絶えず祈りの中に慰めを見出し、永眠するときも祈っていた。ラダン（乳香）が芳香に変わるように、彼女の生は祈りと化したのだ。

テクサは三人姉妹で、すぐ下の妹実は教団でロシア語翻訳を勤めていた木村英吉に嫁いだ。

テクサの一番下の妹信は函館の恵比須町で酒問屋を営んでいた小野家に養女に入った。後にイオアン小野帰一神父、そしてニコライ小野主教となった人は信の夫で、小野家に婿養子となっていた⁴⁰。

一八九六年（明治二九）八月一六日の聖ニコライの日記には、函館の学校の状況について次のように記されている。

……函館伝教学校の最古参の教師をつとめ、函館管区の伝教者でもあつたワシリイ平井「市造」が訪ねてきた。伝教師としての新しい任地、妹尾へ向かうところなのだ。

かれの語るところによると、函館のわれらの学校（小学校）がだんだん小さくなってきているという。現在では男女あわせて四、五人の生徒しかない。しかしこれはわれらの学校が他に劣っているからではなく、函館では公立にせよ、私立にせよ、学校の数が急激に増え

ているからなのだ。……

一方、アンナ田辺が洋裁を教え、ペトル「山懸金五郎」神父が教理を教えている洋裁学校のほうは失敗することなく、むしろ規模が大きくなっており、この学校からは信徒も生まれている。この学校で学んでいるのは、成人した未婚の女子や、若い既婚の女性であるが、彼女らは道徳性が遵守されているからといって、われらの学校を尊重してくれている。ほかにも、いちどは学校を辞めていた者たちが、市立の学校には求められない、善き道徳による保護を望んで戻ってきているのだ。この学校は残しておくのが良からう。現在そこでは、二九人の女子が学んでいる。

一八九七年（明治三〇）の公会で、北海道は再び三司祭体制となる。札幌の信徒たちが、「当地は北海道第一の首府にして……」根室地方に別に司祭を立て、札幌を桜井司祭をもって司祭常駐教会とするよう請願したのである。聖ニコライはこの請願に対して、「北海道教会は、全国教会中に最も活力を有し居る活発なる教会なり。……故に北海道に一名の司祭を増置するは最も必要なり。されば先ず北海道の司祭増置の件より議決すべし」とコメントしている。その結果、伝教者イグナティ加藤主計が公会後に司祭に叙聖され、根室、和田、標津、シコタン島、釧路地方の管轄として赴任する。桜井神父は札幌に常駐し、稚内から福山、江差、瀬棚地方までを管轄、山懸神父は函館と有川を管轄することとなった。

掌院セルギイ（ストラゴロツキイ）の北海道巡回　一八九八年（明治三一）の八月から一〇月にかけて聖ニコライと共に掌院セルギイ（ストラゴロツキイ）が北海道及び千島を巡回する。聖ニコライは宣教団の留守をアンドロニク（ニコリスキイ）神父に任せて、掌院セルギイと共に八月五日に東京を出発、八月六日に



43 掌院セルギイ(ストラゴロツキイ)
1900年頃

青森から函館に着く。函館から根室、和田、色丹、択捉、標津などを巡回した後、一旦函館に戻り、聖ニコライは八月二四日に函館から一足先に東京へ帰る。掌院セルギイは巡回を続け、ニコライ桜井神父と一緒に札幌、幌内、室蘭、稚内、小樽、岩内、寿都、歌島、黒松内などを巡回し、一〇月一二日に函館に戻る。掌院セルギイが東京に戻ったのは一〇月二二日のことである。

掌院セルギイは後、ロシア革命後の総主教制度復活に際し、第一二代モスクワ及び全ロシアの総主教（一九四三年～一九四四年）となった人である。まだ修道司祭であった一八九〇年（明治二三）、聖ニコライの補助者として来日、一八九三年（明治二六）に帰国、再び一八九八年（明治三一）に来日（この時既に掌院）、一八九九年（明治三二）に帰国している。

以下、「掌院セルギイ『北海道巡回記』（宮田洋子訳）から「函館」の部分を引用する。

……「一八九八年」八月六日（七月二十五日）土曜日、朝八時に青森に着いた。ここから青森湾と津軽海峡を通り、函館まで船で六、七時間かかる。船はたくさんあるが、「日本郵船会社」のものが良く、毎日往復している（時には一日二回も出航する）。船中は清潔で、日本料理ではあるが上等で、むろん洋食も注文できるがこれは必ずしも必要とはいえない。同じ日の夕方四時には私たちはもう一風変わった函館山を歩いていた。この山は停泊地を海から完全に閉ざしている。さまざまな宣教師団の大きな建物が集まっている円形劇場のような函館の最上段の、それらの建物の間の緑のしげみの向こうに私たちの古びた木造の教会の小さな十字架がつつましく立っていた。函館は私たちの教会

の母である。三七年前ここで初めてニコライ主教が日本の地を踏み、ここで初めて我がハリストニアニたちが洗礼を受け、その後、日本中にハリストスの福音を述べ伝えたのである。現在の教会の場所はおロシア領事館のものであった。広く、花や草木が多く、領事のための非常に大きな家、書記官・司祭・医者などのための家が所狭しと建てられており、これとやらんでロシア海洋病院があった。しかし大火でこれらの建物がほとんどすべて灰となり、領事館の聖堂と司祭館その他が焼け残った。政府の変遷に伴い、我が国の領事も東京に移ったので再建の必要もなくなり、その場所を私たちの宣教師団が使うことになった。聖堂は今も残っていて、函館の信者たちが祈祷に集まる。焼け残った建物の中に伝教者、司祭その他教会の職員たちが部屋を持っている。以前はここに宗教の相違とはかわりなく子供のための学校があったが、今では函館に官立の学校が建てられ、その上、生徒たちに一定の資格を与えている。私たちの学校は政府に公認されていないので、もちろん資格を与えることはできない。このため生徒数が減り（これはあらゆる宣教師団のたてた学校の一般的な運命であった）、その負担軽減のためには閉鎖のほかなかった。今でも裁縫学校だけは残っており、そこはいつも生徒がいる。木々はますます育って（幾つかはニコライ主教が植えられたものである）、ほとんど聖堂も司祭の家も（そこにはニコライ主教の住んでおられた部屋もある）おおいかくしている。すでに主屋はなく、庭は手入れもされず、邸内には草が茂り、ずんぐりした傍屋といろいろな建物だけが残り、そこではひっそりといわれられている生活の印がほんの時たま現れる。こういうことから放りばなしにされた地主の屋敷といった印象を受ける。すべては過ぎた思いに充ち満ちた過去のなごりであり、今も残る追憶である。この函館の庭をそぞろ歩きながら、蔭の多い木の下や聖堂や家のそばでいろいろ考えめぐらすことができる。静かな目に見えぬ仕事や考えが胸に浮かんでくる。この中で日本における正教会の歴史が始まったのである。

現在、函館にはおよそ三百人の信者がいる。日本教会の開設以来一二人が領洗し、そのうち二百人以上がすでに亡くなり、約八百人が北海道と旧日本にちらばっている。他の教会からの信者たちが去っていった人々のかわりに移住してきたが、もちろんずっと数は少ない。このような移動はどの教会にもみられることで、これを説明するのは難しいことではない。洗礼をさっさと受けられるのは領洗するのに障害の少ない人、周囲の状況に束縛されていない人で、こういう状態にあるのはよそから来た人たちである。彼らが領洗する率が高いが、同時に又その臨時の移住地を簡単に見捨ててしまう。むしろハリストス教の布教を考えればこのような流動は有益である。そのかわり一時的な住人たちはあまり熱心ではなく、教会のことに一生懸命になりその必要のためにすすんで豊かなことはし得ないという点からでも、教会の損失は少なくない。とはいえ函館は古い信者たちといふかなり多くの恒久的な核を持っており、そのうち何人かはニコライ主教自身や掌院アナトーリ師から洗礼を受けている（このような人々は実際にはもう大へんわずかである）。彼らは教会を支え、ほとんどここに住み続けたロシア人宣教師たちから学び得た教会の習慣を守っている。ことにそれは婦人たちについていえる。どこでもそうだが婦人たちは教会に熱心で、男性たちより信心深い。彼女たちはここで親しくなり、互いの向上のために月三回集まり、一緒に教会への寄付を行なったり、貧しい人々を助けたりしている。祈禱は聖堂で教会法と正教のさまざまな習慣を守って行われている。小さな聖堂はもちろんもう古くなっているがまだしばらく使えるし、建てなおすことなど望まないだろう。というのもこれが日本の聖堂の父祖だからである。そこには祈禱の前にいつも鐘の音をひびかせる鐘楼がある。この鐘はかつてニコライ師自身によって鑄造された（もちろん日本の鋳物師の助けを借りて）実に厚いもので、長もちするようにつくられた。そのため鐘の音はひよつとすると考えていたのとは違うかもしれないが、日本教会にとって記念となる尊いものである。

その晩と、翌日（日曜日）の聖体礼儀で信者たちと祈ってから、両回とも大主教自身（大主教）が説教された。教会の仕事を二、三まとめて、夕方司祭や信者たちに送られて、同じ郵船会社の船に移った。根室にむけて出航したのは真夜中であった。月の明るい夜でなんと眠くなかった。私たちは、山かげでさまざまな色の光が静かにまたたく霧深い停泊地や町に長い間みとれていた。

掌院セルギイは、北海道各地および千島列島の巡回を終えて、一〇月一二日、再び函館に戻ってくる。「もう函館に着いた。嬉々としてその活気あふれる停泊地にみほれていた。やがて私たちの宣教団の家に着いた。すべては以前のままに静かで、なじみ深い栗の木がもの思わし気に黒々と茂り、その陰に私たちの古い教会があった」と記して、「北海道巡回記」を終えている。

ちなみに、この頃函館港の船着き場は、八幡坂を下った所にある旧棧橋（東濱棧橋）である。沖に停泊している船とこの棧橋の間を「はしけ」が行交っていた。この棧橋に隣接して現在「北海道第一歩の地」碑が建てられているが、これは本州の人々が上陸して北海道に第一歩を記す場所だったからである。一九一〇年（明治四三）まで東濱棧橋は、函館で唯一の棧橋だった。文字通り、函館は北海道の玄関だった。

東濱棧橋が作られたのは一八七一年（明治四）のことであったから、ゴシケーヴィチ領事や聖ニコライが渡来したときは、まだなかった。

一八九七年（明治三〇）から一九〇〇年（明治三三）頃までの聖ニコライの日記には、函館教会のことで頭を悩ませている状況と経緯が頻繁に記されている。サハリンの漁場での漁業権の件が教会に持ち込まれたことが発端であった。

一八七五年（明治八）の樺太千島交換条約の後も、日本人漁業の中心地であったサハリンでは、一八八二年（明治一五）まで、サハリンの日本人漁業者に対して課税すら行われていなかった。ところが、一八八四年（明治一七）には、サハリン当局の法令によって具体的な漁場名をあげて漁区と禁漁区が設けられた。これ以後、日本人漁業者は毎年、漁区の賃借を出願するという手続きを踏むこととなる。さらに一八九〇年代末になると、出願手続きの際に既存の漁場利用の更新を認められず、既存の漁場の利用権を失う者が出てきたのである。ロシア政府（ブリアムール総督府）はロシア人漁業者の保護を打ち出すようになった。

このような状況の中、函館の信者の中には、サハリン島の一〇か所の漁場での操業権を獲得するために運動できないか、などと利益を教会のために使うという理由付きで、聖ニコライに打診する者もいた。一方、サハリンの日本人信徒のもとを巡回するためにサハリンに出かけようとしていたペトル山懸神父は、漁業権を獲得するためにサハリンに行くことになった彼ら信徒たちと同行する形となる。サハリンのロシア当局は一行の中にいる司祭の存在に敬意を払い、彼らは優れた漁場を手にすることができた。これが函館の信徒たちの間に争いを起こす火元となった。結果として、漁業は教会から切り離され、ペトル山懸神父が盛岡正教会に転出することによって、この一件は鎮火した。一九〇〇年（明治三三）一〇月のことである。

一 二 臨時管轄司祭ペトル仮野成章の時代

一九〇〇年（明治三三）一〇月～一九〇一年（明治三四）九月

一九〇〇年（明治三三）一〇月、ペトル山懸神父は盛岡正教会に転出し、翌年の公会までという条件付きでペトル仮野神父が臨時管轄司祭となる。そして一九〇一年（明治三四）の公会で、仮野神父に代わってアンドレイ目時金吾神父が函館に着任することとなる。



44 ペトル仮野成章神父

一 三 司祭アンドレイ目時金吾の時代

一九〇一年（明治三四）～一九一二年（明治四五）

一九〇一年（明治三四）、目時神父の管轄範囲と伝教者の配置は次の通りである。

函館・有川・江差

副伝教者ペトル小原

根室・和田

伝教生マクシム小畑

釧路・春採地方

副伝教者アレキサンドル室越

斜古丹、紗那

伝教者モイセイ湊

標津・羅臼

司祭直轄

北海道のその他の地域はニコライ桜井神父の管轄で、この年、北海道は二司祭体制であった。

一九〇二年（明治三五）の公会で、ロマン福井寧神父が根室、釧路、斜古丹方面を管轄することとなり、北海道は再び三司祭体制となる。目時神父の管轄は、函館、有川、江差であった。

一九〇三年（明治三六）の公会で、石巻正教会出身のフェオドル豊田精一伝教者が目時神父の管轄の下、函館正教会に派遣される。この年の九月の「正教新報」には、フェオドル豊田が神学校を卒業し、この度函館に赴くことになるので、石巻正教会では送別会を開いたことが記事になっている。

聖歌隊の活動

「正教新報」五四六号（明治三六年九月一日発行）によると、この頃、イサク増田唱歌教師のもと、詠隊の活動が盛んであったことが伺われる。

◎函館正教会唱歌者親睦会

七月二十六日当教会唱歌者親睦会を露館内詠隊室楼上に開かれたり。此の日会するもの村木伝教師、増田唱歌教師、外男女三十余名今其概況を記さんに室内は其西方を百花中最も優美なるものを選択挿飾し是れが天井より左右に信号旗を釣し又右を男席とし左を女席となし其席状円形にして自ら円満なるを表せり。

午後二時開会を報ずると共に一同兼て設けの席に着し会主増田教師の紹介により左の如き順序に依り開会せられたり。

順序

- | | | | |
|-----|-------|---------------------------|----------|
| 一、 | 開会の祈祷 | 在天の主 | 会衆一同 |
| 二、 | 開会の趣意 | 井愛の動機と力に就て | 幹事中岡氏 |
| 三、 | 演説 | 所感を述べ | 厨川氏 |
| 四、 | 演説 | 団結心に就て | 松本氏 |
| 五、 | 閉会の祈祷 | 常に幸 <small>さい</small> にして | 会衆一同 |
| | 余興 | | |
| 一、 | 茶番 | 障害物 | 後藤氏 厨川氏 |
| 二、 | 滑稽の演説 | 北海道の夏 | 山懸氏 |
| 三、 | 唱歌 | 祝へ我が君 四部 | 男女選手 |
| 四、 | 進行曲 | ウイオリン 合奏 | 増田教師 倉岡姉 |
| 五、 | 茶番 | 滑稽道中 | 後藤氏 松本氏 |
| 六、 | 唱歌 | 探梅 四部 | 男子部選手 |
| 七、 | 英語唱歌 | | 長尾姉 倉岡姉 |
| 八、 | 阿房陀羅經 | 丸い玉子の説 | 増田教師 山懸氏 |
| 九、 | 唱歌 | 夢の外 | 女子部選手 |
| 一〇、 | 薄霞 | 箏 | 荻原姉 |

十一、落語

増田教師

十二、流水の曲

遊戯及唱歌

坂本姉 豊間姉 長尾姉 野村姉

十三、唱歌

今宵も

女子部

十四、手品

増田教師 山懸氏

十五、唱歌

馬上の少年

女子部

十六、六段曲

ウイオリン等 合奏

増田伝教師 遠藤氏

十七、茶番

函館大町の五の市

男子部一同

右何れも喝采の中に演了し中岡幹事一応散会を告げられしも時刻早しとして歌ガルト会を開き混戦数次更に一場の清歓を添えたり。尚開会中座間整然として豪も乱雑の態なく懇談款話相語り相笑い全く退散を告げしは午後八時なりき。

日露戦争と要塞地帯法

一九〇四年（明治三七）二月六日、日露の国交は断絶し、二月八日、日露戦争開戦となる。

函館正教会は函館山麓にあるが、この函館山は標高三三四メートルで、山頂からは周囲三六〇度を一望に見下ろすことができる。政府は、一八九八年（明治三一）から四年をかけて、山腹に五か所の砲台を持つ函館要塞を築き、ロシアとの有事に備えた。一八九九年（明治三二）には要塞地帯法ができ、「第八条 要塞司令官ハ要塞地帯内ニ於テ兵備ノ状況其ノ他地形等ヲ視察スル者ト認メタルトキハ之ヲ要塞地帯外ニ退去セシムルコトヲ得」などと定められている。

一九〇四年二月八日夜、函館の境内地では教会の一日の仕事が終わり、一息ついているところへ突然警部

一人が巡查五、六人、憲兵一人を伴つて現れる。函館要塞司令部からの命令書を携えており、目時神父、イサイヤ村木伝教者、フェオドル豊田伝教者に二四時間以内にこの地を退去するように命じた。目時神父と村木伝教者は有川教会へ、豊田伝教者はとりあえず故郷の石巻へ退去することとなった。

東京本会にも、目時神父たちが境内地から退去させられたという情報は届いたが、なぜそうなったのか、今彼らは無事であるのか、わからない。聖ニコライは内務省に問い合わせるなど、東京で手を尽くす。そうこうしているうちに、一旦故郷石巻に退避していたフェオドル豊田伝教者が東京本会に到着して、退去の一部始終を語るに至る。その内容は「正教新報」第五八号（明治三十七年三月一日発行）に「豊田伝教師退去始末」として掲載されている。さらに同号には、彼ら三人の名前で、彼ら自身も何が身の上起こったのか、よくわからない状況の中で、日本正教会の兄弟姉妹に、自分たちにはこのような嫌疑をかけられる理由はなく、良心に疾しい所はないから心配しないようにと、できるかぎりの説明を試みた「謹告」なる文章が掲載された。

謹告

生等今回要塞地帯法第八條ニ依リ函館要塞指令官ヨリ地帯外へ退去ヲ命ゼラレ去ル九日肩書ノ處へ立退キ候義ニ付世ノ悪徳新聞ハ例ノ針小棒大的ノ口調ヲ以テ露探賣國ノ嫌疑ヲ以テ退去ヲ命ゼラルテフノ記事ヲナセルヲ見御吃驚被成各地會友諸君ヨリ慰問又ハ尋問的ノ御書状相達シ一々拝答ニ違アラズ然ルニ救主ノ所謂我国ハ此世ニ属セズテフ天國ヲ傳フル生等教役者ハ國際上忌ムベキノ嫌疑ヲ衣ルベキ理由ナク又斯ク迄ノ腐敗漢ニアラズ退去命令ノ主要ヲ按スルニ目下函館要塞地ノ軍備完成ヲ期スルニハ露國人トノ交際アルモノアリテハ秘密漏洩ノ患ナキニアラズトノ婆心的警戒ニ外ナラズト推測被致候生等素ヨリ良心淡然何



45 アンドレイ目時金吾神父

ノ疚ムコトナケレバ國家ノ為メニ服命直チニ退去仕候次第ニ候得共ソハ決シテ宗教的ノ意義若シクハ何等カノ行為アリテノ義ニ無之候間御安念被成下度此段申上候
渡島國上磯郡上磯村字中野百〇二番地正教會

司祭アンドレイ目時

伝教者イサイヤ村木

陸前國石巻町新田町二番地

伝教者フェオドル豊田

実はこの時、函館要塞地帯内より退去を命じられた者は一七人おり、その中には、正教会境内地の掃除夫ニキタ倉岡馬之助、信徒の澤克巳が含まれている。また、後日、別途退去を命じられた者たちの中には、信徒のイアコフ笠原與七郎が含まれている。いずれにしても「正教新報」の「謹告」に本人たちが記している通り、前掲の要塞地帯法に触れるような行為があつたとは思えない。従つて、この退去命令は日露開戦必須という状況を前にして、かねてからロシアとかかわりが深いと目を付けていた人々に網をかけて退去させたものである⁴¹と見られている。

一方、目時神父と村木伝教者が常駐することとなつた有川教会では行き届いた牧会が行われることとなり、活気を呈した。

「正教新報」第五六二号（明治三七年五月一日発行）には、教会が始まって以来、初めて復活祭を教会暦通りに祝うことができた喜びが次のように報告されている。

◎渡島國有川教會

當會は創立以來始めて大祭當日に正式的奉事を挙行せしこととて信徒一同非常なる満足にて五、六の留守番を除き大抵参拝し祈禱は二時五十分頃終了し午後一時感謝の祈禱を献じ直に別室に於て祝賀會を開き時節柄凡て質素を旨としたるも本年は新信者も加はりし事とて一層の活氣を加へ祝詞演説十六名各自喜悅に満たされ六時頃散会したり來會者凡そ五十四名異教者三、四名中々の盛會にてありき

尚ほ當地も時局の影響を蒙り誤解者よりの罵詈暴言少なからず折角教理の研究を始めし者も自然教會に遠ざかる姿となり彼等救贖の爲め一時悲嘆に呉れしが神の恩佑全く彼等を棄て給はず聴教者中奮然窘難を排して領洗を志望せし者四名あり聖枝祭の當日小兒を合せて八名の受洗入會者ありたるは一重に神恩の現はれと一同感謝しつゝあり云々

また、後日の「正教新報」第六二三号（明治三九年十一月一日發行）のペトル石川による各地方教會巡回記には、「有川教會は目時神父の退去事件滞在中は一冬毎夜の如くに信徒を集めて教養せられたる由にて彼等農民信徒の兒女が斯かる珍しき教理談をなすを得るに至れるは其時の賜物なりとの事なり」と記されている。目時神父は、留守にしている函館正教會のことが氣に掛かり、聖ニコライに配慮を願ひ出たところ、ロマン福井神父（根室）が函館に派遣された。その様子は「正教新報」前掲第五六二号に次のように記されている。

◎函館正教會



46・47 (上)イアコフ笠原與七郎が眠る墓 右の小さな墓は墓碑銘が判読できないが、長男の墓と思われる(函館ハリストス正教会墓地)
(右)笠原與七郎記念碑 笠原家の墓と並んで建てられている



二月九日目時司祭等退去の後は主日スポタ等の公祈祷は増田詠隊師に依りて行はれ来りしも祈祷に与かる者は館内信者位の事にて市中よりは殆んど、人も来らず従つて浮説紛々重立ちたる信者も安き心なく一時は人心恟々と云ふ有様なりしも近來幾分か静穩に歸したる際福井司祭の東京本會よりの命令に依て来函せらるゝあり師は取敢へず憲兵警察等に届書を出し親しく隊長署長等に面會し前後の事情縷々陳述する所ありしに彼等は氏に対して目時氏等の退去せしめられしは決して宗教上に関する理由にあらざり故に貴下が宗教上の必要に應じて来函せしとならば素より憲法の保障もある事故遠慮なくドシドシ行へよ若し萬一に

も暴民ありて妨害を加へ又は不穩の行為あらば報知せられよ我等は職責上十分なる保護を与へんとこの事につき同日より嚴齋祈祷を聖堂にて奉行し増田詠隊師と共に昼夜寸暇もなきまでに信者を訪問し詠隊者を集め老病者を慰め痛悔領聖を勧めしに多年の修養になりし信者の事とて大部分は心を安んじ大金曜日午後三時六時の奉事には百名以上の参拝者あり大祭竝に大祭後の感謝の祈祷には百五十名余の参拝者あり廻家の祈祷も事なく終りたるは惟々主神の聖佑と感謝せざるを得ず願くば全国各會の兄弟姉妹は其祈祷に立つの際我が會の事を記憶し給はん事を

この時、退去命令を出されたイアコフ笠原與七郎は、宮城県の実生れで、神田駿河台の正教神学校に学び、ロシア語を習得した。一八九〇年(明治二三)に来函し、間もなく「函館露語研究会」を設立す

る。函館でロシア領事館書記として働き、日露戦争前年に、ロシアから聖スタニスラフ三等勲章の佩用の義を允許されている。退去命令を出された後、笠原は黒松内に移った。そして退去先にて結核性脳膜炎に罹り、五月二三日に永眠する。

これを報じた「正教新報」第五六五号（明治三十七年六月一日発行）には、「ああ、露探嫌疑の汚名を蒙り罪なくして配所の月にあこがれつつ千秋の恨みを吞んで逝かれしを思い同兄並びに遺族に対する同情の念抑えんと欲して抑うる能わず。感慨胸に迫りて轉々千斛の涙を禁ずる能わず」と記されている。同兄の葬儀は目時神父が有川から函館に一時的に出張することを要塞司令部から許され、五月二六日に無事に行っている。しかし、その翌日、笠原兄の長男（前月四月に生まれたばかり）が永眠し、「正教新報」（同号）には「重ね重ね同氏遺族の愁傷慰むるに辞なく思いやるだに気の毒なり。願わくは知ると知らざるとに論なく同氏父子の為め神前に記憶せられんことを」とある。

新聞紙上に「売国嫌疑者」、「露探の退去」という言葉が躍った露探騒ぎは、結局「嫌疑」を掛けてみたものの、何も実態があるわけではなく、同年八月には目時神父の函館帰任を以て終息を迎える（当時の状況については、第三部「露探」参照）。

豊田伝教師の入営　神学校卒業後、函館正教会に伝教師として赴任し、要塞地帯法によって退去を命じられた豊田伝教師であるが、その後、同年十一月、日露戦争に出兵することとなる。函館正教会では「入営送別会」が開かれた。

赴任以来會務に熱誠勤勉せられ加ふるに資性温良恭順なれば老幼皆其徳に懷き會勢為めに革まる所あり

何れも良教師を得たるを欣び居りしに突然召集の命下り補充兵として所轄師団へ入營することとなり、會事多端の今日良教師に去らるゝは教會の一打撃にして非情に堪えざるも師は之より名譽なる軍職を以て身を国家に献じ義の爲めに戦はんとし、然も我が教會の教職よりハリスティアニンの勇士として起たんとするを思えば実に吾が教會の満足又光榮とする所なり、……⁴²

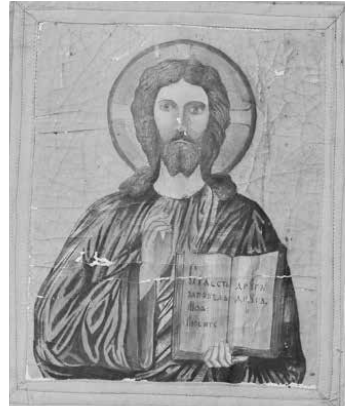
「ハリスティアニンの勇士」豊田伝教者は一九〇六年（明治三九）、無事戦地より帰還している。

俘虜信仰慰安会と目時神父

—— 我が病みし時、我を顧み、我が獄に在りし時、我に來たれり⁴³ ——

日本正教会では一九〇四年（明治三七）五月、日本各地の俘虜收容所に送られてきた俘虜のために「信仰慰安会」を設立した。これは既に設立されていた「正教信徒戦時奉公会」の枠内の活動であったが、政府から発布された俘虜取扱規則に則って手続きを行うため、相応な名称を持った会が必要だったのである。この会の目的は、故国を遠く離れた異教で囚虜となつた敵国俘虜のために、信仰上の慰安を与えることであつた。「正教新報」第五八〇号（明治三八年二月一日発行）の「俘虜の待遇と国家の仁愛」という記事には、その活動の意義と重要性が次のように説明されている。

又茲に一言す可きは敵国俘虜に信仰上の慰安を与ふる目的を以て組織せられたる我が正教信徒の俘虜信仰慰安事業は是を一方より觀れば、初代教会以来ハリストス教徒が常に俘虜のことを慮りたる斯教の精神なる愛敵の徳義を具体的に実行する善行なり。又信仰慰安会の事業は他の一方よりすれば我が帝國政府が



48 ロシアの俘虜より目時神父に贈られた凱旋旗

文明的精神と至尊の仁旨とを體して敵国俘虜を待遇する方針に一致して是を翼賛助成する至要の事業なり。

目時神父は当時、福岡、大里、小倉にあった日露戦争の俘虜收容所に派遣された。他にもこの時点で松山俘虜收容所に鈴木九八神父、名古屋俘虜收容所に三井道郎神父と柴山準行神父、濱寺俘虜收容所に澤邊悌太郎神父と小野帰一神父などが派遣されている。

目時神父の報告によると、福岡收容所の俘虜の数は三七三九人、小倉は一〇二一人で、ポーランド人やユダヤ人も若干名おり、ポーランド人のためにはカトリック司祭（フランス人）が来て祈祷を行なっていた。市井の教会にすれば、かなりの「信徒数」であり、各收容所において徹夜祈祷、聖体礼儀はもちろんのこと聖名日の感謝祈祷、埋葬式、パニヒダなど頻繁にあり、一人、二人の神父で牧会するのは大変な仕事であったと察せられ、「正教新報」第六〇六号（明治三十九年三月一日発行）にも「当該神品の日夕の辛勞に至りては実際を目撃せる者に非ざれば到底想像の多せざる所なり」と記されている。いずれの收容所でも日本正教会の神父たちは俘虜から親しまれ、慕われていた。

目時神父がこのような訳で函館を離れている間、桜井神父が札幌から出張して函館の信徒を牧していた。

後、聖ニコライは、日本の司祭が露国の俘虜に対して恰も同胞を顧みる如く熱心に尽力し、宗教家としての本分を完うした事を宗務院に報告し、その賞として聖書を与えてくれるように申請したところ、宗務院は二〇人の司祭のうち一〇人に対しては帝室より、他の一〇人に対しては宗務院より十字架を授与することと

した。目時神父はこの時、帝室よりの十字架を贈呈されている。

現在、上磯正教会にある手作りの凱旋旗二旗は、俘虜たちから目時神父への贈り物と伝えられている。凱旋旗の周りの布が新調されたが、中央のイコンは当時の俘虜たちの手作りのままである。主ハリストスが手に持っている福音書には教会スラヴ語で「此我の戒也。互いに愛せよ」と書かれている。

日露戦争開戦以来、日本に収容された俘虜の数は七万六〇〇〇人、収容所の数は二八か所に及んだ。日本正教会の俘虜信仰慰安会が派遣した司祭及輔祭の人員二一人、会の中央部には常務幹事二人、役員六人を置き運営にあたってきた。その会も日露戦争終戦後、一九〇六年（明治三九）二月を以て閉会式が行われた。福岡では目時神父の送別会が行なわれ、函館では目時神父を迎えて慰勞会が行なわれた。丁度復活祭を迎える候となり、復活祭祝賀会、目時神父慰勞会、出征軍人歓迎会（豊田伝教師が戦地より帰還）が併せて行なわれ、「來會の信徒三百余名⁴⁴」という盛会であった。

三井神父とペトル石川の北海道巡回　この年、教役者供給法実施勧誘の任務を帯びた三井神父と愛々社のペトル石川が九月から三か月間、北海道並びに東北の各教会を巡回した。伝教者の月給を本会に頼らずに、各教会が供給するように計らうことを勧めるための出張であった。この間、彼らは三度函館教会に立ち寄り、その様子を「正教新報」第六二〇号（明治三九年一〇月一日発行）に「各地方教会巡回日誌」として発表している。以下、抜粋して引用する。

九月八日。四時半頃に汽船は徐々として函館湾内に入りて投錨せり。それより汽船会社の汽艇に転乗して上陸すれば、目時神父、豊田伝教者、増田唱歌教師、青年信徒等埠頭に迎えられたるに会せり。その厚

意感謝に堪えず。手荷物の事や万事世話になりて非常の便宜を得しかば、恰も遠遊の客が故郷に帰れる如き心地せり。

三井神父は、今朝黎明に着し、目時神父その他の教役者各信徒に迎えられたる由にて司祭に対する信徒の美風を賛め居られたり。当地の信徒は他より司祭の出張等に対しては一般に斯の如き美風を有し居るとの事なり。同夜は土曜日の祈祷あり。参拝者は少なし。詠隊は単音なり。祈祷所は諸人の知る如く温雅なる建築の聖堂にて、堂内の構造裝飾等は如何にも高尚にて何処ととりたてていうを得ざるも、我等東洋人の趣味に応える点ありと見えて、京都や本会の聖堂に立て祈祷するよりも心落附きて静かに祈るを得るが如き心地す。斯の如き聖堂を遺し与えられたる信徒は幸福なり。幸福なれども親の代よりの身代を継ぎたる者が為す無くして坐食する如き有様にては甚だ面白からざれば、親譲りの身代を自らも益々拡張せしむる事を謀らざる可らず。当函館教会の聖堂は今の信徒が自ら建築したるに非ずと雖も、決して親の財産を坐食する如き信徒に非ず。特に家屋の修繕の如きも今後年々自ら負担せば大いなる聖堂と附属家屋を多く有するだけその負担は大いなる可し。

九月九日。日曜日なり。九時より祈祷あり。豊田伝教者の説教ありたり。詠隊は今日は四調音なり。数名の少女等と二、三人の少年にて歌えり。能く練習せり。二番の「天に在す」並に、「ヘルビム」など皆よく歌えり。祈祷後我等の宿泊せしめられたる半西洋館の二階に來客あり談話し居りて一二時を過ぎたり。下の室にて日曜学校（祈祷後に）の授業あり。豊田伝教者担任せり。一時頃になりて少年男女は下の室にて尚、詠隊の稽古を続け、パニヒダの詠隊をも練習せり。我等は一時過ぎまで稽古し居りて食事を如何にせるならんと心配せり。然るに歌の稽古終りて一室に至り見れば、詠隊者一同は長き卓を囲み、豊田増田の二氏も坐して最も睦しげに少年少女の生徒と共に紅茶にてパンの昼食を為せり。是れ詠隊者の為に教会

より供する者なり。斯の如き事は些々たる事なりと雖も、詠隊者に歌を練習せしむる時間と便宜とを与ふる点に於て非常の利益あり。詠隊者優待の一端として他教会に取りての一の模範という可し。

一〇月一六日。同夜婦人会の催しあり。目時神父開会の祈禱を献げ、増田詠隊教師並に目時神父の令聞其他二、三婦人の感話ありたり。故酒井神父の令聞も一場の感話を為せり。この元気なる老姉と諸姉の熱心なる談話は我等に深き感動を与えたり。我が東京の諸教会には立派なる美服を飾りたる婦人信徒も多く内部にて中々理屈をいう女性には乏しからざる可きも当函館教会の如き質朴にして且つ集会の際に各自の所感を遺憾なく率直に吐露する如き婦人の集会は多く見られざる可し。後ち三井神父並びに我等も一場の説教を為して婦人の勧めを為せり。多くは子女を伴い又は乳呑児を携え来れる婦人方にて散会の時には各自子供を背にして散じ行けり。如何にうるはしき集会ぞや。馬車人車にて会堂の門に集る集会に比して如何に興味ある集会なるや知る可らず。

一〇月一八日。同夜函館教会信徒の総会を開く。執事の一人なる厨川氏は司祭供給費に関する原案を報告的に提出し執事氏家氏又之を説明せり。信徒の質問あり。又議論沸騰して中々盛んなり。……中途より氏家執事議長席につきて議事を進め遂に左の件を討議議決せり。即ち今後函館教会は司祭に対しては毎月月費の全額を供給し、伝教者並びに唱歌教師に対しては毎月一定の補給を為すことを決定し。今後司祭の俸給は全く本会の分を辞して当教会にて自給する事となし尚将来教会の財政と必要とに依じて更に其月費供給費を増加す可しとの事なり。此の供給費の財政は当教会の財産より生ずる金額にて当てる者なれば比較的確實にて教会の衰勢にて変動する如き事無かる可し。尚当教会の信徒は今後も毎月の献金を継続励行して、基本財産の増殖と伝教者供給費の独立を謀る可き事を決議せり。

明治四〇年の函館大火　三井神父とペトル石川が「去り難き心地せり」⁴⁵と函館を離れてから一年に満たない一九〇七年（明治四〇）八月二五日午後一〇時過ぎ、「明治四〇年の函館大火」と呼ばれ、函館市史に名を残す大火が起こる。その様子は「正教新報」第六四三号（明治四〇年九月一五日発行）に目時神父が「函館大火報告」として報告している。

◎函館大火報告

八月二五日午後一〇時半函館東川町方面より出火。折悪しく東の暴風にて殊に一カ月余も早魃続きにて乾燥しつつかある折柄なれば忽ちにして火炎は四方に瀰漫し、西川町より地蔵町、恵比寿町より末広町富岡町寶町蓬萊町にと焼け広がりたるも最初は風向き当教会とは反対の方位を示し且つ頗る遠距離なれば、何人も延焼の懸念を懐く者なく唯々信徒の居室のみを氣遣い、各所へ手分けして応援に向かいおさおさ尽力する所ありしが、暴威は益々盛んにして区域は彌々拡張され到底消防の力及ばず今は聖堂の方氣遣しくなり故一同館内に戻り夫々受け持ちを定め、消防に尽力せしが尚此時に至るまで誰一人として聖堂の無難を信ぜざる者なく下町信者の多数は勿論異教人さえも館内に避難せり。然るに風位は益々陰悪となり来れば一同聖堂の上の方石垣へ運搬せり。聖堂備付の聖器物は言うに及ばず自己の所有品も皆同所へ片付け各防火の準備を為せしも火煙四方より煽り立て館内恰も紅火の中に埋没されたるが如く到底防火の見込みなく少子は予備聖体入れを頸に掛け、大十字架を捧持したるのみにて漸く免るる事を得たり。同労者松本月岡を始め酒井倉岡その他小使いに至るまで一同着のみ着のままにて所有品は一物も取り出す違なく他所よりの避難者も同様何れも焼焦げたる衣類一枚を身に着けたるままにて実に悲絶慘絶とやいわまし。殊に山懸老母の如きは身内所々にやけどを生じ漸く身を以て免るる事を得たるは不幸中の幸なりき。聖堂も最初は

余程消防に勉めしが火は伝教者の住宅より浄館の二階に移り一方は隣地なる上部建物より廻りて包圍の姿となり、見る見る紅蓮の海となり、払暁の頃漸く鎮火せり。類焼戸数の概算一五〇〇余となし、内正教信者は馬場下田五十嵐両野村小野後藤その他凡て四七戸。露国領事館も類焼せしとの事に伝聞せり。焼失地域は東は外海大森濱の海底電線を境とし東川町の一部鶴岡町音羽町及び海岸なる龍紋氷室と豊川病院を残し、西は仲町台場町新濱町中濱町及び西濱町の一部を余し南は控訴院招魂祠及び春日青柳汐見三町の一局部を除きて全市の九部通りを灰燼となしたり。

主な建物に至りては、元町 函館支庁、…〔中略〕…等にて何れも多年の経営一挙して焦土となるその惨状言辞の尽す所にあらず。轉々驚嘆するの外なし。教会の所有建物は本年買入れたる西川町の分を除き悉く焼失したり。唯我等は一同恙なく無事に立退きたるは感謝に堪えず。目下罹災忽々未だ善後の策も立たず館内の者は夫々各所へ離散仮寓し居れるも少しく人心平穩に復するを待ち、仮祈祷所設置の心算なるも信者何れも全焼大混雑中なれば何事も具体的の相談不可能の有様尚詳細は次便に譲る云々(目時師父所報)

「正教新報」同号には、ペトル石川が再び函館を、今回は大火見舞いの目的で(聖ニコライの祝福で慰問兼視察使として)訪れた時の様子を「函館教会慰問紀行」として発表している。

汽船は五時頃に津軽海峡を横断して函館に近づきたり。函館半島の東の方より遠く濛霧の如く白煙のたなびくを発見したれば何の煙なりやを問いたるに海岸の倉庫の今尚焼け居る煙なりとの事なり。出火後今日にて既に六日を経たるに今尚焼け居るとは殆ど信ぜられざる話に非ずや。しかも船が函館に近づけば近づく程その事実は愈々明らかになれり。汽船が函館湾に入りその上甲板より市街の方を望見すれば、昨年

の九月上旬に同じ舷頭より望見したる大廈高樓櫛比して繁華を極めたる函館全市は全く焦土と化して又昔時全盛の光景を止めざるなり。東より西に海岸より山腹に只だ見る黒く赭き焦土にて処々に白き柱の如きもの見ゆるは煙突の焼き残れるなり。

夜氏家氏の案内にて目時神父を避難所に訪問せり。司祭は当会の執事の一人なる西村氏方に避難し居らるるなり。西村氏方は広くもあらぬ家なるも目時司祭の一家、月岡伝教者並びに酒井老姉の一家並びに本社「正教新報の愛々社」の木村氏の令嬢も同居せり。余の厄介になりたる氏家氏方にも倉岡イウグラフ君その他知人の一家族避難せり。全市一万前後の家屋焼失したる事なれば幸いに火災を免れたる家にて多少たりとも人を入る可き余地ある宅には一軒に一、二戸以上の避難同居なきは無し。目時神父を訪問しての帰途は折悪しく降雨ありて焼跡の道路いよいよ悪路に變じ且つ西も東も所謂焼野となりたれば氏家氏自らさえも方角町名を識るに迷い提灯の明りにて焼跡の立札に僅に町名を知りて辿り行かざるを得ざる有様なり。

翌五月一日、目時神父、松本伝教者、月岡増田並びに執事西村兄等の案内を得て聖堂の焼跡を見たるに四方を囲いたる柵も僅かに一、二間を除くの外は西も東も亦北の方も悉く焼け、屋敷内の立木は一本も残らず幹も枝も焼け、地面の芝草も焼けて青き物の跡も止めず。聖堂始めその他の建物も焼け残りの木材もなく悉く灰となり、石垣を残したるのみなり。全く今までの草木鬱蒼としたる美観は跡方もなく慘憺荒涼たる荒地と為りたり。

屋敷の立木は一本も残らず黒焼けになりたれば立木として助かる可きは一本も無かる可し。屋敷の北面したる地所は柵がなくも石垣ある以て区画立ち居るも東と西の境は同じく火災に罹りたる屋敷なるを以て道路との境もなくなり聖堂の屋敷内に縦横に人々入り来たり荷車までも引き込むという有様なり。倉岡



49 明治40年の函館大火直後の境内地

の老人は焼け残りたるブリキ板を以て三角塔（ピラミッド）形の小屋を作りて今晚より番を致すとの事に今頻りに小屋を一人にて作り居れり。

二、三日前に有川教会の信徒来たりて元宝座の四方に囲いを廻らして宝座の跡を保護し、又聖堂内の墓穴も特別に保護し置けり。大主教閣下が御自分に御作りになりたる鐘は焼けて熔け、僅かに鐘の形の塊ばかりを留め、解けたる金塊も少々は盗まれたるならんとの事なり。

屋敷の石垣の下や樹木の下などに器物の焼けたる痕跡あるは下町の信徒並びに館内の教役者が出したる荷物が灰燼に帰したる跡の由にて見る事聞く事悉く惨絶の事ならざるはなし。

下町の類焼したる信徒が全焼になりたるは此の館内を安然なりと信じて茲に荷物を出したるが故にて、従て自ら館内に居る教役者の如きも荷を屋敷内に出し置きて愈々猛火に襲われて逃ぐる時は皆一物を取らずに僅か命を全うしたる有様なりしとの事なり。

特に松本増田の両氏は数人の子供ある事とて逃る時には子供を伴い連れて逃げたる事故皆一枚の寝衣を着し居るのみなり。僅かに信徒の宅に（松本氏一家は執事の福士方に、増田氏一家は軍川村の厨川氏方）假居して雨露を凌ぎ居るに過ぎず。余は東京に居りて屢々知人の類焼に全焼という事を見聞きしたるも松本増田氏の如き全焼の如き状はまだ見聞したる事なし、事実に着のみ着のままなり。無論酒井神父の未亡人家族その他も同様なり。

同夜信徒の代表者なる当会執事氏家、下田、石川（平家相続人）、西

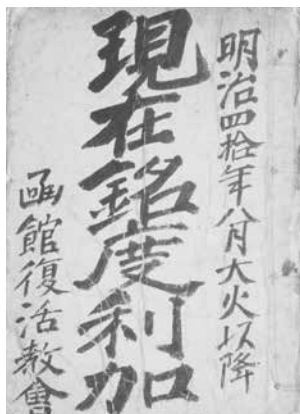
村、富士その他信徒より倉岡氏並びに教役者の集会あり。教会善後策に就きて協議を尽せり。

余は昨日来当地の惨状を目撃して教会の善後策に就きて相談を為すも或いは如何あらんと予期したるに類焼信徒までも中々の元氣にて今更悲觀の事を思うも益なきを以て此の際断然たる決意を為して執事等責任を負いて会債を起こしても假会堂並びに司祭伝教者唱歌教師その他の居宅を焼跡に新築す可しとの事に決議し、木材並びに大工の間は目下非常の騰貴なれば、平準に復するを待ちて至急建築に着手する事に決定せり。又司祭伝教者の供給財源なる貸家は二ヶ所共に類焼したるも尚執事等は種々の計算を立て、目下の所司祭の供給を一五円負担し外に伝教者の供給は規定の通り六円都合毎月二一円を負担するの決議を為せり。余は斯の如き信徒の元氣を見聞して函館教会には確かに教会独立自營の精神と実力あるを認め、今後幾ばくも経たざる間に必ず司祭の供給も全部恢復す可きを信するなり。今後の大問題は聖堂建築の挙なるも函館教会は日本正教会の母教会の事なれば他の地方とは違い函館に聖堂を再建すると聞かば日本全国の教会は奮て応分の寄附金を為す事なる可ければ数年の後には必ず函館相当の聖堂を建築するの挙を見るを得可しと信するなり。

斯くて余は函館教会の善後策の決議に心中自らも一種の元氣を覚えて翌日午後八時に教役者並びに信徒諸兄に棧橋まで見送られて汽船に乗込み明三日黎明に箱館を出帆

この時、ペトル石川は聖ニコライより函館正教会への慰問状と義捐金八五円を預かって来ている。

一方、「正教新報」第六四四号（明治四〇年一〇月一日発行）の卷末には次のような広告が載っている。



50 「現在銘度利加」
(明治40年8月大火以降)

謹曰日本初代教会の活歴史とも名く可き函館教会銘度利可事八月廿五日の大火にて類焼の災に罹り候に付き此際出来得る丈取調べ新銘度利可を調整致度候間御手数ながら貴教区内に於て函館教会にて領洗せし者有之候は、其諸兄弟の聖名俗称誕生年月日代父母領洗の年月日等御記憶の儘成る可くは御詳記御報道の勞を給わり度此段御願申上候也

明治四十年九月

函館復活教会

伝教者パウエル松本安正

諸神父各伝教者御中

同文の広告が「正教新報」第六四七号（明治四〇年十一月一日発行）の巻末にも再掲載されている。この広告に書かれている「新銘度利加」は、現在函館正教会に残っている「現在銘度利加」（帳面一冊）のことだと思われる。

この「現在銘度利加」は、メモ書き状で、戸別に記されており、最初に住所があり、戸主、妻、長男、以下子供たち……という順番である。聖名、庇護聖人記憶日、戸籍名、生年月日、代父母、授洗教会を書くようになっていた。各戸に残っている記録や記憶を頼りに起こしたので、生年月日が空欄の箇所や、授洗教会が空欄の箇所などあり、この当時分かる範囲での記録ということである。「パウエル松本安正 安政二年三月六日生 領洗函館会」、

「イサアク増田作太郎 領洗前橋会」「ワシントン ゲオルギー デンビ」などの記録が見える。
また、大火後に起こされた帳面「類焼義捐金品簿」の記録によれば、教会信徒類焼者は次のとおりである。

教会館内

司祭アンドレイ目時 伝教者パウエル松本

伝教者プラトン月岡 唱歌教師イサアク増田

エレナ酒井 ハリテナ山懸 ニキタ倉岡 (七戸)

元町

イヲアン玉野 インナ五十嵐 ペラキヤ村井

曙町

イクナテイ厨川 ハリサンブ本多 アレクセイ佐藤

寿町

ソサンナ柿沼

汐見町

ヤコフ豊間 ソソント茂又 ヒリップ江口

恵比須町

アンナ小野 ニキタ長瀬 オリカ長瀬

会所町

イクナテイ下田 アントニイ馬場 エロヘイ佐々木

フェオトラ北島 マリヤ吉田

相生町

ミハイル野村 イヲアン田辺

末廣町

ニコライ野村 イリヤ太平 ロマン本多

蓬萊町

イヲアン齊藤 シメオン小笠原 ヒリップ松尾

大黒町

イヲアン齊藤 イエレミヤ齊藤

富岡町

エウグラフィ倉岡

船見町 アルカデイ鈴木 ハリサンブ・ベリチ 露領事館

東濱町 イヲアン南 イヲアン安田 グリゴリー茂木

寶町 ヤコフ後藤

大町 デンビー、アンナ ワシリイ齊藤

鮎町 パウエル村田

青柳町 ヒリモン安宅 ルキヤ福島

ステハン中村 シラ石積 イサイヤ関東吾 (合計五十戸)

なお、この記録では、出火時刻は八月二五日、午後九時四〇分頃、出火場所は東川町二一七番地、塚田才次郎石鹼工場、被災戸数は一万二三九〇戸となっている。司祭はじめ教役者は、一時的に相生町の議友パウエル西村宅に避難した。

また、やはり大火直後に起こされた帳面「教会記録」によれば、教会館内類焼者として他に一戸、「小使鳥井」と記されている。

大火直後の教会資料 大火直後に起こされたとみられる現存の教会資料は次の通りである。

◎「教会記録」(明治四一年一月以降 函館復活教会)
教会日誌などの内容が記されている。

◎「類焼義捐金品簿」(明治四〇年八月 函館復活教会)

全国の諸教会から義捐金品が寄せられていることがわかる。教会ごとに、献金した信徒個々の聖名・姓・



51 大火後に起こした諸記録

金額が記されている。また、見舞金品寄贈者に対して函館正教会から感謝を込めて明治四一年正月に年賀状を発送した送付先リストが記されている。

全国の教会や個人から寄せられた善意の義捐金、物品については「正教新報」にも第六四五号（明治四〇年一〇月一五日発行）から第六五七号（明治四一年四月一五日発行）頃までの永きに亘って「函館教会火災義捐金広告」として掲載されている。

◎「教会附属物品簿」（明治四一年一月以降 函館復活教会）

「明治四〇年八月二五日大火類焼後寄贈献納品」、「明治四〇年八月二五日大火類焼後購求物品」の三部に分かれている。

これによると、東京本会より寄贈として司祭祭服、輔祭祭服、堂役ステハリ、赤色天門幕、宝座及祭台掛、アンテイミンス、宝座用福音書、リテイヤ台、救主寝聖像、四福音者聖像、聖餅印など奉神札に必要な聖器物のほか、小祈禱書、正教訓蒙、領聖予備規定、八調経、大斎唱歌譜、受難週間奉事式略、五旬祭略などの書物が挙げられている。

また、大火の時に焼け残った物品は五点である。

- | | | |
|--------------|-------------|--------------|
| 一、宝座前大十字架 | 聖像ハメ銀メッキ製大形 | 一個 |
| 二、宝座上予備聖体入聖龕 | ガラス函入レ銀製 | 一個 |
| 三、携帯用予備聖体入 | 銀製 | 一個 |
| 四、接吻十字架 | 銀製 | 二個（焼ケシモ用ニ適ス） |

教会名印

鉄製

「類焼義捐金品簿」には、目時神父が右記一、二、三、を聖堂より持ち出して避難したとある。大十字架は現在聖堂の左前方、升壇脇にあるものではないかと言い伝えられている。大十字架台は、大火後購求品として購入している。

類焼後に購入した物品としては、仮聖堂（価格九五二円二〇銭）、番門宅（価格一〇〇円）、物置（価格三五円六三銭）から始まって、宝座及祭台、パニヒダ台などの聖器物が記されている。そろばん、火箸、はたきなどの細かい物品に至るまで購入価格と共に記されている。

「基本財産」に関しては、大火後の不動産として、曙町に宅地二二四坪〇九、宝町に宅地二三坪九三、西川町に宅地五六坪三一とあり、また各土地の地価も記されている。

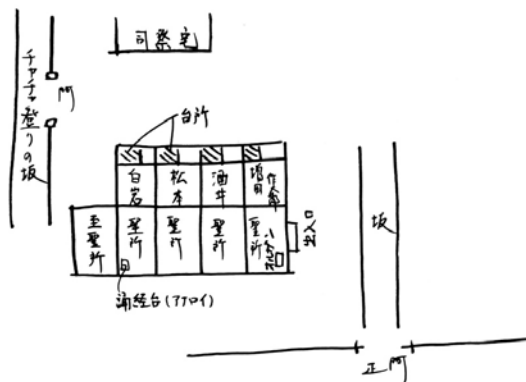
◎ 「聖堂部原簿」（明治四一年一月以降 函館復活教会）
出納帳。

◎ 「書籍目録簿」（明治四一年五月 函館復活教会）

書籍の大火後備品リストによると、明治四一年一月に東京本会から四八品目、大正二年一月に八九品目の書籍が届いている。その中には、「シリヤの聖イサク前書 完」、「イエルサリムの大主教聖キリル全書 完」、「金口イオアン説教集 全」などあり、函館教会の信徒の訓育を慮られた聖ニコライ、セルギイ主教の深い気持ちが届わってくる。

大火の四か月半後、函館にて仮教会の開堂式が行われたとの報告を見ることができ。

「正教新報」第六四九号（明治四〇年十二月二五日発行）より「函館正教会開堂式」について引用する。



加藤さんが思い出しながらかいた函館の教会敷地内図面

52 仮聖堂の手描き図面（ワッサ加藤ワサ）

兄の懇薦なる監督に依りて以外に掛り、此頃に至りて竣工せしかば去二四日の日曜日を以て開堂式を挙行せり。先ず午前九時より聖体礼儀成聖祈禱を執行し、その後式場に於いて開會祈禱を献じ、目時神父は一場の説教と又報告をなし祝いの記として紅白の餅を分配せらる。閉会后も懇談笑話に時を移し午後三時過ぎ思い思い散会せり。当日は前日來の雨未だ止まず道路泥濘にて幼老者の参会は如何あらんと氣遣いしが久振りの祈禱なれば中々の盛會にて二間に九間半の長方形の大広間も狭きまでも集會し、何れも満足にて只管神恩を感謝せり。因に云該工事に付ては平氏家の兩兄及び凡て議友諸氏には痛く熱誠を注がれ尽力せし

吾が教会も罹災當時は慘憺たる形成にて將來を如何せんと思する程なりしが、大主教座下の命に依り石川ペトル氏視察を兼ね慰問使として來會せしを、幸い議友會を開きて善後策を討議せしが、議友諸氏も殊の外元氣にて二一円ずつ供給することと假會堂兼教役者住所及び門番所を建築することに奮つて協賛を与えられ、而してその工事をば議友平兄に依頼せり。然るに之が資金としあるは僅かに保險金六〇〇〇〇円のみにて工錢材料皆暴騰せし今日に當り、計画の如き建築をなすには少くも倍額を要することなれば又その資金法に付き大に苦心し彼是と画策せしが、神の愛吾等を棄て賜わず。計らずも大主教閣下よりも御恩賜あり。又平家は一〇〇〇円の寄付を申出でられ之を動機として信者兄弟も応分に奮発するあり。又各教会諸兄姉よりも深厚なる同情を賜りて忽ち計画を實行する運びとなれり。工事も平

は感謝に堪えぬ次第なり。

イアコフ後藤厚とアントニイ馬場民則の永眠

大火罹災の年も明けて翌一九〇八年（明治四一）、函館正

教会は二人の篤信者を葬ることとなる。

二月九日、エレナ酒井ゑいの実弟イアコフ後藤厚が永眠、三月一日、モイセイ馬場脩の父、アントニイ馬場民則が永眠した。それぞれ「正教新報」第六五四号（明治四一年三月一日発行）と第六五五号（明治四一年三月二五日発行）に次のように記されている。

「イアコフ後藤厚」家代々醫を業とせしを以て氏も亦醫道に志し俱さに艱難を嘗めて苦学せり、学成るや函館病院の醫員となり渡島國江刺病院長、函館區立病院長に歴任し就中豊川病院長たること十有六年の久しきに及び成績の見るべきもの多かりき明治三十三年五月自ら職を退き函館區東濱町に後藤病院を設立して益々斯道に貢献したりしが同年七月一日患者に手術を施したる際不幸にも病毒に感染し九月より横山病院に入院して手術を受け百方療養に手を盡したるも薬石効なく本年二月九日年六十歳を一期として遂に永眠せり

同兄は、故郷の刈敷にて埋葬される。その時の模様は前掲の「正教時報」第六五五号に、「嚴肅なる祈祷は流麗たる聖歌と相和し満場寂として一語を發する者なく唯感極つて時に嘆声の仄かに洩るゝあるのみ……」と記されている。

なお、同兄は函館の聖堂復興のために、一〇〇〇円の寄付金を遺言していた。

◎函館教會馬場氏の永眠

全兄は過般訴訟用務を帯び山口県徳山裁判所へ出張の途中列車内にて発病京都駅下車一旅舎にて静養せられしも病勢衰へざりしかば東山病院に入院國許よりは急報に接したる令閨、門生、東京遊学中の令息其他親戚知人来院百方看護に手をつくされしも効なく三月一日享年五十五歳を一期として遂に永眠せられたり、……〔中略〕……回顧すれば今をさる三十四、五年前、明治七年頃なりき、全兄と余とは駿河臺本會内の翻訳室に於て同窓なりき、もと彼は名を武則と云ひ幕府の遺臣たる父に随ひ函館に渡り五稜郭にて榎本釜次郎（武揚）の麾下にあり大に官軍と戦ひしことあり當時年齢僅に十五後両親と偕に函館に於て領洗し彼は露語研究の目的を抱きて上京し駿河臺なるニコライ大師父の許にいたる（當時は正教會草創時代とて現今の本館も漸く落成せしばかりなりき）大師父も同氏を迎へ將來の正教會翻訳者に擬し翻訳部の一員となしぬ、當時翻訳部に二科あり一は露語よりし他は英語よりす第一に属せし人々には、今の愛々社長堀江先生、小野ペトル、中村某と馬場兄なりき、第二はイオフ水山神父、故アレキサンドル笹間、全パウエル岸本并に予の四人なりき。……全兄は他に志すところありて大師父の祝福を得て法律研究の上弁護士となり帰函……〔中略〕……全兄は函館に於て最も重を各人におかれ「弁護士中の君子」と呼ばれ其硬直義侠の精神によつて多くの人に有形無形の益を與へしこと多しとか、惜しむべきなり、願くばアントニイ兄の靈に大なる祝福あらん事を（三井神父報）。

この年の函館の信徒現在戸数は八〇戸、信徒数二九四人で、大火後他に移転した者は一一戸、三九人だった。往時よりも二〇戸、一〇〇人ほどの減少が見られる。日露戦争と函館大火という二つの大過をくぐり抜

けた直後であり、致し方ない数字である。この後、景況の数字は少しずつ回復していく。

九月には、目時神父、東京の神学校の瀬沼校長、愛々社の木村氏の三人が函館の聖堂再築費募集のため、ウラジオストク、ハルビン、ニコラエフスクなどを廻って帰国した。一〇月に行なわれた報告会では、一六〇〇円が集まったと報告されている。しかし、聖ニコライの日記を見ると、この金額（正確には一五九五円三〇銭）を全て聖堂再築献金とすることができない不首尾が発覚し、聖ニコライは「二度とこのようなことがないように」と関係者を戒めている。

聖ニコライは大火翌年（一九〇八年）、教会再建の計画のために、函館に聖堂の設計図録集を送るので、予算に合わせて好みの設計図を選択するように指示している⁴⁶。しかし、函館の宣教団の土地の一部を、住居建設用地として賃貸できるよう祝福して欲しいと言う請願は却下している。その収入を聖堂建築費に当てたいということであるが、教会の敷地は聖なるものであり、教会生活に相応しい環境を維持できるものではないということのは、聖ニコライの持論である。一九〇〇年頃から在日ロシア領事が函館の宣教団の土地に、再び領事館を建てさせてくれるよう懇願してきた時に、頑として首を縦に振らなかつたのも、境内の風紀が乱れることを心配したからであった。在函館ロシア領事館は、境内地とは別の場所である船見町一二五番地（現在の「旧ロシア領事館」）に建てられることになった。

聖ニコライと函館聖堂再建のための寄付金募集 聖ニコライの日記を見ると、一九〇九年（明治四二）か

ら一九一二年（明治四五）に永眠する直前まで、函館の聖堂を再建するための資金集めに奔走する聖ニコライの姿がある。火事の後、宣教団の焼け跡が荒れたままになっていることを指摘したり、歎いたりする人は大勢いたが、実際に資金集めの陣頭指揮を執れるだけの人脈と、それを活かすことのできる人間性を持つて

いる人は結局聖ニコライの外にはいなかった。

・一九〇九年（明治四二）十一月九日付の日記より——ペテルブルクのアナスタシヤ・ペトローヴナ・シネリニコワに手紙を書き、函館の聖堂建設費として最低でも二万二〇〇〇ルーブルかかること、また教会の広い土地の周りに塀を作る費用がかかることを知らせ、献金を頼んだ。

・一九一〇年（明治四三）一月二七日付の日記より——ペテルブルクのシネリニコワに函館聖堂のための寄附をお願いした。

・一九一〇年（明治四三）九月二四日付の日記より——ペテルブルクのシネリニコワに函館聖堂のための寄附をお願いした。

・一九一〇年（明治四三）二月二日付の日記より——セルギイ（チホミーロフ）主教がイルクーツクの宣教師大会に出席し、在日宣教師団についての情報を広め、援助を呼び掛けたおかげで、ロシアで函館聖堂再建のために一五〇〇〇円の寄附を集めることができた。

日記にはこの他、頻繁に函館聖堂再建資金の寄付依頼の記録が記されている。依頼の手紙の宛先を日記からひろっていくと、アンナ・サルトイコワ公爵夫人、モジヤイスクのワシリイ主教、ガルトイニング婦人、マリヤ・コジミナ、クセニヤ・コレスニコワ、パウエル・シチエチンキン、エリザヴェータ・シュワローワ伯爵夫人、ヤロスラヴリのテイホン大主教、レオニード・コワレフスキイ、ノヴゴロドのアンドロニク主教、ヴオログダのニコン主教等々の名前を見ることができると。

そして聖ニコライは永眠する八日前の一九一二年（明治四五）二月八日も教会の事務を執り、「ロシアの

慈善家コレスニコワから函館教会建設のための寄附三〇〇〇円の申し出が届いたと、大変喜んでいたのである。

一九一六年（大正五）に函館の聖堂を再建するにあたって、アナスタシヤ・ペトロヴナ・シネリニコワの献金によって建設資金のかなりの部分を賄うことができたことについては今もって伝えられ、多くの人が知るところである。ところでアナスタシヤ・シネリニコワは、どのような人物であったのか。僅かな手がかりを「正教時報」第五卷第二号（大正五年一月二〇日発行）の「露都通信」という記事の中に見ることができ。これは赤十字社の関係でペトログラードに在留していた森田神父の報告である。

露國に在りて故ニコライ大主教の崇拜者たるアナスタシヤ・ペトロヴナ・シネリニコワ老婦人は是迄故大主教の使徒的事業に同情を寄せられ各種の名目の下に莫大なる義援金をおくられたことは我等の永く記憶して忘れざる所なるが、……「中略」……同夫人には先にはニコライ・プチツイ師と共に自分を呼ばれ談函館教会聖堂建築の事に及び此は實に故大主教より特に書面を以て献金の事を申込みし事なれば日々着手せられし上からは大いに振うて其擧を助けざる可からずと申され即座に金二萬^{ルイブル}留^ルの寄附となりて現はれたる事あり、……「中略」……因みに此篤志家——日本正教会の同情者たるアナスタシヤ・ペトロヴナ・シネリニコワ老夫人の日常に就きて少しく記さんに、同媪は豊頬童顔短軀の老夫人にして齡已に七八歳と申され、身体はふらふらとして健かならず常に衰弱を訴へらるゝが、其精神上の作用に至りては果斷周密而も平素己を持つる質素にして更に身辺を飾らず今日に至りても未だ電氣灯を用いず極粗末なる横に手の附きたるランプを用い居られ飲食衣服の如き更に頓着せず如何にも素朴に見受けらるゝが併し慈善の事に到りては是迄随分多方面に巨額の金を投じて独り其心を悦ばしめ居れり、之が為には今まで屢々詐

欺にも掛かりたる事ある由にて其奇談も少からざる由それかあらぬか近来は基本金なぞと名のつくものには一切献金を謝絶し居るのみならず、基本金等を積む事はこれ寧ろ盜賊を作成する方法に過ぎぬと激語し居らるゝが其代り何か現實の事に活用する向きには喜んで寄附を承諾せられ既に今迄も其持地の廣き一地点を割いて大聖堂を建て教会用の家屋を建つる等の大事業をすら大抵独力にて経営したる事あり其財産の如きは何程なるか聞きもせぬ故判断せず、若き時より其夫と別居して二三の召使いを相手に今に至れるが其間万事独力にて処理せらるゝと云う女丈夫なり、尚同媪が故ニコライ大主教を尊崇敬慕せらるゝは非常のものにて其写真の如き沢山に収集し居られ其人となりをも他人に紹介して無上の慰めとせられつゝあり尚同媪は露文にて書かれたる故大主教の伝記を渴望せられ居れば何とかして其希望に副ふ様にしたしと考へ居るも今日の所激務に其閑を得ず独り心を焦しつゝ遙に故國の空を仰ぎて我同勞諸君の配慮を乞はざるを得ず云々。

一九一四年（大正三）の時点で、聖堂については「新築費額」総費額金四万五〇〇〇円（内訳 露国篤信者寄付金四万二〇〇〇円、函館信徒寄付金三〇〇〇円）との記述が白岩神父の記録に残っているので、シネリニコワの献金額が、ここに記されている二万ルーブルと聖ニコライの日記から判る一〇〇〇ルーブルで全てだとしても総工費の四五パーセントに当たる（聖ニコライの日記によれば、当時、一〇〇〇ルーブルが一〇二五円）。また、「露国篤信者」は複数であったことが聖ニコライの日記には記されている。聖ニコライは四方八方に寄付願の手紙を書いた。その手紙に対して金額の差こそあれ、多くの人がその呼び声に応えたのである。

セルギイ（チホミーロフ） 主教の北海道巡回

—— 函館教会は日本正教会の揺籃ウィフレムであります⁴⁷ ——

一九一〇年（明治四三）五月二一日より二二日まで、セルギイ主教は函館教会と有川教会を巡回している。その時の感想が「主教セルギイ師の演説」として「正教新報」第七一一号（明治四三年七月一五日発行）に掲載されている。左に抜粋して引用する。

実に北海道は伝道するに甚だ好い所であります。現今の所では若し内地の教会が眠ってしまつても北海道丈の信徒が残れば日本正教会は優に立つことが出来ます。勿論北海道以外にも好い地は沢山あります。また敬虔な熱心な方々も多くありますので誠に結構なことであります、けれども殊に北海道は好い地であります。……来年大主教の五十年記念の祝典を挙げ日本の大臣及び在京の重なる政治家宗教家、実業家其他あらゆる階級の人々を招待し盛に祝はうと申されました、勿論これは甚だ結構な事であり、本会の聖堂の内部も余程廣いので多くの人々を招待して充分に盛に行ふ事が出来ます。されど来年本会でかく盛に喜び祝ひ楽しんでゐる者の中誰か函館の教会へ行き聖堂の焼墟を見たなれば其時歡喜の情は忽ち失せて不快になるに相違ありません。私は函館に参り教会の焼墟を視ましたがその光景は実に眼もあてられぬほど惨憺たる者でありました、其時私是一種言う可からざる印象を受け最も痛切な感に打たれ想はず涙をこぼしました、何処を見ても元の形状は消え失せて唯彼方此方に破壊れた焼墟の煉瓦が散らばり、また元青々し居た樹木は皆焼けてふとい株が小さくなつて残つて居ました勿論雑草は茫茫と生へ茂つて居ります、併し草は年々歳々はえるもので今年火事に遭つても翌年芽を萌くものであります、元聖堂のあつた墟に宝座が小さな丘の様になつて淋しげに立つて居ました、斯の様な有様で誰が眼にも此れが函館の教会であると

は見えませぬ、一体函館教会は日本正教会のウイフレムであります、日本正教会の伝道に此の地から始まったのであります、それ故函館教会は日本正教会の揺籃ウイフレムであります、此の我等の尊ぶべきウイフレムの教会が現在の悲惨な有様であるとは如何に悲しむべき事柄ではありませんか（満場一時暗雲に覆はれ弁士又両眼に涙を漉う）、なる程函館は小さな聖堂と狭い教役者の長屋があります。けれども此れが日本のウイフレムの聖堂としては実にはづべき次第であります、と申して今此処に立派な聖堂を立てるのには少なくとも三萬圓の金が入用であります、加ふるに現在の日本正教会にはその余裕がありません。それで私は今度ロシアに帰つてその建築費を募集する積もりであります。

さて私は今度大阪の公会後一寸東京に帰り身体を休めて後シベリヤの極東宣教師大会に出席します。今年ロシアでは今回教徒に正教を伝道するものと、異教徒に正教を伝道するものとの大会が御座います、前者はカザンに於いて開かれ後者は八月六日からイルクーツク市に於いて開かれ主に支那朝鮮日本から集まりますが私は日本教会の代表者として参ります。そして出来得る限り日本教会の為に全力を盡くして有益なる事をはかる考えであります。其後私は一寸自分の故郷へ帰ります、その故郷には未だ私の両親もあれば兄も妹もあります、其れで其の人々と逢ひましてさらにペテルブルク、モスクワにも参りまして函館教会の建築費の募集をします、此時もし三萬圓出来たならば喜び勇んで帰りますが、不幸にして三萬圓に満たなかつた時は肩を窄めて小さくなつて帰ります（聴衆笑ふ）皆様これは私の力でするのであります、今私皆大主教の力を借りてするのであります、御存じの通り月は太陽の光線の反映によつて光ります、今私も大主教と云う太陽の光をかりて此の目的を遂げる積りであります、大主教の人格より発する光りは露西亜全国に輝き渡り何人も大主教を知らぬものはありません、日本でもニコライさんと言えば全国至る所三歳の少年でも知つて居ります……

このようにセルギイ主教も函館の聖堂再建のために心を痛め、イルクーツクでの宣教会議で帰国した折には、前記の通り一五〇〇ルーブルの献金を集めて日本に戻っている。

聖ニコライの病氣と北海道　この頃の聖ニコライの様子については、「正教新報」第七二〇号（明治四三年一二月一日発行）に次のような記述がある。

我が大主教ニコライ師は去月中旬頃より膝関節に疼痛を覚えられたるも別段の事もなかる可くリュウマチスなどの気味ならんと想はれしかば師は平日の如く夕刻に聖堂側を散歩せられたるに其夜より疼痛激しく左脚の屈伸さへ自由ならざるに至りしかば医療を盡され昨今（廿五日）は御全快に向はれたる方なれば遠からず御全快になる可し導師の脚痛は四六年程前に北海道に於て馬と共に高き懸崖より落ちて殆んど奇蹟に近き神恩にて危難を救はれたる際に左脚を打ちたる事ある由にて其が原因なる可く別にリュウマチスなどはあらざる可しとなり……。

一九一〇年（明治四三）年から数えて四六年程前という和一八六四年頃になるが、「北海道に於て馬と共に高き懸崖より落ちて殆んど奇蹟に近き神恩にて危難を救はれたる際」というのは何時、何処のことだろうか。一八九一年八月二〇日付の聖ニコライの日記の中で、一八六一年頃に森から大沼經由で函館に出る道中で何らかの事故があったらしいことが記されている。

一 一時に森という小さな町に着き、一二時に三円で雇った荷馬車に乗って函館に向かった。道ははじめは花が一面に咲き乱れたきれいな谷間を通っていたが、その後、駒ヶ岳の麓の湖から山のほうに登り始めた。その湖では三〇年前にも少し困ったことがあった〔原文 ПРИШЛОСЬ НЕКОЛКО ДЕТСТВОМЪ〕。山の登り下りが長く続き、道はこれ以上悪いものはないといった感じだ。

函館正教会の聖ニコライ渡来五〇年祝典 一九一一年（明治四四）七月一六日、日本正教会は聖ニコライが初めて日本に渡来してから五〇年を経た祝典を盛大に挙行したが、函館正教会においても信徒等が五〇年祝祭を記念した。その様子が「正教新報」第七三六号（明治四四年八月一日発行）に掲載されている。

◎函館教会の五十年祝祭

ニコライ大主教閣下が一たび福音の使命を帯び父母の故国を捨て単身来て伝道を試みられたる地は之則ち我函館である、で今回五十年の祝典と函館とは歴史上深き関係を有するが故に其の記念祝賀の祭典も信者挙つて最も熱誠に挙行されたり茲に當日の模様其の一斑を記述せん。に教会聖堂前には朝まだきより幾多の燈籠を連吊したると共に竿灯高く十字架の會旗を掲げたるを中心として之れに萬國旗を下し更に邸内芝生の一區には天幕を張つて園内散歩の休息所に充てたる等他所眼に見ても信者一同歡喜盛大の様を察せられたり而て午後二時を報するに至るや司祭及び教役者共に不在なるがために斎藤アレキサンドル兄は信者一同に代わり聖歌を唱え祈禱を献し終つて座に就くやパウエル岸兄は起つて、今日我正教会の盛大なるに至りし所以のものは五十年前大主教閣下が斗大の壯図を懷て函館に來り而て時代の萬難をも意とせず専心布教伝道に従事せられたる賜ものなりとの祝詞を朗読し次て罪弟は今度教会邸内に記念として各自信徒

の苗木仕付けを企てたるは今を去る五十年前ニコライ大主教が始めて我函館に來り正教てふ福音の苗木を植へられ其の苗木の枝葉が成長して丁度今では全国に繁茂して大なる教会と成りしが如きものなれば記念苗木の植へ付けは其の意味に於て大に面白く又た他の一面よりするも先年の大火に邸内の樹木は悉く之を失ひ今や殆んど裸体の如き姿なる邸内に苗木の仕付けは最も其の要を得たる美挙なりとて大に其の擧を賛して祝辭に代へ次に故酒井司祭の末亡人エレナ姉は熱心なる祝詞を述べられしが実に今昔の情を追懷し來つて萬感に堪へざる者の如くなりき終つて十字架の模様ある紅白の御祝ひ餅は予て婦人会幹部の特別思付を以て祝意を表示したる白布に赤十字を染め出したる手拭冠に赤前垂の御揃い其の洒落な服装婦人数名の手依りて歡呼笑声の間に齊しく各自の座前に配られ次に茶菓子の配布となり次には三浦ステファン兄の手依て為されたる口染め色分けの紙串、之れは園遊會に模擬したもので、そふめん、おでん、祝酒等各嗜好者の選択に任せ抽選せしめんとの趣向で其の抽選定まるや祝酒党は屋外芝生の天幕内に赴き各太白を酌んで教会の太平を謳歌しそふめんおでん党は依然屋内に在て祝賀萬歳の舌打ち鳴らされき其間種々の余興あり……「中略」……茲に擱筆するに臨み吾人は婦人会幹部の諸姉が寄付金募集に関し大に尽力し呉れたる点と會の当日青年會の諸兄及び婦人会諸姉が諸事幹旋の勞に服し呉れたる事とに対し大に感謝の意を表するものなり（ヒリツプ江口報）

聖ニコライの永眠 聖ニコライの永眠は、「正教新報」第七五〇号（明治四五年三月一日発行）に次の様に報じられた。

◎ 吊辞



53 恩賜の花輪の贈呈

我が日本正教会の創立者、我等日本に於ける全正教信徒の信仰の父なる大主教、義なる大師父ニコライ師は二月十六日午後七時を以て眠るが如く安然として遷逝せられたり。

「日本正教史」に伝えられている葬儀の模様を抜粋して引用する。

二十二日の葬儀の日には、会葬者が大聖堂内はもちろん境内地をも埋め尽くした。埋葬祈祷は、主教セルギイ師の司祷によつて、三〇名余の司祭が式に参列して執り行なわれた。祈祷中には、宮内省より侍従によつて恩賜の花輪が贈呈され、その時刻には祈祷を一時中止してこれを拝受した。

祈祷ののち、これら会葬者は谷中の墓地に出発した。セルギイ主教は土塊を柩の上に置いた。会葬者は三千人をこえた。大主教ニコライ師は永遠の眠りにつかれたのである。

目時神父から白岩神父へ 一九一二年（明治四五）七月の公会においてセルギイ主教より辞令が出され、アンドレイ目時神父は京都へ転任し、後任としてモイセイ白岩徳太郎神父が赴任することとなった。

八月二五日、仮会堂にて目時神父の送別会が行なわれ、一〇〇余人が一三年間牧会の勉励に感謝した。

八月三一日、午前一時、目時司祭は、マトシカと共に函館港を出帆し、見送りの信徒数十人が神父を見送った。続いて秋田市より来任の白岩神父は一二時、全家族八人とともに無事着港し、出迎え信徒数十人による。各々降福を受け、遠来を感謝した。

白岩神父の管轄地域と伝教者配置、教会所在地は次の通りであった。

函館、有川、江差

伝教者パウエル松本

青森、蟹田、母衣月、三厨

伝教者ワシリイ奥山

弘前、黒石、五所川原、鹿部、涌元、幌泉、

新様似、浦河、三石、市父、右社府、大館、

扇田、中山、二ツ井

司祭直轄

〔教会所在地〕

北海道函館区元町五四番地

函館復活教会

北海道渡島国上磯村中野一〇三番地

有川昇天教会(改)

北海道渡島国檜山郡江差町字新地大森方

江差正教会

青森市浦町四八番地

青森正教会

青森県東津軽郡蟹田町山崎方

蟹田正教会

青森県弘前市(未定)

弘前聖母守護会

青森県南津軽郡黒石町

黒石昇天教会(缺)

青森県南津軽郡五所川原町田邊方

五所川原正教会

北海道日高国幌泉郡幌泉村鹿野方

幌泉正教会(新)

北海道渡島国上磯郡知内村字涌元番外地

涌元正教会

北海道渡島茅部郡鹿部村字鹿部三八番地小坂方

鹿部正教会

一九一二年（明治四五）という年は、一つの時代が達成された区切りの年であった。それは、この年の七月に明治天皇が崩御され、暦の上で明治という時代が幕を閉じたということだけでなく、日本における西洋化と近代化が始まって、それが達成された時代を一つのピリオドとして捉えるならば、「幕末・明治」と呼ばれる時代が終わったという意味の区切りである。

奇しくも亜使徒日本の大主教聖ニコライの日本における正教伝道の生涯は、この「幕末・明治」という時代の区切りと重なるのである。

「帝政ロシアの伝統の中で熟成されてきた正教信仰の『通常』。その『通常』の中で抱かれ守られてきた「真理」を聖ニコライが伝播しようとした先の土壌は、「幕末・明治」という土壌だった。これが主・神から聖ニコライに与えられた伝道環境であった。聖ニコライがこの土壌から驚くべき実りを挙げることできた要因の一つは、この土壌を具に研究し、熟知していたからである。このために費やされた時間——それが聖ニコライの箱館時代である。

その後、東京に伝道活動の中心を移してからも、聖ニコライの一挙一動が主・神の言葉に堅められ、揺るぎないものであったのは、ひとえに聖ニコライの並はずれた忍耐力と神旨への従順によるものである。聖ニコライの日記から感じ取ることのできる「亜使徒」たる聖人の聖神性である。

第二章からは、大正期という新しい時代、セルギイ主教という新しい教導者、そしてモイセイ白岩徳太郎神父という新しい管轄司祭を迎えた函館正教会の歩みを辿る。

注

- 1 「ニコライ堂遺聞」(長縄光男 成文社 二〇〇七年)より引用。
- 2 一八六九年(明治二)に開拓使出張所が函館に置かれ、同年九月三〇日に「箱館」を「函館」と改称した。従って、本章では、一八六九年(明治二)九月三〇日までのできごとについては「箱館」を使い、以降のできごとについては「函館」を使うこととする。
- 3 「ロシア人の見た幕末日本」(伊藤一哉 吉川弘文館 二〇〇九年)より引用。
- 4 「函館・ロシア その交流の軌跡」(清水恵 函館日口交流史研究会 二〇〇五年)より引用。
- 5 聖ニコライが宗務長官アレクセイ・アフマートフに宛てた手紙 一八六三年(文久三)八月二日付(「明治の日本ハリストス正教会」中村健之介 教文館 一九九三年)
- 6 掌院レオニード(カヴェリン)宛ての手紙 一八九〇年三月八日付 «Письма о духовной жизни, Свяитель Николай Японский, Москва, 2009»
- 7 「海事集録」一八六一年三月号(「宣教師ニコライの全日記」中村健之介監修 教文館 二〇〇七年)
- 8 「キリスト教徒の憩」一九二二年第二号(「宣教師ニコライと明治日本」中村健之介 岩波書店 一九九六年)より引用。
- 9 「宣教師ニコライと明治日本」中村健之介 岩波書店 一九九六年
- 10 長司祭ニコライ・ブラゴラズウーモフの回想
- 11 「聖ニコライ祭に寄せて 『アメリカ号』からの手紙」主教セラフイム(「正教時報」二〇〇八年二月号)
- 12 一八六八年(明治元)一〇月二三日付の書簡 «Письма о духовной жизни, Свяитель Николай Японский, Москва, 2009»

- 13 「ロシア語教師としてのニコライ大主教」サブリーナ・エレオノーラ（「窓」一一九号 ナウカ社 二〇〇一年一二月）
- 14 「宣教師ニコライの全日記」（中村健之介監修 教文館 二〇〇七年） 聖ニコライが日本において宣教に携わった年月の中から約四〇年間の日記が本書として出版されている。
- 15 「ニコライ大主教宣教五十年記念集」 正教神学校 一九一一年
- 16 「蝦夷地末期の箱館ロシア病院」水島宣昭 週刊日本医事新報社 一九八九年
本名は七五三太。函館から上海に密航、上海でワイルド・ローヴァー号に乗り換えてアメリカに向かった。その船中、船長ホレイス・S・テイラーに「ジョー」と呼ばれたことから、「ジョー」を名乗り、帰国後は「讓」「襄」と名乗った。
- 17
- 18 「函楯紀行」（「函館市史」史料編第一巻 函館市 一九七四年）を現代語に改めて要約した。
- 19 「箱館時代の新島襄」井上勝也（「新島研究」第六三号 一九八三年）
- 20 「函館脱出の記」新島襄（「新島研究」第一三三号 同志社新島研究会 一九五七年）
- 21 「函館駐劄露國領事ゴスケウキツチ」上・中・下 阿部正己（「歴史地理」第三六巻 一九二〇年）
- 22 前掲「宣教師ニコライと明治日本」所収。
- 23 「浦野大蔵の生涯わかる」（「北海道新聞」一九八九年八月四日夕刊）
- 24 「魯亜仏蘭書翰留」北海道立文書館所蔵（「宣教師ニコライとその時代」中村健之介 講談社現代新書 二〇〇一年）
- 25 「北海道医学教育史年表（二）」小竹英夫（「北海道医報」第二〇三二号 二〇〇四年八月）
- 26 「まるで現代そっくり…」ニコライ・アムールスキイ著 沢田和彦解説・訳（「ウラジオストク建都一五

- 周年記念事業報告 函館—ウラジオストク交流の諸相」函館日ロ交流史研究会 二〇一一年三月三日)
- 27 「最初の駐日ロシア領事、ヨシフ・アントノヴィッチ・ゴシユケヴッチ」ワジム・Yu・クリモフ著（『東京大学史料編纂所研究紀要』第一七号 二〇〇七年）
- 28 「日本正教傳道誌」石川喜三郎編纂 日本正教会編輯局 一九〇一年
- 29 «Семейная хроника. Зубовы и Полежаевы, Москва, 2010.»
- 30 「正教時報」第五卷第四号（大正五年二月二〇日発行）
- 31 「銘度利加」とは、ロシア語の《метрика》（メートルカ）のこと。各教会備付の奉事記録の一つで、洗礼機密、婚配機密、埋葬について記入するもの。
- 32 「日本正教傳道誌」（前掲）によれば、一八七一年一二月七日来函。「ニコライ堂遺聞」（前掲）によれば、一八七二年一月三一日来函。
- 33 「酒井老母の柩前に立ちて」小野帰一神父（『正教時報』大正一五年一月発行）
- 34 「明治初年のギリシャ正教迫害顛末」秋月俊幸（『窓』三四号 ナウカ社 一九八〇年一〇月）
- 35 «Письма о духовной жизни, Святитель Николай Японский, Москва, 2009»
- 36 「釧路正教会百年の歩み」（釧路ハリストス正教会 一九九二年）より引用。
- 37 「正教時報」第二三卷第四号（一九三四年四月一日発行）
- 38 「千島伝道の顛末」落羽野人（『正教新報』第六三七号 明治四〇年六月一五日発行）より抜粋要約した。
- 39 「日本正教史」牛丸康夫 日本ハリストス正教会教団 一九七八年
- 40 「ニコライ堂の女性たち」（中村健之介・中村悦子 教文館 二〇〇三年）

- 41 「露探」奥武則 中央公論新社 二〇〇七年
- 42 「正教新報」第五七七号（明治三十七年二月一五日発行）
- 43 「新約聖書」（マトフェイ伝二五・三六）
- 44 「正教新報」第六一一号（明治三十九年五月一五日発行）
- 45 「正教新報」第六二〇号（明治三十九年一月一日発行）
- 46 前掲「宣教師ニコライの全日記」（一九〇八年二月三日付）
- 47 「正教新報」第七一一号（明治四三年七月一五日発行）

第二章 大正から昭和（終戦まで）

函館正教会は我が日本の各地方正教会中、是れ最も羨望に堪へざる幸福なる教会なり。……今回の此の聖堂の建立を一期と為して新紀元を開き、今後は成人としての生活に入らざる可からず¹。

一九一二年（明治四五）は、函館正教会にとって歴史的な「節目」として覚えられる。日本正教会の厳父たるニコライ大主教の永眠、管轄司祭の交替、明治天皇の崩御、大火からの復興……など。この章は「喪失」から「再興」へと向かう函館正教会の姿を「正教時報」や現存する教会記録に従って、辿ったものである。

一 司祭モイセイ白岩徳太郎の時代

一九一二年（明治四五）八月～一九四一年（昭和一六）一二月

ニコライ大主教の永眠 一九〇六年（明治三九）、ニコライ主教が大主教に昇叙されると、日本の正教会は極東における一教区として認められた。

日本への渡来五〇年目に相当する一九一一年（明治四四）七月一六日、公会の開催に併せ記念式典は举行された。東京復活大聖堂（以下、「本会」と略）で行われた五日間の教会行事には日本各地より一二〇余人



54 聖ニコライの葬列

もの神品教役者と信徒代議員が参会した。聖ニコライの功績を讃える荘厳な祈禱、これに続く祝賀会や音楽会、更に女子神学校の同窓会と「青年の元気あるは頗る注意に値すべき事」の聖ニコライであったが、最終日の疲労困憊は明らかだった。

やがて、七五歳の身体は日を追って変調をきたすようになっていく。心臓疾患を起因とする喘息と合併症の腎臓病は悪化の一途をたどり、静養を忠告されても尚、屈強な精神力で聖務を続けたが、病の深刻さを自覚し築地の聖路加病院に入院したのは一九一二年（明治四四）一月二四日のことだった。

当時の様子は、「大主教ニコライ師事蹟」に詳しい。聖ニコライはセルギイ主教に「函館聖堂の建築に就いて誰か金を送って呉れたならば之が私に最も善く利く薬です。」と真情を吐露しており、函館の聖堂建築費募集の不振は健康を害する煩いのひとつになっていた。

二月一六日午後七時、大主教ニコライ師は眠るように静かに息を引き取った。葬儀には全国の司祭、教役者、信徒が駆けつけ、各国の大使及び関係者、ロシア人信徒、また聖公会、メソジスト、救世軍、福音教会といったキリスト教各派の人々も多数参列し、聖堂内は人をもって満たされた。

荘厳美麗なる葬儀の途中、「名誉の最上点」なる出来事が起こった。明治天皇より花輪が下賜されたのである。宮内の官吏が捧持した花輪には「恩賜」の二文字が記されていた。聖ニコライの存在は日本でも特別なものとして認められ、埋葬地となる谷中へ向かう葬列は数キロに及んだという。

五月、ロシア正教会聖務院は、聖ニコライの後継としてセルギイ主教を「日本の主教」に任命した。この時、セルギイ主教は四二歳、渡来して五年を迎えたばかりであった。

管轄司祭の交替 七月の公会を前に、函館正教会は目時神父据え置き of 嘆願書を提出するが、京都正教会への転任が決まり、後任に秋田管轄のモイセイ白岩徳太郎神父が着任した。

この年に起こった重要事は「教会記録」に次のように記されている。

二月十六日、東京 ニコライ大主教

目時神父、松本伝教者、増田詠隊教師、教会代表ステファン三浦議友、婦人会代表サンナ野村姉、その他、エレナ酒井、マリヤ目時、マトロナ倉岡、イオアン齋藤、モイセイ美濃、フェオドル

天皇陛下今三十日（七月） 午前零時四十三分崩御。

大正元年八月二十五日、目時司祭送別会、仮会堂にて催し、百余名が十三年間牧会の勉勵を謝す。

八月三十一日、午前十一時、目時司祭、夫人と共に會下山丸にて出帆せらる見送りの信徒數十名なりき。

続いて秋田市より来任の白岩司祭は十二時田村丸にて全家八名無事着港で出迎え信徒數十名各降福を受け遠来を謝せり。

ここに三〇年という長き管轄期間を記録する白岩神父の時代が始まった。その間、日本の正教会はロシア革命の影響を受け存続さえ危ぶまれ、更に関東大震災、日中戦争、太平洋戦争など厳しい事態が連続する。しかし、函館正教会は聖堂再建と教会財政の独立運営に取り組み、教会活動は街の景気とも連動し成長を遂

げた。

詠隊教師イサク増田作太郎による音楽活動

詠隊教師イサク増田作太郎も赴任して一〇年が過ぎた。

増田の指導によって聖歌の技術は向上し、祈祷も混声聖歌によって充実さを増した。音楽の素養を身につけた増田の家族もこの頃には聖歌隊の主要メンバーになっていた。

函館の音楽史に増田の名が登場するのは、一九〇六年（明治三九）二月、文学愛好者らによって結成された「苜蓿社」主催の文芸音楽会である。主催者の大島流人は境内西門側に沿うチャチャ登りの上に居を構え、同人には一九〇七年（明治四〇）に岩手から函館に移住した詩人の石川啄木や歌人の宮崎郁雨もおり、教会境内の居住者とは隣人同士の交流があった。

一九〇九年（明治四二）三月、函館図書館の一般公開が始まると、図書購入費の支援活動として函館日々新聞、函館毎日新聞、北海道新聞の三社合同主催による図書館後援音楽会が住吉尋常小学校で行われた。増田もこの頃すでに同好者の集まりとしてあった「増田音楽会」の会員らと共にヴァイオリン合奏や管弦楽で出演し、その後の公演にも名を連ねると、やがて「函館ヴァイオリン界の名手、洋楽の増田」と美名をとるようになった。一九一〇年（明治四三）九月に函館区公会堂が完成すると音楽会は益々盛んになり、同年一月には、「増田音楽講習会」の第四回演奏会が同所で行われた²。

一九一二年（大正元）、増田は会員の希望で青柳町に教授所を開く。「毎日出張叮嚀に教授の労を執る」という熱心ぶりで、会期生による演奏会も行った。

当時の会員は妻のワルワラ増田孝、娘ノナ増田美保とマクリナ増田正枝、信徒ノイ桜井精兵、ワツサ野村わき、イリナ白岩伊利奈、キリル加藤一徳らで、その他、無声映画の楽士や学校教師も指導を受けに来た

という。しかし、増田音楽会はこの年の演奏会を最後に一九一八年（大正七）まで新聞紙面から遠ざかり、函館における音楽界は工藤富次郎や中川則夫らによる「アポロ音楽会」が牽引し、聖公会のラング夫人、遺愛幼稚園園長ドレーパー、ロシア領事夫人レベデフや家庭教師パラマノフのような国際的メンバーと共に、幾多の音楽会を席卷した。

聖ニコライの永眠一周年記念 一九一三年（大正二）二月一六日、聖ニコライの永眠一年を記念して、白岩神父はパニヒダの執行と追悼説教会を催した。当日の様子は「正教時報」第二巻第五号（一九一三年三月五日発行）に報告がある。

故ニコライ大神父一周年の記念日なる十六日には午前九時より白岩神父によりて聖体礼儀奉獻せられ同神父の追悼説教あり。十一時よりパニヒダ執行参拝者露国領事レベデフ氏及び同夫人を始め百数十名。詠歌も四調音にて荘嚴に歌われたり。追慕感泣せしもの多数見受けたり。暫時休息後午後一時より追悼説教会は永遠の記憶の聖歌を以て始まり、白岩神父、松本伝教者等の説教あり。終りて茶菓の饗應あり。各信徒は思い思いに記憶に存せる大主教の逸話を交換し、散会せしは午後五時なりき。

婦人会による「米一握り運動」 一九一三年（大正二）に函館区役所に提出された文書「感化救済矯風教育等調査の件回答」（一〇月一六日付）によれば、函館正教婦人会の創立は一八八三年（明治一六）とあり、組織は会長一人、副会長一人、幹事八人、書記二人と会員四〇余人から構成されている。資産総額は積立金二〇〇余円、運営・維持は、毎月二度の定例会と月額六銭の会費によって賄われ、一九〇八年（明治四一）

以後、毎年二〇余円を慈善のために出金している。また、教会備品購入の一助として「米一握り運動」という活動が行われており、「正教時報」第二巻第五号（一九一三年三月五日発行）にも実施内容が記されている。

…：当婦人会員は一昨年より聖堂落成の時、会の名を以て献すべき聖物購入に資するが為にとて、毎日一握の白米を各一箇月分づつ教会に持参し、これを金子に代へて銀行に預け置けるが、目下百圓近くになりたれば、会員諸婦は尚一層の勇気を増し、大に活動しつつあり。

一九一八年（大正七）から始まる「婦人会記録」によると、信徒婦人らの会合は司祭、教役者、信徒の自宅に場所を移すこともあったが、戦時中でも休むことなく続いている。大正中期になると、教会での定例会は聖ニコライの永眠日である一六日や主日祈祷後に行うことが多く、司祭の講話や男性信徒による演説を聞き、正教会における婦人信徒としての心得など、学びの機会として継続された。また一九三〇年（昭和五）二月の例会記録には「毎年一〇月は婦人会創立記念日なる故に…：」というくだりがある。

パウエル澤邊神父の永眠 「日本正教会の創設者たる故大主教ニコライ師の聖業の同労者、伝道創業以来の元勳」である長司祭パウエル澤邊琢磨師が八〇年の生涯を閉じたのは、聖ニコライの永眠から一年後の六月二五日であった。澤邊神父は、司祭となった一八七五年（明治八）以後、函館を離れ東北地方の伝教に東奔西走し、一八八四年（明治一七）、白河正教会の管轄を経て、一八九二年（明治二五）、最期の任地となる四谷正教会に転任した。

聖ニコライと共に日本の正教発展のため牧会すること四〇年余り、セルギイ主教は日本の正教会初の洗礼

者及び司祭第一号である澤邊神父を尊み、本会にて盛大なる教会葬を執行した。埋葬地は東京の青山霊園である。

聖堂の再建

一九一四年（大正三）八月二日、セルギイ主教は河村副輔祭を帯同して建設予定地の視察に来函した。三か月後、予備工事が始まり境内の整地が行われた。「教会記録」を見ると、白岩神父は再建に必要な文書提出を失念したとあり、予備工事の起工前に、「焼失届」、「聖堂再築願」、「建築許可願」、「宣教届」、「（司祭の）履歴書」、「管理者及び担当布教者変更届」といった各種の文書をまとめて北海道庁や函館区に提出している。

新聖堂の最初の建築計画について、「正教時報」第五卷第二一号（一九一五年一月五日発行）には、「現主教セルギイ師は大主教の意志を継がれ、其後聖堂再建の献金募集の為に盡力せられ、一昨年末に至りて因らず小聖堂新築に要するだけの献金を集め、大正三年の十一月を以て予備工事に着手するを得たり。」とあり、「宣教師ニコライの全日記」には、聖ニコライが目時神父に行った対応が記されている。

一九〇八年（明治四十一）一月二十一日（二月三日）、月曜日

函館のアンドレイ目時（金吾）神父から手紙が来た。……教会再建の計画については、こちらから図解書を送り、好みと建設用の予定募金額によって選択するよう伝えた。

この「図解書」を知るには、四国の松山に建てられた復活聖堂の完成記念誌⁴に手がかりがある。そこには「松山のハリストス復活聖堂の建築設計は、原本「プロジェクト デレワヤンノイツェルクキ」（木造聖堂の

設計圖譜)の第二十一号に依據せられたもので……」と記されている。日記の文脈から察すると、この原本とは聖堂が図版化されたカタログのようなものであると思われる。正教会の聖堂建築は時代、国や土地によって代表される様式があり、細部にわたって規定や基準が設けられている。日本以外の国に類似した聖堂を見つけるのは、このようなシステムが現在も継承されていることによる。

建設に携わった工事関係者の記録は以外にも少ない。「正教時報」第四卷第一二号(一九一五年六月二〇日発行)に掲載されたマリナ白岩美津(白岩神父母)の永眠報告記事中、脳卒中中で倒れた際の第一発見者は「……聖堂新築の為に出張中であつた棟梁ホマ尾林兄「フォオマ尾林利吉」で……」とあり、更に第四卷第一三号(一九一五年七月五日発行)には、「建築工事担当者は東京本会の囑託の建築家小林氏にて工事監督は河村輔祭なり。」と記されている。

河村輔祭は教役者としての務めに加え、聖ニコライやセルゲイ主教の身の回りのことは勿論、本会聖堂の聖器物の管理、営繕、財務も担当していた。建築を専門的に学んだことはないが、聖堂建設という経験を積んで才能を開花させたのである。建築家としての河村伊蔵の記録は「豊橋ハリストス正教会一〇〇周年記念誌」の中にも残されている。現存する豊橋の聖使徒福音記者マトフェイ聖堂の建設時をアントニイ大川昇神父が振り返り「東京本会より河村輔祭が来られ、泊まり込みで建築製図を引いておられた。」とある。この聖堂の成聖式は一九一五年(大正四)二月七日であるから、河村輔祭は掛け持ちで函館の聖堂建設に携わっていた。

至聖所と聖所を区切るイコノスタス(聖障)は、「正教時報」第五卷第一三三号(一九一六年七月五日発行)に、江戸御輿の匠として有名な「神田の宮物」の手によるもので、「函館に於て^{けやま}槻にて彫刻中の由なる……」と記されている。

鐘については一九一六年（大正五）一〇月一六日の「函館新聞」に「名物ガンガン寺」との見出しで「箱根塔の沢の学校のを運んで来た。」とある。塔の沢の学校とは明治初期に同地に建てられた神学校避暑館のことで、そこには聖アントニイを記念した付設聖堂があり、鐘楼には一八八四年（明治一七）にモスクワの工場で製造された直径及び高さ四尺七寸、重量約五三四貫という青銅の鐘があった。新築される聖堂に相応しいと塔の沢より移送されたが、届いてみればかなりの大型であり、一九一七（大正六）のロシア革命後の宗教弾圧で聖堂・修道院・鐘楼の多くが破壊された歴史を見れば、海を渡り日本で現存するこの鐘は貴重なものである。また、クーポルに付けられた十字架についても同新聞は「日露戦争後旅順教会堂の破壊された十字架等の铸件を、ニコライ大主教に公付した材料で、鑄造した……」と報じている。⁵

工事期間中の祈祷は仮祈祷所において行われていた。「地域史研究はこだて」第七号に掲載された白岩神父の次女ワツサ加藤わさの回想では、仮祈祷所は木造平屋建てで、祈祷を行う広間と司祭、教役者の居室が引き戸によって仕切られていたようである。四つの居室には白岩神父、松本伝教者、増田詠隊教師の三家族の他、エレナ酒井急いが住んでいた。聖堂が出来るまで大家族の賑やかな暮らしが境内の片隅にあった（九二頁図版52参照）。

一九一六年（大正五）の復活祭は仮祈祷所で行われた。祈祷は夜の一一時半から始まり午前三時に終了、十字行は地面工事が未完成であったために屋内で行い、祝賀会は翌日の午後に盛大に開かれた。

管轄地域の変更 管轄司祭が伝教者と共に伝道する地域は、公会の度に変更や編成が行われた。大正初期は伝教者の配置に伴い特に流動的で、白岩神父も函館、有川及び道南の他、青森と前任地の秋田周辺まで管轄する年がある。以下は一九一三年（大正二）の白岩神父管轄内の配置である。

教役者配置表 モイセイ白岩管轄

○函館・有川（伝教者、パエル松本）

○青森、蟹田、三厩、弘前（伝教者ワシリイ奥山）

○江差、黒石、幌泉、新様似、浦河、三石、市父、森、横堀（直轄）

○曲田（自給伝教者イオアン畠山）

○大湯、毛馬内、荒川、小坂、小枝指、花輪（伝教者シモン東海林）

○秋田市及び大館、扇田、中山付近（伝教者イオアン後藤）

○増田、岩崎、湯澤（伝教者エフレム山崎）

一九一四年（大正三）七月に行われた公会では、北海道内の管轄及び巡回地域が新しく区分された。函館正教会には新たな区域の編入があり、青森、秋田方面は白岩神父管轄を一旦外れ、一九一九年（大正八）に再び編入される。

「正教時報」第四卷第一五号（一九一五年八月五日発行）にある「公会議事録（略）」には次のように記されている。

・北海道新教区確定の件

北海道の桜井神父の管轄より旭川、下富良野、山邊、近父、奈井江、愛別、歌志内、砂川、北龍、深川、瀧川、留萌、増毛、稚内、声間、名寄、興別、諸滑、紋別、瀧の上、サル等二十一箇所教会を割きて新

教区を設け、薄井司祭転任之を管轄する件を可決せり。

・北海道一部管轄変更の件

桜井司祭の南方の教會より黒松内、寿都、内川、二股、磯谷、八雲、瀬棚の七箇所を白岩司祭の管轄に編入する事を決せり。

遠方に住む信徒宅への出張は数日を要し、津軽海峡を渡る青森方面への巡回は天候にも左右され、汽船の発着に遅れが出るなど連絡の行き違いが度々生じるなど苦勞も多かった。

一九一六年（大正五）二月、青森正教会の柱石イオアン大澤儀助永眠の報を受けると、白岩神父は増田詠隊教師と聖歌隊を伴い出発した。葬儀の様子は「正教時報」第五卷第八号（一九一六年四月二〇日発行）に報告を見るが、当時の青森で正教会の葬儀はもの珍しく、往來の人々が感動し、「聖天主を歌ひ通せしは是れ又諸人の感ぜし處特に函館の唱歌者村井姉の美声には人々何れも感じて今日に至りても時々談話の種となりき……」と話題になったことが記されている。

イコン（聖像）が届くまで 一八八六年（明治一九）、日本は傷病者の保護を目的としたジュネーブ条約に加入した。その翌年、国際赤十字への加入が認められた博愛社（後に日本赤十字社と改称）は、英、仏、露三国における救護活動支援のために「救護班」を各国に派遣し、特に日露戦争時の活動は、国際社会からも高い評価を受けた。

一九一四年（大正三）、東京四谷正教会のパウエル森田亮神父は、同社の依頼を受け傷病兵の宗教的慰安の為に通訳としてロシアに派遣された⁶。

森田神父は任務が終わる一九一六年（大正五）までペトロログラードで過ごし、この時の様子を「正教時報」第五卷第一号（一九一六年六月五日発行）に「露都通信」と題し投稿した。その文中に新聖堂のイコン（聖像）に関する記述が見られる。

故ニコライ大主教の肖像

今回森田司祭は露都滞留中に露国の著名なる畫家ウエニグ氏に託し、巨額の自費を投じて大主教ニコライ師の寫真に基きて畫かしめたる油繪の肖像を持參して本會に奉納せられたり。油繪肖像は等身より稍々大なる可きか實に筆致巧妙にして大主教ニコライ師の風貌端然として生けるが如、威嚴柔和兩ながら備へたる大師父の温容、恰も物言はれんとするが如く見る者をして大師父の御存生中のことを偲び感涙をすら禁じ得ざらしむるものあり。同肖像は大聖堂の洗礼室に掲げあるを以て大聖堂參拝者は自由に拝觀するを得可し。因に記す、畫家ウエニグ氏は目下建築中の函館教會聖堂の聖障を畫きたる畫家なる由。

ロシア繪画史上には一九世紀後半にカルル・ヴェニグという画家がいる。彼は聖堂天井部のフレスコ画を手がけたこともある宗敎画家で一九〇八年（明治四一）に没したが、その家系から画家が多く輩出されている。森田神父の報告にある画家ウエニグとは、この一族に相当する人物であると思われる。一九一六年秋頃、「正教時報」第五卷第一三号（一九一六年七月五日発行）にある報告では、「聖像だけは勿論露國畫家の手になりたるものを入る予定にて近々聖像も到着す可し……。」とあり、引き取りのためにシメオン三井道郎神父がウラジオストクまで出張した⁷。

完成した白亜の聖堂 一九〇七年（明治四〇）の大火によってすべてを焼失した境内に聖堂が再び出現し、晴れて成聖式を迎えたのは一〇月一五日であった。白壁に緑色のクーポル、鐘楼は函館港を見下ろす元町にひととき高く聳え、津軽海峡を見渡すことができた。鐘楼で打ち鳴らされる鐘は、遙か有川（現、北斗市）にまで届いたという。

新聖堂で行われた成聖式の様子は「正教時報」第五卷第二二号（一九一六年一月五日発行）及び第二二二号（同年一月二〇日発行）に殊更大きな記事として掲載されている。その内容は聖堂の成聖式に留まらず、地方公会や講演会が連日催されるなど大イベントであった。

新聖堂の完成祝賀 スケジュール

十月一二日 セルギイ主教ら一行、函館到着

十月十四日 九時より生神女庇護祭聖体礼儀執行（於・仮祈祷所）

夕方 晩課（於・仮祈祷所）

説教会（於・新聖堂）

十月十五日 午前七時より聖水式

午前八時より主教入堂式及び成聖式、十字行、主日聖体礼儀

セルギイ主教主催祝賀会（於・信徒控所）

午後六時より晩課

十月十六日

午前九時より聖体礼儀執行（大木伝教者の輔祭叙聖）
シネリニコワ姉及び永眠者の為に「パニヒダ」執行

函館正教会主催祝賀会（於・五島軒）

午後八時より祝賀会（於・ロシア領事館）

十月十七日 午前八時より北海道地方公会

午後七時より第一回講演会（於・信徒控所）

十月十八日 午前八時より第二回講演会（於・信徒控所）

午後七時より第三回講演会（於・信徒控所）

以下、「正教時報」第五卷第二一号より引用する（聖堂の意匠については第三部「重要文化財としての復活聖堂」参照）。

○成聖式当日

…敷地内の装飾としては本門（石柱鐵門）には日章旗と教会旗と交叉し、教段の石段小砂利坂を登れる坂路にはアーチ形の緑門を設け緑葉の装飾を為せる聖典祝賀の横額には電気装飾を施し、日露兩國の國旗を交叉せり、聖堂の正面に當れる西門にも緑葉の門を設けて國旗を交叉せり。聖堂の北方なるアーチの兩翼には紅白の幔幕を周らして右方に來賓受附を設けたり尚ほ司祭住宅の廣庭には二箇の圓卓と数十脚の椅子を配して來賓の休憩所に當て、舊會堂を以て一般信徒の休憩所、傳教者の住宅を以て地方信徒の休憩所と為せり。午前七時頃より信徒は續々來集し、成聖式祈祷の始まる頃には當日招待せる來賓も來會せり此の日朝來東風強く曇天なりしも、午後より降雨ありたるも午前祈祷中は幸ひに降雨無く、祈祷滞りなく終りしは實に天の賜なりき。



55 成聖式十字行の様子 1916年

○大十字行

前夜より天門の右即ち救主の聖像前に安置したる不朽體を堂の中央に出し祈禱して後大十字行を始む即ち網走會の小川傳教者聖燭を以て先驅となり、釧路會の後藤傳教者は『復活』の聖幡を、岩見澤會の村木傳教者は『洗禮』の聖幡を捧持し、帯廣會の奥山傳教者は大十字架を、札幌會の大木傳教者は生神女の聖像を捧持し、次で石田副輔祭は二本燭を鈴木副輔祭は三本燭を捧持し、夫れに續ぎて詠隊は、増田教師の指揮の下に三十名餘、致命者の讚詞を歌ひつ進み、次に高橋輔祭は香爐を持ち、河村輔祭は「ミートラ」を、湊輔祭は聖水盤を持ち三井長司祭は堂の外部に聖水を灌ぎつつ白岩司祭小福音經を、千葉司祭は大福音經を、笹川長司祭は接吻十字架を捧持す（何れも聖務者二列）。主教は聖不朽體を聖盃に入れ聖架を置き、大氣にて覆ひ、之を雙手にて頭上に捧戴して支へられ、斯く列を正して順次聖堂を出て、左側より堂外を一周し堂内に入るや、白布の幕にて啓蒙所と聖所は別たれ幕の前に西に向ひて聖大十字

架捧持者立つ、主教は経案の上に聖不朽體を置き、爐儀を行いて後ち祈禱を新に始む、即ち主教は『門よ爾の首を挙げよ世々の戸や挙げよ云々』と誦せば詠隊は『此の光榮の王は誰なるや』と二次歌ひ最後に主教は『萬軍の主彼は光榮の王なり』と誦し、詠隊者和唱する時、主教は聖盃を十字架形に畫きて幕を引き裂きて聖所に入り、聖務者は各々捧持せる聖器を元の位置に納む。主教は金属の中に入りたる聖不朽體に聖膏を塗り聖寶座の下の木製十字架の中に千葉司祭之れを納めたり。後高橋輔祭は聖堂の建立者、主教、司祭、信者に壯健と救贖の萬壽詞及故大主教ニコライ師、澤邊、酒井、影田、小松の諸司祭並に傳教其他の函館會に關係ある教役者のため殊に新に眠りしシネリニコワ、アナスタシヤ姉のため永遠の記憶を歌ひつつ成聖式祈禱を終る、時に午前九時半なりき。引續き主日聖體禮儀に入り、本會大聖堂の主教奉事の祈禱と同様にて祈禱中、ペトル石川氏の説教ありて午前十一時半終る。

成聖式に參集した神品教役者及び本會關係者は次の通りである。

東京

セルギイ主教、シメオン三井神父、ロマン千葉神父、アレキセイ澤邊神父、モイセイ河村輔祭、パウエル高橋輔祭、イオアン石田副輔祭、イオアン鈴木副輔祭、「正教時報」主筆ペトル石川喜三郎、女学校教員ウエラ松本、生徒一人

東北

ペトル笹川神父とエルミイ小野伝教者（仙台正教会）、ザハリヤ淺野伝教者（一ノ関正教会）

北海道

ニコライ桜井神父（札幌）、イオアン大木伝教者（札幌）、セルギイ塩谷伝教者（小樽）、イサイヤ村木伝教者（岩見澤）、ポリカルプ石井伝教者（砂川）、イサイヤ関伝教者（斜古丹）、ワシリイ薄井神父（旭川）、ルカ薄井伝教者（旭川）、ワシリイ奥山伝教者（帯広）、ロマン

福井神父（釧路）、イオアン後藤伝教者（釧路）、セラフイム湊修道輔祭（根室）、パウエル小川伝教者（網走）、ペトル湯村伝教者（黒松内）

カムチャツカのネストル主教の来函　新聖堂の完成祝賀が醒めやらぬ一月、ウラジオストクで主教叙聖を受けたカムチャツカのネストル主教を乗せたインデゲルカ号が帰途、函館に寄港した。この船には叙聖式に参列したセルギイ主教も乗っていた。東京から森田神父と河村輔祭が出張し、函館正教会も新立主教を迎える光榮な機会に万端の打ち合わせ、準備にあたり来堂の時を待った。「正教時報」第五卷第二四号（一九一六年二月二〇日発行）より主教入堂の場面を引用する。

……「十一月十七日」十一時過ぎ帰り来れば既に三方の門々には国旗と教会旗が交叉され、聖堂の大門は開け放たれ、其處より「イコノスタス」に聖燈の燃えつつあり信徒又異教人の参々伍々として聖堂の外に集合しつつ有るを見る。十一時半に至るや森田司祭と河村輔祭は聖母の聖像、薄井伝教者は大十字架を捧持し増田聖歌教師は詠隊者を従へ及び信徒一同は表正門に御来臨を待ち迎ふ、其時鐘楼よりは主教歓迎の響きは絶えず耳朵を打てり。十二時を過ぐる五分、長き杖を手にするネストル主教は大十字に聖歌『主や爾の民を救い云々』を歌へる聖歌隊を先行として聖堂に入られ、祭服を着け露国の二輔祭（ネストル主教に随行し来れる）を従へ聖十字架を持てる白岩神父に迎へられ「クリーロス」に立たれたり、此の時白岩神父簡單なる祈禱をなし主教は十字架にて衆人に降福せらる……。

ネストル主教が離函した後もセルギイ主教と森田神父は数日函館に滞在した。これを好機と捉えた婦人会

幹事らは、臨時集会を催し、森田神父にロシア正教会の婦人信徒についての教示を切願した。夕方六時に始まった会合は「集まり会する者数十名、其の内に異教の婦人も多く見え意外の盛会なりき」と報告されている。婦人信徒らの熱心振りに神品が日程を延ばしたエピソードである。

イグナティ岩間輔祭の着任 一九一七年(大正六)

七月、この年の公会は京都正教会で行われた。函館正教会の関連事項は管轄地域の変更があり、青森・蟹田・黒石・弘前は秋田正教会管轄になった。また、浅草正教会の副輔祭イグナティ岩間興一師が函館正教会の輔祭に任命され、同月二二日に東京復活大聖堂で輔祭叙聖を受けた後、当地へ着任した。

盛んなる諸活動 一〇月四日、青年会再興の声が

発せられ、有志者による会合が開かれた。青年会の発足は、一九一四年(大正三)二月に遡る。当時は白岩神父を会長に、マルコ岩崎、ステファン厨川、



56 セルギイ主教と森田神父を迎えて



57 青年会主催の「露語研究会」 1917年

ニールン村井の三人が幹事となり、毎月第一、第三主日に例会を開くとしたが、その後の活動記録は残っていない。現存する青年会の「日誌」は、この日に行われた有志会の記録から始まるが、同月一日、会の再出版を前に二五人が参加する青年大会が催されている。「正教時報」第六卷第二三三号（一九一七年二月五日発行）には、先ず「岩間氏の再興の趣意、続いて白岩師の座長と函毎新聞記者貴志氏の書記の下に、規則の整理あり。次に役員選挙にて、会長は管轄司祭白岩師、副会長は岩間輔祭、幹事は発起者全部……」と定めたことが記されている。会則は「正教新報」第六七七号（一九〇九年二月一五日発行）に掲載された青年会会則を参考に、発足時に議定された会則を再度修正し、新たにロシア語と音楽教授を条項に加えた。

第一回目の例会は一月二五日に行われ、三〇余人が参集した。「日誌」によれば、会合は神品教役者による正教会の教理や宗教についての演説、続いて弁護士、医者、漁業通訳など専門職にある信徒がその見地による講演を行い、その後には会員等の親睦を深めるため座談会や懇親会を設けた。散会が深夜に及んでいるのを見ると、青年信徒より好評を得ていたようである。

青年会会則に設けられたロシア語教授は、「露語研究会」として早々に実施、開講され、一二月には新聞に広告が登場する。翌年二月には「目下三十余名の会員あり……「中略」……日を追ふて盛況に赴き……」と報じられ、同月一七日に行われた青年会総会の内容も掲載された。「露語研究会」の教授にはフアデイ桜井、シメオン廣仲、ヤコフ太宰、キリル加藤など神学校の卒業生やロシア語通訳の職にある信徒が担当し、白岩神父は会長として中途入会者のために補充的教授を行った。

また、ロシア語の夜学部設立は街の情勢に目を向けた信徒の声に応えたもので、「正教時報」第七卷第二号（一九一八年一月二〇日発行）には始業式の様子やカリキュラムの内容が記されている。

……十二月五日午後六時を期して信徒控所に於て各講師臨席の上此に盛大なる始業式を挙行せり、……
「中略」……生徒は商業学校教授、小学校教員、各公私會社員、商店の主人と小僧等五十六名にて今後益々増加する模様なり。尚ほ授業時間は土日曜日を除くの外毎日第二学期は午後六時より七時まで、第一期は七時半より八時半までにて、訳読と文典はフアデイ櫻井講師、會話は廣仲氏、訳読と作文は加藤氏、文典は太宰氏等担任し、若し右講師止むを得ず出席するを得ざる時は寺西、齋藤、小川の諸氏其他にて代理する事と定め六日より右講師は順番にて教會のため献身的に出勤せられ居れり、會場は信徒控所にて増田詠隊教師夫人之が世話を勤め、青年會事務所と夜学部生徒申込所をば岩間氏宅を以て之に當て居れり、開校後日尚ほ浅きも二名の新聴者現はれ教役者は皆手分けして活動し居れり。

このように「露語研究会」が盛会を見たのは、貿易や漁業の好景気によつてロシア語通訳者の必要性が高まつた函館の經濟事情と合致したところにある。教会は社会的役割を帯びた青年会活動を祝福し、白岩神父自身も北海道庁立函館商業学校の要請を受け、ロシア語教師として一九一九年（大正八）から一九三八年（昭和一三）まで教壇に立った。一九二七年（昭和二）に設立した漁場経営会社ルイボ・プロドクトの通訳であった齋藤一郎氏によると、白岩神父のロシア語はウクライナなまりで、発音にも癖があったと回想している。「露語研究会」の盛り上がりと共に、詠隊教師イサク増田も音楽活動を再開した。一九一八年（大正七）二月二三日、公会堂で行われた春期大演奏会（主催はアポロ音楽会）には自ら交渉し飛び入りで出演してい

る。「函館毎日新聞」には「番外として出演せる増田音楽會の會員の四部合唱は定評があるだけに聴衆もうつとりして聴かれた……」⁹と書かれている。好印象を得た音楽會の後、「増田音楽會」は會の拡張と會員を募るため広告を出した。教授時間を二部体制とするため、本部とした増田宅の他、西川町（現在の栄町付近）のステファン厨川宅に支部を置き、「授業料は一科目一円一科目を加ふる毎に八十錢を要す」とある¹⁰。

「露語研究会」と「増田音楽會」に見られる青年信徒たちの活発な動きは、大火後の聖堂再建や教会財政を補助するものでもあったが、函館の経済や文化意識の高まりと機運をよく捉え、知識教養の育成に貢献したとも言える。「正教時報」第三二卷第二号（一九四二年二月一日発行）には、ロシア語教授による収入をもつて、約七〇〇円の図書と市内豊川町に二〇〇坪の地所を購入したことが記されている。

聖堂内の公開 一九一七年（大正六）八月、北海道各地において「衛生展覽會」が開かれた。教会では周辺施設で行われる催事の人出を見込んで、聖堂の公開を行った。その時の様子は「正教時報」第六卷第一号（一九一七年九月二〇日発行）に紹介されている。

其處に新聞記者大會、醫師大會、薬剤師大會、煙火大會、スミスの飛行其他の催しあり、近年になき賑やかさなりき。されば、當會には各新聞の参拝歓迎の記事を載せ、且つ参拝随意の立札をも掲げ、白岩神父監督の下に教役者は勿論パウル茂木氏、マトヘイ吉田氏などの青年交るゝ之が説明を勤め、特に神学生イサク白岩氏は衛生展會期中のみならず今日に至るまで實地見習いの精神にて常に主任となりて早朝より晩まで活動せられ、新聴者をも見出すなど眞に感謝の至りなり、八月中の参拝者二千有餘名、當聖堂の繪葉書の売高百六十部程なり。

また、同月二三日、札幌正教会主催の講演会に来札した「正教時報」主筆ペトル石川喜三郎が、帰途函館に立ち寄った。白岩神父は当地での講演を依頼し、夏期休暇で帰省中の女子神学校生徒たちを集め、講演会と正教会聖歌を紹介する会を催した。信徒の他、二五〇、六〇人が集まり、師範学校の教授、小学校教師、新聞記者らも多数来会した。

函館正教会成聖式一周年記念 聖堂の成聖式から一年が経ち、議友会は一〇月一五日を函館正教会の記念日として記憶するため、毎年感謝祈祷の執行と信徒の繋がりを深める催事の実施を定めた。初年度は日程を早め一〇月一四日と決し、生神女庇護祭と感謝祈祷を行い、午後から児童大運動会を開催した。当日は二〇〇余人の信徒及び児童らが集まり、境内に子供達を応援する歓声が響いた。当日の様子は「正教時報」第六卷第二一号（一九一七年一月五日発行）に報告がある。

児童大運動会

祈祷後聖堂の南側の広場を運動場にあて其上に筵を敷き一方を父兄席一方を児童席となし其中央の高所に赤白の幕を張り国旗を交叉して来賓席並に賞品授與所となし、左の順序を以て運動会を開きたり。関所競争に加はりて一等の賞品を得て得意がる領事令息セルギイさん（十歳）や赤十字競争に負はれて一二等の名誉を得たるシメオン岩間さん（三歳）とユリヤ茂木さん（四歳）の笑顔、負けて落とされて泣く童子、



58 女子神学校の卒業生たち

又壮年連の買物競争宝探しに歩き廻る父と母、筵の上に各自持参の弁当を開いて互いに笑い語る其光景は眞に一大家族の感ありき、晴雨定まらず度々驟雨すらある日に斯かる盛会を見る此れ実に神の恩寵たると共に又之がために数日労されしニーナ茂木姉イリナ江口姉並に遊戯を受持たれしニーナ江口姉クセニヤ五十嵐姉等の尽力に依るなり。

有川正教会議友、イオアン佐藤由助の永眠 一九一八年（大正七）一月五日、有川正教会の初実の果、柱石たる議友イオアン佐藤由助が七十二歳で永眠した。「正教時報」第七卷第三号（一九一八年二月五日発行）にはイオアン佐藤の信仰生活の一端が記されている。

……同兄は明治八年窘逐時代の信徒にして多くの窘逐にも屈せず四十余年間善く信仰を守り議友職は領洗当時より一回も離れしことなく同教会の独立を深く慮ばかり現今一町歩余の田地を備へ付られしも同兄の躰からざる功勞なることは異教者間にも知らるる所なり……。

聖ニコライと蕎麦 毎年二月一六日は、故ニコライ大主教の記念日としてパニヒダを行い、会食後に講演会を催すのが定番になっていたが、この年は懇親もかねて「蕎麦会」も行うことになった。講演会ではステファン厨川による「故大主教と蕎麦会」という演題が見られるが、聖ニコライと蕎麦の繋がりには「ニコライ大主教宣教五〇年記念集」に記されている。

東京には来たもの、また何處に住居を定めん當てはなかつたので、兎に角、築地のホテルに投宿した。

其時師の囊中には一千圓の金があつた。併し此で将来何處にか家を建て、事業を起さうといふ計画であつたから、ホテルの宿料、一晝夜五圓と聞いて驚いて、或る米人に懇意を求め、早速其家に同居した。併し其家族の余り貧しい様子を見て、其厄介になることを氣の毒に思つて、朝早くから家を出て晩になる迄市中を豪歩して、有ゆる名所を見物しながら傍ら貸家を探した。そして食事は大抵蕎麦屋であつたといふことである。

当日集まつた三〇余人の信徒らは蕎麦を食べ、青年信徒は蕎麦食い競争をするなど「近来になき快事」となつた。

教会財政の独立と祝賀会 一九一八年（大正七）五月五日の復活祭祝賀会には、もう一つの慶事——供給の独立——があつた。

本会より自立し神品教役者の供給が可能となつた経緯は、「正教時報」第七卷第七号（一九一八年四月五日発行）にあり、「教会独立の問題は古き以前より屢々計画せられし事ありしも不幸にして其の時を得ざりしが今回本会の布告に接し議友等は種々熟議を重ね其上信徒總會を開き此に当教会は主神の守護と故大主教の代救とに依りて司祭並に輔祭の月費全額を独立供給する事に決定せり……。」と記されている。この頃の「正教時報」誌面では、既に後述のロシア革命に対する懸念が現れ、本会も各地の教会に向けて運営の自立化を促していく。函館正教会の財政の独立は白岩神父のもと、議友や信徒らの理解、協力があつてこそ達せられた喜ばしき事柄であつた。「正教時報」第七卷第一号（一九一八年六月五日発行）には、婦人会代表として故酒井神父の妻エレナ酒井ゑいが祝辞を述べたとあり、「五十年間当教会内に住み其間に起りし変遷等

より当会の独立に就いて満腔の喜悅を現はし、次に人生終局の目的云々より我等信者は地上の事業に優りて神に喜ばるる聖にして朽ざる神の教会の独立を愛し且つ勤めねばならぬと、言々句々教会を憂ふる誠心より進る演説は、老姉平素の清き生活と相合して満座の兄弟等に多大の靈感を與へたり」と信徒らを励まし、結束を一層強くさせたことが記されている。

揺れ動くロシアとの関係 一九一七年（大正六）に起こったロシア革命でロマノフ王朝は崩壊し帝政ロシアが終焉を迎えた。新しい政権を樹立したレーニンは、ツァーリズムや農奴制を廃止し、カール・マルクスの言葉「宗教は民衆の阿片である」をスローガンに掲げ、国教としての宗教を否定、無神論を打ち出した。ロシア正教会と革命の関わりは他書に委ねるが、やがて聖堂や修道院の破壊、聖職者の追放など激しい宗教弾圧に苦しむ時代を迎える。

一九一八年（大正七）の公会には、神品教役者八二人、信徒代議員四九人が参集し、白岩神父とパウエル今井惣之丞も出席するため上京した。

セルギイ主教はロシア国内の政情を説明し、聖ニコライの渡来から三〇年以上も支援を受けている伝道会社からの送金が、前年より完全に途絶えている事実を告げた。会議では教会財務、東京本会及び神学校経費、地方教会の財政調査といった四分科の委員会が組織され諸問題を論究した。事業支出に年間約二万円という予算案が承認されたものの、財政は数か月分を支えるのみと予測され、その対処として「独立維持基本金の献金募集が決議された。

聖ニコライは、各教会において所属信徒による献金と地代等によつて得た収入から管轄司祭や伝教者の給金を工面する教会運営の自立化、即ち「独立」を敝命としたが、本会ですら資金難にあえぐ状況にあり、困

窮にあった伝教者たちの離職が続出した。

また、この公会でイグナティ岩間輔祭が司祭に叙聖され、札幌正教会への転任が決定した。セルギイ主教は輔祭を失することになった函館正教会に対し「輔祭の供給の一部を詠隊教師に供給すべし。」と恩情的な配慮を向けた¹²。

公会後、茨城地方管轄のパウエル鈴木神父は「日本正教会独立基本金」募集のため、北海道巡回に赴き、教会や信徒宅をくまなく訪問して教会独立の必要を説いた。鈴木神父の奮闘は好成績を収め、函館正教会でも多くの信徒が献金を送った¹³。

一九一九年（大正八）三月、セルギイ主教は教会会議に出席するためイオアン瀬沼恪太郎を同行しウラジオストクへ向かう。旅費ですら献金に頼る状況だったが、資金を確保できると見込んだのである。各地で伝道会社の窮状を訴えた結果、ウラジオストクでは七万ルーブル以上の寄付があり、更にロシア人信徒から一五万一六〇〇ルーブル、在留邦人信徒四四〇〇円の献金が集まったが、教会運営費用としては一時を凌ぐに過ぎない金額であった¹⁴。

この時期、日本正教会内で独立運営にあった教会は以下の通りである。次頁の図表は函館正教会の運営状況である。

独立教会 三〇／半独立教会 一四

独立神品伝教者及び教師 三七人／自給神品伝教者 一二人

半独立神品伝教者及び教師 二三人／本会支給 二一人

1919年（大正8）4月分の函館ハリストス正教会 会計報告

(収 入)	信徒月額献金 地所より収入	32円65銭 27円50銭
(支 払)	司祭及び詠隊教師供給 司祭及び代議員旅費 憲法修正案印刷及び送料 電灯料及び雑費	65円 70円 7円10銭 2円80銭
◎特別会計聖堂部	皿銭収入 蠟燭売上収入	22円36銭5厘 43円38銭5厘

「教会記録」より作成

現 戸	74戸
現 員	269人
供給額	602円
総 員	1055人
供給外	864円58銭
財産額	7,000円

「1919年（大正8）大日本正教会憲法公会議事録」より作成

○神品教役者供給額
札幌、小樽正教会

イグナティイ岩間司祭 四二二円／イオアン大木輔祭 三六〇円
イサイヤ村木伝教者 三〇〇円

函館教会 モイセイ白岩司祭 五四〇円
イサク増田詠隊教師 二四〇円
有川教会 パウエル松本伝教者 二八〇円
(内本会支給金一二〇円)

一九一九年（大正八）四月三〇日、公会出席のために参集した北海道の神品、信徒代議員らは、会議に先立ち湯島「玉水館」で懇談会を開く。この会合によって機関誌「北海の正教」創刊が決まり、札幌正教会のパンテレイモン齋藤政明が編集兼発行人となった。六月に発刊した第一号には、「各代議員は慎重の態度を以て臨むこと」とあり、公会議案の重要性が高いことを伺わせる。以下は北海道各教会より出席した代議員である。

白岩司祭（函館）、岩間司祭（小樽）、福井司祭

(鉏路)、大木輔祭(札幌)、村木伝教者(岩見沢)、奥山伝教者(帯広)、今井総之丞(函館)、三原美平、荒濱惣太郎(小樽)、横山熊二郎、齋藤政明(札幌)、袴塚元三郎(鉏路)、野田義三郎(北見) 一三名

五月一日から六日間に渡って行われた公会は、日本の正教会に「憲法」が制定されたことから「大日本正教会憲法公会」と呼ばれる。

八条三一項目に及ぶ憲法草案の内容はセルギイ主教の意に添うものではなかった。不満の点は、ロシア正教会との関係が明確に記されていないことであり、「統理」に関係する教権の所屬や聖規則(カノン)についての条項にも修正の必要があると指摘せずにはいらなかった。日本の正教会が教会の運営、財政管理の独立を推進する理由は、ロシア情勢に対する不安から生じたものだが、方向性の違いはやがて教会内を混乱させた邦人主教の選立へと繋がっていく。

修正後の草案は公会前に各教会へ配布された。函館正教会でも調査委員会を設け、信徒の意見をまとめた修正案を作成、提出している。公会が始まると、セルギイ主教は草案作成の祝福と修正の経緯を説明した後、母教会であるロシア正教会を離れ、独立を急ぐは時期尚早、困難であると発言したが、教務局(公会後は「総務局」に改組)は憲法の必要性を主張、信徒代議員らも将来の不安を訴え草案の再修正と審議続行を求めた。六月八日、「日本ハリストス正教会憲法」は聖神降臨祭の日に公布された。¹⁵

函館に暮らすロシア人 日本の正教会が孤立感を抱く中、世間ではロシア国内、特に極東地域への警戒が強まっていた。革命後のレーニン政権は未だ諸国から承認されずロシア各地は無政府状態に陥っていた。武装したパルチザンによる襲撃が多発すると、英・米・仏各国は革命に干渉してシベリア出兵を決め、日本も

同様に兵力を送り込んだ。一九一九年（大正八）一月、保守派であったオムスク政府が倒れると、英・米両国は兵を撤退させたが日本は駐留を続け、戦力不足を解消する増兵により東部シベリアには七万人以上の日本軍がいたという。

一九二〇年（大正九）、アムール川河口の尼港（ニコラエフスク）で、駐留二部隊の将兵と在留邦人がパルチザンの報復を受け殺害される尼港事件が起こった。この背景には日本の領土拡大問題が絡んでいるが、事件の余波は尼港よりさらに北方のオコック（オホーツク市）や樺太島（サハリン島）にまで及び、やがてロシア人市民も自国を追われる事態となり、在留邦人と共に多くのロシア人亡命者が引き揚げ船に乗り込み日本に渡った。

日露戦争後、日本はカムチャツカや日本海沿岸の漁業権を得、北洋漁業の操業は軍艦の護衛付きで行われた。漁場の獲得や漁獲高の競争など、ロシアと日本の間には複雑な利害の対立も生じていた。一九二二年（大正一〇）、函館に日魯漁業株式会社が発足すると、街は漁業基地として益々賑わいを見せ、東浜栈橋や現存する金森赤レンガ倉庫周辺は労働者で溢れた。翌年、市制が施行されるとカムチャツカ航路も開設し、これに伴いロシア人経営の会社設立が増え、日ソ基本条約が締結された一九二五年（大正一四）には、ロシア人の流入は一五〇人を超える。

函館正教会の信徒にも大変な苦労の上に移住した人達がいる。ミハイル成田実の妻ナデジダ成田（市民ロシア語講座「講師」）は、尼港事件後、南樺太（北緯五〇度以南の樺太島）より日本に避難し東京でビザ取得を待ったが関東大震災に遭遇、その後函館に移住した経緯を持つ、また一九二二年（大正一〇）の秋、ウラジミール入間川弘治一家がオコックより来航の折、函館水上警察の査証確認で妻エフローシニヤと子女四人の上陸が拒否され、許可が下りるまでの数か月、湾内で船上生活を余儀なくされたという。

見知らぬ土地において同国人がいることは心強い。移住者たちは西部地区に寄り集り、元町には「ロシア長屋」と呼ばれる場所もあった。また、現在の湯川や銭亀沢方面に旧教徒の小さな集落も存在していた。

旧教徒とはロシア正教会総主教ニーコンによる改革を受け入れなかった古儀式派の人々のことで、厳格な家父长制や古来の伝統に基づく生活様式を継承していた（函館在住の旧教徒については第三部「旧教徒と白系ロシア人」参照）。旧教徒や亡命ロシア人たちは、ロシアパンやジャム、ラシヤ（毛織物）を売るなどして生計を立てていたが、漁業関係者との経済格差は大きく、出身地や信仰、習慣の違いから函館正教会との関わりは薄かった。

大正末期から昭和初期にかけて教会や日本人信徒と交流があった人々は、領事館や漁業関係者の他にデンビー家、クラフツォフ家、サファイロフ氏、ズヴェーレフ家、ダーニチ家、シュウエツ家などがあげられ、「メトリカ」にロシア語表記の洗礼者や日本人との婚配の記録が幾つも見られる。

札幌正教会青年会との音楽公演会 一九二二年（大正一〇）二月一日、札幌北一条教会を会場に札幌正教会青年会の主催で「四重音楽公演会」が開催された。函館正教会の聖歌隊はこれに賛助出演し、二部構成全一七曲を歌った¹⁶。

その時の模様は、「北海の正教」第三卷第二号（一九二二年二月一五日発行）にあり、「目次も一千二百枚を各学校各教会各種有識階級等に配布したれば、當日は最初の開催としては最も盛大なるべし。出演者は、ソプラノは白岩ワサ、増田正枝、メツゾソプラノ増田美保子、アルト白岩カツ、テノル佐藤六次郎、バス櫻井謙、白岩三男の諸兄弟及び小島美城、北上美芳氏にて指揮者は増田作太郎師なりと。」（原文）と記されている。

講演会プログラム

第一部

- 一、四部合唱（聖歌） 「我が霊や 二番」
- 二、女声二部（唱歌） 「春暁」
- 三、三部合唱（唱歌） 「コーリスラーベン」（原語） 会員全部
- 四、絃楽 トリオ ファンターシアホーム、スイートホーム
- 五、四部合唱（聖歌） 「尊ときイオシフ」 会員全部
- 六、次高音部独唱 「アベ・マリヤ」 増田美保
- 七、（唱歌）バルカンスキー（ロシア語） 男声全部
- 八、四部合唱（唱歌） 「春興」 会員全部

第二部

- 九、絃楽 トリオ ローマンス
- 一〇、四部合唱（聖歌） 「今天軍」 会員全部
- 一一、ヴァイオリン独奏 守護 増田作太郎
- 一二、女声三部（聖歌） 「願わくは我が祈りは」
- 一三、四部合唱（聖歌） 「我がハリストスや」 会員全部
- 一四、セロ独奏 ニーナの死 小島美城



59 札幌・函館正教会合同の出演者

一五、四部合唱（聖歌） 「ヘルヴイム」 会員全部

一六、次高音部独唱 イ、昼の夢 ロ、落椿

一七、四部合唱（聖歌） コンウエルト

以上、入場者は三〇銭寄附のこと

カムチャツカの掌院ニコライ師との交流 この冬、函館正教会ではカムチャツカの掌院ニコライ師と親しい関係が築かれた。「北海の正教」第三卷第三号（一九二二年三月一五日発行）から第六号（同年六月一五日発行）まで掲載された近況報告に、その交流の軌跡を見る。以下、抜粋、引用する。

○一月七日、大祭当日は掌院ニコライ神父と白岩神父とで聖体礼儀が執行せられ、元伝教者佐藤六次郎兄の大祭に関する説教があった。奉事終りて、日曜学校生徒等の聖歴史暗唱対話聖歌合唱等あり引続き一同に贈物分配した。本年はニコライ神父の尽力により多くの寄附金を得たる故、未曾有の立派な贈物であったから百四五十の児童等は何れも意外の贈物に満面の悦びを現して居た。

○四月二四日、聖枝祭にはニコライ神父と共に奉事せり。同夜より毎日規定通りに厳齋祈祷を執行せり。大祭はニコライ神父と共に奉獻せり。露人有志と聖歌唱いたり。午前三時全く終り、ひと先ず帰宅し午後一時再び集まり、晩禱を献じ信徒居所にて茶菓の饗應ありたり。

また、「婦人会記録」には、「二月十六日、大主教御永眠日 午前十時三十分聖堂に於いてカムチャツカ掌院ニコライ神父及び当会司祭兩人にて大主教の為パニヒダ祈祷を献じ、白岩司祭の説教あり。一同信徒集



60 カムチャツカの掌院ニコライ師

会所に於いて各自持参の弁当を開き、その間、蓄音機にて露国聖歌及び各種を聞く。三時散会。」とある。ニコライ師は、降誕祭から大齋期間を経て復活大祭までの半年近くを函館で過ごした、五月三日、ようやく便船を得てペトロバヴロフスクへと帰った。

関東大震災とニコライ堂の焼失 一九二三年（大正一二）九月一日正午、神奈川県相模湾沖を震源とする

マグニチュード七・九の大地震が発生した。死者・行方不明者一〇万五〇〇〇余人、全壊家屋一〇万九〇〇〇戸、焼失二一萬二〇〇〇戸という未曾有の大災害に、本会の大聖堂も甚大な損傷を受けた。「東京復活大聖堂 修復成聖記念誌」は「大聖堂は堅牢な耐震構造を備えていたため、地震の揺れそのものにはびくともしなかった。しかし、火災に伴って起こった熱風が鐘楼をあたり、壁面にひび割れを生じた。鐘楼は安定を失って倒壊し、本堂ドームを直撃した。破れた屋根の間から炎が聖堂内の木造部分に燃え移っていき、やがて大聖堂全体が炎に包まれた。建物ばかりではなく、大聖堂とともにイコンや祭具一式、主教館とともに蔵書や未出版の原稿類が灰燼に帰した。焼け跡に残ったものは、土台と煉瓦壁のみであった。」と崩壊の次第を記している。

同年一〇月二〇日、難を逃れた四谷正教会で臨時公会は開催された。そこで大聖堂の復興は決議されたが、セルギイ大主教（一九二二年（大正一〇）五月一日に大主教に昇叙）は神品教役者と信徒代議員に対し復興の必要性を教度にわたって問い尋ねている。なぜなら、教会財政は長く低迷し改善の妙案もない。神品教役者は慢性的に不足し、大聖堂

の参拝者数は聖ニコライの時代からすでに減少傾向にあったからである。

この公会後、直ちに復興委員会が組織されたが、火災後の処理や財源の調査、建設に必要な資金調達など取りかかる問題は多く、セルギイ大主教は四国の松山にある聖堂敷地の売却を決意した。

この聖堂は、日露戦争の時に松山の捕虜収容所で永眠したロシア人を記憶する聖堂として一九〇八年（明治四一）に建立された。三〇〇〇坪近い土地は一万五〇〇〇円で売却され、聖堂は解体し本会敷地内に移築、仮聖堂として利用することが決まった。

翌年の二月一三日、未だ瓦礫が溢れる本会敷地内で基礎成聖式は行われた。二か月後、再び姿を現した松山の聖堂は小聖堂として用いられたが、老朽のため一九六四年（昭和三九）に役目を終えた。

ロシア副領事レベデフの離任　一九一二年（大正元）に大連から函館に赴任した副領事レベデフ氏は、ロシア革命後も依然として函館に留まり業務を続けたが、一九二二年（大正一〇）以降、ソビエトの新政府と日本の間で交わされた漁業条約の締結で事務のすべてはソビエト側で行われることになった。そのため、船見町の領事館は実質上廃止になり、一九二五年（大正一四）、日ソ基本条約によって国交は回復されたが、すでに自国に戻るはずもないレベデフ氏は、函館を離れ避難民としてメキシコへ渡ることになった。

在任中のレベデフ領事は、日本人嫌いとの評判が立っていたが、復活祭や祭日祈禱などには参拝した記録が残っている。函館を離れる際、見送りの中に白岩神父の姿があった¹⁷。

二か月後の四月一九日、ソ連領事館が開設されることになり、新たにロギノフ領事が着任した。

エレナ酒井の永眠　一九二六年（大正一五）八月八日、イオアン酒井篤礼神父の妻エレナ酒井ゑいが七八



61 エレナ酒井えいの葬儀



62 新装された信徒控所

年の生涯を閉じた。酒井神父永眠後、郷里の金成には戻らず境内に居住して祈りと奉仕の日々を重ねた。一九二二年（大正一一）、孫のアレクサンドル荻原勝の妻が病死し、残されたひ孫の養育のため境内を後にしたが、二月一四日の参拝を最後に、「婦人会記録」からも名前が見えなくなる。八月、エレナ酒井にガーゼ寝巻を贈った記載があり、この頃には既に病床にあったことが窺える。エレナ酒井の葬儀は教会葬として執行了された。

函館聖堂成聖満一〇年記念式典 一九一六年（大正五）から一〇年が経過すると、聖堂の外装も劣化し雨水侵出が発生するなど修繕の必要が高まった。白岩神父は函館市建築課に依頼し修繕の必要箇所を調査した。教会では先に一〇周年の記念式典が予定されているため、工事は二か月で完了した（この工事と併せて、司

祭館、信徒控所、教役者住宅も修繕が行われた。なお、信徒控所については一九三〇年（昭和五）に新築されている。

一〇月一六、一七日、記念式典が挙行され、東京よりセルギイ大主教とモイセイ河村輔祭が来函し、ペトル内田神父（釧路）、イグナティ岩間神父（小樽）、イオアン大木神父（札幌）をはじめ、北海道伝道に尽力したロマン福井神父（白河管轄）とニコライ桜井神父（盛岡管轄）が招待された。来賓には

カムチャツカのネストル主教とワシリイ輔祭の姿があった。

式典の様子は「正教時報」第一五卷第一号（一九二六年一月二〇日発行）に報じられ、「十月十六日午後六時より、新装の聖堂に於いて、土曜日の公祈祷が行われた。翌十七日の聖体礼儀には、風雨を外に参列者は日露信徒百八十名を超え、大主教、主教の下に六司祭が陪祷に立つという森厳なる祈祷が行われ、堂内は神聖さと聖なる歡喜に満たされた。」とある。この日、白岩神父はカミラフカの祝福を受け、有川の伝教者パウエル松本老師の輔祭叙聖という好事を得た。また、詠隊教師のイサアク増田も長年の奉仕を函館正教会より表彰された。

一八日は九時から神品会議が行われ、午後二時より来会した神品の講演会が婦人会主催で開かれた。夕方、来賓のネストル主教や神品教役者をはじめ信徒一同は、谷地頭にあるデンビー邸の茶話会に招待された。記念行事の締めくくりとなる一九日は、セルギイ大主教の大講演会が函館区公会堂を会場に行われ、八〇〇人余の聴衆があった。

北洋漁業の繁栄とロシア語通訳者の活躍 函館へ移住するロシア人の数は一九二五年（大正一四）にピークを迎えた。その後は徐々に減少していくが、昭和に入っても亡命ロシア人に関する報道記事は新聞から消えることはなかった。市内繁華街では毛皮、靴、パンなどの販売店が出現し、ロシア語看板が目につくようになっていた。北洋漁業によって明治設立の老舗リュウリ兄弟商会やルビンシテイン商会、レイボ・プロダクト、カムチャツカ株式会社といった貿易や漁場経営の支店が置かれると、ロシア語通訳の需要は当然のごとく高まった。

この年、企業や函館税関の関係職員のためにロシア語講習会¹⁸が開講し、サファイロフ氏も講師の職を得て



63 輔祭に叙聖されたパウエル松本安正師



64 デンビー邸での茶話会

いた。一九二九年（昭和四）には函館在住の通訳者が団結して「北洋同志会」が結成され、同会のロシア語講習会にはカムチャツカ株式会社駐日代表のカラリョフ氏（アナトリイ・橋本・カラリョフ）、貿易商人アルハンゲリスキイ氏の他、アフアナシイ高井義喜久やアレクサンドル福原登も講師として活躍した。また、教会のロシア語教授を受けた生徒らは通訳者としての評判も上々で、日本とロシアにおける漁業や軍事関係の職に就いた者も少なくなかった。

東京復活大聖堂の再建と鐘の移送

関東大震災によって壊滅的な被害をうけた東京市中では着々と復旧工事が進んでいた。大聖堂の修復は一九二七年（昭和二）九月一日に起工し、一九二九年（昭和四）に完成を迎えた。盛大な成聖式の様子は一九二九年（昭和四）一月二十五日の「函館新聞」にも掲載され、来賓の主

教品らと並ぶセルギイ大主教の写真が見られる。

工事期間中、セルギイ大主教は建設資金を集めるため、日本全国の教会と信徒宅を巡回した。一〇か月で五万四〇〇〇円を集め、一九二三年（大正一二）の高崎正教会の巡回以降、訪問戸数は二七〇〇戸に達した。

大聖堂の新しい鐘楼には、仮聖堂（移築された旧松山聖堂）の鐘を用

いる予定だったが、床面積が大きく設定されたため、急遽、函館正教会にある大鐘と交換することが決まり、残りの鐘はポーランドの工場に発注することになった。¹⁹ 東京から届いた鐘は、初代聖堂以来となる組鐘一式（大小六個）で、二月一日に無事に取り付けが完了した。鐘の成聖は同月二二日午後六時に行われ、初めての打鐘は徹夜禱の始まりだった。

故ニコライ大主教記念祭音楽会 一九二九年（昭和四）二月一七日、聖ニコライの永眠記念日に際し、議友会、婦人会、青年会の合同主催で「故ニコライ大主教記念祭音楽会」が催された。

二月一四日の「函館毎日新聞」に掲載された教会の説明と音楽会の案内が功を奏し、当日は三〇〇人を超える聴衆があった。「正教時報」第一八巻第四号（一九二九年四月一五日発行）より引用する。

音楽会は午後四時に拍手喝采裡に終わった。日曜学校高等部生徒及び婦人会員は設備、接待に當り、宣傳、準備は青年会員の担任であり、桜井謙、浅野武の両兄は聖歌班を指導し、中川元彦氏は司会者となり、近藤昇太郎氏は聖歌班を指揮した。演奏は上々の出来栄えて聴衆の過半を占め未信徒にも多大の感動を與へたことは争われない。

音楽会プログラムは白岩神父、ゾシマ下田、ニキタ近藤、マリヤ厨川ツルによる追悼説教の合間に聖歌や余興演劇を入れるといった構成である。聖歌はデ・リオフスキー作「我等曾てワピロンの河畔に坐し」、アリヤビエフ作「ヘルヴィムの歌」、トルチャニノフによる大齋第三スタチャ、ボルトニャンスキー作「光荣なる神の独生子」などがあり、日曜学校高等部の生徒は「対話」（サロフの聖セラフイムとモトフィロフによ

る「對話」の寸劇と思われる）の余興演劇を披露し、「天主経」、「天の王慰むる者よ」、「真福九端」の三曲を混声で歌っている。

この音楽会の報告から見えてくるのは、大正時代を牽引してきた中心的信徒が新しいメンバーに交替している点である。聖歌隊は増田詠隊教師に替わり若手の信徒が聖歌指導を行い、白岩神父は同年七月の公会で長司祭に昇叙されている。

資料に見る日曜学校の様子　話は遡るがセルギイ主教が聖ニコライの後継になった一九二二年（大正元）秋、一八八〇年（明治一三）から続く機関誌「正教新報」は、「正教時報」と改題し装いも新たに創刊された。発行元の社名も「愛々社」から「正教時報社」になり、人事変更を行い編輯や社友にロシア留学経験者や正教神学に精通したメンバーを揃えた。²⁰創刊当初の誌面にはセルギイ主教の方針が反映され正教神学や哲学、ロシア文芸、文学評などが目次に並ぶ。また、「主教セルギイの高度な神学的素養の表れ」である「正教新潮」が翌年に刊行され、掲載論文はどれも「重厚で神学の深遠性を表している」と高く評価されたが、六号をもって廃刊に至った。²¹セルギイ主教の路線がロシア革命によって変更せざるを得ない状況になったことが廃刊の理由だが、大主教に叙聖された一九二一年（大正一〇）五月の頃には、慶祝行事など控えることが社会の風潮になっていた。

関東大震災の復興に心血を注いだセルギイ大主教は、地方教会や信徒宅を巡回し支援を求めた。その数ににおいては聖ニコライを遙かに凌ぐ。地方に赴くと大勢の信徒子女の姿を目にする。セルギイ大主教は教会の将来を担う子供達に希望を抱き、青年会や日曜学校発展のため自費を投じて機関誌「アケボノ」を刊行した。一九二五年（大正一四）一月発行の表紙には第一号と記されているが、これは一九二二年（大正一

一)に東京復活大聖堂の青年会と日曜学校が刊行した「曙」に後続するもので、一九一四年(昭和三)一二月の廃刊まで一九巻を発行した。²²

函館正教会の日曜学校の様子は、「アケボノ」第一巻第四号(一九二九年九月五日)の投稿記事文中に報告され、一九三三年(昭和八)の公会議事録には、「函館正教会の日曜学校より『喜び』という雑誌が発行、配布されている。」と書かれている。現存する「喜び」は、表題がカタカナ書きの「ヨロコビ」第九号だけで、巻頭から説教、教理、投稿記事、部報へと続く三五頁の小冊子である。

一九二九年(昭和四)五月三十一日、函館正教会の日曜学校は巡回したセルギイ大主教のために歓迎式を行った。「アケボノ」第一巻第四号には歓迎式の祝詞が載っており、日曜学校は既に幼稚部、普通部、高等部の三つに区分されている。また、一〇〇人近い生徒の名が出席簿にあると投稿者(本会の信徒)は驚きをもって紹介している。「正教時報」第一八巻第四号(一九二九年四月一五日発行)にも類似した内容があるので引用する。

……新学年に入る前、学生の大部分が休暇なので、日曜学校高等部の首唱にて生徒の父兄を招待して学芸会を日曜の午後一時信徒控所に開いた。最初開會の祈りを捧げ、生徒の辯論、音楽、餘興演劇など凡てプログラムの順に随って行はれ、高等部生徒の努力と進捗の後が充分に見え、參會せる五十名の父兄達は満足の体に見えた。白岩司祭の訓話、父兄側代表三浦女史の所感演説、大橋莊二氏の聖歌普及についての意見、日曜学校講師中川元彦氏の感話等あり、閉会の祈り後散會したのは午後四時頃であった。因みに云ふ、日曜学校の在籍生徒は約九十名に達し之を高等、普通、幼稚の三部に分ち、猶ほ雑誌、辯論、図書、音楽、運動の諸部を設けて活動してゐる。

このように函館正教会の日曜学校は、組織系統が整い、子供達の世話や宗教教育の指導を青年会や神学校の卒業生が担当した。以下、各部門の担当者を記す。

教師	イグナティ中川元彦	図書	シーラ浅野美都
教務	齋藤・浅野・太平	修養	ウエラ高井花子・イオアン濱邊實
庶務	マリヤ齋藤フミ	園芸	ニコライ大野謙治
会計	イグナティ浅野潔	運動	フオマ小川浩
聖歌	ニコライ大野謙治	聖堂係り	アンドレイ三浦政弘

日曜学校の活動は、やがて後述の「緑塔会」メンバーが支えるようになり、一九三〇年（昭和五）一月には聖歌部と雑誌部が協力しガリ版刷りの「パニヒダの斉唱聖歌」（謄写版刷八銭）を発行・頒布するなど活動は益々充実していった。²³ また、この時代に付記したいのは、各地の信徒が函館出張の際、教会を訪問し日曜学校の活動に参加した記録が見られる点である。来会者はロシア語通訳に携わる者が多い。イオアン瀬沼恪三郎はエルサレム旅行の談話や運動会、当別トラピスト修道院への遠足にも同行している。

公会に見る日本正教会の実情 一九二九年（昭和四）の公会では、総務局より「日本ハリストス正教会独立維持法」（ペトル望月鼓堂師提唱）が提案され全会一致で可決された。この法案は全国信徒に年額二円以上の献金納付義務を課し、各教会に信徒戸数に応じた分担金額を定めて徴収、独立基本金一〇万円に達した時

点で基金を設立、利子を伝道費に充当しようとするものである。しかし、初年度から目標とした六〇〇〇円には到底及ばず、納入額は年ごとに下降線を描いていった。

一九三〇年（昭和五）七月一四日から始まった公会では、教会独立問題が議論されている。公会議事録にはシメオン三井道郎神父とパウエル佐藤秀六神父の連名で提出された「決議書」によって神品たちに不信感が高まっていく様を見る。決議書には以下のように記されていた。

- 一、日本正教会は名実共に独立し、ロシア・ミッションなるものを認めざる事
- 二、日本正教会はソヴィエト・ロシア正教会との関係なき事を明らかにする事

信徒らは共産政権下による宗教弾圧の激しさに恐れを隠せなかった。当時、「正教時報」が伝えるソビエトの実情は、現地に赴いたイオアン瀬沼によるもので、他の報道よりも明確であった。一九二九年（昭和四）から始まる世界恐慌で、北海道内の鉱工業には不況の波が押し寄せ失業者が続出した。労働争議やストライキもしだいに頻発するようになる。

一九三一年（昭和六）の満州事変を機に、市民生活は軍国主義による戦時体制へと移行し、日本正教会も世間と足並みを揃えなくてはならない時世となる。

教会内の経済不振が続く中、セルギイ大主教は一九三一年（昭和六）四月一二日にモスクワ総主教臨時代理のセルギイ（ストラゴロツキイ）府主教によって府主教（メトロポリト）に昇叙された。

パウエル松本輔祭の永眠　一八八〇年（明治一三）に副伝教者として函館正教会に着任したパウエル松本

安正師は、渡島半島を幾度も往来し南北北海道の伝道に努めた功労者である。伝教者の祝福を受けた後、一時は函館を離れ小樽や札幌に配置されたが、一九〇七年（明治四〇）に再び函館正教会赴任となり、着任して数日、函館大火に遭い被災者になった。

大火後、目時神父や白岩神父と共に教会の復興に尽力し、同時に有川正教会の牧会にも励んだ。妻マリヤ須磨が永眠した一九一五年（大正四）以降、松本伝教者は境内から有川に住まいを移したが、一九二二年（大正一一）、娘ウエラ信が持ちかけた東京本会の聖堂々長欠員募集に心を決め白岩神父に相談、快諾を得て転任願を提出した。この希望は公会で決議されたが、会議後、本会からの呼び出しはなかった。この件について議友フィリップ江口が「北海の正教」に投稿して公会決議の不履行を指摘したが、その後も有川に住み、一九二六年（大正一五）一〇月の聖堂成聖満一〇年記念祝典の際、長年の勲功により輔祭に叙聖され、函館正教会より年額六〇円の終身贈呈を拝受した。²⁴

松本輔祭は妻との間に多くの子を得たが、夭折の悲運が続き聖ニコライも情を寄せていた。一九三二年（昭和七）二月二十七日、七七歳で永眠、家族が待つ函館正教会墓地に埋葬された。

緑塔会の設立 先に触れた「緑塔会」については、「正教時報」第二一卷第六号（一九三二年六月二〇日発行）に説明がある。

同会青年は緑塔会を設立して四月二十七日発会式を挙げ、最初白岩長司祭の祝辞があり「経済、人物難により教会の発展が思うように往かぬは事実であるが、教会が振はぬと嘆息する許りでは何物も得られぬ、信徒達の後援がなければならぬ、青年が教会に何物かを捧ぐることは非常に嬉しい、緑塔の如く始終青々

と空を指して発展するを希ふ云々」次に三浦正弘氏の創立談ありて後会則附議に移り委員長を推挙して女子会員の委員長には後藤夫人、男子会員の委員長には厨川勇氏にお願いすることとなり、両氏も快諾され、続いて女子委員に高島良子、後藤ルキヤ、後藤美和子の諸姉、男子委員に三浦正弘、濱邊實、中居正義の諸兄は指名され、準会員代表として小川孝氏は祝辞を述べて閉会が宣せられ「幾歳にも」を唱へた後、用意の茶菓を喫して懇談し盛会裡に解散した。

また同年一〇月二三日、緑塔会主催で聖堂成聖一七周年記念祭が行われた。現存する「招待券」にある催事内容は、感謝祈祷後に聖堂の一般公開、玩具展覧会、食品バザーとあり、午後からは境内で運動会が行われた。

教会敷地の地税問題 一九三三年（昭和八）七月に行われた公会は、セルギイ府主教の渡来満二五年祝典も併せて行った。公会三日目の次年度予算案承認後、経費削減の対応策として本会所有の不動産売却が提案された。この不動産とは塔の沢、京都、函館の教会敷地のことであり、国有地であるこれらの地税は本会が負担していた。

函館正教会の敷地は宣教団の設置以来、二〇〇〇坪の地税二四〇円が優遇されていたと見なされた。財政委員会はここに調査の余地があるものとし、地税は当地の教会が支払うべきとの意見に同意する代議員は少なくなかった。

地税問題は公会後、直ちに函館正教会へ知らされた。議友ゾシマ下田長之助はこの報を受けた後、本会における聖堂建設等に関わり敷地借地料調査委員の一人であった横浜正教会のパンティレイモン齋藤政明に再

考願いを提出する。齋藤はかつて北海道に常駐する神品教役者と信徒間の親睦、意思疎通を図るために発行された「北海の正教」の編集者であった。

ゾシマ下田は敷地二〇〇〇坪を有する苦勞とこれ以上の金銭的負担は信徒に強いられないとして本件の再考を訴えたが、敷地借地料の問題はひと先ず塔の沢の土地処分から着手された。また、再考願には一九一六年（大正五）の聖堂再建時にあつたもう一つの聖堂建築と教会運営の構想が同時に記されており、当時の信徒らもその計画を承知していたことが文中に見られる。設計図の詳細は不明だが、実現していたならば函館正教会は夏と冬の聖堂を有する教会になつていた。

……元来当教会は広大の敷地と聖堂とを有し来りたるは信徒の実力に頼るにあらず故大主教ニコライ師最初の御渡来正教発祥の地として凡て本会直轄の許に維持し来りたるものにして斯る恩恵に浴し来りたるは当会信徒の感謝致し居る処に御座候。明治四十年大火にて館内建物全部類焼し故ニコライ大主教御心痛あらせられし聖堂再建の資金を募集せられ当会信徒も極力献金努力し現府主教座下の御尽力により大正五年十月現聖堂建立せられ候其節露国一未亡人アナスタシヤ姉より聖堂建築費として金貳万円献納有之聖堂建築成り成聖式の時、府主教座下当会義友信徒に対し当聖堂は特志者アナスタシヤ姉を聖堂建立者となすべく残金貳万円の内金七千円にて信徒集會所兼冬期使用の聖堂を建築すべく設計図をも出来居ると一般に図面を示され、猶ほ残金は当聖堂維持費として保存し、其利子にて借地料及び修繕費となすべしと表明せられ信徒一同感謝致候。七月二十九日 義友ゾシマ下田長之助

聖ニコライの遺筆展

一九三三年（昭和八）七月、市立函館図書館において、聖ニコライの遺筆が展示さ

れた。「正教時報」第二二卷第八号（一九三三年八月二〇日発行）に次のように掲載されている。

故大主教の最初の傳道地である函館の市立図書館は、創設廿五年記念の為に『切支丹資料展覧会』を去る七月十六日より三日間開催した。同図書館は展覧会に出品する資料を、本会事務所に申し込んで来たが、本会では、故大主教ニコライ師が明治四年頃芝増上寺の玄信僧正につき『妙法蓮華經』（全八卷）を御研究になった、その第一巻の巻頭に、漢字語交じりの露文で浩瀚な評釋が記されているが、この一巻を同会に出品した。

マルク下斗米伝教者の赴任　一九三三年（昭和八）一〇月一日、函館及び有川正教会の伝教者に、豊橋の啓蒙学院生徒マルク下斗米昌教がセルギイ府主教の祝福を受け赴任することになった。²⁵

豊橋の啓蒙学院とは、ロシア革命の影響で閉校した正教神学校の代替として一九三二年（昭和七）に修道司祭アントニイ日比七平師が設立したもので、シマコフカの修道院生活を踏襲した神学生養成機関であった。後述のルカ日比伝教者もこの学院で学んだ一人である。なお、この学院は一九三四年（昭和九）に閉校した。

「上磯ハリストス正教会一二〇周年記念誌」には、「師は会堂の一室に寝起きし、熱心に伝道して三七名を洗礼へ導きました。」とある。一九三九年（昭和一四）、七月の公会で下斗米伝教者は修善寺正教会へ転任した。

函館最大の大火　一九三四年（昭和九）の大火は一九二一年（大正一〇）以来再び函館の街を灰燼に帰した。三月二一日の夕方、住吉町の民家より火災が発生。東から吹く風速二〇メートルの強風にあおられ、火

勢は市街地を舐めるように焼き尽くしていった。新川に掛かる大森橋が焼け落ちると、迫り来る業火から逃れようとした群衆が一斉に堤防を滑り降りたが、津軽海峡の冷たい高波にさらわれ多くの人が溺死・凍死した。この惨事も重なり、焼失家屋二万四〇〇〇戸余り、死者二〇五四人、重軽傷者一万二五九二人、行方不明者六六二人という函館大火史上最大の被害になった。

青柳町や蓬萊町をはじめ十字街界限に住んでいた信徒らは、着の身着のまま教会に避難し、聖堂内で火勢が収まる時を待ったという。聖堂は耐火構造と風向きの変化によって運良く被害を免れたが、司祭館、教役者住宅は暴風によって屋根が大破し、市中にある教会所有の土地家屋も焼失してしまった。

大火後、全国の教会や信徒から米や古着などの援助物資をはじめ、多くの見舞い金が届けられた。この時の収支報告を見ると、総額は一万九四一円四一銭。この内、一万五〇〇円が被災した信徒に分配された。

聖ニコライの尊影写真 一九三五年（昭和一〇）二月、聖ニコライの永眠記憶日に、神学校卒業生から大判の尊影写真が献納された。「正教時報」第二四巻第四号（一九三五年四月一日発行）に当日の様子が記されている。



66 ニコライ大主教の追悼式



65 暴風で屋根が大破した司祭館

去る二月十六日故ニコライ師永眠記憶日には、當地在住の男女神学校卒業生から立派な額縁付きの故師大判写真を献納された。超えて十七日主日公祈禱後、故師のパニヒダを厳修し、引續き講堂に於て同写真を前面に掲げ大主教の追悼会を開催した。白岩司祭、高井義喜久氏、加藤一徳氏等の講演あり、三時半永遠の記憶を歌つて散會、會する者約百名であつた。猶毎月第一日曜は男子神学校同窓、毎月十六日女子神学校の同窓会が催されている。

この尊影写真は明治四〇年頃、東京の神田錦町にあつた工藤写真館で撮影されたもので、上野の写真展覧会で一等賞を得た原版である（口絵写真6参照）。

札幌正教会へ贈つた聖龕　一九三六年（昭和一一）五月一〇日、札幌正教会顕榮聖堂の移築が完成し成聖式を迎えた。「札幌正教会百年史」によると、新聖堂の聖器物を揃える際、函館正教会にあつた聖龕を譲り受けたことが記されている。

……「函館聖堂明治四〇年」類焼の折、渦中から危うくも取り出した聖龕と、大正五年新聖堂成聖の時、ロシアから贈られた聖龕とがあつた。札幌には聖龕がないことを訴えて、聖龕一つを札幌で永代借用させて欲しいと陳情して、白岩長司祭の祝福を以て借用ができ、以来この聖龕が至聖所の宝座の上に置かれている。

また、函館正教会の「蟬鳴」（神学校出身者の会）の会員らは聖堂建設のために一〇〇円を献じている。



67 日比伝教者が描いた舞台背景

ルカ日比伝教者の赴任 一九三七年（昭和一二）七月一三日、ルカ日比和平副伝教者は伝教者の祝福を受け、公会において函館正教会赴任が決定した。セルギイ府主教は二二歳の若き伝教者を懇望する書簡を白岩神父、議友宛に送っている。在任中、婦人会の講話を白岩神父に代わって担当し、絵の才能を生かして降誕祭祝賀会の舞台背景を製作するなど諸活動にも積極的であった。「正教時報」第二六卷第二号（一九三七年二月一日発行）にある降誕祭祝賀会の様子では、日比伝教者の活躍振りが垣間見られる。函館正教会には一九四〇年（昭和一五）まで在任し、その後は美術を学び画業を残した。

二十五日午前九時三十分より聖祭の祈禱は奉献せられ、終わって講堂に於て降誕祭祝賀会が催された。十一月初旬より青年会の人々によって製作された二間余のバック二種、舞台、クリスマスツリー等小さいながらも本格的、寒国のクリスマスの喜びを味わうに十分であった。閉会の祈禱、聖書朗読、日曜学校生徒のトロバリを歌う声は跪きて持ちたるロソクの燈びと共に主の降誕を讃めあげ、神父の訓話に第一部は終わった。一同昼食、蜜柑、菓子等の分配あり、一時より第二部に、赤き焚火を囲む牧者、星をめあてに進む博士、次にサマリヤ人の聖書朗読に合せて進む、幼稚園生徒の默劇その愛らしさに一同思わずほほえみ、つづく童謡に子供の世界を満喫し劇「お月様の見たお話し」に黒バックに浮ぶ、お月様の目鼻の動くセットに腹を抱え、今回有志によつて特別上演された函館プレクトラムのマンドリン、最後の「まちがえられたサンタクロース」は子供の

自然な表情、変化に富める脚本、その面白さに、集まる者は一斉に拍手を送った。終りに生徒一同は神父より東京仕入れのプレゼントを戴き、その美しさに目を輝かせ、閉会の祈禱を終わり、夕日沈む丘の上より楽しんで家々に散っていった。

議友ゾシマ下田の永眠 一九三九年（昭和一四）二月九日、「多年当教会の議友として会務に尽力²⁶」してきたゾシマ下田長之助が永眠した。一九三六年（昭和一一）一二月二五日の降誕祭当日には長年の奉仕に対する表彰があり救世主のイコン（聖像）贈呈を受けた。葬儀は白岩神父と札幌正教会の猪狩神父によって執り行われた。ゾシマ下田は函館市の旅館組合会長及び全北海道旅館組合副会長を務め社会的にも貢献した人物であった。

宗教団体の成立 一九三九年（昭和一四）四月に成立した「宗教団税法」は、宗教団体の法人化を認める法律であったが、実際は宗教統制が目的だった。国内の宗教団体は全国五〇教会、信徒数五〇〇〇人を有すれば教団として認められたが、文部大臣又は地方長官の認可が必要となり、これによって神道、仏教の諸派は統合され、国内のキリスト教においてはプロテスタント系の諸派が日本キリスト教団として統合されるなどの動きがあった。

日本正教会では、「宗教団税法」に従い「日本ハリストス正教会教団」が新たに設立されることになったが、以前から協議してきた「独立」という日本の正教会における教権問題が現実味を帯びて再び浮上し、七月に行われた全国公会での議案は、セルギイ府主教の立場とモスクワ総主教庁との関係が取り上げられ、同時に「宗教団税法」と「邦人主教選立」特別委員会の設置も決定となる。

戦時体制の中で 一九三七年（昭和一二）七月、中国北京の蘆溝橋付近で日本と中国の両部隊が衝突した。「蘆溝橋事件」を発端に、一九四五年（昭和二〇）まで続く日中戦争が始まった。日本国内の戦時体制は一層強化され、教会内もいよいよ歩調を合わせざるを得ない状況になった。「正教時報」には国民精神総動員に関する通達が掲載され、セルギイ府主教も戦地へ出征する信徒に向け、日露戦争の際に配布された聖ニコライの「第一公書」と共に武運長久を祈願し胸懸け十字架を頒布した。東京の正教会連合婦人会では、慰問袋に入れる物品を方々に手を尽くして集め陸軍省に献納、「正教時報」はこの様子を「国民運動に参すべき秋」と報じた。

函館正教会では六月から九月にかけて再び聖堂の修復が行われた。「正教時報」第二六卷第一号（一九三七年一月一日発行）には「本来ならば盛んに成聖感謝の式を挙げ、大に慶祝すべきであるが、時局に鑑みてそれらの会合祝会等は節約することになり、府主教座下に降臨を仰いで感謝祈祷だけを行ふことになった。」とある。

教会周辺では船見町に移転したロシア領事館の敷地をめぐり訴訟問題が起きていた。高台にある領事館からは港内にある函館ドックが見えるため、元所有者が地権を主張し立ち退きを強要したのである。この件には土地の買収を謀った軍部指令があったのだが、日魯漁業株式会社が解決に動き決着を見た。

外国文化や宗教に対する警戒が強まり、年明け早々には「構内調」の提出を求められ、教会活動や教勢などを詳しく報告している。また、「正教時報」第二八卷第八号（一九三九年八月一日発行）には青年会が『救世主ハリストス』と『生神女マリヤ』のアイコンを印刷発行し、頒布した。」とある。この時期の印刷物は「正教時報」も同様に紙の悪さが特徴的だが、当時としてはアイコンの発色、紙質共に上等なものである。発行に

至る経緯や印刷部数の記録がないため推測の域を出ないが、参拝が困難になる状況を踏まえてか、又は戦地に向かう者の携帯用として作られたのだろうか。戦後、物資の不足が激しくなった時期に東京や豊橋正教会から要望を受け、まとまった数を送った記録が残されている。

一九四〇年（昭和一五）、日本は「日本書紀」に基づく紀元二六〇〇年を迎えて「祝賀」に沸き立った。これを機に、全国各地の神宮では慶賀行事を前に社殿や参拝道等の造成や整備を行い、「建国奉仕隊」と呼ばれた勤労奉仕団がこれに協力した。函館の護国神社でもこの年から本殿整備が行われ、一九四二年（昭和一七）に完成している。

一月一〇日、奉祝式典が行われた皇居前広場は五万人を超える一般参拝者で溢れ、国を挙げての祝賀ムードは戦意高揚を促し「挙国一致」、「一億一心」などいくつものスローガンが流行した。戦争の靴音は本州から遠く離れた北海道にも次第に近づき、海に囲まれた函館ゆえに豊かだった食卓にも、食糧不足の影響が出始めた。新聞には連日、物資配給統制実施の記事が掲載され、米や味噌、砂糖などの食品をはじめ、衣料品やマッチ、木炭なども通帳や切符で配給されるようになり店頭から商品が姿を消した。一九四〇年（昭和一五）の市の人口統計によれば、戦地送還や引き揚げなどで函館の男性人口は半分を割り、各種産業には女性が動員されるようにもなっていた。教会や信徒たちも時局に併せ防空献金や護国神社への寄付を行っている。

モイセイ河村神父の永眠　この年、輔祭を長く務めた後、一九三七年（昭和一二）に司祭に叙聖されたモイセイ河村伊蔵神父が永眠した。「正教時報」第二九卷第三号（一九四〇年三月一日発行）には「二月五日、七十有六歳の全生涯を、信仰に因って故大主教ニコライ師に事へ、ニコライ師没御現府主教セリギイ師に事

え、正教本会奉神礼並に聖堂の守護者モイセイ河村伊蔵司祭が永眠された。」と記されている。尚、河村神父の妻は有川正教会の礎である伝教者ダミアン五十嵐東三の娘である。

邦人主教選立 一九四〇年（昭和一五）七月一三日から一七日にかけて行われた全国公会は、日本正教会の舵取りを左右する大きな難題を抱えていた。前年の公会でも問題となった「宗教団体法」と「邦人主教選立」である。

日本正教会の代表、即ち統理者セルギイ府主教の存在は、ソビエト政権とロシア正教会の關係に影響を受けることは必至で、神品教役者や信徒の懸念は日々強さを増していった。根底にあるのは累積する体制への不満や日露戦争で受けた迫害が再び起こるのではないかという恐れであった。周囲が求める「独立」は教會的な意義からは遠ざかり、ソビエトとの断絶宣言を望んだ。セルギイ府主教はここでも聖規則（カノン）を以てロシア正教会との關係を説明するが、既に排斥運動もおこっている状況下に理解を得ることは難しかった。

七月の公会後、付託をうけた特別委員会において、八月二八日、日本正教会統理者として神学士アルセニイ岩澤丙吉氏（当時、陸軍大学ロシア語教官）が満場一致で推載され、暫定的条件をもって同氏は承諾するに至った。

九月五日、セルギイ府主教は引退を表明、代表としての全ての権限を移譲し、名称も「日本ハリストス正教会」から「日本正教々団」と改名決議された。同月二三日、上野の精養軒で行われた岩澤統理招待の晩餐会には、日比伝教者とフアデイ桜井が出席している。

白岩神父と増田詠隊教師の功労を祝う　一月、増田詠隊教師の五〇年に渡る教会奉仕を労い感謝祈禱が行われ、更に翌月二五日の降誕祭祝賀会では、白岩神父の叙聖三五年及び函館正教会赴任三〇年を祝い、教会より記念品が贈呈された。²⁷

全国教役者信徒大会と臨時公会　　統理者が変わった日本の正教会では新体制が始まった。しかし、アルセニイ岩澤が聖職者ではないため当初から反対や異議が唱えられていた。やがて岩澤派と反支持者による内部紛争が表面化し、両派からの状況説明文や冊子類が地方教会にも届くようになる。教会内が二分する事態に、各地の教会、信徒らは益々不安に陥った。

一九四一年（昭和一六）、各地教会が前年秋頃より要求していた全国教役者信徒大会と臨時公会が一月一日に開かれた。函館正教会が信徒に宛てた説明文によると、「當教会に於いては今回の蟠まれる一抹の暗雲を一掃し対立せる意見を円満解決し相互の意思疎通の融和を図り合法的なる公会の招集者を今度の紛糾を醸さざりし昭和十五年九月一〇日以前の清浄なる公会招集者の名儀に復活さるゝ事を以て最も光明にして且つ適當なる事と被考候……〔中略〕……岩澤氏が日本正教会に於て統治するも教団認可せらるるまでは従来の教規及び日本正教会憲法及び其他教則によりて治理すべき……」と記し、「議友の協議の結果を御参考までに御報告……」したと結んでいる。

一九一九年（大正八）以来、最も多い一二九人が参集したこの公会には、岩澤氏をはじめ新体制側の総務局長等は欠席をもつて態度を示した。函館正教会からは日比伝教者とフアディ桜井謙、フィリモン加藤秀見、パウエル今井惣之丞が出席している。公会では、主教候補者に選立された長司祭イアコフ藤平新太郎師が、叙聖実現までの代理統理者として選ばれた。岩澤氏側も事態を収めるために決議を認める姿勢をとったが、

その一方で長司祭イオアン小野帰一師を主教候補に擁立する人々が、僅かな期間で主教叙聖までの段取りを整え、四月六日、ハルビンで小野神父（主教に叙聖され聖名はニコライとなった）は主教に叙聖されたのである。帰国後、本会は混乱、騒然となり文部省等が介入せざるを得ない状況になった。²⁸

七月一日に行われた臨時公会は、「邦人主教叙聖後第一回の記念すべき公会」とも言われたが、その会場は前例なき異質なものであった。議長席に座したのはニコライ小野帰一主教、副議長のイアコフ山口精一神父と仙台教会の信徒代議員イサク菊池東民の三人で、左に神品、右に文部省村上理事官、警視庁木下警部ら関係所管庁諸氏と並び、中央には大日章旗が掲げられていた。

議案は邦人主教（ニコライ小野主教）の推載、藤平神父の主教叙聖の実現、総務局長及び局員選任の三案のみでいずれも可決又は総務局一任となり、この総務局も小野主教に指名された局員によって新たに構成された。「正教時報」第三二巻第七号（一九四一年八月一日発行）に掲載された公会議事録（略）には「新体制に従應するにふさわしき公会会場であった」と記されているが、「正教時報」もすでに編集者が替わり体制側が発行している。

教会内の紛争に対し、議友会などで協議したであろう函館正教会の態度や方針は、「正教時報」第三二巻第二号（一九四二年二月一日発行）に掲載された白岩神父永眠の弔辞に僅かだが記されている。

……白岩神父には宗教団体法案の新体制を環りて教会内に起こりたる紛擾事件に心痛せらる病床に呻吟し乍らも東京の森謙兄及び佐藤新衛兄等へは屢々自己の意見を書き送って中央の情報を得る事に腐心せられたるが、遂いで教会教団の公認を聞かずして長逝せられたるは遺憾至極に堪へざる所なり。

東京のキリル森謙と白岩神父は婚戚による義兄弟である。キリル森は邦人主教選立に伴い発生する諸事に尽力した人物である。体調が思わしくない中で聞く本会の情報は、白岩神父を更に悩ませたに違いない。

モイセイ白岩神父の永眠

一九四一年（昭和一六）六月、ドイツがソ連に宣戦布告をすると、日本のソ連領事及び館員の家族らには自国への引き揚げ命令が下された。函館においては漁業関係者への査証発給などの業務が行われていたが、一九四四年（昭和一九）一〇月一日をもって閉鎖された。

この頃になると北海道における貿易の拠点は小樽へと移り、漁業で繁栄を築いた函館にもかげりが見え始める。日ソ関係の悪化から三七六漁区あった漁場も一九四三年（昭和一八）には一二〇まで減少し、翌年は更に三四漁区に落ち込んだ。

一年の瀬押し迫る一二月二七日、白岩神父が七三歳をもって永眠した。持病の狭心症の発作によって司祷もままならず、秋頃より札幌正教会のイヤコフ猪狩神父が巡回していた。同月三〇日に行われた葬儀には、猪狩神父をはじめイグナティ岩間神父（仙台）、ペトル森神父（盛岡）らが来函し、司祭埋葬式が荘厳に執り行われた。聖歌は増田詠隊教師に替わってフアデイ桜井が指揮を務めている。

会葬者にはロシア人信徒や函館市長齋藤興一郎、函館図書館館長岡田健蔵、商業高校校長、カトリック教会司祭、福音教会牧師等も参列した。議友アファナシイ高井義喜久が読み上げた弔辞には、三〇年に渡り教会財政に苦勞した白岩神父や議友達の姿がある。

白岩神父と吾が函館正教会との関係に於いて特筆大書せざる可からざるの一事は御赴任以來今日に至る迄三十年間苦心惨で教会財産の増殖に對し画策せられたる事実なり……「中略」……函館教会は現在、市

内の有力なる銀行数カ所に約八千八百円也の定期貯金を有する外、宝町、曙町、西川町、堀川町の四箇所に地所を所有して毎月約百円の地代を挙げて教会の資産増殖の基礎を築き居れり……「中略」……議友にして会計係たる下田兄及び齋藤兄等の周致綿密なる監査によつて預金帳面と實際預金有高の些少の差さへなきこと闡明せられたれば我等は両兄の監査に信頼して函館正教会財産の完全に保管せられ頗る健全なる状態にあることを確信して数十年間の多きに亘り何等の間違ひなかりし白岩神父の御心労の並々ならざりしことを衷心より感謝感激して措く能はざる所なり²⁹。

一九四二年（昭和一七）は、函館のキリスト教会にとつて受難の年であつた。神道、仏教、キリスト教は一九三九年（昭和一四）四月に成立した「宗教団体法」よつて団体化され、国の管理下に置かれた。やがて「体制宗教」として一元化を図り、国策に従わせようとする「治安維持法」が公布されると、キリスト教に對する弾圧は一層強まった。

憲兵らは天皇制の否定運動を行う団体を厳しく取り締まり、プロテスタントの一派、ホーリネス系教会が全国で一斉検挙されるや、函館でも同教会の小山宗祐牧師が治安維持法違反容疑で逮捕、獄中死するという事件も起こつた。護国神社への戦勝祈願参拝を否定すれば摘発され、密告という隣人に対する恐怖心も信徒にはつきまとうようになった。

この年、本会は「戦時祈祷式」を出版し、各教会に実施を推奨した。

二 司祭イアコフ藤平新太郎の時代

一九四二年（昭和一七）二月～一九四六年（昭和二一）一月

一九四二年（昭和一七）二月、永眠した白岩神父の後任として長司祭イアコフ藤平新太郎師が着任した。藤平神父は大阪正教会を長く管轄していたが、ニコライ小野主教の前任地である高崎正教会に転任し、一九四一年（昭和一六）の臨時公会で邦人主教候補者として選立された人物である。函館正教会に着任した背景には本会の派閥紛争が少なからず影響しているが、藤平神父の子息ワシリイ藤平和雄が書いた「大阪正教会の追憶」によれば、藤平神父夫妻は、主教叙聖に対し不肖乍らもその覚悟はあったようだとしている。

公会は一九四一年（昭和一六）一〇月の臨時公会を最後に、終戦後の一九四六年（昭和二一）まで行われず、「正教時報」にも函館正教会着任に関する記事は見あたらぬ。唯一の資料は藤平神父が着任初日より記した「教会記録」である。

昭和十七年二月二十日、十二時四十五分に余函館港に着く信徒一堂の出迎えを受け直ちに聖堂に於いて感謝祈禱を献じ赴任挨拶を述べ。献禱後一同講堂に会し歓迎茶話会を催す。席上余に単立教会規則申請手續期限が三月末日なるを以てその手配を受く必要ありて急いで赴任したる事を述べ、二十四日夜下田氏方に会し申請の方針と手配等協議することを約す。当時司祭館が故白岩神父遺族使用中の都合を以て歓迎茶話会閉会后、余浅野武氏に伴われて同氏宅に行き暫く宿泊す。



68 供出後に取り付けられた木製門扉
1947年頃

単立教会規則の申請と名称変更 藤平神父は着任早々、手続き期限が三月末日と迫った名称変更と教会規則申請のために、連日信徒宅を訪問しては協議を行い事務手続きに奔走している。

宗教団体の規定に従い、教会の名称は一九四〇年（昭和一五）の公会で、「ハリストス」が削除されることになった。本会では小野主教叙聖における派閥の対立がまだ混乱の内であり、結局、日本の正教会は教団としての認可が下りず、「宗教結社・日本正教会」となった。このため、各地の教会が単一教会として名称を変更し、教会規則の申請をするよう指示が出された。教会規則は静岡正教会規則を範として作成され、必要書類を揃え官庁へ提出したが、出頭要請もあり正式に認可されたのは四月二十七日であった。

聖鐘供出 戦局の悪化と物資不足により戦況に必要な道具、即ち戦車、大砲、弾丸などの生産には遅れが生じ、国は早急に金属資源を補う必要に迫られた。当初は任意であった金属類の供出も回収令が制定されると国をあげての実施となり、家庭の鍋釜に至るまで根こそぎ回収された。寺社仏閣においては、歴史的又は

美術的価値の高い金属類は保存認定を受けると供出を免れるとされたが、九割以上の梵鐘が国内寺院から姿を消したといわれている。

函館正教会で保存が認定されたのは奉神札に必要な聖器物だけで、組鐘、聖所の大釣燈（パニカジーラ）、啓蒙所のシャンデリア、燭台、門扉、基礎換気口の枠や鉄製の火鉢など教会にあるほとんどの金属類を失った。なお、供出した聖器物類は一九八八年（昭和六三）の修復で復元され、現在に至る（燭台の意匠等は第三部「重要文化財としての復活聖堂」参照）。供出の様子は「新函館」（一九四二年）一月

二四日)で次のように報じられた。

馴染の深い聖鐘、函館各基督教続々供出

朝に夕に神の聖なる調べを奏でる「聖鐘」が東亜共栄圏確立、英米撃滅の神のお告げとともに勇躍応召することになった。函館市内のキリスト教会は天主教教会をはじめメソジスト教会其他十数余に達しているが大東亜戦激発とともに鉄製品回収の声が昂まり、市内各寺院の梵鐘が続々応召しているのを目のあたりに見て、市内キリスト教会では「われわれも日本に生活しているものとしてまた、日本の正義のため、東洋平和のため鉄製品を供出しなければならぬ」と各寺院の鉄製品を続々供出したものだがさらに市民に馴染みの深い聖鐘をも供出することになった、市役所ではこの聖鐘の供出とともに「市民は此の聖鐘の供出に負けず、大いに鉄製品を供出して貰ひたい」と声を大にして号令している。……

一九四三年(昭和一八)、政府は外国文化の自粛・禁止を推し進め、特に飲食店の店名などは外国語排斥の余波を受け変更を余儀なくされ、函館でも十字街、駅前、大門などの歓楽街からカタカナや英語表記の看板、ネオンが消えた。

同年八月一七、一八日の両日、東京本会に於いて長司祭会議が行われ、小野主教をはじめ長司祭ら一四人が参集した。この会議の目的は教会の和平回復を図るためとされたが、既に選立されている主教叙聖候補者を一旦白紙にし、新たに長司祭三人を候補者として選ぶことが決定した。出席していた藤平神父は再び主教候補者に選立されたが両日とも固く辞退を申し出た。しかし、会議は進行し希望は取り上げられぬまま閉会

する。³⁰

その後、「正教時報」第三三卷第八号（一九四三年九月一日発行）には「教会報知 長司祭会議 函館正教会の藤平神父、前年の公会にて主教候補に推薦されたが辞退したい。」との一文が掲載された。

教会独立を目指した新たな邦人主教の叙聖は、時局の悪化により実現を見ずに終わったが、この一連の事柄は戦後にも禍根を残した。³¹

アフアナシイ高井とスリコフ 一九四四年（昭和一九）七月一九日、議友のひとりアフアナシイ高井義喜久が永眠した。葬儀は藤平神父が病床にあつたため、弟の長司祭アントニイ高井萬亀尾師が来函し執り行った。

アフアナシイ高井は正教神学校を卒業後、四年程伝道に従事したが、ロシア語通訳の職を得てロシア領サハリン島コルサコフに渡り、一九〇四年（明治三七）に帰国、その後は漁場経営や日露貿易の仲介業に就いた。一九二九年（昭和四）、日魯漁業株式会社（現株式会社マルハニチロホールディングス）に入社すると、日ソ漁業交渉における対外折衝の場で活躍した。

函館における高井の名は優秀なロシア語通訳者として認められているが、現在ではロシア絵画を日本に持ち帰った人物としても知られている。

一九三二年（昭和七）、ソ連訪問の際、国営美術作品販売所で画家スリコフが描いた一二〇号の大作「女子修道院を訪れる皇女」（三二〇頁写真113参照）の習作を購入し、その縁があつてかスリコフの孫にあたるコンチャロフスキイに自分の肖像画を描かせた。スリコフの絵は高井の永眠後も東京の日魯漁業株式会社本社社長室に飾られていたが、所有者の高井家に絵を返却し、展覧会などの出品を可能にしたのは函館ゆかりの

画家木村捷司氏の協力が大きいという。木村氏は白岩神父が管轄していた時代に、屢々教会を訪ねては、聖堂や神父をモデルに絵を描いていた。一九六六年（昭和四一）、高井家は「女子修道院を訪れる皇女」を市立函館博物館に肖像画と共に寄託し、一九九三年（平成一五）、北海道立函館美術館に寄贈した。

セルギイ府主教の永眠と終戦　一九四五年（昭和二〇）六月二三日、詠隊教師イサク増田作太郎が永眠した。明治、大正、昭和にわたって管轄司祭を支え、聖歌隊の指導育成に努めたこと五〇余年、教会と音楽に捧げた人生であった。戦時中でなければ、自分が指導した信徒による厳かな聖歌に包まれ、教会葬をもってこの世の生活を終えただろう。「メトリカ」には記載される筈の永眠記録はなく、ニキタ近藤師が後に書いて書き留め貼り付けたと思われる小さな紙が戦争の悲哀を語っている。

この頃、日本正教会の統理者から引退した後、世田谷の太子堂に居を移していたセルギイ府主教も苦しみの中にあつた。同年四月、特高警察や憲兵の監視が続き、ついにソビエトのスパイ嫌疑で逮捕され、四〇日という長期留置や拷問を受けた。釈放後、持病のある体は衰弱し板橋の狭小家屋にて一人生活を続けるが、家財など身の回りのものは僅かで訪ねる信徒もほとんどなかったという。

夏が近づくと日本本土への攻撃が始まった。六月二七日、米軍機が偵察のために街の上空に現れた。訓練ではない空襲警報が四日間連続して鳴らされたが、攻撃はなかった。空襲の予感を感じながら不安な生活は続いた。そして、ついに七月一四日、一五日の二日間にわたり函館空襲が起こったのである。警報が鳴り響くなか轟音をうならせる敵機は爆弾、焼夷弾、機銃掃射をもって街を攻撃した。

終戦を五日前にした八月一〇日、セルギイ府主教は七四歳の生涯を誰にも看取られることなく終えた。葬儀はニコライ小野主教、ニコライ岡神父、パウエル牧島伝教者によって行われた。新聞に掲載された死亡広

告を見て駆けつけたモイセイ馬場脩によれば、「室内はがらんとして、目新しい大八車だけが聖堂の入り口の左側に一台あっただけで人の往来もきわめて稀で此所彼所に数名のロシア人がたむろしているだけで、れい枢車はおろか、花輪さえ一つもなく葬儀とは縁遠い雰囲気だった。」³³と埋葬の日の情景を回想している。

八月十五日、長い戦争が終わった。函館正教会の聖堂は空襲を免れたが、大切な聖器物や信徒を失った。終戦の日、ひとつの「時代」に目には見えない墓標が置かれた。

- 1 「正教時報」第五卷第二〇号（一九一六年一〇月二〇日発行）
- 2 「函館毎日新聞」一九〇九年五月一日・八月九日・一九一〇年五月二三日・十一月六日
- 3 「函館毎日新聞」一九一二年九月二五日
- 4 「松山ハリストス復活聖堂」水島行楊編 一九一一年
- 5 「函館新聞」一九一六年一〇月一三日
- 6 「正教時報」第三卷第二〇号（一九一四年一〇月二〇日発行）、第二一号（一九一四年十一月五日発行）
- 7 「正教時報」第五卷第一九号（一九一六年一〇月五日発行）
- 8 「函館毎日新聞」一九一八年二月一四日
- 9 「函館毎日新聞」一九一八年二月二五日
- 10 「函館毎日新聞」一九一八年二月二七日
- 11 「正教時報」第七卷第七号（一九一八年四月五日発行）
- 12 「大正七年大日本正教會神品公會議事録」
- 13 「正教時報」第七卷第二二号（一九一八年一月二〇日発行）
- 14 「正教時報」第八卷第七号（一九一九年五月一日発行）
- 15 この時期については「日本正教史」（牛丸康夫 日本ハリストス正教会教団 一九七八年）第三部第三章に詳しい。
- 16 「札幌正教会史百年史」札幌ハリストス正教会 一九八七年
- 17 「函館新聞」一九二五年二月九日、「函館日々新聞」一九二五年二月一七日

- 18 講習会は函館水上警察署（旧函館西警察署、現在の函館市臨海研究所）を会場にして行われた。
- 19 「正教時報」第一七卷一二号（一九二八年二月一日発行）
- 20 「正教時報」は、現在も発行され一四五一号を数え、日本のキリスト教機関誌としては最古の伝統を持つ。
- 21 「日本正教史」（牛丸康夫 日本ハリストス正教会教団 一九七八年）第三部
- 22 日本の正教会における機関誌については「正教時報」に掲載されたセラフイム主教座下の論文が詳しい。
- 23 「正教時報」第二一巻第八号（一九三二年八月二〇日発行）
- 24 「正教時報」第一五巻第一〇号（一九二六年一〇月二〇日発行）
- 25 「正教時報」第二二巻第八号（一九三三年八月二〇日発行）
- 26 「正教時報」第二六巻第二号（一九三七年二月一日発行）
- 27 「正教時報」第三二巻第二号（一九四二年二月一日発行）
- 28 「正教時報」第一四三三三三号（二〇一〇年二月二〇日発行）、第一四三四号第（二〇一〇年三月二〇日発行）
- 29 「正教時報」第三二巻第二号（一九四二年二月一日発行）
- 30 「昭和一八年 長司祭会議事録」
- 31 この時期の教会内の事情については、前掲「日本正教史」及び「正教時報」第一四三四号（前掲）掲載のセラフイム辻永主教座下の論文に詳しく述べられている。
- 32 一九世紀のロシア絵画の巨匠ヴァシリイ・イヴァノヴィチ・スリコフ。完成作はモスクワのトレチャコフ美術館に所蔵されている。
- 33 「正教時報」第九三一号（一九六七年八月二〇日発行）、第一三九七号（二〇〇七年二月二〇日発行）

第三章 戦後から新たな時代へ

戦争が終わると、函館の町にも進駐軍が上陸した。パーネル准将率いる各部隊は市内数か所に駐屯施設を置き、接収した函館水産専門学校（現・北海道大学水産学部）などを兵士宿舎とした。

生きるために必要な物資は戦災者や引揚者の救護用、農漁業および山林、炭鉱労務者へ送ることが優先され、一般市民は未だ配給に頼るのみで、その実態は戦時中よりも忍耐を強いられた。開市が並ぶ松風町は人で溢れたが、手に届かぬ高価格で生活に苦しむ人々は進駐軍が七重浜に廃棄する残飯や手つかずの缶詰、携行食などに群がったという。

戦時中、信徒は異宗教に対する警戒やロシア人の摘発、逮捕を目の当たりにして教会には寄りつかず、教会活動もひたすら世間を刺激しないよう控え目に行われた。神品教役者やかつて教会を盛り立て支えた議友らも老齢の域に達し、既に世を去った者も多かった。境内に残された家族は住居の裏庭で耕作を行い、耐乏生活を凌いだと話す。

イアコフ藤平神父の永眠 一九四六年（昭和二一）一月八日、降誕祭の祈祷に立たれた翌朝、イアコフ藤平神父は永眠した。函館正教会の管轄は四年と短期間であるが、軍事化における「新体制」に協力するため、信徒の精神的打撃を受けた金属類の供出や教会規則及び名称変更などと祈祷以外の業務にも多忙を極め、一九四四年（昭和一九）の秋頃からは体調不良で祈祷に立つことも少なくなっていた。藤平神父を記憶する信

徒は「とても優しく穏やかな神父様とマトシカでした。終戦の前後で教会活動も公にはできず、境内でひっそりと暮らした時代だった」と話す。「メトリカ」には「埋葬日は一月二日、函館に於いて火葬、東京に埋葬」とあり、埋葬執行者は教役者がいなかったためフアディ桜井謙の名が記されている。

管轄司祭の不在 藤平神父の永眠により、函館正教会は翌年のニキタ近藤昇太郎の司祭叙聖まで、神品教役者不在の時を過ごすことになる。司祭不在では土曜、日曜日の奉事は勿論、祭日祈祷も行われず、緊急時の対応を北海道に唯一人となった札幌正教会のイアコフ猪狩神父に頼れるはずもなかった。このような状況で参拝数は激減し、函館に在住するロシア人信徒の中には精神的慰安を他派の教会に求める者もあった。

敗戦した日本では戦後処理が始まった。その最中に開催された公会は、ソ連とアメリカの帰属問題に揺れ、再び「独立」が叫ばれたが、孤独な日本正教会の道行きはGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）に委ねられ、アメリカのロシア正教会より主教を迎え入れることが決定する。ニコライ小野主教は既に四月の臨時公会で引退したが、公会決議に反動した人達によって事態収束は容易に進まなかった。終戦前後に、セルギイ府主教をはじめ、聖ニコライの教えを受け継ぎ、礎を築いてきた神品教役者らが一三人も永眠したことが、解決が長引く一因となった。

一九四六年（昭和二一）七月二二日、二三日に行われた公会で、函館正教会は教役者派遣を請願しているが、本会は地方教会の人事に気を配る余裕はなかった。議友会で推薦されたニキタ近藤は伝教者の祝福を承認されたが、司祭叙聖は年明けまで先延ばしになったのである。

着任後の聖務は戦死者の納骨やパニヒダが連日であった。「メトリカ」には七人の戦死者が見られるが、着任早々に書き始めた「会議関係書類綴」には、戦死者の記録の他、樺太、満州、中国、朝鮮に渡り未だ引



69 ヴェニアミン大主教の巡回

き揚げていない信徒が約二五人とある。

戦後初めての信徒総会は本会よりサムイル鵜澤徳寿神父が巡回し、九月二二日に行われた。近藤伝教者の挨拶文には「……我が函館教会の過去一ケ年又曲折多端の状態を巡りつつも幸ひ今日在るを得たるを共に感謝すべきであると考ふ。是れ偏に天帝の守護の賜なるは勿論なるも他面議友諸兄弟を中心とする信徒各位の信仰を基調とせる愛会の熱意と協信共協和の結果に外ならざるものと感銘しつつ反面不當私の力を痛感し各位の御期待に途甚だ遠きものありたりと自覚し情切なるものあるを御諒承願う。」¹とあるが、年内中には婦人会、日曜学校、青年会を再開させ、年明けの一月七日に降誕祭祈祷と弁当持参の祝賀会が行われた。

この頃は、聖パンの材料である小麦をはじめ葡萄酒や蠟燭といった特別な品は配給申請によって支給されたが、クラフツオフやズヴェーレフといった函館在住のロシア人や函館CIC隊長ポリャ

ンスキー大尉が調達、献品したことが記録にある。

着任した直後の近藤伝教者が記した教務概要は、以下の通りである。

○議友会 後藤・茂木・齋藤・齋藤・高島・村井・鈴木・浅野

○信徒概況

信徒総数 八三六人 信徒現在数 七六戸二〇七人

挙家信徒 三七戸

子弟の状態 未就学子女 一五人／国民学校 三〇人／中等学校 一五人／その他 一五人

○祈祷概況

主日公祈祷 第一、三日曜日 八回 二五八人 毎回平均三〇人

祭日祈祷

その他、感謝祈祷 三／埋葬 二／パニヒダ 三五

廻家祈祷 一か月平均三八戸

未訪問信徒 一か月平均三二人

一般参拝者 一か月平均四七人

一九四七年（昭和二二）一月七日、アメリカの正教会から派遣された主教ヴェニアミン（バザリカ）座下が東京本会の大聖堂に立った。同月二〇日に開かれた臨時公会において、日本の正教会は同座下を主教として推戴することを決し、五月には大主教に昇叙され、函館正教会を巡回したのは六月二二日のことであった。

翌年三月二三日、ヴェニアミン大主教はフィオフェル府主教の祝福によって首座主教に着座した。これは日本の正教会がモスクワ総主教との関係を断絶したことを意味し、この日をもって米国人主教が統括する時代が始まるのである。

一 司祭ニキタ近藤昇太郎の時代

一九四七年（昭和二二）～一九五九年（昭和三四）七月

ヴェニアミン主教が来日した頃、敗戦国日本は非常に貧しい状況にあった。東京本会の主教館は戦後の混乱で荒れ果て、ヴェニアミン主教はホテルに宿泊しながら本会に通う日々を過ごす。

一九四七年（昭和二二）一月二六日、近藤伝教者は、ヴェニアミン主教の按手により司祭に叙聖された。

その翌年、ワシリイ大村和志理が上磯正教会の伝教者として祝福され、函館、上磯正教会はようやく神品教役者が常駐する教会に戻った。同年六月一日に行われた公会には、函館正教会が提出した建議案が連なっている²。

建議案

- 日本正教会再建に関する基本方針に関して
- 通常公会開催期日変更方の件
- 中央対地方教会連繫改革化の件

○函館復活聖堂附属地敷地買収方の件

○函館復活聖堂修繕費調達方御配慮相成度件

イシドル中居伝教者の祝福 戦後、引揚者の上陸地になった函館は「悲喜こもごもの喧騒」の街に変じた。

市内には収容施設が出来、就職先のあっせんも行われたが、住宅と仕事の両方を得る事は難しく、一九四九年（昭和二四）の調査では二万人の引揚者が函館に定着したとある。

一九四八年（昭和二三）の公会では教会敷地の買収と入手困難な聖務用資材（乳香、葡萄酒、蠟燭、聖書、祈祷書他）の配布を請願した。その翌年、議友会は教役者不足を改善するため青年信徒イシドル中居真行を伝教者に推薦、同年七月、自給伝教者としてヴェニアミン主教の祝福を得た。中居伝教者は二〇〇九年（平成二一）六月の東日本主教々区会議において六〇年の奉仕を表彰されている。

正教青年会による教会再興 終戦から四年、巷にはキリスト教ブームが到来した。一九四七年（昭和二三）、ミッション系私学の調査団が来函し、ポケット聖書の普及に宣伝カーが街を巡回した。このポケット聖書は無料で配布され、キリスト教の布教が全国的な広がりを見せる。

やがて、函館正教会にも戦地から青年たちが戻り、参拝者も徐々に回復した。緑溢れる広い境内は若人の憩いの場となり、そこから見える市街や津軽海峡の穏やかな景色はやっと訪れた平和を実感させた。聖歌の練習場所であった司祭館からは、喜び溢れる力強い声がよく聞こえてきたという。

一九四八年（昭和二三）一〇月三十一日に結成式を挙げた青年会は、毎週火曜日に会合が開かれた。当時の会員は三〇人、イシドル中居伝教者、パウエル村井正雄、ニコライ村岸勝郎、ウラジール橋詰展昭、デミ



70 「北海道正教青年大会」に参加した青年たち

トリイ小川浩、シメオン高島英夫、ミハイル茂木幹彦、イオアン茂木馨、ワ
ルワラ西岡光枝、アントニーナ近藤ミツ子、ルキヤ三俣曜子、ソフイヤ板倉
京子など同世代の男女が集まり、会報も発行された。現存する第二号（一九四
九年四月二四日発行）にはタイトルが「ひつじ」と記されている。巻頭に近藤
神父の訓話と啓蒙的記事があり、続いて青年達のエッセイや自作の詩、短編
小説の他に日曜学校の作文も掲載されている。

活動が活発になると、各地にいる青年信徒との交流を希望する声も上がり、
一九四九年（昭和二四）八月二〇日、函館正教会を会場に「北海道正教青年大
会」が行われた。「札幌正教会百年史」には「聖歌隊十四名が函館に出かけて、
函館教会青年会と共催で北海道正教青年大会を開き、聖体礼儀では左側の聖
歌隊を務めて右側の函館聖歌隊との兩列による聖歌で信徒に深い感銘を与えた……。」と記されている。札幌
正教会の青年会には函館から移住した信徒子女らも多く、繋がりは深かった。

教会敷地の買収 函館正教会の敷地は、ロシア領事館より宣教団に移譲され、聖ニコライ永眠後にセルギ
イ府主教名義になっていた。また、国有地であることから地税は本会が負担していた。

四月三日、函館正教会聖堂敷地買収期成委員会結成

……然るに今般この聖堂敷地に関し国有地たる関係上政府よりこれが買収取方を促され、而して周囲の状
況よりしてこの際を惜いで買収致さなければ益々経済上の苦痛は累積せらるるものと信徒一同に依り結論

聖堂敷地買収の献金報告

募金総額 333,820円

内訳	
一、管内募金額	108,500 円
(一) 函館教会信徒	66,500 円
(二) 婦人会	5,000 円
(三) 青年会	2,000 円
(四) 上磯教会信徒	20,900 円
(五) 黒松内	6,800 円
(六) 在函露人信徒	6,000 円
(七) 其他 篤志家	1,300 円
二、道内募金額	38,920 円
一、猪狩神父管内	37,420 円
(イ) 札幌教会信徒	23,220 円
(ロ) 小樽	6,000 円
(ハ) 旭川	2,300 円
(ニ) 釧路	1,100 円
(ホ) 斜里	3,000 円
(ヘ) 室蘭、砂川、新冠、苫小牧、厚真 及び三笠在住信徒	1,800 円
二、其他	1,500 円
三、全国募金額	186,400 円
(一) 東京本会	70,000 円
(イ) 大主教座下祝福	50,000 円
(ロ) 宗務局協助	20,000 円
(二) 京浜地区	104,300 円
(イ) 在京邦人信徒	20,300 円
(ロ) 在京浜露人信徒	34,000 円
(ハ) 在京特志外人	50,000 円
(三) 全国教会	11,000 円
(横濱、高清水、鹿沼、岩谷堂、盛岡、気仙沼、大阪、日形、半田、神戸、大槌)	
(四) 其他	11,000円

1950年6月11日函館ハリストス正教会聖堂敷地買収期成会

せられ、先般来大主教「ヴェニアミン」座下並びに東京宗務局に種々陳情致し、結局この際萬難を排し未
記の如き予定を以て敷地買収目的に推進致すべく決したのであります。……⁴

一〇月一四日、近藤神父は土地買収資金を募るため東京へ向かった。献金報告が載っている「正教時報」第七二五号（一九四九年一月一五日発行）を見ると、滞在中の働きが結実し、累計額はほぼ目標に到達している。一月二日、教会敷地は約三〇万円で買収し、同月一四日に移転登記が完了した（敷地内建築物の保存登記については、一九五二年（昭和二七）三月に完了する）。

一九五〇年（昭和二五）六月一日、「ニコライ大主教御来函九〇周年式典」を挙行し、併せて感謝祈禱を行った。この日、近藤神父には信徒一同より胸掛け銀製十字架が贈呈された。

教会名称の再変更 一九五〇年（昭和二五）四月五日、戦時中（一九四二年（昭和一七））に変更した教会名称「函館基督正教会」を「函館ハリストス正教会」に改称した。

日曜学校の復興 戦後、子供達の教育環境はGHQの指導により大きく変化した。給食には牛乳が登場し、教育制度の改革と共に、六三三制が発足し、国民学校は小学校と改称され男女共学になった。

日本正教会内の動きとしては、一九四七年（昭和二二）八月に豊橋正教会で開催された「東海正教青年大会」を機に、各地で盛り上がる青年会活動に押され、「全国正教日曜学校教師会」が一九五〇年（昭和二五）八月に東京で開催された。函館正教会でも降誕祝賀会において、しばらくぶりに豊富な演目で信徒を楽しませた。

教会報「恩寵」の存在 函館正教会が発行した印刷物といえば、これまで日曜学校の会誌や聖歌譜などが



71 祝賀会の余興練習



72 日曜学校と青年会

降誕祭祝賀会プログラム 1950年

1	神父挨拶	
2	聖書朗読	
3	遊戯「夕焼け小焼け」	
	桃太郎	横田はるみ
4	舞踏「峠」	茂木弘子
5	独唱「ちんちん千鳥」	
	〃 「ペチカ」	
6	遊戯「森の小人」	齋藤孝子、横田美子
7	舞踏「梅にも春」	久保智恵子
8	木琴独奏「お手々つないで」	鈴木純子
	〃 「お馬のかあさん」	
9	遊戯「雪の降る夜」	横田はるみ、小島文義
10	叱られて	齋藤留美子

楽譜「きよしこの夜」付き

あったが、定期的刊行物の存在は、「正教時報」第七五三号（一九五二年四月二五日発行）に「恩寵」すでに十一号まで発刊して教会だよりとして信徒の連絡紙に当たっている。聖句、教会だより、説教、教会用品等の解明を主としている。」との記載を見つけた後、実物を確認した。

この「恩寵」は緑塔会が発行しており、教会に現存するのは「久しく途切れていた」という創刊五月号と

六月号（いずれも一九五一年発行）で、ガリ版刷り一枚に奉事や行事予定の他、信徒動静や議友会の内容、特集としてトボリスクの府主教イオアン原著「向日葵」が載っている。

レンセン博士による教会の印象 一九五三年（昭和二八）九月に来函したジョージ・A・レンセン博士の手記「Report from Hokkaido: The remains of Russian culture in northern Japan」⁵は、当時の函館正教会の様子を知ることが出来る外部資料である。博士はこの年の降誕祭に教会を訪れ、聖堂や信徒等の様子を記した。

この頃の教会の外観は、お世辞にもきれいとは言えないものだった。おまけに太平洋戦争中に聖堂の鐘も供出されていた。……畳や小さなストープのおかげで日本風にはなっているが、ビザンチンの様式の内装はよく保たれており、筆者が参列したクリスマスの礼拝は感動的だった……「中略」……クリスマスは日本では祝日ではないので、男性はほとんど仕事を休めず、朝の礼拝に参列するのはおもに女性と畳の上ですっかりくつろいでいるこどもたちであった。女性たちは非常に日本的な雰囲気を出している。というのは男性はたいしては洋服を着ているのに、女性はいまだに色鮮やかな和服を着ているのである。言うまでもないが、礼拝はロシア式で、音楽もロシア風、礼拝の言語は日本語である。

イリネイ主教の来日 一九五三年（昭和二八）七月、ヴェニアミン大主教は教会の戦後復興に目処がついたとして公会で帰米を発表した。後任として日本に派遣されたのは主教イリネイ（ベキュシ）座下であった。戦後続いた教会内の紛争は、九年という長い年月を経て、ようやくニコライ小野主教との和解調印に辿り着いた。この間、函館正教会は、「両者の愛会的提携を切望」¹しながら推移を静観してきた。「正教時報」第

七七七号（一九五四年六月二五日発行）は「和解特集号」とされ、「今回イリネイ主教座下の深き愛会の精神により、小野主教座下と進んで会見せられ、小野主教座下また釈然としてこれに応え、両座下の間に明朗なる和解の話し合いを決定し、一九五四年四月二十四日午後二時、大聖堂に於いて荘厳なる調印式を行い、続いて両座下司会のもとに感謝の祈禱を献ぜられました。」と調印に至った経緯を報告している。

一九五四年（昭和二九）九月一日、イリネイ主教は函館正教会を巡回した。翌日の聖体礼儀は約一二〇人の信徒が参拝し、聖歌隊をはじめ祈禱の出来栄えに満足の旨を述べられた。祈禱中、近藤神父はカミラフカの祝福を受け、「正教時報」第七八二号（一九五四年一月二五日発行）には「望外の事に信徒一同、心から感謝の念を深くした。」とある。

同年一〇月一八日、正教神学校が再び開校し、イリネイ主教自らが校長となり神品教役者養成機関の復興に力を入れた。開校時の教授陣は「サムイル鶴澤徳寿神父、イオアン吉村忠三神父、テイホン太田顧四郎神父、ワシリイ武岡武夫神父、マトフェイ鈴木与治郎、ペトル内山彼得、モイセイ馬場脩、パエル高野槌蔵等で皆、大主教ニコライの門徒であり生き証人⁶」であった。

洞爺丸台風による被災 九月二一日、ヤップ島付近で発生した台風一五号（後に「洞爺丸台風」と名付けられた）は、二六日未明に鹿児島島を通過し、その後、日本海を早い速度で北上、同日夕方には北海道へと迫った。この台風で発生した強力な暴風雨は、函館港内外で青函連絡船「洞爺丸」他四隻を沈没させ、死者・行方不明者約一四〇〇人という海難史上三番目



73 婦人会による卵染め

の大惨事になった。岩内に於いては三〇〇〇戸余りを焼失する大火が発生し、樽前山周辺の原生林も壊滅的な被害を受けた。函館市内でも家屋の被害は甚大で、聖堂も屋根に掲げたクーポルの十字架が折れ、漆喰壁も著しい損傷を受けた。

「洞爺丸」の沈没後、近藤神父は犠牲者の多くが漂着した七重浜に足を運び、かつて議友に名を連ねたサワ植松悦郎を発見した。国鉄職員であった植松は、退職後に保養所があった弟子屈に居を構え、釧路正教会に転属していた。この頃、弟子屈の名所である屈斜路湖周辺は上等な蜂蜜が採取されることで知られたが、所用で上京する際、イリネイ主教や本会にいる神父らへの土産として蜂蜜（二斗缶）を手に乗船したのが二六日だった。乗船前、植松は函館正教会の主日聖体礼儀に参拝し、近藤神父や信徒らと久方振りの再会を喜んだ。

植松の葬儀は台風被害を受けた函館正教会で行われた。また、翌月一七日には本会大聖堂において遭難者のために、パニヒダが執行されている。

一九五五年（昭和三〇）、年明け早々に行われた臨時の信徒総会において、台風被害を受けた聖堂の修復が決定した。

一月十六日、午後一時、於講堂

洗礼祭祈禱後、議友会及び婦人会の合同新年会の席上、緊急信徒総会の形式を以て、聖堂修復に関する意見交換の協議会を開催。左記事項を協議、可決す。出席者二十一名⁷

函館正教会は去年九月台風十五号のため不測の被害を加重せられ、最小限度の修理を急ぐこととなり、

本年融雪期の五月に着工九月迄に完成することに決定した。しかし総工事費約三十万円を要するので、各教会に対しても援助を懇請することとなり、函館復活聖堂修理期成委員会ワシリイ斎藤和理外六名を以て御願の書状を差し出した。

全国の教会、信徒の援助を受け聖堂の修理は完了した。一〇月二〇日、主日聖体礼儀において教会先覚者の記憶をなし、感謝祈祷が行われた。「正教時報」第七九一号（一九五五年一〇月二五日発行）には「私共が神の試練に耐えつつ少しでも、神の光栄を輝しうることが出来た喜びに感を深くいたして、更に教会を愛する心持ちに一致団結いたし又の来る可き日に供うる決意を新にいたした次第であります。因みに所要経費といたしましては聖堂補修工事に金参拾万円、講堂及び附層建物三棟の屋根補修工事に金貳万円、其他経費約貳万円、合計金参拾四万円となりました。これは地方教会としては大きな額でありました。けれども今回幸いに修理完了して感謝の祈祷を捧げることが出来た訳であります。」と近藤神父による報告が掲載されている。

ドン・コサック団の来函 一九五六年（昭和三二）、戦後の日本に一大ブームを引き起こしたドン・コサック団が来函した。話題の合唱団を来日に導いたのは興行師・神彰である。神氏は函館商業高校入学後、白岩神父からロシア語を学んだ。

一段は全国三一か所で演奏を行い、テレビ、ラジオの中継で国中がロシアンハーモニーに魅了された。



74 駅前で歓迎を受けるドン・コサック団

同年四月二三日、急行洞爺で日程外の特別公演を行うため函館に到着し、近藤神父、聖歌隊、信徒有志約四〇名が函館駅で「常に福」を唱和し出迎えた。同日夕方、HBC劇場に於ける公演会は超満員だった。

函館ロシア語研究会 一月二五日、気軽にロシア語に親しみ勉強をしたいという同好者の集まりをきっかけに、「函館ロシア語研究会」が誕生した。創始者はシベリア抑留を経験した本間哲男氏で、講師には教会の露語研究会会員で日魯漁業株式会社通訳ミハイル成田実の妻ナデジタ成田が務めた³。

宗教学人の登記完了 函館正教会の宗教学人登記については、「会議関係書類綴」にある一九五七年（昭和三二）一月六日に行われた信徒総会公務報告より引用する。

○宗教学法人法に依る「函館ハリストス正教会規則」 認証手続

一九五一年（昭和二六）九月二十五日、道知事宛申請

同年 十月二日 右、受理の通知あり

○宗教学人格取得に関連し、教会所有財産（聖堂附属敷地及び建物）は昭和三十一年六月二十一日付をもつて承継登記を完了す。

○従来本会の維持財団の名儀になっていた教会所有不動産（宅地）、即ち宝町、曙町、西川町、堀川町は、昭和三十一年八月三日無償贈与を受く。但し、登記は経費の関係上当之を行わないこととした。

シャンデリアの献納 一九五七年（昭和三二）、函館正教会にシャンデリアが献納された。金属供出によ

って聖所のパニカジーラ（大燭燈）を失ったため、戦後もイコノスタスの側面に設けたランバーダや供出を免れたいくつかの燭器が照明として使われる状況だった。献納の経緯については「正教時報」第八〇二号（九五六年九月五日発行）に詳しく記されている。

当会の大小各シャンデリアは六個の聖鐘と共に、終戦前供出の運命にあい、淋しくなっていたが、昨年春以来函館ドック会社で貨物船マリヤ・エル号（一万二千五百トン）外一隻の建造関係で滞在中の船主ギリシヤ人デミトリー・ロース氏夫妻は、今回帰国に先立って突然聖堂用シャンデリア（高さ一米半、直径一米、六灯、カットグラス飾、時価約八万円）を配線工事費（約四万円）と共に献納の申出があり、堂内照明のため至聖所と啓蒙所の電灯取付けも奉仕の旨重ねて申出あり、突貫工事を進め一月廿日洗礼祭にはこれを完了して喜びの光を点ずることが出来た。そこで、当日祈禱後、日、希两国信徒約六十名参集、感謝を献じ、神恩の奥妙を語り合ったが、婦人会よりエカテリナ・ロース夫人に日本人形を贈って感謝の微意を表した。なお主教座下の祝福を得たロース氏夫妻への感謝状は一月廿六日、引渡しをうけて北米に出港前の同船及び国旗成聖式に赴いた近藤神父より伝達された。

教会墓地の整備

一九五八年（昭和三三）三月一日、台町にある教会信徒墓地の整地と垣柵の修理工事が工費一六万六〇〇〇円を掛け四月二七日に無事完了し、復活祭後の墓地祈禱において感謝祈禱が行われた。¹⁰

墓地に関連する諸工事は、一九九〇年（平成二）九月に隣接する聖パウロ・シヤルトル修道会墓地との境界にブロック塀を設置、一九九三年（平成五）のフェンス敷設（同年五月二日に成聖）と続き、二〇〇〇年（平成一二）八月には墓地中央に緑の屋根と金色のクーポルが美しいチャソープニヤ（墓地聖堂）風の共同

納骨堂を建立した（口絵写真18参照）。

二 司祭イアコフ出原惣太郎の時代

一九五九年（昭和三四）八月～一九六一年（昭和三六）六月

近藤神父の転任と出原神父の着任　一九五九年（昭和三四）七月、全国公会において近藤神父は横浜正教会に転任並びに宗務局長就任が決定した。函館正教会の新しい管轄司祭は、釧路正教会のイアコフ出原惣太郎神父が任命を受けた。八月一六日、出原神父は引き継ぎ業務のため来函し近藤神父と主日聖体礼儀の陪禱に立たれた。祈祷後の歓送迎会には約六〇人余の信徒が集まり、戦後復興の苦楽を共にした近藤神父とは「涙の別れ」だったと「正教時報」第八三八号（一九五九年九月五日発行）に記されている。

サファイロフ氏の永眠　一九六〇年（昭和三五）一月一九日、ロシアから移住し最古参になっていたサファイロフ氏がトラック事故の負傷が回復せず永眠した。享年九二歳、葬儀は出原神父が執行し、船見町（旧、台町）の教会墓地に埋葬された。サファイロフ氏は一九四一年（昭和一六）頃、当時の函館駅長須田喜四郎氏の四女・正子と結婚し家庭を持った。夫の永眠から二か月、妻の正子は出原神父から洗礼をうけ、永眠後は夫サファイロフ氏のもとに葬られた。

ニーコン大主教の来日　一九六〇年（昭和三五）七月一三日、イリネイ主教に代わって大主教ニーコン

(グレーヴェ) 座下が来日した。この年以降、主教品の交替が続いた。

一九六〇年七月一三日 大主教ニーコン(グレーヴェ)座下、来日(〜一九六二年六月、病気により帰米)

一九六二年六月一〇日 アラスカの主教アンヴロシイ座下、臨時統理として来日(〜同年一〇月九日帰米)

一九六二年一〇月九日 大主教イリネイ座下(先に派遣されたイリネイ(ベキュシ)主教と同一人物。一九

六五年に全米及びカナダの府主教、ニューヨークの大主教に先立)、臨時統理として再来日。

一九六二年十一月一日 主教ウラジミール(ナゴスキイ)座下、「京都の主教及び副主教」として来日。

ニーコン大主教が函館正教会を巡回したのは九月八日のことだった。正午から行われた感謝祈禱には上磯(旧、有川)や黒松内の信徒も駆けつけた。この日、子供達にはニーコン大主教よりアイスクリームが振る舞われた。

三 司祭イオアン厨川勇の時代

一九六一年(昭和三六) 一〇月〜一九八〇年(昭和五五) 六月

出原神父の休職とイオアン厨川神父の着任

一九六一年(昭和三六) 六月、出原神父は体調不良のため休

職願を提出、受理された。翌月の公会で、札幌正教会イアコフ日比義夫神父の臨時兼任が決定し、札幌正教

会自給伝教者イオアン厨川勇が函館正教会の後任司祭に指名された。

公会後、厨川師は見習い実習を受けるため上京し、ニーコン大主教の按手によって一〇月二二日に輔祭、同月二九日に司祭叙聖という経緯で函館正教会に着任した。

ウラジーミル主教の来日　一九六二年（昭和三七）、ニーコン大主教が体調不良で帰国した後、アラスカの教区からアンヴロシイ主教が臨時統理者として来日した。ほどなくしてイリネイ大主教が新たに派遣され、一月一日、補佐の任を受けたウラジーミル主教が「京都の主教」として来日する。しかし、実際には東京の本会で日本正教会統轄者としての業務を務めた。

上磯ハリストス正教会の会堂完成　「正教時報」第八七五号（一九六二年一月二〇日発行）には、同年に完成をみた上磯（旧、有川）の祈りの家「昇天会堂」について報告記事がある。

八月一六日、旧会堂の解体に着手、同十九日定礎を行った上磯教会の昇天会堂は、其後工事順調に進捗し、九月二十二日竣工落成した。この日午前九時から建物の成聖の祈禱を行い、引き続き聖体礼儀を執行後、感謝祈禱を献げ、管轄司祭厨川司祭による司禱のもと、佐藤誦経者の読誦、マリヤ大村姉が指揮する聖歌隊、坂下執事長以下の奉仕により盛大荘厳に行われた。函館からは厨川神父夫妻、中川顧問夫妻、中居伝教者、下田執事、横田夫妻、小川、齋藤、森諸兄弟等も上磯正教会の祝賀に参列した。

ウラジーミル主教の来日と北海道巡回　一九六三年（昭和三八）に来日したウラジーミル主教は、九月に

北海道巡回に赴き、同月四日、函館正教会を訪れた。「正教時報」第八八九号（一九六四年一月二〇日発行）に巡回報告がある。

ウラジーミル主教は近藤神父、新妻神父、大浪神父を帯同して北海道巡教に赴かれた。九月一日、釧路正教会管内の巡回を経て函館に到着されたのは四日の夕方であった。厨川神父と信徒二十数名がウラジーミル主教を出迎え、聖堂に赴いて感謝祈祷及び記念撮影が行われた。翌日は教会墓地にてパニヒダを行い、函館図書館と市役所を訪問、函館市長の面会后、上磯正教会で感謝祈祷及び懇談会が催された。九月六日、黒松内の笠原家にてパニヒダを行った後、次の巡回地、札幌正教会へと向かわれた。

北海道信徒退会と基金の設立 一九六五年（昭和四〇）五月、第一回北海道信徒大会が札幌正教会にて開催され、函館正教会から一四人が参加した¹¹。

前年に発生したアラスカ大地震は米国に甚大な被害をもたらした。敗戦国の日本正教会に対し支援を続けてきた米国正教会も震災によって送金を中止せざるを得ない状況になった。日本正教会は財政危機を再び迎えることになったが、この対策として直ちに定額献金の増額を信徒に打ち出した。

北海道信徒大会は教会の財政問題を核に、地方教会が種々論議する機会として設けられた。大会の実施によって、その後、「北海道地区基金」が設立され一九六七年（昭和四二）に発足した。



75 ウラジーミル主教の巡回

基金設置の目的は財政難にある教会を相互扶助し、さらに教勢発展にも寄与するとしたが、各教会にとつて切実な神品教役者の生活保障や給与改善も含まれていた。一九七三年（昭和四八）、苫小牧正教会のマリ
ン佐羽内智が二〇〇万円を献じたことにより基金の確立は早期実現を果たす。その後、この基金は一九七
九年（昭和五四）に解散、東日本主教区特別基金（「佐羽内基金」とも呼ばれる）に統合され、司祭の伝道
費支給をはじめ、司祭館の新築や改修費に充てられた。函館正教会でも一九七七年（昭和五二）の司祭館改
築の際、五〇〇万円を借入、一九九〇年（平成二）に完済した。

第二回の大会は一九六六年（昭和四一）五月一六日に函館正教会を会場にして行われている。道内各教会
より五二人の信徒が参加した。

会期中の主日徹夜祷と聖体礼儀は、サワ大浪神父（東京）、イアコフ日比神父（札幌）、ペトル及川神父（釧
路）によって行われ、厨川神父は聖歌隊の指揮に立った。第一部は各神父による講話、第二部は日本正教会
発展の具体策を協議し、議題に基づき函館正教会代表の四人（シメオン高島英夫、ティフォン伊藤真志雄、イ
シドル中居伝教者、ティモフェイ下田長吉）が登壇して、教役者の数、質、待遇及び保障について話し、意見
交換、質疑応答が活発に行われた¹²。

聖堂修復に向けた市民運動 一九六七年（昭和四二）一〇月、北海道新聞に聖堂の老朽化を伝える記事が
掲載されたことを受け、函館観光協会が視察のため来堂し、函館市建築部に調査を依頼するという外部から
の「修復」実現化を計る動きが起こった。教会では一九一六年（大正五）に再建された二代目聖堂の成聖以
来、部分的な修理、修復工事を重ねてきたが、聖堂の外観は函館市民も憂慮するほど損なわれ、屋根は前年
から雨漏りが発生していた。

教会では翌年に開教一〇〇年記念式典を控え、記念事業として修復を予定していたが、教会の蓄えは乏しく、限られた信徒による献金では困難を強いられるのは必至であった。そこに視察の報道が功を奏した。函館観光協会、商工会議所、市議会有志、函館工業高校建築科教師等により、一九六八年（昭和四三）に「函館ハリストス正教会聖堂修復後援会」が設立され、主旨に賛同し会員になった者は函館市各界に及び、年明けと共に始まった募金活動は秋頃には目標額の四〇〇万円を超えた。

後援会の勢いに励まされ、教会でも「函館ハリストス正教会聖堂修復実行委員会」を結成、修復事業達成に向け実務を担当して協力を申し出た上磯正教会の信徒と共に募金運動を展開した。

大鐘の寄贈 一九六七年（昭和四二）一二月、ギリシヤ人船主ジョン・リバノス氏が函館ドック株式会社に発注した船の進水式のために来函した。彼は同会社に二〇隻以上もの造船発注をしたことから、「函館市より「榮譽市民」の称号を授与された人物であった。

父親がギリシヤ正教会司祭という同氏は、来函する度に教会を訪れた。鐘のない鐘樓の事情を知り大鐘の献納を約して帰国、数か月後、函館に向けて鐘を発送したとの知らせが届いた。

翌年一二月、ギリシヤから海を渡って届いた大鐘は直径九五センチ、重量は五七五キログラム、側面は七つの聖像（聖ゲオルギイ、生神女マリヤを抱く聖アンナ、聖天使ミハイル等）で装飾されていた。

同月一九日、函館ドック株式会社の協力を得て設置が完了、二八日午後一時に鐘の成聖式が行われ、一九四二年（昭和一七）の金属供出以来二六年ぶりに鐘の音を函館の空に響かせた。¹³



76 リバノス氏献納の鐘

修復完了

聖堂の修復工事費用は後援会や信徒等の協力によって目途が付いたが、屋根の施工計画に問題が発生し、着手に遅れが出ていた。原因は銅板の屋根を緑に発色させる方法にあった。厨川神父は講師として勤めていた函館有斗高校工業化学科に相談を持ちかけた。技術開発の協力を応じた同高校は新しい技法を開発して銅板屋根を鮮やかな緑青に変化させた。

一九六八年（昭和四三）二月二十八日、修復工事を終えた聖堂と大鐘の成聖式が後援会や工事関係者と共に行われた。美しくなった「ガンガン寺」の鐘の音は、信徒と函館市民が成し遂げた「協働」を祝福するかのようであった。

ロシア正教会への復帰　一九六九年（昭和四四）八月、ロシア正教会と米国正教会（メトロポリア）在米ロシア正教会府主教庁）の和解交渉が開始される。「東京復活大聖堂修復成聖記念誌」にはその経緯が記されている。

九月十八日、アメリカのメトロポリア（府主教庁）から突然、アレクサンドル・シュメーマン神父が来日する。来日の目的は在米ロシア正教会（メトロポリア）がモスクワ総主教庁と教会法的正常関係に復帰し、米国正教会は聖完全独立教会となること、その条件として、戦後、姉妹教会にある日本正教会との関係を絶つこと、日本正教会もロシア正教会に復帰することを伝えるためであった。すでにロシア正教会と米国正教会では、日本正教会がモスクワ総主教庁との関係を復帰し、教会法に準拠した聖自治独立教会となるべきであるという、取り決めがなされていた。

一〇月一九日に開かれた臨時公会では、日本正教会の自治独立と主教を複数推挙することが議せられ、鹿兒島正教会のワシリイ永島新二神父とセラフイム(シグリスト)輔祭が候補者として選立された。

セラフイム(シグリスト)師は米国ニューヨーク出身で、聖ウラジミール神学大学卒業後に来日、高校の英語教師を勤めた後、修道士になり、一九七〇年(昭和四五)に掌院となり仙台正教会へ赴任した。

修道誓願を立てた永島神父は掌院に昇叙、フェオドシイと聖名を改め、十一月二日、東京復活大聖堂に於いて、サンフランシスコのイオアン大主教臨席の下、ウラジミール主教の按手によって主教に叙聖された。

十一月二六日から二八日の三日間、東京の法曹会館に於いて三国会議(モスクワ総主教庁、米国正教会、日本正教会)が開かれ、聖ニコライがもたらした日本正教会は自治独立の資格を得たのである。

ウラジミール主教は二月一九日の臨時公会で首座主教に選立された。

聖自治独立教会へ 一九七〇年(昭和四五)四月二日、日本正教会を代表する一団はモスクワへ出発し、同月一〇日、モスクワ及び全ロシアの総主教アレクシイ聖下より聖自治独立の祝福を受けた。翌日、日本正教会に対し以下の事項が決定した。

- ・ 日本正教会には三主教教区を設定すること。
- ・ ウラジミール主教を「東京の大教及び全日本の府主教」として祝福する。
- ・ モスクワ総主教庁が最終的教会裁判権を持つ。
- ・ 東京にロシア正教会総主教庁駐日代表部教会(ボドヴォーリエ)を設置する。

時を同じくしてロシア正教会総主教庁聖務会院は、聖人列聖委員会の調査と合意を得て故ニコライ大主教を「亜使徒・日本の大主教聖ニコライ」として聖人の列に加えることを認めた。

四月一四日、ウラジーミル主教は府主教に昇叙され、聖自治独立教会の公文（トモス）、聖膏、パナギヤを拝受した。同年七月、念願だった聖自治独立は七月一二日の公会で宣言され、宗教法人「日本ハリストス正教会」教団本部は「府主教庁」と呼称が改められた。

一九七一年（昭和四六）二月一九日、掌院セラフイム（シグリスト）師は東京復活大聖堂で主教叙聖を受け「仙台の主教」となった。これによって東日本（仙台主教）、東京（東京大主教）、西日本（京都主教）の三つの主教教区が設立され、聖自治独立教会としての体制が整ったかに見えたが、翌年ウラジーミル主教は帰国請願を提出した。

一九七二年（昭和四七）三月一九日の臨時公会でウラジーミル府主教の帰国は承認された。そして新たにフェオドシイ永島主教が首座主教に選立され、同月二二日にモスクワへ赴き、一九七一年（昭和四六）五月に着任した総主教ピーメン聖下より「日本の首座主教、全日本の府主教、東京の大主教」として祝福されたのである。

函館の観光ブーム始まる　一九七三年（昭和四八）四月二〇日、「NHK連続ドラマ」北の家族」のオープニングで聖堂の姿が写されたことを契機に、函館の名は全国的なものになる。テレビの影響もあって聖堂を訪れる観光客は増加したが、境内の出入りは教会関係者に限られた時代で、門扉が閉じているにもかかわらず侵入して写真を撮るなど、観光客のマナーの悪さも目立ち始めた。時には石垣から落ちてケガをする

者、タバコの吸い殻のポイ捨てによってボヤ騒ぎが起きることもあった。

教会運営の自立 聖自治独立を果たした日本正教会は、教会運営も他からの援助を受けることなく完全に自立することになった。これは各教会も同様で、独立運営の下に教会を維持し、神品教役者を支えることになったのである。しかし、実際には地域差が生じ、窮地に立たされた教会も少なくなかった。

一九七五年（昭和五〇）に開かれた公会では、神品教役者の給与一本化、即ち教団からの給与支給が決定した。支給の財源は教会毎に金額を定め収められた負担金によるものとし、一九七七年（昭和五二）から実施された。また、給与体系化に伴う「六五歳定年制」の導入は、一九八七年（昭和六二）七月の全国公会で決議された。

厨川神父のラジオ出演 一九七八年（昭和五三）二月、NHKラジオ放送に厨川神父が出演し、函館の歴史とギリシヤ正教を紹介した。放送内容は後日、シリーズ企画「随想 はこだて散歩」として出版、発行された。同書には、「この年、聖堂公開する。往復はがきで拝観希望者を募集したところ四〇〇〇人近くの人に応募してきた。」と記されている（詳しくは、第二部「聖堂公開への道」参照）。

東日本主教々区正教青年大会 一九七八年（昭和五三）七月二八日から三〇日の三日間、函館正教会を会場に正教青年大会が行われた。参加者六三人の中には、神学生や東京、大阪正教会の青年信徒もあり、交流の輪は全国的な広がりとなった。宿泊と研修会場には函館市立道南青年の家（旧ロシア領事館）を利用した（次頁の「青年大会プログラム」参照）。

敷地利用をめぐる 一九六八年（昭和四三）の修復から一〇年が経ち、聖堂は再び修繕の必要に迫られていた。

リバノス氏から贈られた鐘は約五年間鳴らされたが、移送中の温度変化などで発生したと思われる亀裂により破損が危ぶまれ打鐘を中止、一九七四年（昭和四九）に鐘楼から降ろされた。¹⁴その後、鐘楼にはスピーカーを設置し、レコード録音による鐘の音が祈りの時を知らせた。

聖堂の修繕、維持管理は継続しなければ美観は保たれない。宣教と共に修復費用の蓄財も所属信徒の使命であり、先人たちも苦勞を重ねてきた。鐘の献納者リバノス氏の甥ゲオルギイ・リバノス氏から受けた献金（およそ五八〇万円）によって一九七四年（昭和四九）に聖堂内外の修理工事を行ったが、再び聖堂と境内の建物は廃れた。

部分的な修復工事は聖堂が劣化する速度に追いつくことがない。信徒の協力や外部支援を得た喜びも数年後には再び工事の必要に迫られ、信徒数と定額献金納入戸数が半減している状況で、教勢の回復と財政改善は重圧となって神父や教会役員たちを悩ませた。

一九七八年（昭和五三）の信徒総会ではある一案が議せられた。それは敷地の一部を売却し、聖堂維持資金として運用するというものであった。この議案は信徒の承認を得て、教団に土地売却の請願書を提出する

青年大会プログラム

第一日目	「青年の家」にてオリエンテーリング 函館山登山
第二日目	宗像英雄氏による講義「道南の自然」 外人墓地まで散策 厨川神父の講話「ニコライ大主教」 有原神父の講話「讃詞（トロパリ）」 及川神父の講話「奉神礼について」 聖堂見学 徹夜禱 交歓会
第三日目	牧島神父の講話 聖体礼儀 昼食（信徒会館前にてジンギスカン）

が認可は下りなかった。しかし、函館正教会内では既に敷地利用の構想が練られ、一九六八年（昭和四三）の修復を共に成し遂げた函館市の有志者らの賛同も励みとなり、実現に向け歩み出すところにあった。同年九月、認可を促すかのように再び請願を提出するが、フェオドシイ永島府主教はイオアン大槻盛一、イアコフ長島秀夫、アフアナシイ河野義信等を伴い視察のために来函した。

翌年早々、総務局役員会で函館正教会の敷地利用の件が協議された。その後役員会の意向を携えたユウスチン山口神父とロマン大川神父が来函し、計画案は宣教方針と異なるとの理由で白紙に戻されたのである。六月二五日、管轄司祭は函館正教会代表役員の任を解かれ、その後、一部信徒によって宗教法人被包括関係廃止（教団離脱を意味する）運動も浮上しかけたが、仙台のセラフイム主教と大川神父が事態善処に尽力した。

七月に行われた全国公会本会議において、フェオドシイ永島府主教は函館正教会の状況を説明した。人事発表では仙台正教会の大川神父が八月より函館正教会を兼任することが告げられた。

公会後、臨時総会が開かれ執事は任期途中で更迭、一月の役員改選でウラジイミル鈴木旭（執事長）、パウエル村井正雄（副執事長及び会計）、シメオン竹田仁（庶務）、アンドレイ米里公良（会計）、アキラ吉川昭（会計）、リディア中居寿子（庶務）、ルキヤ西橋曜子（庶務）が選ばれた。

教会内を揺るがす事態が避けられた後も教会財政は好転を見たわけではない。しかし、教会、信徒がどのようなべきか内面の刷新に時間は必要だった。国の重要文化財指定と大修復は、これより三年後のことである。

四 臨時管轄司祭ロマン大川満の時代

一九八〇年（昭和五五）八月～一九八一年（昭和五六）七月

ロマン大川神父の巡回と信徒総会 一九八〇年（昭和五五）八月より函館正教会の管轄を兼任することになった仙台正教会のロマン大川神父は、仙台より月に一度巡回した。大川神父は函館、上磯正教会での祈禱や聖歌の指導に力を注ぎ、定例で執事会、婦人会、勉強会等を実施し信徒の啓蒙に務めた。また、聖堂を開放し市民や観光客の見学を広く受け入れた。

一九八一年（昭和五六）一月、年の始まりと共に函館正教会の信徒の元には「函館ハリストス正教会だより」と題した会報第一号が届けられた。定期刊行物の発行はニキタ近藤神父以来である。同月一日、信徒総会が開かれ大川神父は次年度方針を次のように述べた。

昭和五十六年は函館正教会の再出発を期して「教会づくり」に励む年とする。聖堂修復は最優先の課題ではなく、靈的に生きた真の教会づくりをしながら解決していく課題とする。よって、信徒はまず、その結束を図るために（一）学び合うこと。（二）謙遜と神への従順を身につけること。（三）他人の悪口、告げ口、うわさ話などを禁止することとする¹⁵。

信徒総会の報告が掲載された臨時号は同月一日に発行された。第二号は大川神父に代わりアンドレイ米里公良が編集に携わった。以後、会報は管轄司祭が変わっても継続発行され現在に至っている。

五 司祭ニコライ築茂三郎の時代

一九八一年（昭和五六）八月～一九九一年（平成三）七月

ニコライ築茂神父の着任 臨時管轄の大川神父にかわり、一九八一年（昭和五六）八月に石巻正教会管轄のニコライ築茂神父が着任した。「はこだて正教会だより」第四号には「昨年（一九八〇年）の七月以降約一年間にわたり空席となっていた当教会に、待望の専任の司祭が八月一日付をもって発令され、ニコライ築茂三郎司祭が奥様と二人の子供さんと一緒に、七月二十七日午後六時二十分着の青函連絡船で着任されました。同司祭は直ちに聖堂に入れられ、待ちわびていた二十数人の信者と共に安着のモレーベンを献せられました。」と着任当日の様子が記されている。

三一歳、新進気鋭の築茂神父は、教会を活性化させるため信徒が教会に集まる機会を設けた。始めに行ったのは日曜学校の再開で、アガフィヤ築茂和子マトシカとマトロナ藤村春恵の二人が担当となり、一〇月一日に行われた。この日は七五三の感謝祈禱があり、六人の子供達が築茂神父より祝福を受けた。一月からは伝道会、聖書勉強会、読書会、単音聖歌練習会も始まり、諸活動は益々盛んになっていった。当時、聖書勉強会に参加していたソフィヤ下田フヨの句を紹介する。

「海望む、石畳の坂は、昼静か、聖書学びて、ひとり下りゆく」

セラフィム主教の巡回 一〇月二四日と二五日、仙台よりセラフィム主教がロマン大川長司祭とワシリイ

加藤長輔祭を帯同し上磯正教会と函館正教会を巡回した。二五日の主日聖体礼儀は一〇数年ぶりの主教司務だった。

祈禱後、セラフイム主教を囲んで記念撮影をし、午後にはセラフイム主教、大川神父、加藤長輔祭を交え「宣教懇談会」が行われ、質疑応答など二時間余りを有益に過ごした。

市民クリスマススの始まり 「はこだて正教会だより」第八号には参拝者で溢れる降誕祭の様子が報告された。

十二月二十日、函館教会では十時より「降誕祭聖体礼儀」、そして午後祝賀会が行われました。子どもさんたちが多く百名以上の参拝者でした。そして、今年はお子さんたち、七十才以上の方々にはもちろんのこと、参拝者全員にプレゼントが渡されました。十二月二十四日、函館教会では午後六時三十分「クリスマス夕べの祈り」が多くの市民の参拝のもと行われ、模様はNHKの全国ニュースで紹介されました。

神品研修会の実施 一九八二年（昭和五七）三月、東日本主教々区の神品教役者が函館正教会に集まり研修を行った。「はこだて正教会だより」第九号には次のように記されている。

去る三月二日（火）から四日（水）、東日本主教々区内の神品、教役者が来函され、大斎初週祈禱を中心とした「神品研修会」が行われました。主教セラフイム座下、及川、大川、牧島、大窪、松平、築茂の諸司祭、村上、佐々木両伝教者、高橋誦経者の十人でした。函館教会では大斎時の神品研修会は初めて。

晩堂大課のアンドレイのカノン、先備聖体礼儀等、大斎の祈祷がこのように多くの神品、教役者の方々と共に祈りできましたことは、函館教会によって何よりの精神的な糧でした。

研修中の祈祷に参拝したタイシヤ高井醇子は、この時の様子を鮮明に覚えており、「祈祷は深夜、早朝を厭わず本来の時間通りに行われました。男子修道院にいるかのように、誦経、聖歌、所作に至るまで大きな感動を得ました。朝、仕事明けで帰宅した主人に、この祈祷を是非見て欲しいと教会への道を急ぎました。」と話す。

同年夏、元町界限に建つカトリック元町教会、日本聖公会函館ヨハネ教会、日本基督教団函館教会との共催で「元町チャーチ・フェスティバル」が行われた。函館正教会では函館植物研究会会長宗像英雄氏の講演会（「ロシアの植物学者マキシモヴィツチと長之助」と、レコード鑑賞及び聖歌隊による「聖歌コンサート」を企画した。「はこだて正教会だより」第一三号には、「市民に気軽に教会に来ていただきたい」という開催目的が記されている。

重要文化財に指定 一九八三年（昭和五八）六月、函館ハリストス正教会復活聖堂は国の重要文化財に指定された。「はこだて正教会だより」第一八号では、「去る三月二十五日、文化財保護審議会は復活聖堂を指定するよう文相に答申しましたが、六月二日、官報一六八九七号に文部省告示七三号として公示され正式に『国の重要文化財指定』となりました。」と報告している。

五代目の鐘

鐘楼はあれど鐘はなしの函館正教会に大鐘の献納という恵みがもたらされた。一九八三年（昭



77 鐘を製作した中川氏
(左から二人目)

和五八) 六月三日「北海道新聞」道南版には「◎喜びの音／復活へ／ハリストス正教会 鐘取り付ける／五日に結婚祝福の第一号」と題して、設置の様子が報じられた。

国の重要文化財、函館ハリストス正教会に三重県桑名市から到着した新しい鐘が二日、取り付けられた。この日は大型クレーン車が出動し、ヒビ割れで使えない従来の鐘を取り外したあと、新しい鐘を二十メートル余りの高さまでつり上げた。工事のため、鐘楼の高さまで作業用やぐらが組まれ、教会敷地内は立ち入り禁止に――。いつもは静かな同教会周辺にひと時、エンジンのうなる音、作業員のかけ声が飛んだ。安政年間の建立当時から五代目にあたる新しい鐘を献納した桑名市東矢田町一五の美術铸造家中川正知さん(56)は四日に来函し、五日正午から行われる成聖式に参祈する。そのあと同日午後三時から、聖堂で市内の信徒の結婚式が予定されており、新しい鐘の音の祝福を受ける「第一号」になる。

鐘の祝福を受けた「第一号」は、ニコライ島田智とアンナ重子の婚配式であった。また、中鐘と小鐘については、一九八五年(昭和六〇)四月七日に聖鐘成聖式が行われ、イシドル中居伝教者と北鹿正教会のイオアン釜谷輔祭が打鐘した。祈祷後、フェオドシイ永島府主教は築茂神父へ、セラフィム主教は中川正知氏へ、函館正教会は信徒会館の改装一式を献納したキプリアン寺井藤三郎にそれぞれ感謝状と記念品を贈った。

カップル会と修養会

築茂神父の呼びかけで、二〇代から三〇代の若い夫婦らによる「カップル会」が誕

生し、第一回目の会合が一〇月二日に行われた。会員については会合での話し合いから夫婦に限定せず、信徒、未信徒を問わずだれでも参加可能な若者の集まりに変更し、聖書理解や正教会の習慣など啓蒙的な勉強を毎月第一日曜日の午後に行うとした。

カップル会員の子どもも多かった日曜学校には、近隣に住む小学生が次第に参加するようになり、夏休みを実施する修養会は毎年盛会であった。東日本主教教区「会報」第四五号には、一九八三年（昭和五八）年の修養会報告があるので引用する。

八月八日（月）〜十日（水）函館教会にて「第二回道南セミブロック小・中学生修養会が、八才〜中学生二十八名の参加によって行われた。修養会は祈りと学びと奉仕を三本柱として計画され、聖堂での開会祈祷のモレーベンと朝・晩の祈り、又聖書絵本と聖書スライドによる学び、そして、教会周辺の清掃等の内容であった。レクリエーションは九日の函館山頂上まで歩いて約一時間、毎朝登山をしているイグナティ増田吉蔵の案内によって全員登り、山頂でのおにぎりの美味しさは格別であった。「一日汝（神）の庭に在るは千日に勝る」（第八十三聖詠）という確信により未来をになう子供達の修養会を続けていきたいと思う。

敬老会の実施 祝日である「敬老の日」に沿い、教会でも諸先輩たちの健康、長寿を感謝、祈念する会として敬老会が実施された。「はこだて正教会だより」第二〇号より引用する。



78 好評だった修養会

九月十一日函館教会では始めて教会全体の敬老会が行われた。主日聖体礼儀に引き続いて七十歳以上の方々二十六人の皆さんのために感謝祈禱を献じ平安と長寿を祝った。又祈禱後集会所で昼食を共にし、昔の話の話を伺った。最長老はダヴィド村井政義兄（九十五才）、当日も元気に参拝され、しっかりとお話しなされた。

信徒研修会 一月二〇日から二二日の三日間、盛岡正教会を会場に信徒研修会が行われ、函館正教会から築茂神父、ソフィヤ齋藤サツ、エレナ佐藤タミ、ルキヤ西橋曜子、ユリヤ関本由美子と上磯正教会のエウドキヤ田中ハルが参加した。

「単音聖歌練習」をテーマにした研修会は、仙台正教会の大川神父とルカ岡崎澄三郎を講師に、埋葬式、パニヒダ、感謝祈禱など諸祈禱の聖歌を中心学び、実技練習に励んだ。

北海道ブロック宣教委員会 「はこだて正教会だより」第二五号には一九八四年（昭和五九）七月に行われた信徒総会と北海道ブロック会議の報告がある。

○信徒総会を終えて

総会では、日本ハリストス正教会維持財団名義の元町、栄町、堀川町の三ヶ所の土地を函館教会名義に変更を願う事が議決され、又、今までなかった「執事会規約」が制定されました。執事会規約では執事の責務、事務分担、運営等が明らかにされています。任期は責任役員との関わりから今までの二年から三年

となりました。役員改選では、新制定の規約に従い、司祭指名によりパウエル村井正雄、アキラ鈴木旭、シメオン竹田仁、出席者の選挙によりシメオン森影宝示、セルギイ下田行孝、タイシヤ高井醇子、リディヤ中居寿子の七兄弟が選ばれました。また監査にはキリル森征一、ルキヤ西橋曜子の両兄弟が選ばれました。尚執事会は、司祭と中居伝教者と七人の新執事の九人で構成されます。

○北海道ブロック宣教会議

七月二十九日、函館教会にて主日聖体礼儀後、北海道八教会の司祭と宣教委員全員の出席をもって行われ、今年度の活動方針の具体化について熱心に協議が行われました。今年度の函館正教会宣教委員はシメオン竹田仁、アキラ鈴木旭、セルギイ下田行孝、キリル森征一、ミハイル吉野孝雄。

北海道ブロック宣教会議は一九八〇年（昭和五五）に始まりを見る。フェオドシイ永島府主教は宣教を推進するため、三つの主教々区を幾つかのブロックに分け、統轄を行うブロック長と各教会が選出した宣教委員から構成する宣教委員会を設けた。東日本主教々区においては東北と北海道の二ブロックとし、広域な北海道ブロックは更に道央（札幌、小樽、苫小牧）、道東（釧路、上武佐、斜里）、道南（函館、上磯）の三つのセミブロックに区分された。

北海道ブロックの第一回目の会議は、同年一二月に札幌正教会で行われた。¹⁶

道南セミブロック内で好評を得た行事としては、函館正教会と上磯正教会の合同開催による信徒懇親会や小中学生対象の修養会であろう。これによって信徒間の親睦は一層深まり、親愛溢れる関係は変わることなく続いている。

二〇一一年（平成二三）現在、宣教委員会は年に二度の会議が行われ、函館正教会のニコライ・ドミートリエフ神父が二〇〇九年（平成二一）よりブロック長を務めている。

青年会会報「緑鐘」の発行 一九八五年（昭和六〇）一月二十五日に発行された、東日本主教教区「会報」第五四号には函館正教会の青年会について以下のように記されている。

今夏上下堤で行われた東日本主教教区青年大会に函館教会から提案された各教会の青年会活動の情報交換のための機関誌が函館青年会発足一年に当たる十月十日を記念して創刊された。機関誌名は『緑鐘』である。青年会の活発化は正教会にとって喫緊の課題である祈柄、心強いことである。

教区行事として青年大会が毎年実施されたことよって、参加を経験した青年達の繋がりが深まり、札幌、釧路、函館では少人数ながらも青年会を発足する動きが見られた。この頃の函館正教会では、アキラ大村貴之、イオアン竹田圭介、シルベストル花野聡志が堂役を務め、ユリヤ関本由美子、オリガ豊間弓、マリナ森影薫代、ルキヤ森影能子の他、上磯正教会のマルファ佐藤直美が青年大会に参加し、聖堂公開の奉仕にも青年が携わっている。

青年会の活動はユリヤ関本を中心に一九八四年（昭和五九）頃から始まり、降誕祭祝賀会での人形劇上演や来会した子供達に手作りクッキーをプレゼントするなどの活動が行われた。

一九八五年（昭和六〇）以降はイサイヤ青木直人やアナスタシヤ関本淳子も加わり、また日曜学校を経てロマン藤村信吾、アンナ藤村真紀、アンナ下田めぐみ、アナスタシヤ下田歩、ルキヤ森珠美、ユリヤ森真佐子

など中・高校生も集うようになった。

北海道正教婦人の集い 一九八七年（昭和六二）二月二三日、苫小牧正教会を会場に「北海道正教婦人の集い」が初めて開催され、北海道各教会から神品教役者、宣教委員、信徒婦人ら五四人が集まった。函館正教会は築茂神父と共にリディア中居寿子、ルキヤ西橋曜子、ウエラ成田アキ、エカテリナ齋籐千代が参加し、千歳市丸駒温泉に場を移した懇親会では和やかな雰囲気の中で互いの教会の様子を聞き合うなど交わりを温めた。

上磯昇天聖堂の建立 東日本主教教区「教区報」第五八号（第五七号以前は、東日本主教教区〔会報〕には、上磯正教会の新聖堂について報告記事が掲載されている。

十一月二十一日、二十二日、上磯教会信徒が待ちに待った新聖堂成聖式の日を迎えました。……工事は建設予定地が農地であったことから開発工事を行わなければならず、土盛り、排水工事、及び旧教会堂解体、周辺整備等は信徒の労働奉仕によって行いました。……設計監理は札幌教会信徒のアレキサンドル小野正司兄が献身的なご奉仕にて下さりました。……府主教フェオドシイ座下が入堂され聖堂成聖式祈祷が始まりました。陪祷者は長司祭有原次良尊師、長司祭馬場登尊師、司祭大窪望尊師、長輔祭加藤國枝尊師、司祭築茂三郎、堂役は札幌教会高橋誦経者、酒井、吉井両神学生でした。聖歌は函館教会聖歌隊が捧げました。成聖式は宝座、聖器物、祭台、聖堂内壁、外壁の成聖が行われ、次に亜使徒日本の大主教聖ニコライの不朽体が宝座の中、十字架に安置されました。

婦人会 一九八八年（昭和六三）二月の婦人会総会では役員改選が行われた。「はこだて正教会だより」第四号の報告記事には、ルキヤ西橋曜子（会長）、ウエラ成田アキ（副会長）、アンナ森もと子（副会長）、ナタリヤ板倉京子（会計）、エカテリナ齋籐千代（会計）、ワッサ増田つる（監査）、リュボフ下田節子（監査）が選ばれたとある。新年度は家族交流会の実施、会員訪問、伝統の継承についての学び等が計画案にある。また、この頃は市内にあるキリスト教会が輪番して行う「婦人世界祈祷会」にも婦人会として参加している。

聖堂の大修復 国の重要文化財に指定された聖堂は「文化財保護法」の規定事項に基づき管理することが義務づけられる。修理や修復については所有者（教会）が行うものとしているが、費用の負担が困難な場合、国が補助金を交付する。また一般公開の規定に従い冬期数か月を除く通年公開が始まり、来訪者の応対や案内を行う奉仕者が聖堂内に配置された。この奉仕者は一九八八年（昭和六三）二月より当番制になった。

一九八五年（昭和六〇）一二月、聖堂を建設当時の状態に修復、保存するため、文化財建造物保存技術協会による綿密な予備調査が行われた。同月二二日の臨時総会では境内地測量費を教会基金より支出することが決定した。「はこだて正教会だより」第三四号では、「境内地の設計は東京の信徒、内井昭藏氏が奉仕でして下さる」との報告がある。内井氏はモイセイ河村神父の孫である（修復の詳細は、第三部「重要文化財としての復活聖堂」参照）。

以下、東日本主教教区「教区報」第六〇号より成聖式の様子を引用する。

◎函館教会復活聖堂 修復成聖式行われる

十一月五、六日、府主教フェオドシイ座下の司祷、有原長司祭、馬場長司祭、石動司祭、田丸司祭、築茂司祭、加藤長輔祭、松浦長輔祭が陪祷し、地元信徒、全国教会信徒約三百五十名の参祷のもとに函館教会復活聖堂の修復成聖式が行われた。一九一六年に二代目の復活聖堂として建立された現聖堂は七十年余風雪によって外壁を中心に傷みが激しくなり、この度国の重要文化財保存修理事業として約三ヶ年の工期と二億二千万円の費用をかけて大修復工事が行われた。

三十名近い聖歌隊によって捧げられる聖歌の流れの中、府主教座下によって成聖された金色の覆いが宝座、奉献台、祭台、アナロイ等に次々とかけられていき、堂内外の四方の壁は聖膏と聖水によって成聖された。成聖祈祷に続いて府主教座下司祷による聖体礼儀が十時過ぎに行われ、府主教座下は説教で成聖についてお話し下さりこの日の喜びをさらに意義深いものとして下さった。

函館教会にとって記念すべき復活聖堂修復成聖祈祷は、最後に「幾年も、幾年も」を祈り四時間余をもつて終了した。函館教会信徒の永年の念願であった復活聖堂修復事業は、国、北海道、函館市の補助を得たが、府主教座下をはじめ多くの全国教会兄弟姉妹と函館市民のご援助によって行うことができたものである。この度の復活聖堂修復成聖式を函館教会の新たなスタートとして歩み始めたい。

教会周辺地区の景観保存運動 一九九〇年（平成二）五月二八日、教会の隣接地に高層分譲マンションを建設するとして業者が函館市に建築確認を申請したことを受けて、西部地区の景観と周辺環境の保全を訴える市民団体や住民グループ等が反対運動を起こした。市は一九八八年（昭和六三）に「函館市西部地区歴史景観条例」（現、函館市都市景観条例）を制定、景観条例の先駆的な存在になったが、高層建築物の乱立が目立つようになり、住民側から行政の効果や対応に疑問を持たれていた。函館正教会も周辺の教会や寺院

と足並みを合わせながら、市議会を傍聴したり市長との意見交換会などにも参加した。

六月五日、市議会は問題の業者に対しマンション建設反対の姿勢を決定、七月二日には西部地区の歴史的景観と街並みを守ることが全会一致で可決された。

聖堂の肖像権 高層マンション反対運動と並行して、函館正教会では出版会社との間で肖像権論争が起こっていた。事の発端は、観光ガイド誌を発行している出版会社が表紙に聖堂の写真を使用した事による。

一九八八年（昭和六三）の修復完了後、聖堂の姿は菓子の包装紙や観光土産のグッズ類など多くの販売物のデザインに利用され、テレビ番組やビデオ映像にも登場するなど種々雑多に使用されるようになっていた。

教会は宗教建築物としての品位が損なわれることを懸念し、利用する側が使用目的を申し出て、教会的見地より撮影許可の判断を示す対応を行ってきたため、問題の出版会社にも写真使用の申し出をするよう文書を送付した。その後、申し出の是非について問い返してきたことが報道機関に伝わり、新聞に掲載された。

建物の肖像権は法律上認められていないが、所有者と撮影者及び利用者の間には相互理解の上に使用されることが望ましいとして、教会はその姿勢を崩さなかった。論争の表面化は教会にとって望むことではなかったが、一般社会にむけて宗教施設に対する扱いやマナーの問題を投げかける機会になった。

バザーの開催 「週報」第八二号には盛況だった第二回チャリティーバザーの報告が次のように掲載されている。

一九九〇年（平成二）一〇月一日（祝・水）

心配された天候もよし、第二回チャリティーバザーの準備は六時頃からはじまり八時にはほとんど奉仕者が集まった。準備は順調に進み開始十時前にはほとんどできた。開始前に天竺経を祈りわたしたちの小さな働きに神の恵みを願った。イオナ吉川兄の打鐘の合図で十時丁度に開場、十一時までは戦争のありさま、去年よりも多くの市民に参加していただき、地域の行事としてチャリティーバザーは定着しつつあるように思えた。信徒の奉仕約五十名、上磯教会の奉仕十名、一般の奉仕者約二十名、計八十名ぐらいで当日は動いたと思われる。来教者二千人から三千人、売上約百五十万円、収益約五十万円であった。二時に閉会し後片付けは四時頃終わり、神様の光栄の為に小さな働きができ快い疲れを感じながら解散、但し、会計担当のパウエル村井正雄兄には七時まで残って頂き会計事務をして頂いた。多くの人々に支えられ、大成功であった……

管轄司祭の交替

一九九一年（平成三）七月一三日、一四日に行われた全国公会の人事発表で、築茂神父休職が伝えられた。築茂神父は前年より義母の介護で函館と東京を往復する生活が続いており、休職の申請は宮城県金成への移住を決めたことによる。

任期終了となる同月三十一日、上磯正教会のエリセイ田中誠一が永眠した。折しもその日は北海道ブロックの神品会議が函館正教会で行われ、有原神父（札幌）、田丸神父（釧路）、そして後任の松平神父が引き継ぎ業務のために来会していた。夕方、臨終祈禱と納棺が行われ、二日後の埋葬式を有原神父に託し、築茂神父の聖務は終了した。真夜中、築茂神父一家は信徒が歌う「幾年も」の祈りに見送られ、フェリーで函館を離れた。

六 司祭アレキセイ松平康博の時代

一九九一年（平成三）八月～一九九四年（平成六）七月

アレキセイ松平神父の着任 一九九一年（平成三）八月九日、アレキセイ松平康博司祭が着任した。松平神父は、石巻正教会を一九七八年（昭和五三）から六年間牧会にあたり、大阪正教会に転任した後、再び東日本主教々区に戻り、函館及び上磯正教会の管轄司祭となった。

ブルガリアアイコンの成聖 一九九二年（平成四年）四月一七日、ブルガリアから「亜使徒・日本の大主教聖ニコライ」のアイコンが届き、翌日の復活大祭祈祷後に成聖された。献納のいきさつは一九九一年（平成三）一二月にイオシフ落合良治経営のギャラリーで開催したブルガリアアイコン展の協力者、片山通夫氏（写真家）の計らいによるもので、ブルガリアのアイコン画家ネジュラ・ストヤ氏が製作した。全身像のこのアイコンは現在、聖所内に設置されている。

石垣の修復工事 一九九三年（平成五）七月一二日午後一〇時過ぎ、マグニチュード七・八の烈震が北海道奥尻島を襲った。日本海最大規模となる地震は津波を引き起こし、更に発生した火災によって被害は拡大、多くの死者、行方不明者を出した。

この地震は函館でも強い揺れを観測したが、聖堂に影響は見られなかった。しかし、半月を過ぎた八月一日、正門左側の石垣（チャチャ登り側）約五メートルが、地震と大雨による浸水の影響で崩落、市道は石で



79 奥尻町を訪問

塞がれ交通に支障をきたした。

これに対処するために開かれた臨時執事会で、崩落部分の復旧と排水関連の整備（トラフ設置）に取ることができることが決定した。またこの工事と併せて境内地を囲む石垣の長期的な修復も年度ごとに実施することになり、すべてが完了したのは二〇〇〇年（平成一二）であった。

地震後に開始した義援金募集には、全国の教会より五〇〇万円の善意が寄せられた。奥尻町と使途を相談した結果、半壊した稲穂小学校の備品購入費用に用いることが決まり、松平神父と信徒三人が奥尻島へ出向き仮校舎において贈呈式が行われた。¹⁷

「洋楽史再考」セミナーの開催

一九九三年（平成五）一〇月二〇日から二三日にかけて、金森ホールを会場にシンポジウム「洋学史再考——音楽発祥の地としての函館」（音楽図書館協議会主催 本部・東京）が開催された。このセミナーは「幕末から明治の洋楽受容史を厳密な資料研究の観点からとらえ直そうとする試み」として開かれ、日本の洋楽史上、画期的なセミナーであったと評された。期間中、洋楽史研究家の中村理平氏により前記副題を結論づけた研究調査報告の発表が行われ、札幌に隠退したイオアン厨川神父も「函館のハリストス正教会における音楽活動の歴史」と題した講演を行った。二二日は函館正教会に場を移して聖歌のワークショップを行い、夜の九時過ぎまで熱心な質疑応答が交わされた。翌日二三日の徹夜祷にはセミナー参加者五〇人が参拝した。

七 司祭アントニイ石動昌夫の時代

一九九四年（平成六）八月～一九九五年（平成七）四月

アントニイ石動昌夫神父の着任 一九九四年（平成六）七月九日から一日、全国公会が行われた。本会議では、東京復活大聖堂の修復事業に二億九〇〇〇万円の献金が寄せられたことが報告され、また神品牧役者の退職一時金制度の導入が決定した。神品牧役者の人事において松平神父の鉤路正教会転任が決まり、新たにアントニイ石動昌夫神父が函館正教会の管轄司祭として発令された。

石動神父は函館の出身で一九六九年（昭和四三）に正教神学校へ入学、司祭叙聖後、横浜、盛岡正教会を管轄し、八月一九日当地へ着任した。

聖歌研修会とコンサート 九月一五日から一七日にかけて函館正教会で北海道ブロック聖歌研修会が行われた。大阪正教会の詠隊教師テイト加藤直四郎と米国正教会の神学校に留学し聖歌を学んだエカテリナ加藤都也子を講師に、参加者三三名が両師の熱心で丁寧な指導を受け、聖歌の学びを深めた。

最終日には、模範を聞く機会として遺愛女子中学校及び高等学校講堂に於いて、この日のために来函したテイト加藤率いる「テイト・コール」と「東京男性合唱団」のジョイントで「ロシア正教会聖歌コンサート」が行われた。

徹夜祷、聖体礼儀、祭日、大斎から一七曲が歌われ、賛助出演した合唱団体「女声コーラストリル」にはルキヤ西橋曜子（団長）とユステイナ村井ルミがいた。

臨時總會

一〇月二日に行われた臨時信徒總會は、三三人の信徒が集まった。この總會で新たな教会運営の方針が石動神父より示された。一般経常費は函館正教会信徒の献金で運営されるよう全信徒家庭で努力することが要望され、冠婚葬祭の献金基準の規定や定額献金の増額を計るため具体的な数字も示された。これは、当時の函館正教会信徒にとって革新的に思われた。

新年度の役員はパウエル村井正雄（執事長）、セルギイ下田行孝、クリメント児玉慎一、タイシヤ高井醇子、リディヤ中居寿子、イオシフ落合良治（新任）、アキラ吉川昭（新任）、シメオン竹田仁（監査）、グレゴリイ長岡宏幸（監査）となった。

境内地の開放時間をめぐる問題

同年九月頃より、石動神父の要望で夜間の境内地開放は中止された。これは境内地に居住する司祭の生活環境を保全するための対応であったが、観光業界や観光客から函館市商工観光部への苦情が相次いだ。市側はこの件について静観の姿勢をとったが、一九九五年（平成七）三月に及んで市議会や新聞各紙に取り上げられることになり、教会に開放時間の延長を要請した。

かつては教会関係者だけが出入りを許可された祈りの聖域が、宣教方針や観光客の増加に伴い門扉を開放した。それにより聖堂や境内には多くの人々が立ち寄り、親しみを持たれ愛される名所となり多くの恩恵をもたらされ美しい姿を保つに至っている。開放を中止した理由には、境内地に居住した者でなければ経験し得ない観光客のマナーの程度が問題視されたことによる。この状況は暫くの間続いたが、四月にはマナー改善を市に要望し開放時間の制限を解除した。

四月一〇日、アントニイ石動神父は休養、離任することになり、後任の管轄司祭発令まで、東北ブロック

の神品が交替で函館正教会と上磯正教会を巡回する状況が続いた。

八 司祭イオフ馬場登の時代

一九九五年（平成七）一月～二〇〇八年（平成二〇）七月

司祭の着任と誦経者の祝福 一九九五年（平成七）一月一日、仙台正教会より長司祭イオフ馬場登師が着任された。一九五六年（昭和三一）、出身の上磯（現、北斗市）より正教神学校へ入学し、一九六四年（昭和三九）に司祭に叙聖され、小田原、仙台正教会を経て四〇年目に管轄司祭として故郷に戻った。

同年一月二六日、クリメント児玉慎一が正教神学校に於ける五回の研修会を修了し、東京復活大聖堂にてフェオドシイ永島府主教より誦経者の祝福を受けた。翌年には函館正教会付副輔祭及び伝教者の祝福があり、二〇〇一年（平成一三）七月の公会にて輔祭に叙聖、仙台正教会赴任が決定し、函館正教会より転出した。

その後、二〇〇二年（平成一四）七月の公会で司祭に叙聖され、現在、仙台ハリストス正教会及び福島県にある白河正教会を管轄している。

馬場神父の着任から一か月が過ぎた一二月一七日、臨時信徒総会が開催された。任期満了により七人の執事と監査役員の改選が行われ新体制がスタートした。

「総会議事録」には、パウエル村井正雄（執事長 会計、営繕、備品関係を兼務）、セルギイ下田行孝（庶務、渉外、営繕関係）、クリメント児玉慎一（広報、聖堂・奉事関係、書記、宣教委員）、タイシヤ高井醇子（会計、

聖歌資料関係、婦人会窓口）、イオシフ落合良治（境内地環境整備、行事関係）、アキラ吉川昭（境内地環境整備、行事関係、青年会・日曜学校）、セルギイ入間川三弘（境内地環境整備、行事関係）とある。

鐘の音、「日本の音風景一〇〇選」に 一九九六年（平成八）一月から三月までの三か月間、環境庁（現、環境省）は、全国各地に地域のシンボルであり、また将来に残したいと思われる「音のある風景」を公募した。これに対し七三八件の応募があり、音環境の保全という視点から、特に意義のある一〇〇件が選ばれ、「オホーツクの流氷」、「時計台の鐘（札幌）」と共に、「函館ハリストス正教会の鐘」が認定された。

フェオドシイ永島府主教座下の永眠 一九九九年（平成一一）五月七日、フェオドシイ永島府主教座下が永眠し、唯一である主教品の急逝により日本正教会は新たな首座主教が選出されるまで、モスクワ及びロシア正教会総主教アレクシイ二世聖下の臨時統轄下に置かれることになった。

七月一〇日、一一日、主教候補を選立するため臨時公会が開催され、キリル有原神父（札幌）、イウダ主代神父（豊橋）、アンドレイ辻永神父（東京）の三人が推戴された。

八月二〇日、ロシアに赴いた主教候補の三人は、聖セルギイ修道院至聖三者聖堂において修道誓願を立てる剪髪式を受けた。そして有原神父はペトル、主代神父はダニイル、辻永神父はセラフイムという修道士の名を頂き、九月一七日の帰国日までロシア各地の修道院で研修生活を過ごした。

一〇月六日、シノド会議の決定を受け典院キリル有原師は掌院に昇叙、同月九日に「横浜の主教、東京の副主教」として叙聖され、典院ダニイル主代師は一月一二日に掌院となり、一四日、「京都の主教」として叙聖された。

セラフイム辻永主教座下の着座 二〇〇〇年（平成一二）一月九日、掌院セラフイム辻永師は典院に昇叙され、同月一五日のサロフの聖セラフイムの記憶日にモスクワのダニイロフ修道院至聖三者聖堂に於いて、モスクワ及びロシア正教会総主教アレクシイ二世陛下及び九人の主教品により「仙台の主教」として叙聖、東日本主教々区の統括者となった。

セラフイム辻永主教座下は同月二〇日に帰国し、三〇日に仙台正教会で聖体礼儀を司禱された。

首座主教の誕生 三人の主教を得た日本正教会では、首座主教候補者を選立するため臨時公会（三月）が行われ、ペトル有原主教座下が選ばれたが、健康状態が思わしくないことから辞退を申し出た。再度行われた臨時公会（五月）でダニイル主代主教座下が候補者となり、着座式のために来日する総主教アレクシイ二世陛下を待つのみとなった。

二〇〇〇年（平成一二）五月一〇日、ペトル有原主教座下は永眠した。同月一二日、東京復活大聖堂で埋葬式を執行、有原主教の棺はその日のうちに函館正教会へ移送された。一四日、ダニイル主代府主教座下は日本正教会の首座主教になった。着座式の様子を「函館ハリストス正教会だより」第五六号より引用する。

五月六、七日に臨時公会が開催され、ペトル有原主教座下の首座主教候補ご辞退に伴い、新たに京都のダニイル主教座下が日本正教会首座主教候補に選立されました。五月十四日のニコライ堂における聖体礼儀で、モスクワ及び全ロシアの総主教アレクセイ陛下より、東京の大主教・全日本の府主教として承認、祝福を受けられ、ここに昨年五月七日にご永眠されたフェオドシイ府主教以来、一年ぶりに新しい府主教



80 総主教アレクシイ二世聖下の来堂（北海道新聞社 提供）

座下が誕生されました。同日午後四時より帝国ホテルにおいて首座主教着座祝賀会が開かれ、アレクシイ二世総主教聖下ご一行も共に日本正教会の再出発をお祝いして下さいました。

アレクシイ二世総主教聖下の来函
いる。

「函館ハリストス正教会だより」第五六号には、次のように報じられて

五月十二日（金）午前十時過ぎ、ロシアよりアレクシイ二世総主教聖下ご一行が函館空港に到着。セラフイム主教座下をはじめとする東日本主教々区の神品ならびに信徒が迎える中、歴史的な第一歩を函館の地に標されました。五稜郭タワーでの見学、五島軒での歓迎昼食会、函館正教会での感謝祈祷、ロシア極東総合大学函館分校訪問、ロシア人墓地でのご祈祷と大変お忙しい日程ではありましたが、身近に信徒の方々とも会話されるなど、信徒にとつてはこの上ない喜びの訪日初日となりました。

五月一五日、セラフイム辻永主教座下司祷のもと東日本主教々区の神品、宗務局長イオシフ大窪望神父が陪祷し、有原主教のパニヒダが執り行われた。有原主教の墓碑は翌年五月一九日に完成し、再びセラフイム辻永主教座下をはじめ三主教区宗務局長及び北海道の神品教役者が参集、パニヒダと墓碑成聖式を執り行つた。当日は有原主教が管



81 故ベトル有原主教座下パニヒダ

もとに新時代の第一歩を踏み出したのである。

聖ニコライ祭 二〇〇二年（平成一四）二月一五日から一七日の三日間、東日本主教々区主催の宣教大会「聖ニコライ祭」が開催された。会期中に行われた徹夜祈、聖体礼儀及び感謝祈禱は、セラフィム辻永主教座下のもと東日本主教々区の神品、駐日ポドヴォリエのニコライ・カツバン長司祭が陪禱し、聖堂内は全国各地より信徒が参拝して立錫の余地も無いほどであった。

この記念祭は函館正教会に二つの幸事をもたらした。「亜使徒・日本の大主教聖ニコライ」のイコンに不朽体が嵌入されたこととセルギイ下田行孝が誦経者の祝福を受けたことである。

聖ニコライ祭記念行事の内容は左記の通り。



82 展示された聖ニコライの遺品

轄司祭として赴任した大阪、札幌、小樽、苫小牧正教会の信徒らも参拝し、有原主教の霊の安息を熱心に祈った。

フェオドシイ永島府主教の永眠からダニイル主代主教座下の首座主教着座式までの一年は実に慌ただしく過ぎていった。新世紀の始まりと共に、日本正教会も二人の主教品の

・迎接祭 聖体礼儀

・聖ニコライ祭 徹夜祷及び聖体礼儀

・モレーベン、聖ニコライのイコンへの不朽体嵌入

・府主教庁の協力による聖ニコライ遺品展（於・信徒会館内）

・記念講演会（於・ロシア極東国立総合大学函館校）

「まことの愛の半世紀——聖ニコライの偉業を回顧して」

共立女子大学教授 中村喜和氏

「日本の聖ニコライの宣教の偉業」

在札幌ロシア連邦総領事夫人タチアナ・サープリナ氏（歴史学者）

スライド上映及び講話

エルミタージュ美術館 日本文化学芸員アレキセイ・ボゴリュボフ氏

同美術館ロシア文化部学芸員コベリンスカヤ氏

講演会は、ロシア極東国立総合大学函館校と函館日口親善協会の共催、函館市と函館日口交流史研究会の後援で行われた。

記念行事は函館正教会を東日本主教々区の宣教重点地区として活性化させ、函館市民に正教会と聖ニコライ祭の認知を高めることを目的に開催された。ポスター、チラシの配布など早期の広報活動が功を奏して三日間の聖ニコライ遺品展には一〇〇〇人に上る来場者があり記念行事の様子はテレビ、新聞等に取り上げられた。

「キャンプだホイ 二〇〇四 イン 函館」の開催 二〇〇四年

(平成一六) 七月三十一日から八月二日の三日間、東日本主教々区北海道ブロック主催の教会学校宿泊研修会「キャンプだホイ」が函館正教会を会場に開催された。北海道、東北ブロックの教会より八五人が参加、準備などで協力した地元信徒を含めると一〇〇人を超える大行事になった。

キャンプは「共同生活・共通体験・信仰の継承」をテーマに、徹夜祷、聖体礼儀に参祷し、ウォークラリー形式で聖堂、祭服、アイコンを探検調査する活動、銭湯の入浴体験、周辺散策、花火大会観賞と豊富なプログラムで函館の数日を満喫した。

信徒会館の建設

信徒会館は、七〇年の風雪に耐え改修、増改築等を行い維持してきたが基礎部分の老朽化が著しく、二〇〇二年度信徒総会において信徒会館の改築が提案された。明治の古いガラスが未

だ使用され、信徒の歴史が積み重なる象徴的存在であり保存を願う声も少なくなかったが、函館市文化財課の要請で外装を木造にした信徒会館の建設計画が承認され、二〇〇三年(平成一五)一一月末、信徒会館建設委員会を発足、翌年、建設費用の協力が信徒に求められた。同年五月、プレハブの仮会館設置後、旧信徒会館跡地にて基礎成聖式が行われた。工事期間中、会館裏手に接する石垣の補強工事を余儀なくされ、二〇〇万円程の追加予算が計上されたが、木造一階建て、延べ約二三八平方メートルの信徒会館が無事竣工を迎



83 大行事になったキャンプ

えた。同年一〇月二日、セラフイム辻永主教座下の司禱により信徒会館の成聖式が執り行われ、新装叶った信徒会館大ホールで工事関係者や道内の教会から参集した信徒らと共に祝賀会が催された。

なお、新しくなった信徒会館は二〇〇六年（平成一八）に函館市都市景観賞を授与され、「北海道新聞」（二〇〇六年九月二八日）は「白い壁と緑色の屋根が『ハリストス正教会と調和し周辺環境に調和した建物だ』と認められた。」と報じた。

ワークショップへの参加 二〇〇六年（平成一八）一月四日、函館メサイヤ教育コンサート実行委員会企画のワークショップ（体験集会）「日本の混声四部合唱発祥を考える」に馬場神父と聖歌隊が参加し、講演と聖歌六曲を紹介した。この催しは、船見町にある日蓮宗一乗山実行寺の本堂にて行われ、一八五八年（安政五）に初来函したロシア領事一行が、領事館が建立されるまで同寺（当時は弥生町にあった）に仮分宿し「祭祠堂」を建て祈禱を行ったという史実から発案、企画されたものである。¹⁸

信徒総会 二〇〇七年（平成一九）七月二二日、信徒総会にて執事改選が行われた。新役員にはニコライ松井靖介、アキラ吉川昭、アンナ森もと子、イリナ鈴木恵美子、パウエル村井正雄、イオシフ落合良治、ソフィヤ村井幸枝が選出され、監査役員はアウディ高石勇光とマリヤ大谷孝子が留任となった。八月一九日、新年度第一回執事会で執事長再任のパウエル村井正雄が健康不安を申し出たことから、ニコライ松井靖介が新たに執事長として選ばれた。

宣教の機会として 同年一〇月一六日、第一六回チャリティーバザーが境内地及び信徒会館で行われた。

バザー実行委員会は新しい試みとして、函館市民の公募による「聖堂の写真展・フォトコンテスト」を企画、実施した。信徒会館大ホールの展示スペースには四季折々、様々な角度から撮影した三二作品が飾られ、来場者の目を楽しませた。またコンテスト上位者の作品は教会発行のカレンダーに掲載された。

バザー開催は、ニコライ築茂神父が唱えた「社会福祉の小さなお手伝い」をモットーに、収益を市内の社会福祉機関や災害地等に献金するチャリティーを目的にした。二〇〇四年（平成一六）においては、収益を信徒会館建設資金に充当するため催されている。近年に至っては、信徒手作りの食品（ピロシキ、焼きそば、おでん等）、上磯正教会から提供される新鮮な野菜、献品による雑貨、衣類販売と併せ、アイコン、教会資料、祭服、祈祷書等の企画展示も行われるようになり、正教会を知っていたく宣教の機会として、名称も「正教会バザー」と標されている。

副輔祭の祝福 二〇〇八年（平成二〇）六月に行われた東日本主教々区の教区会議において、セラフィム辻永主教座下よりアキラ吉川昭が副輔祭の祝福を受けた。

馬場神父の休職 二〇〇八年（平成二〇）七月一二、一三日に行われた全国公会にて、馬場神父は七月末日をもって休職となった。同月二七日に行われた信徒総会の冒頭、馬場神父は在任期中の謝辞を述べ、教会の将来を展望して「……教会の環境は改善が進んだが、教勢に於いては篤信徒の永眠が続き、十年前と比較すると三割も減少しました。将来を思うと不安を禁じ得ない。守る信仰があつても、行いが伴わなければ真の信仰とは言えない。隣人への思いやりの心を大事に、教会に参拝し、奉仕することが基本です。」と話さ

れた。

八月一〇日、五島軒で行われた送別会には函館正教会と上磯正教会の信徒が多数集まった。馬場神父は出身地の上磯（現、北斗市）に隠退された後も、上磯正教会での祈祷に立られている。また、同日、馬場神父と共に一三年間、執事長と会計を兼務したパウエル村井正雄に感謝状が授与された。

九 新たな時代に向かって

ニコライ・ドミートリエフ神父の着任 馬場神父の休職に伴い、函館正教会及び上磯正教会の新たな管轄司祭として、神戸正教会管轄のニコライ・ドミートリエフ神父が八月一日付で発令され、九月四日に当地へ着任、出迎えた信徒らと感謝祈祷を行った。

この着任は「函館正教会一五年振りのロシア人司祭」と新聞等で話題になったが、ニコライ神父は、聖ニコライと同じくサンクトペテルブルクの正教神学アカデミーを卒業し、ソ連時代にモスクワ及び全ロシアの総主教アレクシイ二世聖下のもとで副輔祭長を勤めた経歴を持つ。会報「函館ハリストス正教会」第一号にある着任の挨拶では、神学生時代に聖ニコライと函館を知り、以来、その地を訪れることは念願とあり、「時が来たら、神様の祝福のもとに函館正教会を訪れることになるだろうと信じていた。」と記している。

函館正教会の黎明期にロシアより渡来した神品教役者と同じ土壌で正教を受け継いだニコライ神父と共に、新しい時代の歩みが始まった。

近年の主な教会のできごとは次の通りである。

二〇〇八年（平成二〇）

一月四日

ロシア領事館開設一五〇年に併せロシア連邦外務相ラブロフ氏来函。ロシア人墓地及び聖堂を訪問。

一月五日

モスクワ及び全ロシアの総主教アレクシイ二世陛下永眠。

翌年、スモンレスク及びカリーニングラードの府主教キリル陛下が総主教に着座。

二〇〇九年（平成二一）

四月二日～五月一七日

「イースターエッグ展覧会」を開催。約一二〇点を展示。道内、道外から多数の参観者。

一〇月二一日

信徒対象「教会のロシア語勉強会」開始。

一月二一日

「ロシア料理教室」実施。翌年三月二一日には第二回目実施。

二〇一〇年（平成二二）

一月一七日

セラフイム辻永主教座下叙聖一〇周年記念祝賀会（仙台）。

二月二七日、二八日

「イースターエッグ講習会」開催。一般参加者の好評を得て現在も継続実施

中。

六月二日

東日本主教々区会議でアキラ吉川昭師、輔祭叙聖。

七月末〜九月末

聖堂外壁及び至聖所の壁修復工事。

八月二〇日

信徒会館で「正教会聖歌コンサート」開催。一〇〇席を超える来場者。

一月

公式ホームページ開設 <http://orthodox-hakodate.jp>

一二月二四日、二五日

セラフイム辻永主教座下巡回 函館正教会初となる主教司祷による降誕祭。

二〇一一年（平成二三）

七月一六日

ロシア極東連邦総合大学函館校主催「第一四回はごだてロシアまつり」で正教会聖歌コンサート。

二月〜三月

函館ハリストス正教会聖歌隊による聖歌

CDの収録、制作が行われる。

九月一七日

東日本主教教区より「正教会聖歌Ⅱ」と

して八月末に完成、頒布開始。

旧函館区公会堂において「函館ハリストス

正教会聖歌コンサート」開催。

二〇一一年（平成二三）

九月現在の教会聖職者及び役員は次の通りである。



84 セラフイム主教座下司祷による降誕祭 2010年
(北海道新聞社 提供)

管轄司祭

ニコライ・ドミートリエフ

輔 祭

アキラ吉川 昭

伝教者

イシドル中居真行

誦経者

セルギイ下田行孝

執 事

アキラ吉川昭輔祭

セルギイ下田行孝（執事長）

アンブロシイ花野英昭

イオシフ落合良治

ソフイヤ村井幸枝

アンナ森もと子（婦人会会長）

イリナ鈴木恵美子（会計担当）

信徒戸数一〇六戸 信徒数三九七人（内男一八二人、女二一五人）

- 1 「会議関係書類綴」
- 2 「昭和二十二年 全国公会議事録」
- 3 「函館市史」通説編第四卷第六編
- 4 「正教時報」第七三四号（一九五〇年九月十五日）
- 5 訳文引用は、清水恵「レンセン博士と函館のこと」（『地域史研究はこだて』第三二号）による。
- 6 「日本正教史」牛丸康夫 日本ハリストス正教会教団 一九七八年
- 7 「聖堂修理関係（記録簿）」
- 8 「正教時報」第七八四号（一九五五年二月二十五日発行）
- 9 聖堂内にある燭器は照明としての役割の他、奉神礼における教理的、シンボルの意味合いを持ち、信徒の祈りを蠟燭をもって献じ捧げ置く聖具でもある。
- 10 「正教時報」第八二三号（一九五八年六月五日発行）
- 11 開催に至る経緯は、「札幌正教会百年史」に詳しい。
- 12 「正教時報」第九一九号（一九六六年八月二〇日発行）
- 13 「北海道新聞」一九六八年一月一日夕刊
- 14 現在は上磯正教会の聖堂前に設置されている。
- 15 「信徒総会議事録」
- 16 北海道ブロック内の活動及び経過は「札幌正教会百年史」に詳しい。
- 17 その後、稲穂小学校は児童が減少し、二〇〇三年（平成一五）に廃校となった。
- 18 「北海道新聞」二〇〇六年一月五日朝刊

第二部 函館ハリストス正教会史に寄せて

渡来一五〇年を祝して

前管轄 長司祭イオフ馬場登

最初に日本正教会の父であり、私達が敬愛して止まない亜使徒日本の大主教聖ニコライ師の渡来一五〇年を心よりお祝い申し上げます。罪僕もその一五〇年の教会史の一端に携わったひとりとして、改めてその偉業に思いを馳せております。殊に函館はその恩恵にあずかる処、甚大でありました。すなわち一八六一年（文久元）、弱冠二四歳の青年修道司祭ニコライ師が来日第一歩を函館に記された事で、函館ハリストス正教会はその基礎を据えられ、またそれは日本正教会の嚆矢たる光榮に結実していったからであります。

実は、筆者の所属する上磯教会もそうした恩恵に与ったひとつでした。有川（現、上磯）教会は、函館に近い事もあって一八八四年（明治一七）に教会が設立され、間もなく当家の者も受洗して仲間に加えて頂きましたが、筆者が子供の頃の教会の盛況は今も忘れる事が出来ません。中学生の頃はよく元町の教会を訪れて、美しい聖堂やそこから街並みを眺めるのが楽しみでした。そうした背景もあってか神学校に入学し、司祭に叙聖され、いくつかの教会へ奉職させて頂きましたが、自分が伝統ある函館教会の司祭を拝命できるとは思っておりませんでした。それが図らずもフェオドシイ府主教座下のご高配によって実現し、永年の望みが適えられました。

それだけに一九九九年（平成一一）の府主教座下の急逝は痛恨事で、これも神の摂理のなざる業だと認めるのはむずかしい事でした。

話は戻りますが一九九五年（平成七）十一月の少し肌寒い日、筆者は妻のフェオドラと共に仙台から函館

へと赴任、多くの兄弟に温かく迎えられるさとの温もりを覚えました。以後は村井執事長様はじめ諸兄弟に教えられ、励まされ、支えられて四九年の教役者生活の掉尾を飾ることが出来ましたが、函館での一三年間には多くの出来事がありました。

先ず感嘆したことは、日曜日、殆んどの信者の方には時間前に参堂され痛悔、領聖される事でした。また信徒の多くは教会を我が家のように愛して、たとえば広い境内の草刈りや清掃、冬の除雪など喜んでご奉仕くださった事でした。何しろ年間を通して内外から多くの人々が訪れる教会ですから、みんなのご奉仕ご協力がなければ維持管理がむずかしいだけに有難い事でした。

そうした中で一九九七年（平成九）の境内地の舗装工事は、実に有益な事でした。以前は砂利道でしたので、パスハの十字行の時などぬかるみに足を取られるなど難儀しましたが、舗装が入った事で境内地が見違えるようになりました。こうして整備された境内地では教会学校の夏期合宿やチャリティバザー、それに市内の多くの小学校が写生会に訪れて、それはほほえましい光景でした。

しかし司祭職に携わる者としては、聖堂内の公祈祷、また洗礼、婚配、永眠などの諸祈祷も印象深い事でした。今もそのひとつひとつの喜びや悲しみが甦えつつ、それらは終生の宝となりました。また約一〇年にわたって発行された「函館ハリストス正教会カレンダー」や「聖堂写真集」も大切な宝となりました。

しかし、罪僕の在任期間中の最も印象深い出来事は、二〇〇〇年（平成一二）のモスクワ及び全ロシアの総主教アレクシイ二世聖下のご来臨でした。五月一二日、豪雨の函館空港にキリル府主教座下（現、総主教聖下）など随行員一行と共に到着された聖下に、出迎えた神品一同祝福を頂きました。その後聖堂でモレーベンを献じられた聖下は、満堂の神品、信徒に向かって、「亜使徒聖ニコライによってまかれた正教の種はこの国に実を結びつつある」と語りかけられました。



85 総主教アレクシイ二世聖下と長司祭イオフ馬場登師(右) その右、キリル府主教座下(現、総主教聖下)

時代を迎えました。

その後二〇〇八年(平成二〇)、罪僕イオフ馬場神父は休職し、新たにニコライ神父様が赴任されて、函館教会も新しい活動が始められました。筆者も会報等でその景況を拝見して陰ながらエールを送っておりますが、教会が飛躍を求める時、そこに問題や悩みが生ずるのは不思議なことではありません。しかし、幸いな事に函館は聖ニコライによる正教の伝統に養われた教会であります。日本のイエルサリム教会とも呼ばれております。故に、そうした伝統に養われた「函館ハリストス正教会」が、この聖ニコライ渡来一五〇年を契機に更なる飛躍をとげられますように祈念して、拙いながら祝辞とさせていただきます。

二〇一二年一月吉日

事実、函館に播かれた正教の種は、仙台を揺籃の地として、東京から全国へと伝播していきましたが、聖下が訪日第一歩を函館に記されたのは、そうした歴史的な背景があつての事だと思われれます。その後会館に移られた聖下は、子供たちを膝に抱き上げられたり、信徒にやさしく語りかけられて、誰もがその温かなお人柄に感銘を受けました。

もちろん筆者にも忘れ得ぬ一日となりましたが、その慶事と前後して、ペトル有原主教座下の訃報が伝えられ、函館で埋葬式が行われる事になりました。ペトル師は日本の首座主教の大任に立向かおうとしていた矢先だっただけに、その無念さが偲べれます。そこで五月二十七日の臨時公会は新たにダニイル主代主教座下を府主教候補に選出し、その後、アレクシイ総主教聖下の祝福を得て、わが国の正教会は新しい

聖ニコライ渡来一五〇年を迎えるに当たって

伝教者 イシドル中居真行

聖使徒日本の大主教聖ニコライ渡来一五〇年の記念すべき年を、聖ニコライが日本で初めて開教された函館で迎えることができる幸運は神恩以外の何者でもなく、罪僕にとっては望外の喜びであり、深く神に感謝を捧げるものであります。

聖ニコライの渡来一五〇年。これは単なる数字の問題ではないことを私達は認識しなければならないと思います。

私達は今、この一五〇年は如何なるものであったかを、心を新たにして検証してみる必要があるのではないのでしょうか。

外国への開港間もなく、外国人への対応の仕方も知らなかった日本。しかも、キリスト教禁止の時代に渡来された聖ニコライの御苦労とはどんなものであったのだろうか。

聖ニコライを斬りに来た尊皇攘夷の武士、そして神官であった人間を授洗者第一号とし、やがて聖職者として受け入れた聖ニコライ。更に、少数の教役者にも拘らず、またキリスト教への迫害の強かった時代に、三万余の信者を獲得した聖ニコライの偉業。勿論、神の恩寵のもとであったのは当然ではあるけれど、その原動力は一体何に由来したものであったのか。

今、渡来一五〇年を祝うに当たり、私達はつぶさに聖ニコライに学び、反省し、教勢の伸展のために働く決意を新たにしなければならぬのではないのでしょうか。

函館ハリストス正教会史発刊に寄せて

セルギイ下田行孝

聖ニコライ渡来一五〇年の記念すべき年に、かねてから懸案でありました函館正教会の通史を「函館ハリストス正教会史」として上梓できましたことは、刊行のご祝辞を頂いたのみならず、集輯に当たり明治・大正期の貴重な文献や写真などの資料をご提供下さいましたセラフイム主教座下を初め、全国の教会、信徒、関係者各位のご協力の賜物であり、函館教会の信徒を代表して厚くお礼申し上げます。

それまでの封建社会から近代国家への脱皮をめぐり、幕府と諸藩が激しく対峙していた幕末の一八六一年（文久元）に、修道司祭ニコライがロシア領事館付属聖堂付司祭として箱館に渡来し、なおキリスト教弾圧が続いていた一八六八年（明治元）に澤邊琢磨、酒井篤礼、浦野大蔵が洗礼を受け、わが国のハリストス正教会発祥の地となった、ある意味でドラマチックな初期のプロローグは、いまや伝説として全国的に定着しているのが実情であります。

ただ残念なことに、函館教会にとって、一番教勢が発展した明治期の資料、なかんずくメトリカを一九〇七年（明治四〇）八月の大火で初代の聖堂共々焼失したことが、その後たびたび持ち上がった通史としての教会史編纂にブレーキとなって来たことは否めません。

このたび発刊にこぎつけた一五〇年史は、二〇〇八年（平成二〇）函館正教会管轄司祭として着任されたニコライ・ドミートリエフ神父様のご指導の下、執事会の決議をもって編集委員会がたちあげられ、前出のセラフイム主教座下ご提供のものを始め、各教会、図書館、博物館など、あらゆる伝で関係資料を収集・分類、

基本となる年表を作成しながら、共同執筆でこの教会史を完成して下さいました。

発刊に当たり、資料収集、編集全般にわたるアドバイスを下さった函館市中央図書館館長長谷部一弘氏、困難な編纂作業に携われた諸兄弟のご努力に対し心から感謝申し上げます。

私と教会の出会い

ソフィヤ村井幸枝

私と正教会の出会い、かれこれ六〇年ほど前に遡ります。当時女学生でした私は、昼食時間にそっと校舎を抜け出して隣りの教会の庭に入り、そこでお弁当を食べながら友と語り合うのがとても楽しかったです。そこからは街が一望できまし、また美しい聖堂も目の前にあつて、とても素敵なロケーションでした。

しかし教会の聖堂の中に入ったことは一度もなく、その頃の私にとって正教会は、近くて遠い存在でした。それがあつた時、思いがけない転機が訪れました。それは村井との結婚が決まり、その人が正教会の信者だったからです。その時より厨川神父様から教理を学び、洗礼を受けるに到りました。ああ自分はこの教会の信者になつたのだと、不思議な感慨を覚えました。

聖堂内には、これまで見たことのない十字架や美しいイコンがたくさん飾られていて、それは荘厳な雰囲気でした。そしてその中で行われる祈りや、殊に美しい聖歌に心を揺すられました。もちろん当時も今も人には苦しみや憂いも多くありますが、聖堂でのお祈りにあずかっていると、そうした苦しみや憂いもすつ

と和らげられていくことを覚ええました。

こうして教会生活にもなじんでいく中で、馬場神父様の時に婦人会長を仰せつかり、拙いながら一〇年余り勤めさせていただきました。当初は、さて婦人会とは何を目ざして活動を進めていくべきものか、いろいろと考えさせられました。その中で何かにつけて優しく助けてくださった馬場マトシカのお力によって、婦人会は教会のお母さん役ではないかと思いつきました。主にあつて教会は、一つの家族だからであります。

そこで皆が心一つにして聖堂でのお祈りにあずかれるように、いろいろな苦業も分かち合えるように、と願いつつ活動に携わってまいりました。聖堂や境内地の整備や美化を心がけ、会員が分担して、清掃や四季折々の花を植えることなどを行ってきました。これは信徒の皆様ばかりか、教会を訪れる方々の目を楽しませることもなりました。

さらに九〇余年を経て老朽化した信徒会館。これも執事会や信徒の方々と力を合わせて、立派な新しい信徒会館の成聖を見るに到りました。

これは信徒の諸活動のみならず、宣教のためにも大きな力になると思います。「宣教」といいますと、教会は信徒のものであるとともに全ての人々のものである、と言われます。そうであれば、私達はより多くの人々にハリストス正教会の存在を知らせ、みずからもその信仰の喜びが招くように求められていると思いません。私もまた、外部から正教の信仰に導かれた一人であります。かくして受洗以来、四八年の歳月が流れました。

教会は、亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来一五〇年を迎えましたが、私はその歴史の三分の一、約半世紀の教会生活にあずかせていただきました。神の祝福に心からの感謝を申し上げますとともに、私達の正教会の信仰が、子から孫へ、さらに多くの人々に受け継がれていくことを祈念しております。

聖堂での祈りの四〇年

アンナ森もと子

四〇年まえのその日は、確か冬の寒さの厳しい夜だったと思います。扉を開けて入った途端、目に映った赤い炎の揺らめき、うつすらと煙った堂内に充満するなんともいえない香りと響く祈りの声。それが函館ハリストス正教会の聖堂でした。結婚が決まり、洗礼を受ける準備の勉強会に訪れた時の光景です。これまで目にしたことのない異空間という第一印象でした。

教会と言うと、カトリックの幼稚園に一年通い、日曜学校やクリスマスの時の思い出はありましたが、それとは全く違う教会（聖堂）に出会った瞬間でした。

その時から四〇年、私達の婚配から始まり、二人の娘達もこの聖堂で婚配式を挙げ、また孫達も洗礼を受けました。諸々のモレーベン、義父の埋葬式やパニヒダ等々、家族の歴史を刻んできました。

振り返ってみると、喜びも悲しみも苦しい思いも、聖堂で祈り、感謝をし、助けを求めてきたように思います。この聖堂に出会い、多くの神父さま、信者の方々と出会い、別れ、歳月が流れ、今もその歩みの途中なのだと思いを新たにしています。

函館の観光シンボルとしての函館教会は、全国各地から人々が訪れます。訪れる人々は、観光目的あるいは様々な思いを抱いて教会を目ざして来ているのだと思うのです。一瞥して出て行かれる人、長い間座してアイコンを見つめる人、涙する人。それぞれが聖堂という場所で祈り、問いかけをしているのかもしれない。聖堂拝観当番の時に見かける様子です。私達も共に静かに見守ります。

穏やかな表情になって去っていかれる際に、聖堂の中に満ちている、言葉では表現できないものを感じるのです。今日もまた人々が坂を登って聖堂の扉を開け、新たな出会いをすることでしょう。

聖堂公開への道

イオシフ 落合良治

春の晴れた日。私が洗礼を受けた記念すべき日、一九七三年（昭和四八）四月一六日。朝八時に信徒会館に着きました。室内はまだ寒く、石炭ストーブが小さな炎を上げていました。代父であるティホン伊藤真志雄兄より聖名はイオシフと告げられました。

高校の恩師厨川先生が神父をされている教会で、高校時代の友人と庭の草刈りや枝切り等の手伝いや、教会の行事に参加したり、月に三回程のボランティアをしました。二五歳になり、洗礼を受ける決心をしてこの日を迎えました。その夜は神父宅で祝宴が開かれ、一生の思い出となりました。

この年の降誕祭の祝賀会で、厨川神父より来年の四月より聖堂の大修復工事が始まるとの話がありました。一九七四年（昭和四九）四月、函館の名誉市民であるジョージ・P・リバノスさんの寄付により聖堂の修復が始まりました。足場が組まれて五月中旬より本格的に工事が進み、激しい音を立てて壁の汚れをドリルで削り、下地のレンガが見えるほどになりました。夏の終わり頃には白セメントの工事が本格化して外壁もきれいになり、石段も直し、十勝沖地震でひびの入った石垣も修復されました。予想を超える時間を要しまし

たが、一〇月末までに無事に修復工事は終了しました。そしてこの時NHK函館放送局より年末の「行く年来る年」で教会を紹介したいとの話があり、NHK、市役所等の関係者で準備が始まりました。

教会としては修復も終わり、NHKの全国放送もあるので、聖堂の公開を決定しました。初めてのことで、どのように公開すべきか高島執事長のもと皆で話し合いました。正月三が日を公開することにし、往復はがきによる申し込みとしました。一月一〇日に新聞社、テレビ等のマスコミの報道があり、二月五日の締め切りには全国より三〇〇〇通を越えるはがきが寄せられ、山のように積まれました。予想を越える数の多さに驚きながらも返信のはがきを出し、公開に向けての準備を進めました。

一月三十一日、NHK「行く年来る年」の準備が着々と進められ、聖堂は照明に照らされて白く浮かび上がり、美しい輝きを放っています。一二時少し前に聖堂内の様子が全国に放送され、神父の高く掲げた十字架と鐘の音が鳴り響き、無事に生中継は終了しました。

元旦の聖堂公開のため朝八時に教会へ行くと、驚きました。一〇時の公開予定なのにすでに大勢の人が並んでいるのです。末広町の五島軒の近くまで並んで待つ人の列に驚き、予定を早めて九時三〇分に聖堂の扉を開けました。一〇〇人くらいずつ聖堂内に入り、神父の話を熱心に聞いていました。三日間で一七〇〇人を越える人が聖堂公開に訪れ、現在の聖堂公開の基礎となりました。

多くの皆さんの協力があり、天候にも恵まれ、無事出来たことを今も神様に感謝しております。今後の教会のためにも、過去の経験を生かし、更なる発展を願うものです。

感謝

イグナティ増田吉蔵

巫使徒日本の大主教聖ニコライ渡来一五〇年を心よりお祝い申し上げます。

私は、一九四八年（昭和二三）に近藤神父様から洗礼を授けていただきました。

今は函館の顔にもなっている聖堂も、当時は漆喰の外壁が剥げ落ち荒廃した感じでした。一九六三年（昭和三八）まで教会の敷地内に住まわせていただきましたが、その間雪の日は朝三時に起きて教会の正門から聖堂の入り口までの除雪、雪が解けてからは敷地内の樹木の剪定などの奉仕をさせていただき、今は懐かしい思い出となっています。それらの樹木が今は大木となっているのを見ると、感慨深いものがあります。

洗礼を授かった当時は正教会の教えなど全く無知の私でしたが、まわりの信者の方々が優しく接していただき、主の前にひざまずく自分の支えとなっております。

私も現在九五歳になりました。病氣入院など何回かありましたが、お陰様で健康に恵まれ、月三回の聖体礼儀には電車に乗り教会までの坂道を歩いて参拝していますが、これもみな主の恩寵によるものと深く感謝しております。

これからも健康でいる限り、主に感謝し、敬虔の心を持って、参拝を続けたいと願っています。

ハリストス正教会との出逢い

タイシヤ高井醇子

二〇一一年は聖ニコライの渡来一五〇年に当たる。私は一九五三年（昭和二八）に結婚して洗礼を受け、信者となった。思い出すままに筆を執りたい。

私は仏教徒の家庭に生まれ育った。結婚した高井家では、夫の祖父である高井栄司が長野県松代の出身で、明治の初めにニコライ大主教が松代に巡教した折に一家で洗礼を受けた。夫の父義喜久と一歳下の弟萬亀尾が、小学校を卒業して従兄弟と三人で上京、神学校に入学したという。また夫の母方の祖父沼辺愛之輔は、開校された伝道学校に入学、その後退学した（函館市史編さん室に直筆の入学願、退学願の資料が残されており、故清水恵さんよりコピーを届けていただいたことがある）。一八七二年（明治五）九月一四日に東京で最初に行われた洗礼の一〇名の一人として、セルギイ沼辺愛之輔の名前がある（「聖人ニコライ事跡伝」）。その後本会の書記として、ニコライ大主教のお傍でお仕えした。

義母オリガ利可の話によると、幼い頃両親に連れられて教会に行くと、ニコライ大主教が幼い母の頭に手をのせて下さったが、その手の大きかったこと頭に傘をかぶせたようであった、と何度か聞かされた。義母は笹川常吉神父に洗礼を受け、女子神学校に学び、卒業後同校で教鞭をとったという。

大正末期から昭和初期に生を受けた私たち兄弟姉妹は、第二次世界大戦の影響を諸に受けた。長兄は一九四五年（昭和二〇）五月一八日に、二三歳でフィリッピンのネグロス島で斬込隊として戦死した（同隊の生還者の証言）。次兄はそれより前の三月一七日に一八歳で硫黄島で玉砕。私は旧制高等女学校で援農、勤労

今週の聖句

主は悪を憎む者を愛し、その聖徒のいのちを守り、これを悪しき者の手から助け出される。

詩篇九七篇十節

86 井の高筆聖句
伊安直夫の
武夫今週

奉仕、学徒動員とほとんど勉強することができなかつた。入
学して音楽部に入り、母が家事をしながら口ずさんでいた「旅
愁」や「埴生の宿」等を教わるのを楽しみにしていたが、軍
歌一色の時代になっていた。音楽の先生がカトリックの信者
で、元町のカトリック教会でのお祈りの際に一度だけ讚美歌を歌った記憶がある。

初めて聖堂で聖歌を聞いた時の感動は忘れることが出来ない。聖体礼儀ということも知らず、初めて聞く歌に心を奪われ、聖歌隊の仲間入りが出来るようにと来る日も来る日も「天主経」を練習した。何とか歌えるようになった時、聖堂で小さな声で合わせて歌った。そして当時アルトの加藤百合子さんに声をかけられ、未だ自信がなくてお断りしたが結局聖歌隊に入ることになった。聞きながら声を出して力をつけていくようにと言われ、聖歌隊の一員になった。楽譜をお借りして手書きで自分の楽譜を作り、一生懸命練習した。

今から二七、八年ほど前と思うが、一般信徒対象の聖歌研修会が何度か行われた。講師は大川神父様と仙台の岡崎先生で、休憩時間に『イルモス』は初めてだったので晩祷の前に練習し、帰ってから翌日の聖体礼儀のためにソプラノを練習するのですが八調まであるので大変です」とお話した。すると岡崎先生は、「そんなに練習されるならそれは指揮者冥利につきます」とのお言葉をくださった。大斎の楽譜も手書きで作り、聖土曜日のお祈りが終わった時に感極まってマトシカと手を取り合い、涙をボロボロこぼしたこともあった。

夫は仕事の関係で留守が多く参拝することが少なかつたが、定年になって聖書勉強会にも出るようになり、何かお手伝いすることがあるならと神父様にお願ひし、模造紙に天主経、お祈りの言葉、今月の予定表を書いて信徒会館の壁に張った。また、聖堂の外の掲示板に「今週の聖句」を毎週書いて貼り出し、通りがかり

の方が声を出して読んでいたという。また私は、自己流ながら司祭・堂役の祭服や祭台覆いなどを縫わせていただいた。

晩祷、聖体礼儀、大斎、祭日等の御祈禱に参拝させていただき、聖歌とのかかわり、岡崎先生よりいただいた一言など、すべてハリストス正教会との出逢いは私の一生の宝である。

最後にイオアン・高井武夫直筆の「今週の聖句」(前頁参照)を掲げさせていただきます。

父から受け継いだ信仰

アントニーナ宮崎ミツ子

父は一九一二年(明治四五)、一六歳で神学校へ入学しました。北海道の岩内出身で、町をあげての推薦だったと聞いております。その頃の凛々しい写真が私の手元にあります。当時の写真の撮り方なのか、上半身裸で十字架を首から下げ腕を組んでいます。私は父の生い立ちを何も知らず、さみしいことです。神学校を卒業すると父は民間へと進みました。水上警察の外事課に勤め、函館の全盛時代を活躍したことでしょう。一九三七年(昭和一二)、私が小学二年生の時、仕事の関係で満州の新京へ渡りました。あの広大な土地で七年を過ごし、終戦を迎え函館に帰ってきました。

父が司祭になった一九四七年(昭和二二)「ニキタ近藤昇太郎神父」、私は一七歳でした。父が心を決めるまでに精神的な苦しみがどれほどあったのか、それまでの私は宗教や信仰などまるで意識をしたことが無く、

理解もせず、に恥ずかしい思いをさせてしまいました。戦後の苦しい生活の中、編入試験を受けた学校も卒業し、上磯正教会や伝教者ワシレイ大村夫妻には何かとお世話になり見守って頂いたことを心から感謝しております。司祭という重責を負いながらも家庭での父はとても優しく、年の瀬には煮染めを作るなど手まめな一面もありました。私の子供達は父が遊びに来るのをそれは楽しみに電車の停留場まで迎えに行きました。信者さんに作ってもらったという巾着を常に持つていて、その中にはお菓子が入っていたのを知っていたのです。

老後は私達の情愛のもとにと望んでいたようですが、父はアメリカへ出発しました。聖ティホーン修道院での生活の後、更に遠いアラスカの地で祈りと勉強に時間を費やしました。尊敬する主教様や在留日本人の方々に歓迎され支援を頂きました。シトカの街は北海道と似た自然豊かな環境で、父の慰めになっただろうと信じております。

時の流れは早いもので、私も心の準備期間に入りました。常日頃から信徒として持つべき信仰を考えております。正教要理がわからなければ神父さまが優しく教えて下さり、急がず正しく学びましようと言ってくださいます。教会生活をいかに過ごすか、自分の心を磨いていきたいのです。

ある時、父がつぶやいた言葉があります。

「自分の信仰を守ってくれる子であって欲しい。」

幸いにも父は自分が勉強したノートを私に残してくれました。これはどんな贈り物にも勝る宝で、不勉強な私へのサインであると受け止めています。

昔を振り返ると、懐かしく忘れられない光景があります。教会の西門、道路を挟んだ向こう側に遺愛幼稚園があります。そこに合歡木ねむの木があり、枝が交叉してアーチになっておりました。五月になりますと可愛いピ

ンクの花が咲き、その香りが忘れられません。境内には墓もたくさん咲いておりました。

父が管轄していた頃の青年達は、私の思い出深い道を歩き教会に通いました。門を入ると胸に十字架を描き、自分を戒め、また何が出来るかを考え希望に燃えておりました。神様の恩祐に護られ、教会でのお祈りや人との交わりの中で受けた愛は、温かな記憶となって忘れることはありません。

悲しい事件も多い昨今ですが、いつも愛に溢れる世であって欲しいと祈っております。

教会の思い出から

ルキヤ西橋曜子

聖ニコライ渡来一五〇年に際しまして、ニコライ神父様より寄稿のお声をかけて頂き、不肖乍らお受けするに至りました。年を無駄に重ねただけの私が何を書いたらよいか……。しばし思い巡らせましたが、教会の歴史の一端ということで我が家の信仰の始まりとなった祖父の事を記し残すことをお許し願います。

私の祖父はイサク増田作太郎と申します。明治から終戦までの半世紀、函館、有川教会を管轄しておられたアンドレイ目時神父様とモイセイ白岩神父様のもとで詠隊教師として勤めました。

祖父は東京大聖堂の聖歌指導者デミトリイ・リヴォフスキイ師より音楽の手ほどきを受け、ヴァイオリンや声楽を学んだ後、函館へ赴任致しました。教えを受けた師に倣い、祖父もヴァイオリンを使って聖歌練習を行いました。

家族の話によると、大正時代の教会は異文化に触れられる場所として音楽家や画家、詩人、歌人など文化人のたまり場でもあったそうです。祖父はとても柔和で穏やかな性格の持ち主でしたので、来る人を拒むことなく受け入れ、西洋音楽の知識、演奏技術を伝授したのだろうと思います。生徒の希望もあつて教義所を設け、旧函館区公会堂で「増田音楽会」として演奏会を開いたのもその頃のことです。

祖父は、信徒の引き合わせで蠟燭問屋の娘ワルワラ孝と結婚し一男二女に恵まれました。子供達も幼い頃から音楽や楽器を教わり、人前で歌うことも度々ありました。次女である私の母は、正教女子神学校最後の卒業生です。函館正教会にも女子神学校の卒業生は何人もおり、白岩神父様と作太郎の娘達が聖歌隊のソプラノとアルトで美声を響かせていました。母は声量あるソプラノで、歌にとっても厳しい人でした。娘の私が上手に歌えるようにと合唱団の入団を勧められたのが機となり、この年になっても尚、市内の合唱団の片隅で歌わせて頂いております。

父は祖父が結成した増田音楽会の一員で三俣保暁といひます。バンドマスターで弁士でもあり、名前の読み方も仕事によつて使い分けているような人でした。いつの日か函館に音楽学校を作りたいという夢を持っていましたが、私が五歳の時に病死し、以来境内に住む祖父達との同居が始まりました。

幼い頃を振り返ると、教会ではよく手伝いを致しました。ランパードの油に火をつけたり、ススの汚れ落としなど数も多く大変でした。ご祈祷の前には石炭小屋から石炭を運ぶのが兄と私の仕事でした。境内で遊んでいると祖父の部屋から聞こえてくるヴァイオリンの音は今も懐かしく思い出されます。

学校ではクラスにクリスチャンがいること自体珍しく、「耶蘇（ヤソ）！」とからかわれ悔しい思いをしたこともありました。同級生に追いかけれ一目散に境内に逃げ込む。信徒にとつて境内は「安住の地」でした。

戦時中は憲兵が監視のために門前や家の前に立ち、信徒も容易に出入りすることができなくなり、ご祈祷は境内に住む者だけで行なっていたようです。聖パンや乳香は勿論、物資も不足し苦しい時代でした。

戦争が終わると戦地から戻った青年達が教会へ来るようになりました。キリスト教ブームなどもあって同世代の若者が集まり、札幌正教会の青年会と一緒に青年大会が行われるなど教会にも活気が戻りました。

その頃の青年会がきっかけとなり結婚に至った信徒も随分といました。当時から馴染みのある方達と共にご祈祷に与り、互いを思い合い、励ましあいながら教会に通うことは大きな喜びになっています。

戦後の印象深い出来事は、やはりドン・コサック団が函館に来たことです。函館駅は出迎えの関係者や見物人ですごい人でした。ニチロ会館で演奏会を行い、聖堂にも足を運んでくれました。歌ってくれた聖歌が何であったか記憶も遠くなりましたが、素晴らしい歌声に圧倒されました。あの感動は今も忘れられません。また指揮者のセルゲイ・ジャローフ氏が祖父と同じように各パートの間を歩き来して音を示すのを見てとても驚きました。ロシアから日本に伝えられたものの一面を目の当たりにした瞬間でした。

祖父は終戦を前に永眠し、間もなくして私は母と共に境内から住まいを移しました。それまでの暮らしは特別な環境にありましたが、函館正教会のために尽くされた白岩神父様や聖歌指導に人生を捧げた祖父の姿から学ぶことは多く、また母の叱咤激励のおかげで今日の私があると思えるようになりました。気づいてみれば祖父よりも長くこの世に生きておりますが、先に逝った家族に報告したいことはたくさんあります。聖堂は国の重要文化財となり、コンサートも行えるホールを備えた信徒会館もできました。夢に思っていたことが現実になり、ひとえに主の恩寵と歴代の神父様、信徒の皆様の努力の賜です。私もこれからの日々を感謝の気持ちで忘れずに過ごして参りたいと思っております。

第三部 函館ハリストス正教会の諸相

重要文化財としての復活聖堂

麓 和善

名古屋工業大学大学院教授

一 初代復活聖堂

一八五八年（安政五）一月五日、ロシア領事ゴシケーヴィチとともに、修道司祭フィラレートが箱館に着任した。当時、ロシアは正教会を国教としていたため、領事館を外国に設けるときには司祭を派遣しており、当初は領事館付き司祭として、ワシリイ・マホフが予定されていたが、ワシリイ・マホフは領事一行と同行することができず、その代わりに、シベリア小艦隊所属の司祭であったフィラレートが、臨時管轄司祭として着任することになったのである。その後、ワシリイ・マホフは、息子イワン・マホフとともに一八五九年（安政六）七月一九日までに着任している（第一部第一章「初代ロシア領事ゴシケーヴィチの着任と初代教会」参照）。

領事館の施設として、まず実行寺の既存建物内が間仕切って貸し渡され、一八五九年（安政六）正月二〇日に同境内地に三間×五間の「祭祠堂」が建設された¹。同年二月二十八日、領事ゴシケーヴィチは、箱館奉行に対し、大工町上の地東西四〇間南北五〇間（現在地）のロシア領事館予定地に、幕府からの許可がおりるまで、仮の建物（領事館）を建てたい旨申し入れている²。

そして翌一八六〇年（安政七・万延元）三月には、領事館を上大工町に建築中で、その敷地内は差し支えるため、いまだ実行寺内に残された「拝礼堂」を領事館の敷地の外に仮に移築したい旨を申し入れ、許可をもらっている³。この後ただちに工事が行われたようで、同年九月一日付の領事マキシモヴィチの「箱館日記」には、とんがり屋根の三階建ての領事館、二階建ての白い医者の家ほかに、小さな札拝堂が完成し、さらに子供たちの学校が突貫工事で進められている旨が記されている⁴。

一八六一年（文久元）六月に箱館に到着した修道司祭ニコライから、ロシアの宗務庁長官アレクセイ・アフマトフに宛てた一八六三年（文久三）八月二一日付の手紙には、次のとおり記されている⁵。

…一八六一年に私が当地に着任したとき、すでにここは「ハリストスの復活」という名の教会が建てられて成聖されておりました。かつてこの国に存在していたけれど滅ぼされてしまったキリスト教がふたたびこの国に現れてきているという意味をこめて、この教会を建てた人でありまた教会の執事長である領事ヨシフ・ゴシケーヴィチが、教会にその名を与えたのです。昨年この教会は南北に拡張されました。それでは縦横等しい長さの十字架のかたちをしております。教会のすぐ横には鐘楼が付設されております。現在教会は三百人を収容することができます。外側は漆喰塗りで、内部は麻布（カンバス）を張って白く塗り、その上に光沢出しを塗ってあります。現在教会では新たに細々した改修工事が行われております。…当時の日本人の鋳物工場がわれわれの鐘楼の鐘を作ってくれました。なかなかよい鐘です。小さいのが四個、大きいのが一個です。…

その後、一八六五年（慶応元）に領事館がイギリス領事館からの失火で類焼し、さらに翌一八六六年（慶



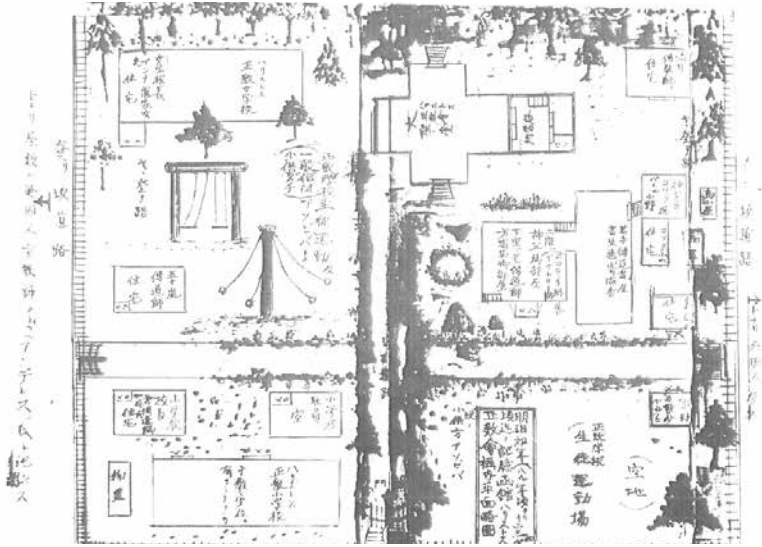
87 1875年～1879年頃の境内全景

応二)には病院も焼失するが、聖堂は宣教師住居・少女たちの学校とともに類焼を免れた。⁵⁾

以上、史料によって確認できるこの間の聖堂建設の経緯を簡単にまとめると、次のとおりになる。

- ①一八五九年正月二〇日に実行寺境内地に三間×五間の「祭祠堂」建設
 - ②一八六〇年三月に実行寺内の「拝礼堂」を領事館の敷地外に仮移設の申請と許可
 - ③一八六〇年九月一八日までに三階建て領事館、二階建て医者の家、小さな礼拝堂が完成
 - ④一八六一年六月までに「ハリストスの復活」という名の教会が成聖
 - ⑤一八六二年に南北に拡張されて縦横等しい長さの十字架のかたちになり、教会のすぐ横には鐘楼が付設。
- そして、明治期になると、古図・古写真が残っており、具体的にその姿を知ることができる(口絵写真1

3、写真87、図版88参照)。古写真に写っている聖堂が⑤と見て間違いなく、これは一八六二年に拡張されておおり、その前の状態が③④で、一八六〇年九月までに完成していたことになる。そうなると②の実行寺境内の「拝礼堂」を領事館の敷地外に仮移築するということが許可をもらっておきながら、実際には領事館の敷地内に小さな礼拝堂を建設したことになる。こうなると、実行寺内の「拝礼堂」を移築というのも疑わしくなり、移築という名目で、実際は新築した可能性も出てくる。このように申請と実施が異なるということは、この場合に限ったことではなく、



88 明治初期の境内配置図（1888年以降に信徒が少年期の記憶をもとに作成）
古写真（口絵写真2）と比較すると聖堂が実際よりやや西寄りに描かれている

当時の日本の寺社建築造修営においても同様に、寺社奉行への届け出は修理ということにして、実際には規模を大きくして新築するということがあった。幕末期の欧米列強とわが国の力関係を考えると、奉行所への届け出は敷地外に移築としながら、実際には敷地内に新築ということが十分考えられる。

いずれにしても、初代復活聖堂は、実行寺境内から現在地に移転・拡張を経て、徐々に正教会聖堂としての体裁を整えていった。その最終的な姿をみると、敷地は現在と同じ位置で、海（北）側に向かって緩やかに傾斜し、南を除く三方が道路に面している。そして敷地内を四分するように十字形の道路が設けられ、その北端が正門、東西端が脇門となる。

聖堂は、正門から南に延びる道路の突き当たりに位置し、西を正面として立つ。木造平屋建てで、正面の啓蒙所の上に鐘塔が付く。平面は、正教会に共通の十字形平面で、南北に突出部を持つ聖所を中心として、前方に啓蒙所と玄関の二室、後方に至聖所が取り付く。外壁は、前記の修道司祭ニコライの手

紙には漆喰塗りと記されているが、古写真を見ると、鐘塔が豎板張りであるほかは下見板張りで、白色ペンキ塗り仕上げである。聖所南北突出部および玄関北面に出入口があり、各室および鐘塔各面上下二か所ずつに両開きガラス窓が付く。屋根は、聖所南北突出部および至聖所が切妻屋根となり、その交差部分を正八角錐状の宝形造として、頂部に明り取りの両開き窓が付いた八角形平面のドラムがのり、さらにその上に十字架を戴いた葱花形のクーポルがのる。また鐘塔は宝形造で頂部に十字架がのる。玄関は片流れ屋根である。以上、屋根材はすべて金属板葺きである。内部は聖所しかわからないが、床に敷物を敷き詰めて、壁面は白色塗装である。至聖所寄りの床を一段高くして、その境目中央に階段、左右に手摺を設け、至聖所境には中央に天門を持つ聖障（イコノスタス）を置く。天井は交差部が外観どおりの正八角錐状のドーム形で、仕上げは壁面と同じく白色塗装である。

なお、聖堂のほかにも敷地内には、司祭館や正教会関係者の住宅が立ち、さらには正教女学校や正教小学校等の教育施設も充実していた。これらの建物もほとんど木造下見板張りペンキ塗り仕上げで、屋根は柿葺きもしくは板葺き石置き屋根である。これらの建物は、一九〇七年（明治四〇）八月二五日に、函館市西部市街地全域を焼き尽くした大火によって、灰燼に帰した（初代聖堂焼失については、第一部第一章「明治四〇年の函館大火」参照）。

二 聖堂再建

日本正教会の発祥という由緒ある初代聖堂が焼失したことは、正教会にとって一大痛恨事であったが、その四か月後には、境内の北東の一郭に仮会堂兼教役者住宅が建設された（九二頁図版52参照）。そして、翌

一九〇八年（明治四一）一月には、ニコライ大主教から函館の目時神父に宛てて、聖堂再建のための図解書が送られ、好みと建設用の予定募金額によって選択するよう伝えられた。一方、資金調達にあたっては、地元信徒の努力があったのはもちろんのことであるが、ニコライ大主教とその遺志を継いだセルギイ主教は、ロシアにも献金募集を熱心に働きかけ、その結果、アナスタシア・シネリニコワという一老寡婦から多額の献金を受け、いよいよ聖堂再建の願いが実現することになる（聖堂再建のための募金活動については、第一部第一章「聖ニコライと函館聖堂再建のための寄付金募集」参照）。

まず、一九一四年（大正三）八月二日、当時正教会聖堂の多くを設計監督していた河村伊蔵副輔祭がセルギイ主教とともに来函し、聖堂建設のための実地調査を行った。この河村副輔祭とセルギイ主教の来函予定を報じた一九一四年八月一日の『函館毎日新聞』朝刊には、「……その設計は塔屋（ケーポル）五個建の煉瓦造にて、旧聖堂に比し二倍大の設計にて、……〔中略〕……工中費総額四万円に上るならんと云ふ」とあるので、この実地調査は、すでにある程度できあがった設計を現地で確認するためのものであり、当初は木造で計画されていたが、前述のアナスタシア・シネリニコワからの多額の献金により、東京神田のニコライ堂と同じく煉瓦造の耐火建築に計画変更されていることがわかる。

そして、一九一四年（大正三）一〇月二九日付で「ハリストス正教会聖堂再建願²⁾」が、函館区長を通して北海道長官および函館要塞司令官宛てに提出された。以下にその要点を抜粋する。

新築聖堂構造並設備

- 一 材料 石材、煉瓦、木材、亜鉛引板
- 一 床張 祭壇室ハ地盤ヨリ高サ五尺 信徒席ハ地盤ヨリ 四尺ニ設ク

一 天井 八角寄天井ニシテ床上ヨリ參拾貳尺

一 窓 巾七尺高サ拾壹尺五寸貳ヶ所、巾貳尺三寸高サ五尺

七寸六ヶ所、総テ硝子張りトス

一 祭壇室六坪五合ニシテ祭壇ヲ設ク

一 信徒席四拾坪ニシテ敷物ヲ敷ク

一 鐘楼 六坪ニシテ三階トス（鐘未定）

新築費額

一 総費額金四万五千円

内訳

一 金四万貳千円 露国篤信者寄附金

一 金參千円 函館信徒寄附金

ノ

前記寄附金ハ臨時寄付ニテ、全部納附済ナリ。

〔中略〕

落成期日 大正三年十一月十日着手

大正六年十一月十日落成

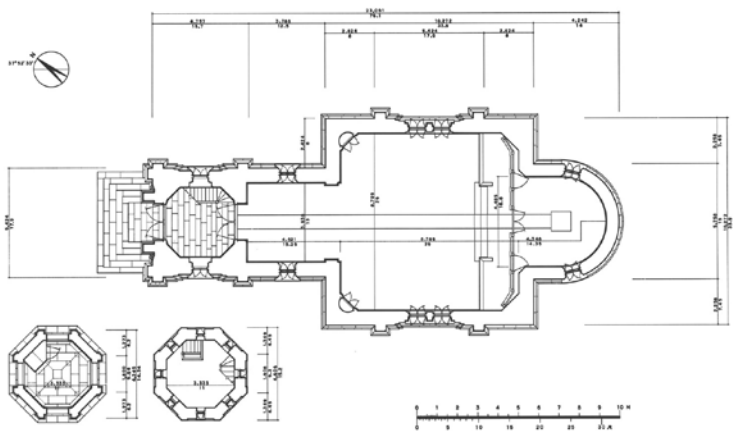
ここに記された設計内容と現在の聖堂を比較すると、落成期日が実際より一年一か月程遅く計画されていたことなど、細部において若干異なる点はあるものの、ほぼこの設計にしたがつて建設されたことがわかる。

そして一九一四年（大正四）六月二日付の「函館毎日新聞」（発行は一日夕刊）には、「……今近況を聞くに前月中に石工終り目下地馴し地業に着手し一方大工事は窓枠、入口枠、遣方等にて年内には煉瓦工事を終へ是非降雪期迄には鐘楼、聖堂及び土塀石垣の一部は本年内に終了すべしといふ……」と報じられているので、冬季間は基礎石等の石材の加工を行い、雪解けを待つて敷地の整地と地業に着手したこと、年内降雪期までに鐘塔・聖堂の煉瓦工事および土塀・石垣の一部を終える予定であることがわかる。

一九一四年（大正四）六月一〇日、いよいよ本格的に工事を進めるに先立って起工式を行い、また七月五日には基礎式の祈禱が行われた⁶。そして、九月一〇日頃には外部煉瓦壁が完成し⁷、一月までには屋根も完成して、冬を迎えるにあたって一旦足場が撤去された（口絵写真11参照）。この間、急速に工事が進んでいるが、これは冬期間の降雪を考慮してのことで、この時点では外壁と屋根が組み上がったに過ぎず、窓や扉はまだなく、また正面の石階段も据え付けられていない。内部の床組みや造作はこの後の冬期間に進められたのであろう。翌一九一五年（大正五）四月二二日の「函館毎日新聞」朝刊に、「……会堂工事概況を聞くに鐘楼階段工事にて教育者住宅及び門柱等も来月初旬より夫れ々々組立に着手すべく聖堂外部は全部出来内部聖段其他の装飾は露本国より材料を取寄するならんといふ」と報じられている。そして、この頃から再度足場が組み立てられて、内外壁の漆喰塗や塗装工事が行われたと考えられる。

一方、聖障の聖像（イコン）はロシアに作成を依頼していたが、宛名の間違いから予定よりも大幅に到着が遅れる⁸。しかし、心配された聖像も九月二〇日以前に到着し、全工事を完了して、予定どおり一九一五年（大正五）一〇月一五日に成聖式が盛大に挙行された^{6,7}。

「永遠なる神の宮」の願いを込めて再建されたこの聖堂は、煉瓦造平屋建てで西面し、正面玄関の上に八角形平面の鐘塔が付く（次頁図版89、90参照）。



89 聖堂 平面图



90 聖堂 南立面图

平面はやはり十字形で、一辺約九・五三メートル（真々寸法、以下同）の正方形平面の聖所を中心とし、前方に幅約四・七メートルの啓蒙所と玄関の二室、後方には半円形平面の至聖所が取り付く。

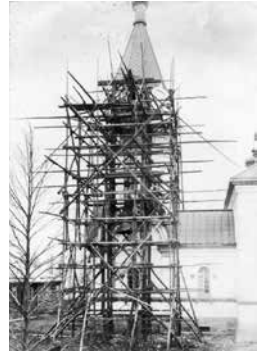
壁は煉瓦造で、外部には基礎・腰蛇腹・柱頭・軒蛇腹に石を貼り付けるほかは、白漆喰を塗って仕上げる。玄関正面は、柱形を作り出してその上にオジー・アーチ状の線形を作り、さらにその中に柱形を付けて一段低い半円アーチの庇を設け、両開き板扉を構える。玄関両側面と聖所両側面にも柱形を作り出してその上にオジー・アーチ状の線形を作り、その中に玄関側面では小さなアーチ形の、聖所両側面では二連のガラス窓を設ける。八角形平面の鐘塔は、第二層各面に矩形の小さなガラス窓を設け、第三層は各面上部にアーチを連ねて、一面おきに、四面を開放、他の四面を壁とする。屋根は、鐘塔が正八角錐状の宝形造で、頂部に十字架を戴いた葱花形のクーポールをのせる。啓蒙所は照り起り曲線の両下造とし、瓦棒葺である。聖所は宝形造で、頂部と四隅に鐘塔と同形の十字架を戴いた葱花形のクーポールをのせる。至聖所は啓蒙所と同じく照り起り曲線であるが、半円形平面に合わせて瓦棒が放射状に配される。以上屋根葺材は、当初亜鉛引き鉄板緑色ペンキ塗り仕上げであったが、一九六八年（昭和四三）の修理によって、人工緑青色銅板葺に改められた。内部は、玄関が石敷きのほかは、板張りでその上に花ゴザを敷き詰め、中央に啓蒙所から至聖所内宝座まで、幅約六九センチメートルの中央通路用絨毯が延びる。壁面は煉瓦積みの上に全面白漆喰を塗って仕上げている。玄関・啓蒙所境に両開き板扉を建て込み、啓蒙所・聖所境は開放とする。聖所は、至聖所寄りの床を一段高くして至聖所と等高とし、その境目中央に階段、左右両側に手摺を設け、至聖所境には壁面いつぱいの聖障（イコノスタス）を置く。天井は、聖所が扁平なドーム形、啓蒙所と至聖所がヴォールト天井で、白漆喰塗り仕上げである。

聖堂建設一〇年目の一九二六年（大正一五）一〇月に「聖堂成聖十年祝典が挙行され、これにあわせて漆

函館ハリストス正教会復活聖堂主要営繕年表

西暦	年号年	聖堂営繕事項
1859	安政 6	正月20日 実行寺境内に聖堂普請(「大日本古文書」)
1860	万延元	3月～9月 上大工町(現在地)に聖堂建設(「各国書翰留」)
1862	文久 2	南北に拡張して十字形平面となる(「明治の日本ハリストス正教会」)
1907	明治40	函館大火により初代復活聖堂焼失
1914	大正 3	8月2日 聖堂再建実地調査のためセルギイ主教・河村副輔祭来函(毎・時)
		10月29日 聖堂建設許可願を函館区長に提出(教文)
		11月 予備工事に着手(時)
1915	大正 4	2月4日 石垣改築工事着手(毎)
		5月中に石垣工事終える(毎)
		6月10日 起工式(時)
		6月13日頃 コンクリート工事(時)
		7月15日 基礎式(時)
		9月10日頃 煉瓦壁ほぼ完成(毎)
1916	大正 5	11月 屋根完成、足場一旦撤去(写真)
		4月20日頃 鐘楼階段工事中(毎)
		5月頃 門柱組立(毎)
		9月20日以前 聖像到着、聖堂落成(時)
1926	昭和元	10月15日 成聖式(毎・時)
		10月以前 入口石階段・屋根・壁・ペンキ塗り・花ゴザ・絨毯他修繕(教文)
1928	昭和 3	11月28日 大鐘をニコライ堂へ送り、代りに大小6基の鐘が送られる(時・毎)
1937	昭和12	6月～9月 内外大修繕(時)
1942	昭和17	11月9日～12月11日 シャンデリア大小各1基・吊燭台4基・鐘大小6基・基礎換気口金物8箇所他供出(教文)
1955	昭和30	6月29日～8月7日 屋根・外壁・正面石階段等修理(教文)
1968	昭和43	9月～11月 屋根を銅板葺に替え、壁を修理する(教文)
		12月 ギリシャ人リバノスから鐘を寄贈される(聞)
1973	昭和48	鐘破損につき取り外す(聞)
1983	昭和58	6月2日 大鐘寄贈される
		6月2日 重要文化財に指定される
1985	昭和60	3月10日 小鐘5基寄贈される
1986	昭和61	5月1日 修理工事着手
1988	昭和63	10月31日 修理工事竣工
		11月6日 成聖式

典拠 (毎):「函館毎日新聞」(時):「正教時報」(教文)「函館ハリストス正教会所蔵文書」
(聞):聞き取り



91 大鐘 函館から東京へ
1928年11月26日

「司祭イオアン厨川勇の時代」参照。

また、復興中の東京復活大聖堂（ニコライ堂）に当聖堂の大鐘を送ることになり、一九二八年（昭和三）一月二六日に鐘塔南側の窓をレンガ下地から壊して鐘を降ろし（写真91参照）、その代わりに送られてきた大小六基の鐘が、一月一八日に設置された。⁶しかし、戦時下の一九四二年（昭和一七）一月頃これらの鐘とシャンデリア（パニカジロー）大小各一基・吊り燭台（ランパート）四基・基礎換気口金物八か所・門扉三か所他が供出された。²その後、鐘については、一九六八年（昭和四三）にギリシャ人から大鐘一基が寄贈されたが、一九七三年（昭和四八）に破損し、現存するのは大鐘が一九八三年（昭和五八）六月一日に、小鐘五基が一九八五年（昭和六〇）三月三〇日に寄贈されたものである。

以上、聖堂に関する主要営繕工事を年表にまとめると、右表のとおりとなる。

三 昭和の大修理

復活聖堂は一九八三年（昭和五八）六月二日に重要文化財の指定を受けた。このときすでに凍害による外

喰塗・屋根・入口石階段ほかの補修や、ペンキ塗り替え、花ゴザの敷き替え等が行われた。²その後、一九三七年（昭和一二）と洞爺丸台風の被害を受けた翌一九五五年（昭和三〇）にも漆喰塗り替えや正面石階段の据え直しなど、比較的大きい修理が行われ、^{2,6}さらに一九六八年（昭和四三）には漆喰塗り替えに加えて、屋根を亜鉛引き鉄板から銅板に改める工事も行われた（昭和四三年の修理については第一部第三章

壁漆喰塗の剥落および屋根の雨漏りなど、破損が著しく、早急に修理しなければならぬ状態であった。そこでまもなく修理が計画され、一九八六年（昭和六一）五月一日から一九八八年（昭和六三）一〇月三一日まで三〇か月を工事期間とし、工事費は約二億円（補助事業のみ）で「昭和の大修理」が実施された。

この修理では、破損部分の解体修理にとどめ、健全な部分は極力古い状態を残すという文化財修理の原則に従って、内外壁の漆喰塗り替え、屋根銅板葺および小屋組木部腐朽部分の補修、木部ワニス塗・ペンキ塗の塗り替え、聖障の聖像クリーニングなどを行い、また花ゴザ、聖堂内の灯具類や正門鉄扉・鉄柵を復原した。以下に主要工事についてその概要を記す。

漆喰塗

内外壁および天井が白漆喰塗り仕上げとなっていたが、特にデンテイルやオジー・アーチで飾られた白亜の外観は美しい。漆喰塗は下塗から上塗まで、数層塗り重ねるが、その補修にあたっては、破損の程度に合わせて、適当な層からの部分的な塗り直しで済ますことが一般的である。そこで、建物外壁各所において、下塗から上塗までの塗層を削り出し、その異同を比較することによって、後世の修理の有無を確認した。その結果、建設以来の七〇年間に、少なくとも四回は大規模な補修を受けており、また小修理も含めると八回以上にもおよびることが確認できた。したがって、その耐久性は一〇年未満ということになる。このように耐久性が劣るのは、冬期の凍害、すなわち漆喰に浸透した水分が凍結・融解を繰り返すことによって、加速度的に破損が進行するためである。外壁修理においては、アーチ下など破損の少なかった一部を除き、下塗あるいは斑直しから塗り直した。内壁・天井・蛇腹は比較的破損が少なかったので、破損に応じた層からの塗り直し、あるいは旧漆喰はそのまま残して、カゼイン白色塗料による表面の化粧直しにとどめた。

塗装

聖障木部前面およびその前方の木製手摺と階段、玄関（鐘塔）階段彫桁および手摺、玄関・啓蒙所出入口扉はワニス塗りである。また、聖所・啓蒙所の幅木にケヤキを模した板目模様、ペンキの木目塗が施され、玄関・啓蒙所出入口枠廻りおよび鐘塔二階幅木には、柾目模様のペンキの木目塗が施されている。以上は、いずれも当初の塗装であるので、クリーニングの後、ワニスを塗り重ねた。一方、各所窓廻り、聖所北西および南西隅の物入れ建具廻り、聖障背面、外部正面アーチ内聖像額縁にペンキが塗られていた。研ぎ出しによる塗層調査によって、当初の色と、数回におよぶ後世の化粧直しの塗り重ねが確認されたので、それぞれ当初の色に復した。

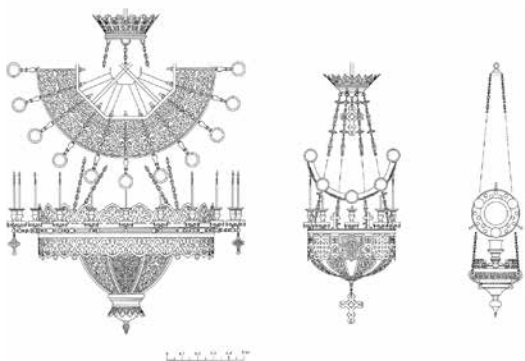
聖障（イコノスタス）

正教会聖堂内の聖所・至聖所境には、壁面いっぱい広がる聖障、すなわちハリストス・聖母子・天使・聖人および福音書の中の出来事などを描いた聖像（イコン）が縦横に並んだ障壁がある。聖像は、敬虔な画家——多くの場合修道士——が断食と懺悔と祈りの中で描いたもので、ラファエロやレオナルド・ダ・ヴィンチなどのいわゆる聖画とは区別される。本聖障は、縦三段横九列に大小の聖像が並び、下段中央が両開き扉の「天門」、その左（北）・右（南）二列横が片開き扉の「北門」・「南門」となっている。そして天門の上には「聖晚餐」が、さらにその上には本聖堂の記念聖像である「救主復活」の聖像がある。聖障本体はケヤキ材でできており、表面全体を精緻なレリーフで飾っている。これが額縁となつて、麻布のキャンバスに油彩で描かれた聖像が嵌め込まれている。従来からこの聖障の製作者については、聖障本体を東京の宮惣という宮大工が製作し、聖像はロシアの聖像画家によって描かれたと伝えられていたが、昭和の大修理にともなう諸

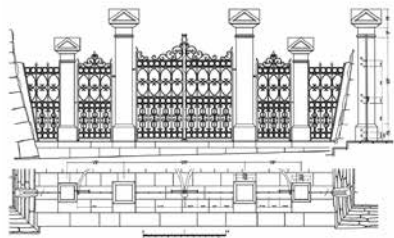
調査によつて、さらに詳しい製作経緯が明らかになった。修理工事では、聖像を一旦取り外して、画面に付着した煤や蠟および塵埃をクリーニングするとともに、製作手法の分析や絵具および下地組成の科学的成分分析を行った。そして、聖像取り外し作業中に、八点の聖像から、縁に付着した当時のロシアの新聞の破片が発見され、その新聞に使用された文字の中には、一九一七年（大正六）のロシア革命以後使用されなくなった文字も含まれていることから、聖堂建設に合わせてロシアで作成され、枠に貼り付けた状態で新聞紙で包み、日本に送られたことが実証できた。また、「宮惣」とは、当時、豪華な彫刻で飾られた神輿を多く手掛けた神田の宮惣のことである。

花ゴザ

修理前、聖堂の床には花ゴザ三枚の上にカーペット一枚が敷き重ねられていた。これは敷物が傷むたびに新しい物を敷き重ねていった結果で、下層のものほど古いといえる。しかし、床板に残る花ゴザの止め釘痕を調べると、残存する三枚以外にもう一枚分の止め釘痕が確認できた。一方、花ゴザを剥がしているときに最下層の花ゴザの下から、もう一種類別の花ゴザの断片が発見され、結局これが当初の花ゴザであることがわかった。この花ゴザは、幅八七五ミリメートル（二寸九寸、五八間）で、大柄の唐草文様を表面に捺染したものである。この断片をもとに忠実に復原し、床全面に敷き詰めた。なお、ロシア本国の正教会では、聖堂内は土足で、敷物はない。ところが日本においては、当聖堂のみならず、北鹿ハリストス正教会（一八九二年）、豊橋ハリストス正教会（一九一五年）他、現存する明治から昭和初期のほとんどの正教会聖堂において、当初は花ゴザ敷きであったことが確認できる。いずれの聖堂も、意匠的にはロシア・ビザンチン様式を志向しながらも、このように床仕上げは、日本独特ともいえる花ゴザ敷きとしたところに、草創期正教会



92・93 1926年～1933年頃の聖堂内部と灯具復原図



94・95 正門 復原図と成聖式記念絵はがき 1916年10月

聖堂の特徴があるといえる。

灯具

当初の灯具類は、一九四二年（昭和一七）一二月頃に供出された。しかし、古写真によってかなり正確に、その大きさとデザインを明らかにすることができたので、すべて復原した（写真92、図版93参照）。

まず、聖所シャンデリア（パニカジーロ）は、直径約一・五メートルで、薄板金の打ち抜き細工による唐草模様の透かしで飾られた本体部分から、放射状に二〇本のアームが延びて、その先端にロースク立てが取り付く。啓蒙所シャンデリアは直径約〇・六メートルで、聖所と同様に薄板金の唐草文様の透かしで飾られ、上部に八個の口

ソク立てが取り付く。聖障前の吊燭台（ランパート）は四基あり、現存する床置き燭台の上部とほとんど同じ意匠である。

正門

正門は、左右脇門付きの石造柱門である。中央柱間が約二・九メートル、左右両脇間が約一・四メートル、さらにその外側約一メートル離れて石垣となっている。当初は、中央一間が両開き鉄扉、脇門が片開き鉄扉、その外側一間ずつがはめ殺し鉄柵であったが、これらも一九四二年（昭和一七）一月頃に供出された。しかし、当初の門柱・敷石が残存しており、鉄扉・鉄柵の取り付いた痕跡が残っているので、これと古写真をもとに復原した（前頁図版94、写真95参照）。

四 結び

天然の良港を持つ函館は、一八五四年（安政元）開港以来、北の商都として栄え、異国文化を積極的に吸収しながら、函館文化ともいえるべき独自の折衷文化を生み出した。その名残を今に伝える元町界隈の一郭には、函館ハリストス正教会・カトリック元町教会・東本願寺函館別院・日本聖公会函館聖ヨハネ教会が四つ角に隣接して立っている。

その中であって、ロシア・ビザンチン様式の白亜の聖堂がひととき美しい函館ハリストス正教会は、幕末開港直後にロシア領事館に付属して木造の聖堂が建てられたことをもって草創とし、以来日本ハリストス正教会発祥の教会として知られている。

初代の聖堂は一八六〇年頃に木造で建設されたが、函館市西部市街地全域を焼き尽くした一九〇七年（明治四〇）の大火によって、灰燼に帰した。再建聖堂は地元信徒の努力とロシアのアナスタシア・シネリニコワという一老寡婦から多額の献金を受け、東京神田のニコライ堂のような煉瓦造の耐火建築で設計され、一九一六年（大正五）一〇月一五日に竣工・成聖した。

設計は、豊橋ハリストス正教会聖徒福音者馬太聖堂（一九一五年）・白河ハリストス正教会生神女進堂聖堂（一九一五年）も設計監督した河村伊蔵副輔祭である。これらの聖堂は、いずれも十字形平面で、正面から八角形平面の鐘塔をのせた玄関・啓蒙所・聖所・至聖所が一直線状に並んで共通している。ところが、豊橋教会および白河教会の聖堂は、木造建築で外観は下見板張りで直線的意匠であるのに対し、函館教会の聖堂は、煉瓦造で造形が自由であるため、オジー・アーチなどの曲線を多用し、ロシア・ビザンチン様式に忠実に洗練された意匠となっている。

また、聖堂内の聖所・至聖所境は、縦三段横九列に大小の聖像（イコン）が並んだ聖障（イコノスタス）が立ち、シャンデリア（パニカジロー）や燭台（ランパート）が金色に燦然と輝く。正教会特有の荘厳であるが、その中であつて床を日本独特ともいえる花ゴザ敷きとしたところに、草創期正教会聖堂としての特徴がある。明治初期にニコライ大主教や師から洗礼を受けたわづかの伝道者達が布教を開始するが、その頃は、まだ函館以外に聖堂はなく、民家を仮聖堂として利用しており、当然畳敷きであつた。畳敷きの部屋でも立つて祈祷するのには問題ないし、祈祷の後で司祭から説教を受けるに際しては、日本人の習慣として正座の姿勢をとるのが最も相応しく、むしろ畳敷きのほうが好都合であつた。そこで草創期聖堂の建設にあつても、その習慣を尊重して、畳敷きと土間の折衷案ともいえる床板の上にゴザ敷き、とりわけ洋風建築の内装として重要であつた柄物の絨毯に似た花ゴザを敷き詰めることになつたのであろう。

以上のように、日本正教会発祥という由緒を持ち、同教会の中でも最もロシア・ビザンチン様式に忠実な意匠で再建された聖堂が、これまで信徒に大切に護られてきた。さらに一九八三年（昭和五八）六月二日には文化財的・建築史的価値も認められて重要文化財に指定された。そして、一九八六年（昭和六一）五月から一九八八年（昭和六三）一〇月まで昭和の大修理が実施され、漆喰塗や屋根の銅板葺などの破損部分が修理されるとともに、花ゴザや戦時中に供出されたシャンデリアおよび正門の鉄扉などが、建設当初の状態に忠実に復原された。今後は信徒にとって大切な聖堂であるのはもちろんのこと、わが国の貴重な文化遺産として永久的に護り伝えられていくことになったわけで、まさに「永遠なる神の宮」といえよう。

注

- 1 「大日本古文書 幕末外国関係文書之二十三」 東京大学史料編纂所編 一九五二年
- 2 「函館ハリストス正教会所蔵文書」
- 3 万延元年「各国書翰留」北海道立文書館所蔵
- 4 「日魯交流史の人物 マクシモーピチと須川長之助」 井上幸三 岩手植物の会 一九八一年
- 5 「明治の日本ハリストス正教会」中村健之介 教文館 一九九三年
- 6 「正教時報」
- 7 「函館毎日新聞」
- 8 「函館新聞」一九一六年九月一三日夕刊

本稿は『重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂保存修理工事報告書』に最近の成果を加えて改稿したものである。

函館ハリストス正教会のイコンに見る「聖ニコライのイコン観」

大下 智一

北海道立函館美術館主任学芸員

一 新築時の函館正教会のイコンとその由来

現在、函館ハリストス正教会（以後、函館教会）の聖堂を訪れると、聖所正面のイコノスタス（聖障）を飾る三四枚のイコンをはじめ、時代、様式が異なる大小さまざまなイコンを目にすることができる。このうち、一九一六年（大正五）の新築当時より函館教会にあつたイコンは、縦三段あるイコノスタス三四点のうち、下段両端の二枚を除いた三二点と、もつとも重要な祝日である「復活大祭」に続く「十二大祭」を祝うための、「接吻イコン」と呼ばれる独立した額に入った二二点の小型イコンである。

現在の函館教会が建築されるきっかけとなったのは、一九〇七年（明治四〇）の大火により、当時の聖堂が焼失してしまったことによる。新たな聖堂の完成はニコライ没後の一九一六年（大正五）にずれ込むものの、再建計画はニコライ生前から進んでいる。一九〇八年（明治四一）には、函館の目時神父がニコライに手紙で、函館の信徒が教会の再建計画をたてたことを伝えている¹。ニコライも翌年にはペテルブルクのアナスタシア・ペトローヴナ・シネリニコワに手紙を書き、函館の教会建設に関わる寄進を頼んでいる²。さらに同年、セルギイ主教を函館に派遣その後函館の聖堂建設への寄進者を探すためロシアに派遣した。一九一二

年（明治四五）のニコライ大主教没後は、セルギイ主教が引き継いで計画を進めた。

イコノスタスのイコンについては、「正教時報」第五卷第二一号（一九一六年一月五日発行）に「聖障は始めて我が日本に於て作りたる全部楓の彫刻にて稍厚く塗りたる本地色なるが、聖障の高さは二丈三尺二寸、幅三丈一尺にて三層の組立てにて、聖障の聖像は露国の有名なる聖像画家の筆になり、従来我が国に於て見慣れたる聖像画とは其趣が異にし、単に絵画として之を見ても深き趣味を感じず可し」とあり、木製の聖障本体は日本で作られ、そこにはめ込まれるイコンはロシアで描かれたことがわかる。

一九八八年（昭和六三）からの修復の際にイコノスタスの状態調査が行われ、そこで、上部が半円、または三葉型円弧という複雑な形をしているにもかかわらず、日本で作られたイコノスタス本体にぴったりと形が合い、さらにそのうちの数枚が枠をあわせるために描き直していることから、日本で作った枠に合わせてイコンを発注したことがわかる。

「十二大祭図」は、日本人イコン画家、山下りんの手によるもので、こちらも一九一六年（大正五）の聖堂新築に合わせて描かれたものと思われる。山下りんは、一八五七年（安政四）、現在の茨城県笠間市に生まれた。一六歳で上京、浮世絵などを学んだ後、洋画を志し中丸精十郎のもとに入門。一八七七年（明治一〇）には、日本で最初の公立美術学校、工部美術学校に入学する。一八八〇年（明治一三）同校を中退、翌年ニコライによりペテルブルクに派遣され、ノヴォデーヴィチ修道院でイコンを学んだ。帰国後は、ニコライのもと、全国各地に竣功された教会のためイコン制作を続けた。そのイコンは、西欧の影響を受けた一九世紀後半のロシアイコンの状況を色濃く反映しているといわれている。

函館教会の「十二大祭図」は、一九六八年（昭和四三）、岡畏三郎氏の論文⁴などにより、公にその存在が知られ、山下りん研究の発端となった。以降、調査研究が進み、同様の絵柄のものが、上武佐（北海道中標

津町)、札幌、一関、福島にあることがわかつている。函館の同イコンは山下晩年の作で、札幌や上武佐のものとは比べると、厚塗りで筆あとを残すように、大まかな筆触で描いている。前述論文中、「大正の初め、二、三年頃から白内障を患い、この図の描かれた四、五年頃は、すでに視力も悪く作画にも差支えていたのではないか」とあるように、「全体に筆が重く、多少もたついた感じ」を受けなくもない。しかし、ホワイトを多用し混色の多い色彩を用い、たつぷりとした量感で描かれており、ダイナミズムや柔らかさも感じられる。その後、山下はロシア革命の影響による教団の財政的な窮乏、さらには自身の視力悪化により、一九一八年(大正七)に故郷笠間に隠遁する。函館教会のイコンは、ニコライにより育てられた日本人イコン画家山下の最晩年のイコンである。

二 聖ニコライの求めた「イコン」——ロシア帰国後の聖ニコライの日記より——

ニコライは、一八七九年(明治一二)から翌一九八〇年(明治一三)にかけて、来日以来二度目のロシア帰国を果たす。その大きな目的の一つが、日本での本山となる大聖堂、すなわち「ニコライ堂」建設の資金を得ることであり、聖堂には欠かせないイコンを集めることも重要な目的となった。そこでニコライは、聖堂建築の資金を集めるかたわら、イコンそのものを寄進してもらおうよう働きかける。さらに寄進してもらった資金で、日本の聖堂のためのイコンを発注する。すなわち、ニコライが日本の聖堂に見合うと思えるようなイコンを新たに制作させた。ニコライの日記にはそうした経緯も記されており、それはとりもなおさず、ニコライのイコンに対する知見や好みを伝える内容となっている。

「宣教団本部の建物の中の教会のために、ビザンツ様式のイコンが何枚かほしいという考えが、またしても激しく湧き起こった。……もし、ペテルブルグでよいものが描けるならば、値段が高くて、ぜひ注文しよう。イタリア様式のイコンは大聖堂にかけることにする。それはノヴォデーヴィチ修道院で描いてくれる⁵と書く。ニコライは、「ビザンツ様式」と「イタリア様式」のイコンのうち、日本の大聖堂に架けるイコンとして、いわゆる西洋画の描法に近い「イタリア様式」のイコンを選択、山下が後に留学するノヴォデーヴィチ修道院に依頼しようとする。その上で、それとは違う東方正教会において伝統的な「ビザンツ様式」のイコンを、値が張つても入手しようと考えている。

この後、ある寄進者が持つてきたイコンを、「おんぼろ」で「描かれているお顔が全然見えない状態⁶」として返却しようとする。しかし、寄進者は、「このイコンは分離派信徒たちがどんなに高くてもお金を払う⁶ものだ」と説明する。さらに同日、別の寄進者と話し合い、イコノスタスに嵌めるイコンの寄進を承知してもらい、その「イコンの種類」を決める段になって、次のようなやりとりがなされた。

「わたしは『ギリシャ様式』と言った。ところが、本当のギリシャ式画法というのは、不自然な顔の、古めかしい不細工な描き方のことで、わたしがギリシャ様式だと思つていたのは、『舶来（フリヤジ）画法』といわれるものだということがわかった。……かれの家にはいくつか祭壇があるが、そこに並んでいるイコンはすべてギリシャ式画法のものだ。われわれは、日本のイコンはきれいな描き方のものにしよつと決め⁶た。」

ニコライは自分が「ギリシャ式画法」と思つていたのは、実は「フリヤジ式画法」と呼ばれるものであったことを知る。本当の「ギリシャ式画法」とは、おそらく、ニコライは受け取らなかつた、伝統を固守し改革を拒む分離派（古儀式派）の人々が「高くてもお金を払う」イコンと同じものであつただらう。

ここでニコライがいう「イタリア様式」、「フリヤジ式画法」、「ビザンツ様式」、「ギリシヤ式画法」が、具体的にどのような様式のイコンをさすのか、その厳密な判断はむずかしい。「ビザンツ様式」、ないしは「ギリシヤ様式」を、現在、我々がイメージする伝統的なロシアイコンの様式だとすると、その実態は一九世紀には一般の人はおろか、聖職者の間でさえあまり知られていなかった。その代表的なイコン、アンドレイ・ルブリョーフの《聖三位一体》がクリーニングされ、もとの姿を現したのが一九〇四年（明治三七）のことである。

「フリヤジ式」と呼ばれるイコンは、一七世紀に入り、シモン・ウシャコーフのように、自然主義的な描写など、西欧の技法を取り入れて制作したイコンを指すのだろう。であれば、ニコライが「イタリア様式」と呼んだイコンは、一八世紀から一九世紀においてさらに西欧化が進んだ、例えばルネサンスやバロックの宗教画がそのままイコンに転用されているようなイコンを指すとも考えられる⁷。

いずれにしても、前述した二つの日記の内容をあわせると、ニコライはイコンの様式を三つの基準に分け、そのうち日本の聖堂のためのイコンを、「イタリア様式」のもの、ないしは「ギリシヤ様式」だと思っていた。「フリヤジ式画法」のものに決めようとしていることが推測できよう。

ただ、ニコライは、モスクワの大修道院大聖堂で見たイコンについて、「芸術的に高度なものだが、しかしどこかあまりにもリアルであった⁸」と記す。なかでも、救世主降架の絵については、「ここに描かれている救世主は硬直した死体以外の何者でもない。それは、自然のままをおどろくほど忠実に写したものであるが、神人とは思えないものだ⁸」と強い拒否感を示している。救世主を、肉体として過度にリアルに表現することは、神性の否定へとつながると考えている。

あわせてニコライは、ロシア人イコン画家を雇い、日本において新たなイコンを制作させるとともに指導

教師も兼ねさせ、自前の日本人イコン画家を養成しようとする⁹。実際に何人かの画家とあっているが、条件の合う人材は見つからなかったのか、イコン画家は来日していない。そのかわり、ノヴォデーヴィチ修道院が日本人女学生のイコン画習得の受け入れ先となり、一八八一年（明治一四）より山下りんが留学している。

そこで山下が受けた教育の内容は、山下が残した日記や模写などによって、その一端がわかる。

同修道院では、ペテルブルク・アカデミーの教授ヨルダンが指導にあたっており、その内容は、アカデミーやエルミタージュ美術館での模写など、西欧絵画のそれに倣っている。また、山下は「イタリア画」と「ギリシャ画」の狭間で悩むことになるが、実際に山下に「ギリシャ画」のイコンを描くよう指導したのは、同修道院の修道女でイコン画家のフェオファニアであった。ニコライは、この帰国時ペテルブルクに到着した三日後にこのノヴォデーヴィチ修道院を訪れており、早くから日本の教会のためのイコンを描くことは決まっていた。そのイコンを描いたのが、フェオファニアであろう。しかし、実際に日本に将来されたイコンは、後述するようにニコライが日本の教会のために選択した「イタリア画」ないしは「フリヤジ画法」と思われるものである。また少なくとも、日記を見るかぎり、ノヴォデーヴィチ修道院のイコンに対するニコライの受け止め方は、前述したように「イタリア画」である。

三 初期日本正教会のイコンと函館教会のイコン

—— 聖ニコライのつくった「イコン」群 ——

では、実際にニコライが日本の教会のために選んだイコンは、どのようなものであったのか。



96 山下りん《至聖生神女之福音》

認できる。また、山下はニコライ堂のペシエホーノフのイコンを何枚か模写しており、《至聖生神女之福音》(図版96参照)や《四福音書記者》などは、現在でも各地の教会に伝えられている。また、山下りんが学んだノヴォデーヴィチ修道院で制作されたイコンも早くから将来されている。ロシア帰国の折、ニコライはノヴォデーヴィチ修道院で山下を指導した修道女フエオファニアにイコンを発注、一八八一年(明治一四)にニコライ堂と同じ敷地内にあったニコライの私的な礼拝堂のイコノスタスに「大小総て三十一面、悉く銅の板に背景を厚く純良の鍍金

まず、一八八四年(明治一七)より建設が開始され、一八九二年(明治二四)に成聖された東京復活大聖堂、すなわちニコライ堂のイコンの多くは、ペテルブルクのイコン画家ワシリイ・マカロヴィチ・ペシエホーノフの手によるものである。ペシエホーノフの名は、ニコライの日記にも見つけることができる。例えば、「複数のイコンとイコノスタス枠それ自体でいくらになるか、見積もりを作ってもらおう」¹¹。また、自身のイコン様式に対する誤解を知った後には、他のイコン画家と比較し、「かれ「イコン画家ロゴージン」の描くイコンは厳格なギリシヤ様式で、ということほとんどすべてが見た目には醜いものなのだ。これはだめだ。日本にはペシエホーノフのイコンの方がよい」¹²と評価をしている。結果、ニコライがペテルブルクで制作を依頼したであろう、一八八〇年(明治一三)に大小六七枚が三段に組み込まれた壮大なイコノスタスのイコンが描かれている。これらのイコンは一九二三年(大正一二)の関東大震災で焼失したものの、現在、「東京復活聖堂画帖」(一九〇五年)や「東京ハリストス復活本聖堂小誌」(一九〇七年)などに掲載された写真で確認できる。また、山下はニコライ堂のペシエホーノフのイコン



97 フェオファニア
《天使長聖ガウリイル》

をした¹³。アイコンが掛けられた。これらのアイコンもやはり現在には残っていないが、「東京十字架聖堂記念画帖」に写真（図版97参照）が掲載されている。これらもやはり山下が同じ図柄のアイコンを描いており、《降誕》などは秋田県の曲田教会などに伝わっている。

考えた「様式」のものを選び、アイコン画家と直接話し合いながら決めたものである。つまり、それだけニコライのアイコン観が強く反映したものであるが故、そのいくつかの模写を山下に命じている。山下によるロシアアイコンの模写は、「他の教会のために制作するアイコンの雛形とするために、それらの最良のものを模写する目的で」¹⁴新築された京都教会に派遣されているように、すべてニコライが指示したものである。

一方、ニコライの没後に将来された、函館のロシアアイコンを見てみたい。

例えば、イコノスタス中央上段の《救主復活》は静かなポーズでありながらも、背景の明暗やハリストスの端正なプロポーション、全体の丁寧な仕上げによって、美しく劇的に描かれている。また、上段の《主昇天》や中段の《主洗礼》などの、昇天するハリストスの姿や洗礼の場面など超自然的な場面を描きながら、見るものに極端な不自然さや生々しい印象を与えない、平易かつ明快な表現が選ばれている。これらの題材は、函館教会にある山下の《十二大祭図》にも見られ、やや山下の表現の方がダイナミックではあるが、大きく異なった印象を感じない。

これらのロシアアイコンについて、修復時に撮影した赤外線写真により、精密な下図があったことがわかっている。その上で、修復を行った創形美術学校修復研究所長の歌田真介氏は「三二点全ての絵が画家の個

人的情熱や芸術的感興のあまり感じられないことから考えて、教会の約束にしたがった粉本に基いて描いた可能性が強い」と指摘。また、技法的には理にかなった描き方をしているが、「聖像の油絵を作品として見た場合、印象が薄い。同じ宗教画でも山下りんの描いた絵からは作者の情熱が伝わってくる。この差異は両者の芸術的素養からくるのかも知れない。……描き方が生硬である。……おそらく絵心のある修道僧であるが山下りんほどの力量がない人であったと見受けられた」としている³。

しかし、その後の調査研究¹⁵で、山下のイコンも、おそらくそのすべてが、前述した例のようにロシアイコンなどの模写であると考えられている。また、キャンバスに油絵具を用いて西洋的な描かれ方をした山下のイコンは、現在われわれがイメージする、板にテンペラで描かれた伝統的なロシアイコンと全く異なる、特殊なものと思われるがちである。「イタリア画」、すなわち西欧的な絵画表現を好んだ山下が、留学先のロシアで、「ギリシャ画」、すなわち伝統的なイコンの画法を強要されて悩んだ、というイメージがそうさせるのだろう。確かに、彼女の手がけたイコンには、西欧とロシア、さらに日本という異文化の狭間で悩んだ彼女独特の特徴が現れている。しかし、そうした西欧的特徴は、一九世紀では、山下のイコンに限ったことではない。

では、「函館教会イコノスタスのイコン《聖晚餐》を、山下の同画題のイコン《機密の晚餐》を見ることで、両者の「様式」的な特徴を比較してみたい。

まず、山下は、『機密の晚餐』のイコンを、二種類のバージョンで描いている。

一つは、図柄の源泉が一九世紀ポーランドの画家、シエラミツキの作品に遡るイコン（次頁図版98参照）で、構図や色彩、さらに人物の動的なポーズなど、いわゆる西欧の宗教画と大きく違わないもの。もう一つは、どちらかというと、構図、色彩ともにやや不自然で、人物のポーズも画一的なもので、現在上磯正教会



98 山下りん《機密の晩餐》



99 山下りん《機密の晩餐》



100 《聖晩餐》函館ハリストス正教会

(北斗市)にあるイコン(図版99参照)はこれにあたる。ただ、やや不自然さはあるものの、顔の描写や衣服のひだなどは質感をよく捉え、十分に写真的だともいえる。

一方、函館の《聖晩餐》(図版100参照)は、図柄はレオナルド・ダ・ヴィンチの《最後の晩餐》と全く同じものである。筆致自体は生硬であるものの、「粉本」がレオナルドである故、人物のポーズは劇的で、空間構成にも不自然さはまったくない。ロシアから将来した「イコン」であるから、「教会の約束にしたがって」描いていることは疑いの余地はない。

山下のイコンが一九世紀ロシアイコンの振幅を表しているとしたら、函館のイコンは、ルネサンス絵画の代表作の模写でさえも、その範囲に

収まる典型作と呼べるのではないだろうか。つまりいずれも、一九世紀ロシアアイコンの特徴を備えたアイコンであるといえよう。

四 むすび

ドストエフスキーは、ラファエロの《シストの聖母》の複製を部屋に掲げた。それは、信仰心と芸術的理想とを融和させようと努力するドストエフスキーが祈る、かれ個人のアイコンであった。¹⁶同様に、《シストの聖母》を左右逆にしたアイコンがニコライ堂にかけられており、またニコライの自室の壁にも、やはり《シストの聖母》の複製画が飾られていたという。そこには、急速に変わりゆく一九世紀ロシアの、西欧との、あるいは近代との相克が現れているのかもしれない。ニコライが日本の教会のために示した「アイコン観」は、一九世紀ロシアにおいて、とても穏当なものだったといえるだろう。急速な西洋化、近代化の道を進んだ明治の日本に、ニコライは祈りと美の穏当な融合を指し示した。

正教会のアイコンは、わが国で新たな祈りを生み出すのと同様、新たな美との邂逅と誕生をうながした。例えば、父が熱心な信者で、自身も生涯信仰を護った画家河野通勢が、少年時に長野の正教会で山下のアイコンを見ていたように、アイコンを身近な「油彩画」として見て育った画家もいるだろう。函館においても、若き日の画家木村捷司が、「ニコライのアイコン」に触発されて、堂内の風景を描き、全国的な公募展に発表している。

「聖堂として堂内でみるとき全作品、額、堂内の内装と響き合って落着いた感じをかもし出す。堂内の環

境全体が芸術になることも見逃してはならないと思う。」というように、イコノスタスのロシアアイコンと、山下りんによる十二大祭図は、堂内に統一した祈りの空間をもたらしている。そこで、ニコライが日本のために選んだものの流れを組むロシアアイコンと、ニコライが育てた日本人アイコン画家の手によるアイコンが同居している。

ニコライの没後に完成した聖堂にあつて、それらはニコライの信仰と美意識と、ニコライの生きた一九世紀ロシアアイコンの姿を今に伝えている。それは、ニコライが初めて立った日本の地、函館にふさわしいアイコン群である。

注

- 1 ニコライ日記一九〇八・一・二二、以下日付のみ。ニコライの日記はすべて「宣教師ニコライの全日記 1-9」(中村健之介監修 教文館 二〇〇七年)による。
- 2 一九〇九・一〇・二七
- 3 「聖障(イコノスタス)」歌田眞介(「重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂保存修理工事報告書」函館ハリストス正教会 一九八九年)
- 4 岡畏三郎「函館ハリストス正教会蔵 山下りん筆『十二大祭図』について」(「美術研究」第二七九号 一九六八年)
- 5 一八七九・九・二四
- 6 一八八〇・四・一一

- 7 この「技法」論は、「十九世紀ロシア・イコンのふたつの様式——山下りん作イコンにおける『イタリア画』と『ギリシャ画』——」鐸木道剛（『美術史における軌跡と波紋』中央公論美術出版 一九九六年）や中村健之介『ロシア帰国時の日記』の注解」同注1の一卷などに詳しい。
- 8 一八八〇・二・一八
- 9 一八七九・一一・一八
- 10 一八七九・九・二三
- 11 一八八〇・三・一三
- 12 一八八〇・五・二二
- 13 「東京十字架聖堂記念画帖」水島行楊編 正教本会編輯所 一九〇五年
- 14 一九〇三・三・二三
- 15 例えば、「山下りん研究（4） イコンの図柄の源泉別による作品総目録作製の試み」鐸木道剛（『岡山大学芸術学研究』創刊号 岡山大学芸術学研究会 一九九〇年）や「山下りんイコン総目録」（『山下りんとその時代展図録』読売新聞社 一九九九年）など。
- 16 中村健之介『ロシア帰国時の日記』の注解」同注1の一卷。
- 17 「東京ハリストス復活本聖堂」（正教本会編輯所 一九〇七年）所収の写真より。

函館とハリストス正教会 — 架け橋の人々 —

長谷部 一弘

函館市中央図書館館長

函館とロシアのつながりは、一七九三年（寛政五）六月、ロシア使節ラクスマン一行の通商交渉を目的に外国船として初めて箱館に来航したことにはじまる。一八五四年（安政元）八月には、アメリカのペリー艦隊に次いで、ロシア使節プチャーチンが日露和親条約批准のため箱館に来航し、翌年箱館が開港し、一八五九年（安政六）には、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、オランダの五か国との修好通商条約に基づき箱館は国際貿易港として開港した。果たして、函館とハリストス正教会との交わりは、この箱館開港から始まったのである。

箱館開港は、幕府にとって門戸開放とともに五稜郭や弁天岬台場を配備するなど対外的な北の構えの最重要施策とされ、箱館はその重要拠点に位置づけられた。これにより門戸が開かれた列強にとっては、国策に基づく北からの日本進出の絶好の機会が到来したわけである。開港に伴い箱館市中には、相次いで各国の領事館が開設し、とりわけ一八五八年（安政五）、箱館駐在の初代領事としてヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチが海軍士官ナジモフ大尉や修道司祭フィラレット、医師アルブレヒトらとともに箱館に着任した。そして、いち早く実行寺に開設したロシアの領事館は、日本で最初のロシア領事館となった。翌年、実行寺

境内に領事館付属の「祭祠堂」が建造され、司祭ワシリイ・マホフがロシア領事館付司祭として来箱した。一八六〇年（万延元）、大工町（現ハリストス正教会地）に新たなロシア領事館が完成し、同地内には聖堂が併設され初代領事ゴシケーヴィチによって「箱館復活聖堂」と命名された。新築のロシア領事館には、市中の役人や商人などが盛んに出入りし、木津幸吉や田本研造などのように洋服の仕立てや写真術などを学び、新たな西欧文化を享受したのもも現れた。この頃ロシアの植物学者マキシモヴィチが来箱し、函館山および函館周辺の植物を採集し多くの新種を発見して本国へ持ち帰っている。採集の手助けをした須川長之助は、函館でのハリストス正教会とマキシモヴィチとの出会いがきっかけで後に司祭アナトリイの洗礼により敬虔な正教会信徒となった。

一八六一年（文久元）六月、病により職を辞した司祭マホフの後任として、ロシア正教会の修道司祭ニコライ・カサートキンが、ハリストス正教会司祭として着任した。ワシリイ・マホフの息子でロシア領事館付誦経者のイワン・マホフが日本の子どもたちのためにロシア語学習書「ロシヤノイロハ」を刊行したのもこの年である。着任した司祭ニコライは、アメリカへの密航画策のため一八六四年（元治元）に、箱館に渡航した新島七五三太（後の襄）から日本語の教授を受けるなど親交を深め、聖書に興味をもった新島に弟子になることを強く勧めるも新島のアメリカへの渡航の強い意志に打たれ、同年六月には、澤邊琢磨、富士卯之吉（後の成豊）らとともに国禁を犯した新島の箱館からの密出国を手助けしている。

戊辰戦争最後の血戦、箱館戦争が迫る一八六八年（明治元）五月、司祭ニコライは、かつて山本数馬を名乗り土佐藩尊皇攘夷派だった箱館の神明社神官澤邊琢磨を諭して洗礼を授け、後に澤邊が日本人最初の司祭となった逸話は有名である。またこの時澤邊とともに酒井篤礼、浦野太蔵が日本で最初のロシア正教受洗者となり、ここが日本ハリストス正教会の初穂となった。箱館戦争さなかの正教会にまつわる出来事におよん



では、榎本武揚率いる旧幕府脱走軍の遊撃隊長（仮政権では松前奉行）人見勝太郎が「魯国宣教師ニコライ館」で肖像写真を撮影している事実や箱館戦争が終結すると旧幕府脱走軍に身を投じた長崎奉行所の通詞であった宋近治が正教会にかくまわれ下僕としてロシア料理やパン作りを教わり、函館市中が平穏になると宋は五島英吉と名を変え、一八七九年（明治一二）にロシア料理店のコックになったという逸話が残されている。

明治政府が安定すると、一八七二年（明治五）にニコライは正教会の後任をアナトリー・チハイに託し、日本各地の伝道のため上京を果たしている。また、誦経者として正教会聖堂の鐘楼守に携わったヴィサリオン・レヴオイツ・サルトフは、秘密裏に執り行われた澤邊らの聖洗の警護や正教会に出入りする須川長之助の面倒を見るなど敬虔な正教会信徒であったが、近代化を図る明治政府の国策によって開拓使のお雇い外国人の招聘が勧められると、一八七三年（明治六）に開拓使雇露語教師として官立函館学校に赴任し、三野又一、諸岡篤三、東虎雄らの門下生を育てたが、道半ば函館で急死した。サルトフの死後、聖歌教師と



101 1891年9月15日の函館港と市街、山麓中央部にハリストス正教会が見える

して来日したアナトリイ司祭の弟にあたるヤコフ・ドミトリエヴィチ・チハイが函館で正教会聖歌隊の指導にあたった。そして、明治期の函館ハリストス正教会では、一八七四年（明治七）、教会境内に小学校、一八八四年（明治一七）に女学校を開校し、普通教育をはじめ裁縫や西洋洗濯の授業を取り入れた技芸教育の普及など地域貢献にも努めた。

幕末以来、北海道と樺太の海産物の集積場であった函館は、一八九六年（明治二九）、カムチャツカでの日本式塩魚製造が成功を収めるようになると、函館の漁業家齊藤豁三郎が日本初の合法的カムチャツカ出漁を果たすなど露領漁業が盛んとなり、函館は露領漁業基地として発展を遂げていった。露領漁業に依存する商業都市函館を物語るのかのようにロシア語の需要が待望され、市内ではロシア語に関

係する研究所や公立学校でのロシア語科増設などが相次いだ。

朝鮮半島や満州などの日露間の領土問題によって日本とロシアとの関係が悪化すると、一八九九年（明治三二）には要塞地帯法が公布され、函館山への入山が禁止されることとなった。日露戦争が勃発した一九〇四年（明治三七）二月には、要塞地帯法により函館ハリストス正教会の目時司祭はじめロシア語通詞、函館日日新聞社主筆らに「露探」（ロシアのスパイ）の嫌疑がかけられ、要塞地帯外に退去を命じられる事件が

起こった。

日本の勝利で日露戦争が終結した後の一九〇七年（明治四〇）八月二五日、函館は市街地の二〇町が未曾有のいわゆる「函館大火」に見舞われ、初代ロシア領事ゴシケーヴィチが一八六〇年（万延元）に建造したハリストス正教会聖堂も跡形もなく焼失した。焼け野原となった市街地の復興の翌年、隆盛を極めたセミヨーンフ商会から独立してカムチャツカの漁場経営など露領漁業を中心として毛皮貿易やロシア義勇艦隊の代理店などを手がけるデンビー商会が設立され、「露領漁業の策源地」函館の一翼を担った。このことによりジョージ、アルフレッドの親子二代にわたり函館経済界の名士となったデンビー家は、敬虔なハリストス正教会の信徒としても尊敬され、谷地頭の邸宅に通じる坂道は住民から「デンベの坂」と呼ばれ親しまれた。

大主教ニコライが、東京神田駿河台ニコライ堂で七六年の生涯を閉じた四年後の一九一六年（大正五）一〇月には、聖画、内部祭壇などの装飾、設備を整えた新たな正教会聖堂が完成した。現在の函館ハリストス正教会の聖堂である。露領漁業に沸く当時の函館にあつて、ウラジオストク方面からユートピアを求め旧教徒のロシア人一行が銭亀沢村大字笹流に入植したのは一九一四年（大正三）一〇月のことであつた。入植した彼らに団助沢の土地を提供した澤克巳は、函館の漁業家、ロシア語通詞として知られたが、日露戦争が勃発すると「露探」の嫌疑で新聞紙面を騒がせた。

一九一七年（大正六）のロシア一〇月革命により、ソビエト政権が樹立されると、日本は多くの良好な漁場を失うこととなつた。このためデンビー商会は経営難に陥り、漁業会社「日魯漁業」との合併によつて、商業都市函館はサケ・マス漁の露領漁業から缶詰生産など近代化した北洋漁業に大きく舵をとることとなつた。この年から、漁業などに関わる白系ロシア人いわゆる亡命ロシア人の函館流入が顕著となり、団助沢、湯川周辺に多くの白系ロシア人が住み始めた。一九二二年（大正一〇）頃からは、元町のハリストス正教会

界限にも白系ロシア人が住み着くようになり、住民はかれらの居宅をロシア長屋と呼んだ。当時函館には約三〇〇人の外国人が居住し、その内函館在住のロシア人は、デンビー商会、リューリ兄弟商会、中央購買組合ツェントロソユーズなどに従事する事業家をはじめ、銭亀沢村の団助沢での農業を営む旧教徒やラシャ売り、冲商に従事する約一八〇人の人々で占められ、一九三〇年（昭和五）頃の時期には、亡命した白系ロシア人を含め最も多くのロシア人が函館に居住し、大正末期から昭和初年にかけては湯川に「ロスケ部落」と呼ばれたロシア人の居住地が形成された。昭和期に入ると、函館から旧教徒が何処ともなく消え去り、ロシア革命によって函館に移住したズヴェーレフ家、シュウエツ家などの白系ロシア人が、第二次世界大戦を挟み時代に翻弄されながらも昭和二〇年代まで函館で逞しく暮らしていたことは記憶に久しい。

そして、今ニコライ・カサートキン司祭、来函一五〇年の節目に函館とハリストス正教会の歴史を振り返る時、歴代の司祭、信徒をはじめ、いち早く函館とロシアに架かる歴史的風土を読んだ函館の名士馬場民則とその子息である北方考古学、アイヌ民族学の権威馬場脩や日露漁業に従事した高井義喜久等々函館ハリストス正教会ゆかりの人々が残した多くの足跡に、彼らがロシアや函館ハリストス正教会を通して生涯、函館に永遠の郷土愛を捧げた証であったことを知ることができる。とりわけ、以下に掲げる函館とロシアとのおよそ一五〇年におよぶ激動の歴史的史実の中でその架け橋となった先達の記憶は、函館とハリストス正教会の関わりを象徴し永遠に語り継がれるものである。

在箱館初代ロシア領事「ゴシケーヴィチ」

保科 智治

市立函館博物館学芸員

一八五八年（安政五）二月五日、ロシア領事ゴシケーヴィチ一行が箱館に到着した。サンクトペテルブルクを出発してから約九か月に及ぶシベリア縦断の長旅であった。到着後ゴシケーヴィチは箱館奉行竹内下野守と着任の会談を行い、仮の住居兼領事館となる実行寺へと向かった。住居として他に高龍寺も使用した。ゴシケーヴィチとともに箱館に同行した人たちは妻エリザヴェータと母親、書記官オヴァンデル、海軍大尉ナジモフ、司祭フィラレート、医師アルブレヒトとその妻、下男四人、下女二人である。

初代駐日ロシア領事ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチは、サンクトペテルブルク神学校を卒業し、翌年から一八五〇年までロシア宣教師団の一員として北京に赴任した。その後外務省アジア局に配属され、プチャーチン海軍中将の遣日使節団の中国語通訳として加わった。下田で行われた江戸幕府との交渉にも参加し、日露通好条約の締結にも関係することとなった。下田からの帰途、プチャーチン一行は地震による大津波によって船を失うことになる。幕府の計らいにより戸田で建造した船で帰国することになる。その際戸田で橋耕齋という日本人が乗り込んでしまった。ゴシケーヴィチはこの橋耕齋とともに途中イギリスの軍艦に拿捕され、九か月間を過ごすことになる。当時ロシアはクリミア戦争のためイギリスと交戦状態であった。

解放後、ゴシケーヴィイチは橋とともに「和魯通言比考」という辞典を一年あまりで出版することになる。これらのできごとがゴシケーヴィイチが初代駐日ロシア領事になった要因と思われる。

ゴシケーヴィイチが赴任してまず行わなくてはならなかったことは、領事館や病院そして教会の建設であった。当初箱館奉行が領事館建設用地として提案したのは当時では箱館の町の外に位置する亀田川左岸の河口付近であった。当時の亀田川は現在と違い函館湾に注いでいた。その土地には病院とバーニャ（ロシア式サウナ）が建設されたが、一八六一年（文久元）一〇月九日に焼失した。箱館奉行とのたびたびの交渉の結果、領事館建設用地が現在のハリストス正教会のある場所に決定した。敷地内に建てられたのは、領事館・教会・病院・学校・住居などで一八六〇年（万延元）三月にはゴシケーヴィイチやアルブレヒトらが引越しをした。当初実行寺内にあった教会も移転し、一月にフィラレート司祭による礼拝式が執り行われた。

また、ゴシケーヴィイチが箱館に着任して行った主たる職務は、一八五九年（安政六）七月に江戸に行き条約批准書の交換と北蝦夷地の境界交渉であった。その年の末にはロシア人殺傷事件のために再び上京し、帰りは陸路で箱館にもどった。一八六一年（文久元）には対馬を不法占拠したロシア船ボサドニック号を退去させるべくロシア海軍や幕府との交渉を行い退去させることに成功し、一八六二年（文久二）一〇月二日にはロシア人としては初めて將軍徳川家茂に謁見をする。一八六四年（元治元）には箱館奉行小出大和守と北蝦夷地の境界について交渉を行う。一八六五年（慶応元）一月には隣のイギリス領事館からの火災により領事館を焼失する。この間一八六四年（元治元）に妻エリザヴェータが病死し箱館の地に埋葬された。エリザヴェータの当時の墓碑は残されていないが、一九九三年（平成五）に新たに建立された。

開港間もない異国・箱館の地で、妻を失いながらも初代領事として幕府や本国との交渉、領事館建設などの激務をこなしたゴシケーヴィイチは、領事館焼失後の一八六五年（慶応元）、箱館を離れた。

日本人最初の司祭「澤邊琢磨」

佐藤 智雄

函館市教育委員会学芸員

後に澤邊琢磨となる山本教馬が訪れた幕末の函館を一言で現すならば、「辺境と混沌」の地とでも表現できるだろうか。海を挟んでロシアと接するこの街は、すでに徳川幕府の北方開拓基地として殷賑を極めていた。一八六四年（元治元）に来箱し、澤辺とも親交のあった新島七五三太（後の襄）はその手記「函楯紀行」の中で「一地峡と港口の他は尽く山をひかへ、港内尽広く、船數百艘を容る々に足れり……〔中略〕……黒船三艘 英艘三艘 亞国スクーネル二艘 普国の蒸氣船二艘なり……〔中略〕……日本人の戸口凡三千ヨ、……〔中略〕……薬師山の麓に、魯・英・亞・仏官吏の館立並び、日に映ずる白壁、風に翻へる紅旗、人をして目を慰めしむ」と当時の様子を書き残している。また、文久年間の箱館を描いた「奥州箱館之図」には、港にひしめく和船と共に、ロシア、アメリカ、イギリス、オランダの国旗をなびかせた黒船が停泊し、箱館山の裾野に広がる市中には、黄色い土壁と木板葺きの日本家屋とカラフルな国旗を掲げた白壁の領事館の建物が描かれている（一四頁、写真22参照）。幕末、開港場となった箱館は、辺境なるが故に様々な人と物と情報が日常的に交錯する場所であり、ペリー来航から箱館戦争に至って新たな北の夜明けを迎える歴史的舞台であるとともに、澤邊琢磨という一人の日本人に希望を与えた「可能性の土地」であった。

澤邊琢磨は一八三五年(天保六)、土佐郡潮江村の郷土、山本代七の長男として生まれる。父代七の従兄弟に同い年の坂本龍馬がいた。武内半平太の私塾で学び、一八五一年(嘉永四)、劍術修行のため一六歳で江戸へ出て、鏡心明智流桃井道場で腕を磨き、「カラス天狗」の異名で師範代まで務めたという。日米和親条約が結ばれた一八五四年(嘉永七)、一九歳で江戸を出奔。浪人となって、四年後の一八五七年(安政四)箱館に現れる。その理由は定かではないが、この頃、蝦夷地全島はすでに幕府の直轄地となっていた。数馬は止宿していた旅館で押し込み強盗を捕らえるという騒動に巻き込まれ、これがきっかけで、宿の主人の計らいにより神明社境内に道場を開き、箱館に居を構えることとなった。神明社の社殿は現在の幸坂の中腹、弁天末広通り付近である。

この頃、箱館では五稜郭の築造が始まり、一八五九年(安政六)には、日米・日露修好通商条約が調印される。ゴシケーヴィチが来箱し、神明社に程近い実行寺を仮止泊所として領事館と仮祈祷所(祭祠堂)が建てられ、大工町に領事館と付属施設の建設に取り掛かっている。数馬はその翌年の一八六〇年(万延二)、二五歳で神明社宮司澤邊家の養子となっている。名は「澤邊数馬幸高」。神明社の社伝によると八代目の宮司にあたる。この年の箱館鎮臺史料乙巻「箱館年中行事元治元年甲子十二月廿八日」には、正月六日の箱館奉行へのご挨拶として、亀田八幡神主、有川神明神主、箱館八幡神主と並び「同所神明社司 澤邊數馬」の名が記されている。



102 日本脱出時の扮装を穿する新島七五三太

一八六一年(文久元)、領事館付設聖堂の修道司祭としてニコライ(カサートキン、後の聖ニコライ)が箱館に上陸した。開港場となった箱館には、アメリカをはじめとする領事館が相次いで開設するが、ロシア領事館は領事館内に病院と教会を付設する大規模な

領事館を構えた。敷地内に併設された病院では日本人にも施薬するという噂を聞きつけ町衆の中には奉行所に治療を嘆願するものまであらわれている。

一方、日本中で攘夷思想が高まる中、澤邊は箱館奉行の依頼により領事館員に剣術の指南に赴いていた。この頃の澤邊の人物像と履歴がニコライ宅に止宿していた新島の日記の中に垣間見える。

「五月八日菅沼（諸術調所）の親友で神明社の神主澤邊数馬という人が訪ねて来た。私はこの人がただ者ではないと見抜いたので、儀礼的なやりとりをやめ、旧知の間柄のように世間の事を話した。（この人はもと土佐藩出身であったが、しなくても良い議論を俗吏と交わして憤りに堪えず、ついに脱藩してこの地に流れ住み、しばらくの間、神明社に籍をおいているとのこと。しかし、この人がいつでもどこに去って行くのかはわからない）。新島の言葉の中には、今しも動乱の渦中へ駆けつけようとする数馬の姿勢が見えるようである。

新島はこの年の六月一四日に箱館から日本を脱出し、名実共に神明社宮司となった澤邊琢磨とニコライが直接向き合うのもこの頃であったと推察される。

この年の六月五日、京都では「池田屋事件」が勃発している。当時の武士が普通に抱いていたであろう思想と感情の中で、澤邊琢磨はニコライと対面したのである。

その出会いの中に、澤邊琢磨は新たな希望と可能性を見いだしたのである。それは、西欧文明と接した日本人が必ず出会う西欧思想の根本ともいえる価値観であった。この時から澤邊琢磨は時代背景や当時の日本人のいづく異国人への偏見を越え、宗教による国づくりを指すことになる。

果たして、禁教下の一八六八年（明治元）、澤邊琢磨は、仙台藩医師の酒井篤礼、浦野大蔵と共に日本人として聖ニコライからハリストス正教会最初の洗礼を受けた。ここに、澤邊はその使命とともに洗礼名パウエルを授かることとなった。洗礼を受ける決意の根底には、新たな希望とともに前年にたおれた坂本龍馬の

死があったかも知れない。

一八六九年（明治二）、信徒となった澤邊は離函し、同士のゆかりの地である宮城・岩手・福島・青森へ布教の旅に出ることとなる。くしくもそれは戊辰戦争で敗れ、箱館で決戦に臨んだ旧幕府軍ゆかりの地でもあった。一八七五年（明治八）には日本人最初の司祭となり、禁教が実質的に解放される一八七八年（明治一一）に福島の白河で七人の日本人に洗礼を授けている。後年司祭となった澤邊は、迫害と投獄を受けながらも布教活動を止めることはなかった。それは聖ニコライがハリストス正教会の教義と共に布教を通じての民衆と国の救済というものを強く彼の中に焼き付けたからに他ならない。

攘夷から開国、そして国家の改革という歴史の変遷の中でハリストシアニンへの道に命をかけた澤邊琢磨の波瀾万丈の転身は、単に宗教家あるいは幕末志士の生き方にとどまることなく、幕末の混沌とした箱館において、ロシア正教と出会い、近世という時代を乗り越え、近代日本へともに生まれ変わろうとした日本人澤邊琢磨がいたのである。一九一三年（大正二）、澤邊琢磨は、四谷洗礼教会にて長男の澤邊悌太郎司祭に看取られながら永い眠りについた。日本最初のハリストス正教会の信徒として伝道に深く携わり、長司祭となつて福音宣教に捧げた生涯であった。

プラントハンター「須川長之助」

佐藤 理夫

市立函館博物館学芸員

須川長之助は、一八四二年（天保一三）二月六日に、旧陸奥国（後に陸中国に分立）紫波郡下松本村（現、岩手県紫波郡紫波町下松本字元地）で、小作農家の須川与四郎の長男として生まれる。

一二歳の時に奉公に出され、年季奉公明けの一八五八年（安政五）に、一六歳で一家の働き手となるが、長之助が一九歳となった一八六〇年（万延元）に箱館に渡ることになる。

このとき、何故、箱館に渡ったのかは定かでないが、当時、東北の一農村からの出稼ぎは、大変な苦労があったにしても、天然資源の豊富な北海道であり、開港で賑わっていた箱館に行くことは、容易に職を得るには、都合の良い場所であったのかもしれない。特にこの当時、「松前に行く」と言つて、蝦夷地に出稼ぎに行く者が多かったようである。しかし、当時、長之助は、結婚したばかりの妻を残して地元を離れたことから、妻から逃げたという説もうなずける。

箱館において長之助は、職を転々としていた。一時イギリス人貿易商ポーターの下で働いていたが、同僚の不始末のあおりで、その職を辞めざるをえなくなる。その時、偶然同じ時に箱館に来ていたロシアの植物学者マキシモヴィチに雇われることになるが、何も知らない異国の地で、見ず知らずの長之助を雇うのは、周

りから推薦されているとしても勇氣のいるものである。当時使用人を雇い入れる常套手段として、部屋の中にお金を置いておき、それに対してどのように対応するかで、使用人がどのような人物かを見定めたようである。

この時の長之助の金品に対する妥協のない誠実な態度に、マキシモヴィチは感銘を受け、長之助を単なる従僕を超えた信頼に足る人物として、日本での植物採集の助手として採用し、長之助は、陰日向にマキシモヴィチを支えた。

マキシモヴィチは、函館での植物採集の手始めに長之助を函館山に連れて行く。そこで、長之助は植物採集の方法やさく葉標本の作製方法の手ほどきを受けることとなる。長之助にとつて、見るもの聞くものすべてが初めてのことで戸惑ったが、本来農家出身で持つて生まれた勤勉さから、習得には時間がかからなかった。以後、長之助はマキシモヴィチが本国ロシアに帰国するまで行動を共にした。

マキシモヴィチが、長之助を雇うことになったいきさつについては、定かではない。ただ、長之助は、箱館に来て直ぐに貿易商ポーターの下で働いていたようで、そこでは既に函館測候所（当時気候測候所）の初代の所長となる福士成豊（幼名を統宇之吉といい、統豊治の息子、後に福士家に養子に入る）が働いており、彼は当時の初代箱館駐留ロシア領事であるゴシケーヴィチとも親交があったことからその縁によるものか、また当時のロシア領事館は正教会の敷地内にあつたため、教会や領事館に出入りしていたマキシモヴィチに会う機会に恵まれたことが推測される。

一八六二年（文久二）、マキシモヴィチと長之助は、一年半ほど過ごした箱館を出帆して長崎に向かう。この時、彼らは、二度目の来日となるシーボルトを訪問している。さらに、再び横浜に戻り関東地方で植物採集を行い、同年二月二六日に再び長崎にもどっている。そして一八六四年（元治元）十一月二一日にマキ



103 チョウウノスケソウ(「塚本角次郎採集」)

シモヴィチは横浜より帰国の途につくことになる。

この後の長之助の動向については、マキシモヴィチがロシアに帰国した後の一八六六年(慶応二)以降で続いていた採集を中断し、生まれ故郷に戻るようになる。しかし、長之助のその実直で真面目な性格を必要とする人は多く、箱館の教会を通じてか、間もなく箱館に戻るようになる。そして、当時、函館に設立された官立函館魯学校にお雇い教師として一八七二年(明治五)六月に採用されたヴィサリオン・サルトフに雇われることになる。

ところが、サルトフは翌年の一月二九日に急死してしまう。検死解剖の結果から、彼の死因は脳出血となるのだが、この死因が毒殺ではないかとの噂が広まったため、長之助はその死因についての口上書を書くはめになるのである。一八七六年(明治九)には、長之助の実直さもあつてサルトフと親交のあつたロシア人実業家ソフィヤ・アレクセーエフの経営するホテル「ニコラエフスク」の料理人助手となった。

その後、長之助は再び故郷に戻り農業に従事したが、ニコライ堂のアナトリー神父を通じてもたらされたロシアからのマキシモヴィチの依頼により、一八八七年(明治二〇)に植物採集を再開した。

長之助は、先ず信州木曾駒ヶ岳、八ヶ岳、富士山、天城山等で植物採集を行い、翌年の一八八八年(明治二二)には紀伊、九州、四国等で、一八八九年(明治二三)に東海、近畿、山陰、北陸等で採集し、このとき立山では、マキシモヴィチにより命名された和名に長之助の名を冠する「チョウウノスケソウ」を採集している。このような一八八八年と一八八九年にわたる長之助の採集、調査は、二二〇日以上に及んだ。また、一八九〇年(明治二三)には、岩手山、早池峰山、鳥海山等で種子採集を主体とした採集、調査を行い、一種

につき数十点の種子を採集した。

このように、長之助が採集してマキシモヴィチのもとへ送られた植物のうち、マキシモヴィチや他の研究者が「チョウノスキー」として献名した植物は以下のとおりである。

- *Trillium tschonoskii* Maxim. シロバナエンレイソウ
- *Carpinus tschonoskii* Maxim. イヌシデ
- *Berberis tschonoskyana* Regel オオバメギ
- *Malus tschonoskii* (Maxim.) C.K.Schm. オオウラジロノキ
- *Prunus* × *tschonoskii* Koehne ニッコウウザクラ
- *Acer tschonoskii* Maxim. シネカエデ
- *Rhododendron tschonoskii* Maxim. コメツツジ
- *Ligustrum tschonoskii* Decaisne シヤマイボタ
- *Lonicera tschonoskii* Maxim. オオヒヨウタンボク
- *Arnica unalascensis* Less. var. *tschonoskii* (Ilijin) Kitam. et Hara ウサギギク

このことは、マキシモヴィチを始め多くの植物研究者が、長之助の労苦に対して感謝の意を表している証拠である。ただ、残念なのは「チョウノスケソウ」の学名は *Dryas octopetala* L. var. *asiatica* (Nakai) Nakai となっており、なぜか、そこには、長之助由来の種名がついていないのである。

実は、マキシモヴィチは、「チョウノスケソウ」に *Dryas tschonoskii* Maxim. を用意していたと伝えられて

のようである。

現在、イコンをはじめとする長之助の遺品は、長之助が眠る墓地の改修に際しては、「メダイ」が発掘されている。メダイの表には聖ニコライ像が、裏には神の母マリア像が描かれ、信心深かった長之助が生涯、肌身離さず身につけていたことを物語っている。



104 晩年の須川長之助



105 須川長之助が肌身離さず身につけていたイコン

いるが、運命のいたずらか、マキシモヴィチの早すぎる死のため、その志はかなわなかったというのが真相のようである。

なお、マキシモヴィチの助手を務めるなど、長年植物採集に携わった功績を讃えられた後に、「ブランドハンター」の異名をもった長之助は、箱館においてマキシモヴィチとともに礼拝した当時、箱館ハリストス正教会の神父であったニコライ神父の教えにより信仰に目覚めたと思われ、一八七七年（明治一〇）に岩手県紫波郡日詰町にあった郡山教会でアナトリイ神父より「聖名ダニイル」として洗礼を受けている。

「須川家の仏壇を見ると、その上にはキリストの像やマリア像がかかげられ、引き出しには首にかける十字架がある。」長之助なき須川家の様子からは、長之助が生前、仏壇に向かい祈りを捧げていたことがうかがえる。周囲に気を遣いながらも、途切れることのない信仰心を抱いていた長之助の生き様の一端を垣間見るエピソード

ロシア語学校の設立と函館ハリストス正教会

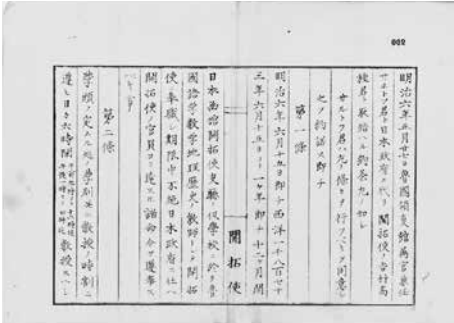
奥野 進

函館市中央図書館歴史担当

一八七二年（明治五）一〇月、函館学校内（一八七一年一〇月設置）に「露学」（ロシア語学科）が開設された。これは、ロシアに隣接し、関係の深い北海道と樺太（日本とロシアの雑居地）の開発にあたっては、ロシア語が不可欠で、そのためには函館にロシア語の学校を建て、ロシア人の教師を雇い入れてロシア語教育にあたらなければいけない、という開拓次官黒田清隆の考えに基づくものであった。

開拓使は黒田の考えどおり、教師としてロシア人を雇用する意向で、「開拓使公文録」にある学校の設置認可を伝える東京出張所からの書簡（二月一〇日）にも「御地居留魯僧ニコライ義倭語をも相通シ、兼テ書生教授ノ手續申込有之義ニ付、同人を教師ニ御雇相成候方可然」と、「彼ノ語学ヲ教フル外、教法無用」と布教はしないとの条件で、日本語に通じたニコライを教師にあてることを挙げていた。しかし、ニコライの布教活動への警戒や、当のニコライが本格的に布教をするために、この年の一月に東京に移ったことなどから、最初のロシア語教師は日本人の通訳官をあてることとなった。

そもそもハリストス正教会とロシア語教授とのかかわりは、一八六〇年（万延元）に、領事館が建設された際に併設された建物が、「学校」として利用されたことに始まる。一八六一年（文久元）の記録、「異船諸



107 サルトフ氏函館露学校教師として雇備契約書 (和文写)



106 子ども向けに出版されたロシア語入門書「ロシアノイロハ」

書付」には同心子弟が「魯語稽古せし為日々魯西亜館江相越候処、稽古本として右之品銘々江差送り候……」とロシア語を学ぶ様子も記されている。同年、領事館員イワン・ワシリーエヴィチ・マホフが「ロシアノイロハ」を刊行、マホフの帰国後、ニコライが来てからは、「学校」はニコライの仕事となっていた。

日本での伝教に生涯を捧げたニコライは、一八六八年（明治元）に自ら「伝道規則」を制定するが、その中には「魯語を教へて魯西亜の宗学校に遣はすべし此目当は学校出来の上日本に帰り学校を建て宗法と其他の学文を教ふ其他宗教の書籍を翻訳す」との一項があった。布教に欠かすことのできない聖書・祈祷書の翻訳のために語学・日本文化を重視し、自ら「日本」を学ぶなかで、ニコライの周辺には正教だけではなく、ロシア語を学ぶ者も増えていった。

このような背景のなか、開拓使は一八七三年（明治六）六月、ロシア語教師として、ロシア領事館付属聖堂の誦経者であったヴィサリオン・サルトフ (Sallov, Vissarion Luvoich 一八三八〜一八七四) を採用している。

開拓使の函館学校は、サルトフの尽力により徐々に盛況となり、外国語学校の体裁を整え始めた。函館支庁は、八月に函館学校のロシア語科以外を廃止して別の学校に移し、名称を露学校と改めた。「開拓

使公文録」に記された函館支庁からの報告には、「教師サルトフ氏甚勉強いたし隨テ生徒も日々相増、追々盛大ニ赴ク景況ニ御坐候」と露学校の景況が記されている。

しかし、学校が軌道に乗り始めた矢先の一八七四年（明治七）一月二九日、サルトフは脳溢血で急死した。「御雇魯学校教師 変死一件書類」にあるとおり、「着港以来教育行届、生徒も追々増加、其他教員迄も悦服いたし、学校の体裁相立、加之和魯辞書著述の為毎夜夜更迄従事、凡三分之一も出来候由の処」「一同歎嗟罷在候」と惜しまれる死であった。

サルトフの死後、露学校は一時休校されるが再開、同年六月に松蔭学校と改称され、ニコライに学んだ嵯峨寿安、小野寺魯一などが教師となっていた。松蔭学校は翌一八七五年（明治八）元町学校と名称を変更され、結局は生徒の減少により一八七六年（明治九）四月廃校となった。

函館学校（ロシア語学科）に始まる一連のロシア語教授の流れは短い期間ではあったが、全国的にも早い段階で、開拓使の政策としてロシア語が取り上げられたことや正教会関係者のニコライやサルトフ、ニコライに師事した嵯峨寿安、小野寺魯一の名が見られることは、ロシア及びハリストス正教会と函館の関係の深さの一端を示している。

露探

奥野 進

函館市中央図書館歴史担当

日本とロシアの関係が極度に悪化し、日露戦争が宣戦布告された一九〇四年（明治三七）二月一〇日の二日目の八日、函館要塞司令部は函館正教会を含む一七名の関係者に「露探」として退去を命じた。「露探」とは、日露戦争当時に使われた言葉で、ロシアの軍事探偵・スパイの意味である。

日露戦争の開始とともに、函館要塞を警備するために第七師団が旭川から派遣され、要塞地帯を中心に、二月一〇日に防禦海面令、一四日に戒嚴令が矢継ぎ早に施行された。一日には、青森県深浦沖でロシア・ウラジオストク艦隊による日本商船奈古浦丸撃沈事件が発生し、函館市内はロシアの脅威に対する風説による混乱が起きるなど緊張は高まっていた。

そのような中、要塞地帯法第八条による「要塞司令官ハ要塞地帯内ニ於テ兵備ノ状況其ノ他地形等ヲ視察スル者ト認メタルトキハ之ヲ要塞地帯外ニ退去セシムルコトヲ得」に基づいて標的とされたのが「露探」嫌疑者であった。

一九〇四年（明治三七）二月一〇日付の函館新聞は、当時の模様を「露探！売国奴！（我函館の珍事）」として次のように伝えている。

「露国東洋侵略策の着々其歩を進むるや、利害關係国の注目愈々其嚴を加ふるに從ひ露国は探偵を各邦に放ちて其動靜や如何に其の機微や如何にと、鶻の目鷹の目にて隣国の意向を探りつつあるが中にも最も利害關係の密接なる吾国に対しては常に仇敵の思ひをなして其偵察を嚴にし……〔中略〕……外国人の自ら好んで露探となるは其原因那邊にあるや敢へて吾人の関せざる處なりと雖も苟くも我邦人にして金が欲しさに露国の狗となりて公使館或は領事館に出入し有ることないことを口から出任せに之れを敵国に報導するといふに至つては其の品性の下劣なる其根情の野卑なる到底我同胞として之れを觀る可からざる……」と強い嫌惡感を示しつつ、「露探十七名一昨夜露靈一下要塞地帯外に退去を命ぜられたる……」と。

その後も新聞による報道が続くので、それらの記事により推移を追つてみたい。

「昨日号外再録」として「売国嫌疑者」の見出しでは、「露探嫌疑者として其筋の密偵中のもの尠なからざる由は兼ねて耳にする所なりしが果然一昨日午後六時より九時十五分までの間に左記十七名は二十四時間内に要塞地帯外に退去を命ぜられたり」として次の一七名の名が上げられている。

露探東洋侵略策の着々其歩を進むるや、利害關係国の注目愈々其嚴を加ふるに從ひ露国は探偵を各邦に放ちて其動靜や如何にと、鶻の目鷹の目にて隣国の意向を探りつつあるが中にも最も利害關係の密接なる吾国に対しては常に仇敵の思ひをなして其偵察を嚴にし或は佛蘭人に或は獨逸人に出資する限りの探偵を拵へて夜になくはなく吾が機微を探りつつある由は屢々吾人の聞く處なりしが併し彼等外國人の白から好んで露探となるは其原因那邊にあるや敢へて吾人の関せざる處なりと雖も

露探を糾弾する新聞の記事
（我樂館の珍事）

目時金吾（正教会司祭）、村木弥八（正教会伝教者）、豊田正一（正教会伝教者）、澤克巳（ロシア語通訳）、中瀬捨太郎（露領漁業者）、竹村淳太（ロシア語通訳）、斎藤哲郎（函館日日新聞社主筆）、音羽啓久（元英語学校教師）、山田為吉、桜田廉治（セミヨーノフ商会店員）、楠瀬菊水（ロシア語通訳）、近藤信秀、倉岡馬之助（税関監理・正教会内）、藤井常太郎、長瀬長兵衛（古物商）、渡辺政次郎（回漕業）、細谷てい（ロシア人ピョートル妻）

一七名は「退去を命ずると同時に逃走を慮り退去するまで憲兵及巡查



109 「露探小路」 青柳町44番地(当時)、
現在の市営住宅青柳団地付近

を附添はしめたるが何れも退去の命令に服従して昨夜までに夫れぞれ方向を定めて退去した」という。このとき教会関係者の目時神父、村木は有川村(現、北斗市)に、豊田は郷里の石巻や東京に退去している。

後日報道では、さらに笠原與七郎(ロシア領事館書記)、ゼ・ガーマン、トラヒン、ピョートル、フーザベリフ、デンビー(セミヨーフ商会支配人)、テリー(セミヨーフ商会)、大村励(函館船渠株式会社支配人)、齋藤三郎・なよ夫妻(露領漁業家)、広仲政季(ロシア語通訳)、佐藤清(貸座敷業)、田中盛幸(電気業)、武井かつ(芸妓)の名前を確認することができ、露領漁業者やロシア語通訳そして正教会関係者らが対象とされたことが分かる。「露国人と交際」「東京ニコライ教会に出入」「露国領事館に出入」「ニコライの洗礼」「露西亜教を奉し」など、ロシアに関連するものは何でも「罪状」として上げられ、個人名を上げ、いずれもひどい誹謗中傷の語が並んだ「罪証」記事が続いている。

地理的にロシアに近いこともあり、全国的に見ても「露探」という言葉が強い力をもって、正教会関係者らにも強い疑惑の目が向けられた結果であった。

新聞紙上を賑わせた「露探」騒動は、三か月後には、「要塞地帯退去の解除 函館要塞地帯内より退去を命ぜられたる邦人にして同命令を解除せられざるは齋藤哲郎、澤克巳、目時金吾の三氏のみなりしが今回右三名も解除されたりと云ふ」と収束に向かったが、教会関係者が実際に退去を解除されたのは、豊田正一が六月、目時司祭にいたっては八月だった。

結局、函館では軍機保護法などで罪を得たものは一人もいなかったが、司祭や伝教師といった教会の支柱、

信者らの追放により、教会は大きく動揺した。教会活動は増田詠隊師によって細々ながら土・日の祈禱が行われる程度で、ニコライの日記には、「函館のわれわらの教役者たち、すなわち神父アンドレイ目時（金吾）、伝教者イサイヤ村木（弥八）、伝教者フェオドル豊田（精一）、そして高齢の掃除夫ニキタまでが、いやどうやら、教会所属の建物に住む者すべてが、ロシアのスパイ「露探」だとされて住まいから追い出された」（二月一二日）、村木の語るところとして「警察署長、六人の警察官、二人の憲兵隊員が函館の宣教団の建物に突如現われて、二四時間以内に函館を退去せよという軍当局の命令を伝えた」（一六日）、「函館の不安動揺がひどく、すっかり怯えた何人かの信者たちは教会を捨てた、『脱会シタ』という。教会の集まることも中止になった」（二二日）と、悪化する状況とともに、「目時神父からの手紙によれば、復活大祭の前に八人の洗礼があった。また復活大祭の奉神礼には五〇人以上が集まった。ということは、目時神父が有川に住むことになったのは有川にとっては幸運だった」と、退去地でも布教活動を行う目時神父らの動向が綴られている。

四月九日、ハリストス復活大祭のために、根室から来函した福井寧神父は、信徒の訪問や老人・病者の慰問等をはじめ、教会関係者への不当退去命令の解除を求めて交渉をするなど事態の収束に努めた。復活大祭は、多くの信徒が教会を埋め尽くしたが、福井神父が信徒たちの家を訪問した際は、家の中に入れないか、来訪を拒否する家々が八三軒中一九軒もあったというのが現状であった。

一連の函館における「露探」騒動は、教会の受難とは裏腹に、時が経つに連れて人々の記憶から忘れ去られていったが、当時追放された澤克巳の住んでいた場所が「露探小路」と呼ばれ、わずかに日露戦争に端を発する「露探」事件を物語る記憶として街に残されている。

旧教徒と白系ロシア人

長谷部 一弘

函館市中央図書館館長

旧教徒がロシア本国での宗教上の迫害を逃れ、旧教徒に伝わる「ペロヴォージェ」、白水境と呼ばれるユートピア伝説を信じ理想郷を求めて函館にやって来たのは、ロシア革命以前の一九一〇年（明治四三）頃のことである。

彼らは、生活様式すべてにおいて従来の伝統を維持し、厳格な家父長制のもと、信仰を異にする者との婚姻は結ばず、食事すら一緒にとることもなく、ウオツカ、タバコ、コーヒー、茶などの嗜好品は一切受け付けず、衣服や被り物も変えてはならない独自の風習を有するロシア人旧教徒で、当初新川町付近に居を構えたが、後に銭亀沢村大字笹流、通称「団助沢」に入植したのである。そこは、津軽海峡に注ぐ清流松倉川の左岸に位置する湯川のトラピスチヌ修道院から南方へ数キロ程行った志海苔川が流れる丘続きの原野であった。最初の入植者は、ウラジオストクからやって来たワシーリエフら七名で牧畜や養鶏、養蜂に従事していたが五年後にはその数も一九人に増えていた。

ワシーリエフたちが入植した土地は、函館の漁業家で通訳をしていた澤克巳の所有地であった。所有者の澤は、同志社英学校在学中の一八八〇年（明治一三）に起きた世に言う新島襄の「自責の杖」事件の張本人



110 旧教徒が居住していた笹流(団助沢)
1910年代

のひとりで、一八九一、九二年(明治二四、二五)頃にはウラジオストクに渡り日本人の商店の支配人を務めていたことがあった。一八九七年(明治三〇)前後、函館に移り住んだ澤は、日露戦争が勃発するとロシア人、ロシア領事館との親密な関係や東京ニコライ教会へ出入りする正教会信徒などの素姓により「露探! 売国奴! (我函館の珍事)」と新聞紙面で弾劾された。

一九二〇年代末期(大正末)になると、函館の旧教徒は団助沢と湯川にそれぞれ四、五戸ずつのコロニーを形成し、自給自足で賄っていた当初の牧畜、養鶏、養蜂のほかに、農耕や馬車追い、アジウリ、西瓜の行商や函館市民にとって馴染みの深いパン売りや旧教徒独自のアルコール飲料「ブラガー酒」の製造、販売などで生計を立てていた。しかし当時、北洋漁業と関わりがなかった旧教徒たちは、当時の物価や土地の確保

農農業経営の問題などによって死活の困窮に陥り本州や樺太、アメリカなどへ移住し、旧教徒が住んだ団助沢や湯川の住居跡には、樺太などからの新たな旧教徒がしばしば入居したが、ついには一九二六年(大正一五)二月一日付の「団助沢の露人、全部居なくなる」の新聞記事が函館市街に伝えられた。果たして、旧教徒にとって日本で最初の聖地として選んだ函館は、「ベロヴォージェ」の夢のまた夢だったのだろうか。

一九一七年(大正六)のロシア一〇月革命によりソビエト政権が樹立されると、ロシア本国から多くの白系ロシア人、いわゆる亡命ロシア人が函館に移住した。革命以前の函館には露領漁業に関係するロシア人が四〇人程度在住していたが、この年の函館地区内のロシア人居住



111 函館ハリストス正教会にたたく
むズヴェーレヴァ姉妹
1940年代

ヴェーレフは、一九三二年（昭和七）に「北海道露国移民協会」の会長に就きソビエト極東から脱走、漂着したロシア人らの助命救援活動のために奔走し、一九三二年（昭和七）から一九三三年頃には、ソ連領事館や多くのロシア人が住んでいる交通の要所函館に映り住んだ。函館では、家族とともに松風町で喫茶店「ボルガ」を開店したが一九三四年（昭和九）の大火で焼失し、洋服や小間物、パン・菓子店として再建した。ズヴェーレフは、一九四三年（昭和一八）にスパイ容疑で収監され、翌年札幌刑務所で獄死した。残されたズヴェーレフ夫人と五人の子供、祖父のズヴェーレフ家は、亡父の家業を引き継いで生計をたて、子どもたちは大谷幼稚園や大森小学校、新川小学校、遺愛女学校などに通いながら函館の子どもたちと一緒に多感な少女時代を過ごした。ズヴェーレフ家は一九五四年（昭和二九）九月に離函し、東京、横浜、大連そしてソ連時代の本国へと流浪の生活を送ることになった。それからおよそ四〇余念ぶりに、一九九五年（平成七）春に三女オリガ、二〇〇三年（平成一五）一二月には次女ガリーナが、父の眠る生まれ故郷函館のロシア人墓地を訪れている。

毛皮商を家業としていたドミートリイ・ニコラエヴィチ・シュウエツとその妻エフロシーニヤ、フィリー

者数は統計上一八〇人を数え、一時的な滞在者を含めロシア極東からソビエト政権に背くロシア人を中心として実際にはその二、三倍に達するロシア人が大勢函館に押し寄せてきたようである。その中であって、ズヴェーレフ家やシュウエツ家のように函館を第二の故郷としながらも代を重ねながら時代に翻弄され、数奇な運命を辿った白系ロシア人がいた。一九二七年（昭和二）頃、ロシアから亡命して室蘭に定住した白系ロシア人クジイマー・ズ

プ、マールファアの四人家族のシュウエツ家は、一九二〇年代、サハリンの北西海岸にある当時流刑地で高名だったアレクサンドロフスクから革命を逃れ北緯五〇度線を越え、日本占領下の樺太に亡命し、ハルビンを経て一九二九年（昭和四）に毛皮の集積地として海外にも知られていた函館に移住した。その頃、シュウエツ家はフィリープの妻、その子二人が加わり七人家族となり、正教会に近い元町に居を構えた。函館では、毛皮のほかに洋酒や砂糖の取引、不動産業にも携わり成功をおさめ、一九三〇年（昭和五）には邸宅を新築した。一九三四年（昭和九）、ドミートリイは不慮の事故で亡くなり、白岩神父と神戸のボブロフ神父立ち会いのもと函館のロシア人墓地に埋葬された。ドミートリイ亡きシュウエツ家は、関税法違反や子どもの進学などで一九三六年（昭和一一）に函館を去った。慣れ親しんだシュウエツ家の居宅は、後にソーセージ製造業を営んだカール・レイモンの居宅となった。

その後の息子フィリープを中心とするシュウエツ家は、日ソ関係の悪化に伴う警察の執拗なマークの中で神戸と東京に居を構えながら北海道、樺太で毛皮業に奔走し、東京では戦争中の宗教団体法により正教会の府主教の座を降りたセルギイの面倒をみるなど白系ロシア人の取りまとめ役となった。また、フィリープ亡き後、息子のヴァレーリイは、函館から上海に亡命し晩年を鎌倉で過ごした函館ゆかりのデンビー商会二代目アルフレッド・デンビーの墓を横浜の外国人墓地に建立している。

函館ハリストス正教会ゆかりの人々

大矢 京右

市立函館博物館学芸員

国内の一大漁業基地として栄えた函館では、明治から昭和にかけて函館発展のために尽力した篤志家や、信仰の傍ら日口（日ソ）間における漁業協定協議で活躍した実業家など、多くの正教会ゆかりの人々の姿があった。

アントニイ馬場民則（一八五四～一九〇八）は、八王子千人同心であった馬場八百蔵の子として出生し、一八五八年（安政五）に親子で七飯村に入植した。箱館戦争時に旧幕府軍として参加した兄が咎めを受けたことで「魯学」を志し、函館ハリストス正教会のアナトリー司祭に洗礼を受け、開拓使のロシア語教師サルトフに料理やロシア語の教えを受けた。一八七四年（明治七）に上京してニコライ司祭に師事した後には、法律を学んで弁護士となり、弁護士会長や函館区会議員も歴任するなど、名実ともに函館の名士としての地位を確立したのである。

その三男として函館区会所町で出生したモイセイ馬場脩（一八九二～一九七九）は、日本歯科医科専門学校卒業後にアメリカのウエスタン・デンタル・カレッジで博士号を取得し、一九二四年（大正一三）から東京の本郷で歯科医を開業したが、幼い頃から興味のあった考古学・民族学への情熱を断ち難く、一九三〇年



112 馬場脩先生記憶祈禱・追悼会

(昭和五)に閉院して以降は北海道・樺太・千島でアイヌ資料の収集や発掘調査を行った。発掘調査で南千島シコタン島の斜古丹聖三者教会を訪れていた馬場脩は、ロシア文化の影響を受け敬虔な正教徒となったクリルアイヌから、聖歌を歌ってくれとせがまれ、ほとほと困り抜いたというエピソードを述懐している。これらの調査行で得られたアイヌ資料は、残念なことにその大部分が東京大空襲により灰燼に帰した。しかしかろうじて残された民具資料七五八点が国の重要有形民俗文化財に指定され、一九七一年(昭和四六)に馬場脩の愛着のある市立函館博物館へ納められたのである。

馬場脩は、アイヌ研究の傍ら東京神田にあるニコライ学院の英文科主任教授など敬虔な正教徒としての務めを全うし、一九七九年(昭和五四)に埼玉県において八七年の生涯を閉じた。同年函館ハリストス正教会では、函館をこよなく愛した氏を偲んで「馬場脩先生記憶祈禱・追悼会」が催された。

元松代藩士高井栄司の長男として出生したアフアナシイ高井義喜久(一八七三〜一九四四)は、明治初年にニコライ神父が松代を巡教した際に一家で受洗し、小学校卒業後に東京の神学校を卒業して、伝道に励んだ。一八九七年(明治三〇)からは、ロシア語の能力を活かして樺太の「薩吟噓島漁業組合」で通訳として就労し、日露戦争の混乱時における在ロシア日本人を無事帰国させる立役者ともなった。

一九二九年(昭和四)からは日魯漁業で日ソ漁業交渉の実務にあたり、ソ連から帰国する際には、正教をモチーフにした絵画やアイコン、十字架などを持ち帰るようになった。高井義喜久が購入し、日魯漁業東京本社



113 「女子修道院を訪れる皇女」ヴァシリイ・イヴァノヴィチ・スリコフ作



114 白岩神父とデンビー一家

ったことや母親が日本人であったこともあり、幼少期を日本で過ごした。ケンブリッジ大学専門部卒業後は父親が共同経営者となっているセミョーノフ商会に入社したが、日露戦争でサハリンの漁場を失ったことを契機にカムチャッカへと転じ、デンビー商会を設立して経営の第一線に立った。

デンビー商会は函館とウラジオストクに店舗を構え、デンビー自身も函館に居住し、正教徒として函館ハリストス正教会で結婚式を挙げた。また、漁業が不振となつてからは貿易商に切り替えて成功し、一九三〇年（昭和五）に函館市産業功労賞受賞、一九三五年（昭和一〇）にはイギリス名誉領事に就任するなど、函館で最も成功を収めた外国人の一人であった。

長室に飾られていた絵画「女子修道院を訪れる皇女」は、ロシアの巨匠ヴァシリイ・イヴァノヴィチ・スリコフが一九一二年（明治四五・大正元）に描いた習作として世界的に高い評価を得ており、現在北海道立函館美術館に収蔵されている。

サハリンの漁業家ジョージ・フィリップス・デンビーの長男として出生したアルフレッド・ジョージ・デンビー（一八七九〜一九五三）は、日本に店舗があ

年表
参考・引用文献
写真・図版一覽

函館ハリストス正教会関係年表

西暦・和暦	月 日	函館ハリストス正教会関連の主な出来事(太字は社会情勢)
1793 寛政5		ロシア使節ラクスマン、エカテリーナ号で箱館に来航
1802 享和2		幕府、箱館奉行所を設置
1811 文化8		ロシア、ディアナ号艦長ゴロヴニンら、クナシリ島で捕らえられ、箱館に護送(その後松前町福山に幽閉)
1813 文化10		クナシリ沖でロシアに拿捕の高田屋嘉兵衛と引き換えにゴロヴニンら釈放(ゴロヴニン事件解決)
1816 文化13		ゴロヴニン、『日本幽囚記』を発表
1836 天保7	8月13日	聖ニコライ、ロシアのスモレンスク県ベリョーザ村に生まれる
1853 嘉永6		アメリカ・ペリー艦隊、浦賀に来航 ロシア・プチャーチン艦隊、長崎に来航 (中国語通訳としてゴシケーヴィチ同行)
1854 嘉永7 安政元		ロシア・プチャーチン艦隊、箱館に来航 日米和親条約締結 ペリー艦隊、箱館に来航
1855 安政2		日露和親条約締結 松前周辺を除く全蝦夷地が幕領となる
1856 安政3		弁天岬台場築造着工 アメリカ駐日総領事ハリス、下田に着任
1857 安政4		ゴシケーヴィチ、橋耕齋の協力を得て『和魯通言比考』を編纂 デミードフ賞受賞 アメリカ貿易事務官ライス、箱館に着任 五稜郭築造着工
1858 安政5	11月	軍艦ジギット号でロシア領事ゴシケーヴィチ家族、書記官オワンデルら領事館員、医師アルブレヒト、海軍士官ナジモフ、修道司祭フライラートら15人来箱(実行寺止宿) 亀田万年橋付近にロシア病院を開設 幕府、米・露・仏・英・蘭と修好通商条約締結
1859 安政6	1月 6月 6月	実行寺境内に祈祷所普請 ロシア軍艦アスコリド号箱館入港、領事館付属教会管轄司祭ワシリイ・マホフ長司祭と息子イワン・マホフ着任 アスコリド号航海士ゲオルギイ永眠(ロシア人墓地最初の埋葬者) 箱館港、通商貿易港として開港 フランス人メルメ・カシオン神父(カトリック)来箱
1860 万延元		上大工町(現、元町)にロシア領事館竣工、実行寺境内から初代聖堂移築(鐘大1個、小4個を設置)

	8月 9月	聖ニコライ、日本へ向かう ロシアの植物学者K.M.マキシモヴィチ、日本の植物採取のために来日、ロシア領事館に滞在(1864年に帰国) 聖ニコライ、ニコラエフスクにて越冬 大主教インノケンティ(後、モスクワ及びコロムナの府主教)より薫陶を仰ぐ 箱館に医学所設置 大町築出島(外国人居留地)竣工
1861 文久元	4月 7月14日 9月 10月	聖ニコライ、ニコラエフスクを発つ イワン・マホフ、子ども用ロシア語入門書『ロシヤノイロハ』を発行 春頃、修道司祭フィラレト、ロシアへ帰国 聖ニコライ、ロシア軍艦アメリカ号で箱館に到着 大主教インノケンティ、箱館に来航 生神女誕生祭の奉神礼を行う ロシア病院、火事で焼失 ゴシケーヴィチ、長崎の志賀浦太郎をロシア領事館通訳に招聘 武田斐三郎ら、亀田丸でニコラエフスクに渡航
1862 文久2		聖堂、南北に拡張して十字型とする ゴシケーヴィチ、総領事昇任 志賀浦太郎、箱館奉行雇い通訳となる 会田光正、志賀の門下生となる
1863 文久3		ロシア海軍病院竣工(領事館隣の敷地) 医師アルブレヒト、帰国 後任に海軍医師ゼレンスキイ、着任 誦経者サルトフ、箱館に着任 現在の遺愛幼稚園の場所にイギリス領事館竣工 ピョートル・アレクセーエフ、大町居留地にホテル「ニコラエフスク」を開業(1883年に閉業) 弁天岬台場竣工
1864 元治元	5月 6月	エリザヴェータ・ゴシケーヴィチ、箱館で永眠 木村謙斎、大館へ帰る 新島七五三太、ロシア領事館内に居住 新島七五三太、アメリカに向け箱館出帆 箱館奉行所業務開始 木津幸吉、船見町に北海道最初の写真場を開設(一説に1866年)
1865 慶応元	2月 3月	イギリス領事館から出火、ロシア領事館類焼 聖ニコライ、ゴシケーヴィチと江戸へ旅する ロシア総領事ゴシケーヴィチ、帰国 後任として領事ビュツツォフ、着任
1866 慶応2	3月	ロシア病院から出火、焼失 聖ニコライ「魯話和訳」を編纂 五稜郭関係工事完成
1867		地蔵町居留地、竣工

慶応3		大政奉還
1868 明治元	5月	<p>宣教規則(布教の方針)作成 パウエル澤邊琢磨、イオアン酒井篤礼、イアコフ浦野大蔵の3人、 聖ニコライから洗礼を受ける パウエル澤邊、イオアン酒井、イアコフ浦野、イオアン酒井の妻及び 女兒と澤邊の従者退蔵ら箱館から大間に逃れる イオアン酒井、郷里金成へ、イアコフ浦野、金濱村に残る 澤邊、気仙沼にて捕らわれ箱館に護送 妻子招き萱部の親戚に 潜行 戊辰戦争勃発 榎本釜次郎ら旧幕府脱走軍、五稜郭を占拠</p>
1869 明治2	1月 9月	<p>医師ウエストリ、永眠(ロシア人墓地に埋葬) 日本宣教団(日本伝道会社)設立のため、聖ニコライ、ロシアへ一 時帰国 ロシア領事ビュッツォフ、転任 領事代理トラフテンベルク、着任 聖ニコライ、『ロシア報知』に論文「キリスト教宣教団の観点から見た 日本」を発表 旧幕府脱走軍降伏(戊辰戦争終結) 五稜郭開城 開拓使設置 蝦夷地を北海道と改称 函館に開拓使出張所設 置 「箱館」が「函館」に改称</p>
1870 明治3	4月 9月	<p>宗務院において日本における宣教団の設立採択 聖ニコライ、日本における宣教団長に任命され、掌院に昇叙 領事代理トラフテンベルク、転任 ロシア領事オラロフスキイ、着任</p>
1871 明治4	3月22日 (露暦) 12月	<p>聖ニコライ、函館に戻り、宣教団発足 グリゴリイ・ヴォロンツォフ神父、3か月間函館に滞在 教法学校を設立し、課程を定める 石版印刷により天主経、日誦経文、東教宗艦、教理問答等を印刷 日本で最初の復活祭が行なわれる(7人の日本人と14人の外国人) 小野莊五郎ら函館にて洗礼を受ける 聖ニコライ、イオアン小野に仙台布教を勧め、イオアン小野、ペトル 笹川、イアコフ高屋、仙台に向かう 札幌を開拓使本府とし、函館、根室に出張開拓支庁を設置</p>
1872 明治5	1月 2月	<p>修道司祭アナトイ、函館に着任 聖ニコライ、東京着 函館正教会において、マトフェイ影田、イオアン酒井、パウエル津田 を伝教師に選定 イオアン酒井、講義所を恵比須町の三浦与八郎宅とし伝教 する パウエル津田、講義所を大町の「山吉」に設け、伝教する マトフェイ影田、講義所を天神町の「越後屋」真野宇兵衛宅、</p>

		<p>腰山宅に設け、伝教する</p> <p>3月22日 酒井ゑい、長女澄、次女実と共に函館に移住</p> <p>3月23日 復活祭に30名前後の信者参拝</p> <p>3月26日 イオアン酒井、官憲に捕縛、町会所に投獄</p> <p>3月29日 パウエル津田、マトフェイ影田らの伝教者、函館開拓使刑法局に呼び出され、弁天台場に投獄</p> <p>5月1日 マトフェイ影田、パウエル津田、イオアン酒井、イオシフ真野が赦免アナトリー神父、感謝祈祷執行</p> <p>マトフェイ影田、パウエル津田、テイト小松ら、正教関係の宮城県人婦県命令 アナトリー神父の祝福を受け、函館を発つ</p> <p>7月 カムチャツカの主教ヴェニアミン来函 生神女就寝祭の日に奉神礼を行なう</p> <p>10月 イオアン酒井、水沢県に帰県命令、金成の川股家に預けられる、これを機に金成、刈敷、伊豆野地方を伝道</p> <p>ロシア領事オラロフスキイ、離函 函館の領事館閉鎖 東京にロシア公使館開設</p> <p>ホテル「ニコラエフスク」、ピョートル没後、妻ソフィヤが継承</p> <p>福土成豊、船場町自宅に日本初の気候測量所を設置</p>
1873 明治6	<p>9月 官立函館学校へロシア語教師として招聘され、再来日する</p> <p>9月 官立函館学校を官立ロシア語学校と改称</p> <p>10月 修道司祭アナトリー、正教「伝教学校」開設</p> <p>修道司祭アナトリー、議員を選定して布教会事を行う</p> <p>函館正教会婦人会の創立</p> <p>明治政府、切支丹禁制の高札を撤去</p> <p>開拓使、函館、青森間に定期航路を開設</p> <p>函館運上所、函館税関と改称</p>	
1874 明治7	<p>1月 誦経者サルトフ、永眠(ロシア人墓地に埋葬)</p> <p>2月 聖ニコライ、函館巡廻</p> <p>2月 「伝教学校」増築 小学部を正教学校とする</p> <p>正教学校女子部に「裁縫場」を設置</p> <p>復活祭に150人余の参拝者あり</p> <p>5月 東京にて第一回公会議(掌院ニコライ/マトフェイ影田、パウエル津田、パウエル佐藤、イオアン小野、イアコフ高屋)開催</p> <p>6月 官立ロシア語学校を官立松蔭学校と改称</p> <p>6月 ヤコフ・チハイ、来函(一説には1873年)</p> <p>8月 修道司祭モイセイ(コストイリョフ)、修道司祭エウフィミイ(チュエイルキン)、来日</p> <p>9月 修道司祭モイセイ、函館に着任</p> <p>9月 修道司祭アナトリー、外国人墓地貸与を約定(ロシア人墓地)</p> <p>函館裁判所を設置</p>	

		ハリス宣教師(アメリカメソヂスト監督〔エписコバル〕教会) 来函 デニング司祭(英国聖公会) 来函
1875 明治8	1月 3月 7月22日 7月25日 11月	ヴェラ山中の埋葬事件起こる 117号地(旧ロシア病院跡地)の賃貸契約成立 パウエル澤邊、函館においてカムチャツカの主教パウエルより司祭に叙聖〔日本で始めての神品機密〕 イオアン酒井、函館においてカムチャツカの主教パウエルより輔祭に叙聖 聖ニコライ、来函 修道司祭アナトリイ、修道司祭エウフイミイ、復活祭を執行 修道司祭アナトリイ、117号地(旧ロシア病院跡地)の使用権を1876年末をもって返上 松蔭学校、元町学校と改称 ゴシケーヴィチ、故郷ミンスクの西、ヴィリノ(現、ヴィリニユス、リトアニアの首都)で永眠 この頃ダミアン五十嵐、福音を伝えるために有川村に出張、大村萬助(佐藤由助 後イオアン)宅を講義所とする 樺太千島交換条約締結
1876 明治9	3月	有川にてイオアン大村(萬助)、ペトル田中(西松)、パウエル寺澤(万之助)が洗礼を受ける
1877 明治10	7月 9月 11月 12月	公会で輔祭イオアン酒井、伝教者マトフェイ影田、イアコフ高屋、テモフェイ針生を司祭に推挙 輔祭イオアン酒井、伝教者マトフェイ影田、イアコフ高屋、テモフェイ針生、修道司祭アナトリイと共にウラジオストクに到着するも、主教パウエル死去につき叙聖を断念し、帰国 須川長之助、アナトリイ司祭より洗礼を受け、ダニールの聖名を授けられる。「第壹参五号のハリストス正教会員之證」を日本ハリストス正教会から交付される ロシア軍艦アレウト号、ニコラエフスクからウラジオストクへ向かう途中、瀬棚村海岸で難破 「教会報知」第1号発刊(～明治13年まで) 西南の役勃発
1878 明治11	4月17日 4月20日 4月 7月	ウラジオストクから軍艦エルマーク号が函館入港 19日、瀬棚村で難破のアレウト号乗組員収容のため函館から瀬棚に出帆 軍艦エルマーク号端舟、アレウト号遭難者収容時に転覆、12人溺死 司祭ガヴリイル・チャエフ、来日 輔祭イオアン酒井、伝教者マトフェイ影田、イアコフ高屋、テモフェイ針生、パウエル佐藤がウラジオストクでマルチアニン主教によって司祭に叙聖

		北海道最初の新聞「函館新聞」創刊
1879 明治12	3月 8月	修道司祭アナトリー、東京の公使館付司祭となり函館を去る 聖ニコライ、横浜を発ってロシアへ一時帰国 この頃の日本の宣教団の景況(掌院1 修道司祭3人 日本人司祭6人 伝教者73人 31か所の教区信徒数6,000人) ヤコフ・チハイ、函館を去り上京 修道司祭エウフイミイ、ロシアへ帰国 堀江町から出火、2,326戸焼失 函館公園に開拓使函館仮博物館を開館 函館公園で開園式を挙行
1880 明治13	3月30日 (露暦) 11月20日 12月 12月	聖ニコライ、主教に叙聖(レーヴェリの主教) 聖ニコライ、日本へ戻る ヤコフ・チハイ 妻と共にロシアへ一時帰国 修道司祭アナトリーも同時帰国 山下りんロシアへ留学 「愛々社」より「正教新報」第1号発刊(～大正元年まで) サハリンへの出漁者、「出稼漁業者寄合」を組織
1881 明治14	3月14日 8月	司祭イオアン酒井篤礼、永眠 聖ニコライ、ドミトリイ(スミルノフ)神父見舞いのため来函 函館復活教会の景況(信徒200人〔男106人、女94人〕、死者3人、洗礼21人、婚配1、講義所2) 全国公会の統計(教会96、神品14人、教師3人〔唱歌教師外国人2人、女教師外国人1人〕、伝教者79人、信徒6,099人、会堂69、講義所263)
1882 明治15	2月 5月 7月 8月 9月	ドミトリイ神父、ロシアへ帰国 ガヴリイル・チャエフ神父、函館に着任 全国公会において輔祭テイト小松、正伝教者ペトル笹川、伝教者ペトル仮野、司祭叙聖に選出 テイト小松韜藏神父、函館に着任 エレナ酒井ゑい、函館正教会女徒親睦会を創立 ガヴリイル神父、ロシアへ帰国 開拓使廃止、函館、札幌、根室の三県を設置
1884 明治17	3月 4月	私立「函館正教小学校」に隣接して、正教会の私立「裁縫女学校」を創立 生徒30人、校長エレナ酒井ゑい 有川(現、上磯)会堂建立、テイト小松神父成聖 テイト小松神父、根室・道東巡回
1885 明治18	5月 8月	テイト小松神父、色丹島巡回 聖ニコライ、函館巡回
1886 明治19	5月	ヤコフ・チハイ、ロシアへ帰国、同年12月永眠 会所町に私立函館露語学校を開設

		『聖詠経』発刊 三県を廃止し、札幌に北海道庁、函館、根室に支庁を設置
1888 明治21	10月	この頃、正教学校最盛期 この頃、山下りん「機密之晚餐」を描く(上磯正教会に現存) セルギイ・グレボフ神父、来日 函館で上水道工事に着工
1889 明治22		函館元町に聖和女学校設立 この頃、セルギイ・グレボフ神父、函館に着任 テイト小松神父、ペトル湯村伝教者と共に牧会にあたる 黒松内から道南にかけて信徒数が増加 大日本帝国憲法発布 堀川(願乗寺川)の埋立工事終了
1890 明治23	1月 4月6日 9月	裁縫女学校を正教女学校と改称 掌院アナトリー、ロシアへ帰国 修道司祭セルギイ(ストラゴロツキイ)、修道司祭アルセニイ(ティモフェーエフ)、来日(一説には10月) セルギイ・グレボフ神父、東京公使館付きとなって離函 後任の修道司祭アルセニイ、着任 教育勅語発布
1891 明治24	3月8日 5月11日 8月	東京復活大聖堂成聖式執行 大津事件 聖ニコライ、北海道巡回 巴学校、露語科を設置 ペトル山懸金五郎神父、函館に着任 増田詠隊教師、函館に赴任 在留英商人ヘンソン、旧ディアナ号由来の大砲を函館公園に寄付
1892 明治25	12月18日	函館に司祭ペトル山懸、札幌に修道司祭アルセニイ、根室に司祭テイト小松が配置され、北海道は三司祭体制となる 仙台福音会聖堂成聖式 『裏錦』刊行(～明治40年まで)
1893 明治26	5月 7月 9月 11月28日 (露歴)	修道司祭セルギイ(ストラゴロツキイ)、ロシアへ帰国 公会でテイト小松神父、白河教会へ転任決定 修道司祭アルセニイ、ロシアへ帰国 掌院アナトリー(チハイ)、ペテルブルクにて永眠 『心海』刊行(～明治32年まで)
1894 明治27		日清戦争勃発
1895 明治28		『聖事経』発刊 日清戦争終結

1896 明治29		函館検疫所設置 弁天岬台場が埋め立てられる 函館船渠株式会社創立(後の函館ドック株式会社)
1897 明治30	2月	アンドレイ目時、司祭に叙聖
1898 明治31	1月 6月 8月	掌院セルギイ(ストラゴロツキイ)、アンドロニク(ニコリスキイ) 師と共に再来日 正教学校廃校 掌院セルギイ、聖ニコライと北海道巡回(～10月) 函館尋常中学商業専修科(函館)でロシア語教授開始
1899 明治32	2月	掌院セルギイ、ロシアへ帰国 函館正教会の景況(信徒345人、戸数83戸、洗礼13人) 全国公会の統計(教会231、神品35人、伝教者161人、信徒24,924人、会堂170) 函館に区制施行 大町に露領漁業の函館セミョーフ商会、設立 この頃から、日本人がカムチャツカ漁業に殺到し始める
1900 明治33	7月 10月	『正教要話』(月刊)発刊 ペトル山懸神父、盛岡正教会へ転任 後任は翌年の全国公会までペトル仮野成章神父 函館正教会の景況(信徒352人、戸数87戸、洗礼18人) 全国公会の統計(教会257、神品36人、伝教者162人、信徒25,698人、会堂173) ロシア副領事ゲデンシュトロム、函館に着任 函館要塞司令部を設置 要塞地帯法施行規則実施
1901 明治34	3月 10月	「正教女学校」廃校 アンドレイ目時金吾神父、函館に着任 アンドレイ目時神父、色丹島のクリルアイヌ信徒を巡回 函館正教会の景況(信徒353人、戸数87戸、洗礼11人) 全国公会の統計(教会259、神品38人、伝教者154人、信徒26,310人、会堂174) 『我主イイススハリストスノ新約』刊行(聖ニコライ・中井訳)
1902 明治35		ゲデンシュトロム、ロシア領事館建設のため船見町125番地の1129坪を購入 『大斎第一週奉事式略』、『受難週間奉事式略』発刊 日英同盟締結 下湯川村、上湯川村、亀尾村が合併して湯川村となる
1903 明治36	5月	セミョーフ商会内で領事事務行われる(セミョーフ商会、東亜鉄道汽船代理店) 京都福音聖堂成聖式執行

	6月 8月1日	船見町のロシア領事館工事開始 翌年2月に日露戦争勃発 領事引き上げ、工事請負人退去命じられる ロシアにてサロフの克肖者聖セラフィム列聖される 函館正教会の景況(信徒409人、戸数110戸、洗礼24人) 全国公会の統計(教会260、神品40人、伝教者149人、信徒27,966人、会堂174) 『五旬経』発刊 函館開港50年記念祭を挙
1904 明治37	2月8日 2月22日 4月 4月10日	要塞地帯法によりアンドレイ目時神父、フェオドル豊田伝教者ら17人、函館退去を命ぜられる 22日までに、新たに露探の嫌疑をかけられた7人が函館退去を命ぜられる アンドレイ目時神父ら上磯へ退去、有川(上磯)教会にて宣教 ロマン福井神父(根室)、来函。4月4日、厳斎祈祷を聖堂で行い、増田詠隊教師と信徒宅を訪問 有川教会で目時神父により創立以来初めて教会暦通りの復活大祭当日の祈祷行われる 日本正教会にて「正教信徒戦時奉公会」及び「俘虜信仰慰安会」を設立 函館正教会の景況(信徒383人、戸数109戸、洗礼11人) 全国公会統計(教会260、神品39人、伝教師155人、信徒28,397人、会堂174) 日露戦争勃発
1905 明治38		函館正教会の景況(信徒369人、戸数103戸、洗礼10人) 全国公会統計(教会260、神品39、伝教者153人、信徒28,746人、会堂174) 日露戦争終結 日露講和条約締結
1906 明治39	2月 4月 5月	「正教信徒戦時奉公会」、「俘虜信仰慰安会」解散 聖ニコライ、ロシア宗務院によって大主教に昇叙 船見町のロシア領事館の工事再開 ロシア副領事トラウドシヨリド、函館に着任 12月に領事館が完成するが、翌年の函館大火で被災 函館正教会の景況(信徒343人、戸数93戸、洗礼13人) 全国公会統計(教会264、神品40人、伝教者169人、信徒29,289人、会堂174)
1907 明治40	8月25日	函館大火により聖堂及びすべての建物を焼失 日露漁業協約締結 堤清六、平塚常次郎、宝寿丸でカムチャツカ漁場に出漁 函館にデンビー商会、設立 東川町から出火、8,977戸焼失

1908 明治41	7月 9月	船見町のロシア領事館竣工 アンドレイ目時神父、瀬沼恪三郎、木村栄吉とウラジオストクに渡航 アンドレイ目時神父、帰国 函館正教会の景況(信徒294人、戸数80戸、洗礼8人)、大火後に 移転した者11戸39人 全国公会の総計(教会265、神品41人、伝教者123人、信徒 30,432人、会堂174) 青函連絡船、就航 露領水産組合、設立
1909 明治42	8月	主教セルギイ(チホミーロフ)、北海道・サハリン巡回(~11月) 函館正教会の景況(信徒312人、戸数81戸、洗礼16人) 全国公会の統計(教会265、神品42人、伝教者122人、信徒 31,175人、会堂174) 『八調経』発刊 私立函館図書館、函館公園内に開設
1910 明治43	5月 7月	主教セルギイ、函館正教会と有川正教会を巡回 大阪生神女庇護聖堂成聖式 函館区公会堂、新築落成 中華会館、新築落成
1911 明治44	7月 8月	日本正教会、東京で「ニコライ大主教渡来50年期祝典」 函館正教会で「ニコライ大主教渡来50年期祝典」 函館正教会の景況(信徒327人、戸数91戸、洗礼15人) 全国公会統計表(教会266、神品44人、伝教者112人、信徒 32,700人、会堂175) 函館郵便局、船場町に新庁舎落成
1912 明治45	2月16日 8月 11月	午後7時、ニコライ大主教、東京神田駿河台のニコライ堂で永眠(享 年75歳) アンドレイ目時神父京都へ転任し、秋田からモイセイ白岩徳太郎 神父、函館に着任 「正教時報社」から「正教時報第1号」発刊 この頃、リユース商会、函館に進出 ニコラエフスク市から観光団来函 ロシア語「函館案内」出版 堤商会、本部を新潟から函館に移転 音羽町から出火、733戸焼失
1913 大正 2	2月16日 6月25日	大主教ニコライ永眠1周年記念パニヒダ執行、追悼説教会開催 パウエル澤邊琢磨神父、永眠 函館正教会の景況(戸数95戸、信徒314人、信徒総数999人、洗 礼16人) 全国公会の統計(教会266、神品教役者42人、伝教者115人、 信徒総員34,111人、会堂175)

		若松町から出火、1,532戸焼失
1914 大正 3	8月2日 10月29日 11月 10月頃	聖堂再建実地調査のため、セルギイ主教、河村副輔祭、来函 パウロフ、船見町でロシア語教室開く 「聖堂再築願」を函館区長に提出 聖堂予備工事着工 第1次世界大戦勃発 銭亀沢村大字笹流に旧教徒ロシア人一行入植 露領漁業貿易研究会発足 日魯漁業株式会社創立
1915 大正 4	2月4日 5月 6月10日 6月13日 7月14日 7月15日 9月10日 11月	石垣改築工事着工 石垣工事終了 セルギイ主教巡回、起工式 コンクリート工事着工 セルギイ主教、北海道巡回 基礎成聖式執行 煉瓦壁ほぼ完成 屋根完成、足場一旦撤去
1916 大正 5	4月20日頃 5月頃 6月19日 10月14日 10月15日 10月17日 11月	鐘楼階段工事 門柱組み立て、箱根塔の沢より2トンの大鐘移設 セルギイ主教巡回 大説教会開催 新築聖堂成聖式執行(セルギイ主教司捧) 函館正教会で地方公会開催 セルギイ主教及び神品・教役者による講演会 カムチャツカのネストル主教、来会 セルギイ主教巡回 ロシア2月革命、ロマノフ王朝滅亡 10月革命、ソビエト政権樹立 旭町から出火、1,763戸焼失(白玉火事)
1917 大正 6	6月30日 7月22日 8月10日 10月 10月14日 11月11日 12月5日	カムチャツカのネストル主教、再び来会 東京浅草正教会イグナティ岩間興一副輔祭、輔祭叙聖 函館正教会赴任 北海道全道で衛生展覧会開催 聖堂を公開 参拝者2千有餘名 イグナティ岩間輔祭、司祭叙聖 札幌・小樽の管轄司祭として転任 函館正教会成聖式1周年記念及び児童大運動会開催 青年会再興 露語夜学部を開設、始業式 ロシアでレーニン、革命政権樹立 帝政ロシア崩壊
1918 大正 7	2月	第12回アポロ音楽会開催 増田音楽会出演 青年会主催「露語研究会」開講 復活大祭及び独立祝賀会開催 シベリア出兵

		デンビー商会経営難に陥り、新たに北洋漁業株式会社を設立
1919 大正8		白岩神父、函館商業高校にてロシア語教授開始 青森正教会、函館正教会管轄下となる
1920 大正9	9月16日	函館区公会堂にて北上増田連合主催音楽大演奏会開催 聖歌隊出席 レベデフ領事、シベリア孤児救済義援金募集 尼港事件起こる
1921 大正10	2月11日 2月16日 4月14日 5月 8月27日	札幌正教会青年会主催聖歌・器楽講演会開催 函館正教会聖歌隊賛助出演 故ニコライ大主教永眠日パニヒダ カムチャツカ掌院ニコライ神父陪祷 信徒宅類焼 全国の教会、信徒より支援受ける セルギイ主教、大主教に昇叙 生神女就寝祭前晩祷 多くのロシア人参拝 東川町から出火、2,141戸焼失 北洋漁業者、軍艦の護衛で出漁 元町にロシア長屋できる
1922 大正11	1月6日	函館正教会のクリスマス 市民の一大関心事と報じられる 函館正教会の景況(戸数75戸、信徒290人、洗礼12人) ソビエト社会主義共和国連邦成立 函館に市制施行される ロシアから、多くの白系ロシア人が来函
1923 大正12	9月1日	関東大震災起こる 東京復活大聖堂損壊
1925 大正14	2月 5月	函館ソ連領事館再開 旧ロシア帝国領事レベデフ一家亡命 新ソ連領事館再開 新領事ロギノフ一行、着任 駐日ソ連通商代表部函館支部設置 セルギイ大主教巡回 日ソ間で国交回復 日ソ基本条約調印 極東貿易局函館支部設置 ソ連商船隊函館支店設置 日露協会函館支部設置
1926 大正15 昭和元	8月8日 10月15日 10月19日	エレナ酒井薺い、永眠 入口石階段、屋根、漆喰壁、ペンキ塗り、花ゴザ、絨毯他修繕 函館聖堂成聖10年記念祝典 セルギイ大主教、ネルトル主教、ワシリイ露輔祭来会 パウエル松本伝教者、輔祭叙聖 セルギイ大主教、函館区公会堂で講演会開催

		函館市、露国展覧会開催 川崎汽船、ウラジオストク航路開設 函館在住ロシア人80人(団助沢居住9戸39人含む)
1927 昭和2		旧ロシア領事館修復に着手 駐日ソビエト大使、避暑地として7月から9月まで滞在 革命10周年祝賀会、領事館で開催 ロシア通訳組合発足 ソ連企業カムチャツカ(株)、ルイボ・プロドクトの函館出張所開設
1928 昭和3	12月22日	函館正教会の大鐘、東京復活大聖堂の復興のため移設 東京復活大聖堂より鐘6個届く 日ソ漁業条約締結 ロシア語新聞『週間函館』発行
1929 昭和4	2月17日 12月15日	故ニコライ大主教記念祭音楽会開催 東京復活大聖堂成聖式 北海道亡命露国人協会発足 「北洋同志会」結成 駒ヶ岳、大噴火
1930 昭和5	1月 4月	日曜学校「パニヒダの斉唱聖歌」を発行 セルゲイ大主教、府主教に昇叙 日本正教会、大主教管区より府主教管区となる 函館在留のロシア人116人(ロシア人入植者ピーク) アルハンゲリスキイ、ロシア語新聞を発行
1931 昭和6		函館在住の白系ロシア人減少し始める ルイボ・プロドクト、函館撤退 ロシア個人漁業の経営なくなる
1932 昭和7	2月27日 4月27日 10月23日	パウエル松本輔祭、永眠 緑塔会設立、発会式行う 函館緑塔会主催「聖堂成聖17周年記念祭」開催 教役者住宅、屋根瓦葺き替え 函館日ソ通商協会創立 日魯漁業株式会社、北洋合同漁業株式会社と合併
1933 昭和8	7月2日 7月16日	府主教セルゲイ座下来朝25周年記念祝典 市立函館図書館創設25年「切支丹資料展覧会」開催 故ニコライ大主教の妙法蓮華経研究評釋を出版(～18日)
1934 昭和9	3月21日	函館市教育会創立50年記念で正教学校が表彰、感謝状授与 住吉町から出火、24,186戸焼失 死者2,054名、行方不明662名 信徒宅類焼 全国の教会、信徒より支援受ける
1935 昭和10	2月16日 9月29日	函館正教会の神学校卒業生ら、故ニコライ大主教尊影写真を献納 ソ連通商代表部、函館支部閉鎖 カムチャツカ出漁中の諸兄ら、無事帰函し感謝祈祷

		第1回函館港まつり開催
1936 昭和11	2月16日 7月	ニコライ大主教永眠25周年追悼会 聖体礼儀・パニヒダ 「大主教ニコライ師事蹟」刊行 ルカ日比和平副伝教者、伝教者祝福、着任 2・26事件起こる 日独防共協定締結 日ソ関係悪化
1937 昭和12	6月 10月10日	聖堂大修繕(～9月) 聖堂修繕感謝祈祷 セルギイ府主教座下巡回 日中戦争勃発
1938 昭和13	1月9日 12月25日	青年会の新年会開催 函館ソ連領事引き揚げ 国家総動員法公布
1939 昭和14		函館ソ連領事館再開 宗教団体法施行 「日本ハリストス正教会教団」設立 函館正教会青年会、頒布用イコン(救世主、生神女)を発行 第2次世界大戦勃発 函館市、湯川町と合併 北洋同志会、一般市民対象のロシア語講習会開催
1940 昭和15	12月25日	セルギイ府主教、引退 増田作太郎詠隊教師50年教会奉仕祝賀感謝祈祷、感謝集会開催 降誕祭 モイセイ白岩神父奉職50年、司祭叙聖35年、函館正教会赴任30年記念祭 函館正教会の景況(戸数78戸、信徒265人、洗礼4人)
1941 昭和16	6月 7月 9月1日 12月27日 12月8日	ドイツ、ソ連に宣戦布告 函館ソ連領事館館員家族ら11名引き揚げ イオアン小野帰一神父、ハルビンで主教叙聖 臨時公会開催 国家総動員法に基づき「金属回収令」が実施 モイセイ白岩神父、永眠 日ソ中立条約成立 真珠湾攻撃、太平洋戦争勃発 日本、イギリス・アメリカに宣戦布告 デンビーら漁業経営者、国外に脱出
1942 昭和17	2月 4月27日 8月 9月12日 11月28日	イアコフ藤平新太郎神父、着任 単立教会規則申請及び教会名称を変更、「函館基督正教会」となる 長司祭会議開催 ニコライ小野主教座下巡回(～13日) シャンデアリア大小各1基、吊燭台4基、鐘大小6基、基礎換気口金物8 か所他、供出 「レリメッシュ商会」関係外謀容疑事件起こる 小樽・釧路・函館で白系ロシア人7名が摘発、逮捕

1943 昭和18		函館ソ連領事館ザバーリン領事、転出 後任にザバーリエフ領事、 着任 白系ロシア人組織「函館露西亜人協会」発足 キリスト教関係書、一斉発禁
1944 昭和19	10月1日	函館ソ連領事館閉鎖 仏教、神教、キリスト教関係30万人の大日本戦時宗教報告会結成
1945 昭和20	8月10日 3月10日 7月14日 8月15日	セルギイ府主教、永眠 ソ連領に出漁した日魯従業員ら抑留 東京大空襲 函館空襲 終戦
1946 昭和21	1月8日	イアコフ藤平神父、永眠 ニキタ近藤昇太郎、伝教者祝福 ソ連、南樺太と千島の併合を布告 函館山、一般開放
1947 昭和22	1月 1月26日 5月 6月	米国正教会府主教庁（メトロポリア）より主教派遣、ヴェニアミン主 教来日（～1953） ニキタ近藤伝教者、司祭叙聖、着任 ヴェニアミン主教、大主教に昇叙 ヴェニアミン大主教、巡回
1948 昭和23	10月31日	正教青年会結成 函館正教会の景況（戸数106戸、信徒294人、洗礼34人、永眠11人）
1949 昭和24	4月3日 7月15日 8月20日	境内地買収委員会結成 イシドル中居真行、自給伝教者祝福 北海道正教青年大会開催
1950 昭和25	4月5日 6月11日 6月14日	「函館基督正教会」を「函館ハリストス正教会」と改称 ニコライ大主教御来函90周年式典並びに敷地購入完了、感謝祈 禱 国有地である境内地を買収、移転登記完了 朝鮮戦争勃発
1951 昭和26	7月	大主教ニコライ渡来90年記念式典（東京）
1952 昭和27	3月5日 12月	教会建物の保存登記（聖堂64.2坪 信徒会館44.6坪 司祭館 27坪） 日ロ・日ソ関係史専門家のジョージ・アレクサンダー・レンセン氏、来会 北洋漁業再開 函館正教会の景況（戸数98戸、信徒272人、洗礼5人） 全国公会の総計（神品教役者29人、伝教者18人、信徒総数9,203人）
1953 昭和28		イリネイ主教、来日（～1960）

1954 昭和29	9月11日 9月26日	イリネイ大主教巡回 「洞爺丸台風」(台風15号)、函館襲来 聖堂被害
1955 昭和30	6月29日 8月7日	屋根、外壁、正門前石階段修理(～8月7日) 聖堂大修理終了(洞爺丸台風被害箇所)
1956 昭和31	4月24日 11月25日	ドン・コサック団来会 宗教法人登記完了 日ソ通訳会発足 『函館ロシア語研究会』発足 ロシア語講座開催 北海道、旧ロシア領事館補修工事行う 日ソ漁業条約調印 日ソ国交回復共同宣言
1957 昭和32		ギリシヤ人船主デミトリー・ロース氏夫妻来会、シャンデリア献納 日ソ協会函館地方支部結成
1958 昭和33	4月	パンフレット「ハリストス正教会とは」発行 函館市台町の信徒墓地整地及び垣柵修理工事完了、感謝祈祷
1959 昭和34	7月13日 8月	全国公会、ニキタ近藤神父、宗務局長に任命、東京復活大聖堂へ転任(～14日) イアコフ出原惣太郎神父、着任 聖堂、観光客に開放
1960 昭和35	9月8日	ニーコン大主教来日(～1962) ニーコン大主教巡回 チリ沖地震で太平洋岸津波被害 函館貿易共同組合と全ソ消費共同組合で貿易契約調印
1961 昭和36	10月29日 11月1日	イアコフ出原神父、休職 札幌正教会管轄イアコフ日比神父、函館正教会兼任 イオアン厨川勇、司祭叙聖 イオアン厨川神父、着任 函館空港完成
1962 昭和37		アンヴローシイ主教、来日(臨時統理) ウラジーミル主教、来日(～1972)
1963 昭和38	9月4日 11月13日	ウラジーミル主教巡回 ヴェニヤミン府主教、永眠
1966 昭和41	5月 9月27日	第2回北海道信徒大会開催 市立函館博物館における全国博物館大会で山下りん制作のアイコン12点、一般公開開始 函館正教会の景況(戸数100戸、信徒398人、洗礼9人) 日ソ領事条約調印
1967 昭和42	10月7日	釧路で第3回北海道信徒大会開催 北海道地区基金(ミッション)発足(～9日) ソ連領事館誘致推進期成会発足

1968 昭和43	1月 5月19日 5月26日 9月 12月	市民による「函館ハリストス正教会修復後援会」発足 第4回北海道信徒大会、開教100年と併せて開催 ニキタ近藤神父、永眠 屋根工事、壁修理(～11月) ギリシャ人船主ジョン・リバノス氏、大鐘寄贈 十勝沖地震起こる
1969 昭和44	9月 11月	米国正教会府主教庁(メトロポリア)よりシュメーマン神父、来日 在米ロシア正教会とモスクワ総主教庁との関係正常化 臨時公会開催 ワシリイ永島新二神父、主教叙聖を受けフェオドシイ永島主教となる 東京にてモスクワ総主教庁、米国正教会、日本正教会の3国会議開催(東京)
1970 昭和45	4月10日	聖自治独立教会として祝福認可 ウラジーミル主教、府主教に昇叙 故ニコライ大主教、聖人に列聖(亜使徒日本の大主教聖ニコライとなる) 東日本主教教区、東京大主教教区、西日本主教教区を設立 掌院セラフィム・シグリスト、東日本主教教区主教に選立
1971 昭和46	12月9日	掌院セラフィム・シグリスト、主教に叙聖 ウラジーミル府主教、離日
1972 昭和47	10月10日	フェオドシイ主教、府主教に昇叙 北海道トラピスチヌ修道院を会場に東日本主教教区神品研修会開催(～12日)セラフィム主教座下巡回、講話 鐘、破損につき撤去 沖縄復帰 日中国交正常化 函館市、市制施行50周年記念式典 「函館市民の船」、ナホトカ、ハバロフスク両市を親善訪問
1973 昭和48		函館市、亀田市と合併 日本、オイル・ショック
1974 昭和49	4月25日	ロシア正教会代表团(イルクーツク及びチタの大主教ウラジーミル、ザライスクの主教クリソストム他3名)、来函 ギリシャ人船主ゲオルギイ・リバノス氏より献金 聖堂内外修理
1975 昭和50		塗装修理 函館正教会の景況(戸数59戸、信徒258人、洗礼8人)
1976 昭和51		ソ連空軍ベレンコ中尉、ミグ25型機で函館空港強制着陸しアメリカへ亡命
1977 昭和52		200海里規制始まる(北洋漁業の衰退、水産、造船業の停滞)
1978 昭和53	7月28日	第8回東日本主教教区正教青年大会開催(～30日) 司祭館建設着工

1979 昭和54	2月15日	イアコフ出原神父、永眠 第2次宣教5か年計画始まる
1980 昭和55	5月 7月9日 7月18日 8月	聖自治独立10周年記念式典(東京) セラフイム主教、大川神父巡回(～10日) イオアン厨川勇司祭、休職 仙台正教会管轄ロマン大川満神父、函館正教会を兼任
1981 昭和56	1月 4月29日 8月 10月24日 12月24日	「函館ハリストス正教会だより」第1号発行 聖堂一般公開開始 ニコライ築茂三郎神父、着任 日曜学校再開 セラフイム主教巡回(～25日) クリスマス、夕べの祈り開催
1982 昭和57	3月2日 10月	東日本主教教区神品研修会開催(～4日) フェオドシイ主教叙聖10周年記念式典(東京) 函館市、カナダ・ハリファックス市と姉妹都市提携
1983 昭和58	6月2日	「函館ハリストス正教会復活聖堂」、重要文化財に指定 大鐘1基寄贈
1984 昭和59	7月28日 7月29日 7月30日 9月9日 12月25日	道東セミブロック巡礼団訪問(～30日) 第1回北海道ブロック会議開催 道南セミブロック合宿修養会開催(～8月1日) 道南セミブロック懇親会開催 中・小鐘5基寄贈
1985 昭和60	3月5日 4月7日 9月8日	函館教会で神品研修会開催、セラフイム主教巡回(～7日) 聖鐘成聖式(セラフイム主教司祷) 函館・上磯教会合同懇親会開催 函館正教会の景況(戸数88戸、信徒307人、洗礼10人)
1986 昭和61	3月7日 4月25日 5月1日 7月1日 10月19日 11月1日	セラフイム主教巡回(～8日) 「重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂保存修理委員会」発足 聖堂修理工事着工 解体調査工事着工 全信徒研修会(復活聖堂修復工事現場説明会)開催 函館市民対象の「聖堂現場説明会」開催
1987 昭和62	7月26日 8月1日 11月22日	上磯正教会基礎成聖式 上磯正教会工事着工 上磯ハリストス正教会昇天聖堂成聖式執行(フェオドシイ永島府主教司祷)
1988 昭和63	2月 10月31日	聖堂公開当番制開始 一般市民の聖堂修復募金開始 修復工事終了

	11月6日	函館ハリストス正教会復活聖堂修復成聖式(フェオドシイ永島府主教司禱) 青函トンネル開通
1989 昭和64 平成元	3月20日 11月	集会所外装工事終了 東日本主教教区聖歌隊リーダー研修会開催(～21日) 日本正教会独立20周年記念式典(東京) 函館市、国際観光都市宣言
1990 平成2	8月18日	長司祭モイセイ白岩徳太郎師50年祭パニヒダ
1991 平成3	2月17日 7月8日 8月	亜使徒日本の大主教聖ニコライ祭祝賀会開催 司祭館改修工事着工 アレキセイ松平康博神父、着任 ソビエト社会主義共和国連邦解体
1992 平成4		ロシア連邦成立 函館市、ウラジオストク市と姉妹都市提携
1993 平成5	5月2日 5月20日 8月1日	教会墓地フェンス敷設工事完了、成聖式及び復活祭後墓地祈禱 初代領事夫人エリザヴェータ姉の墓碑成聖式 北海道南西沖地震と大雨によりチャチャ登り側石垣崩落 北海道南西沖地震起こる
1994 平成6	5月初旬 6月 9月17日 11月21日	ロシア極東国立総合大学函館校成聖式 アレキセイ松平神父、釧路正教会に転任 石巻正教会アントニイ石動昌夫神父、着任 遺愛女子高等学校でロシア正教会聖歌コンサート開催 サハリン市市長代理ワレリイ・ベリノソフ氏一行、ロシア人墓地でリテイヤ ロシア極東国立総合大学函館校開校 函館・ユジノサハリンスク間の国際定期空路開設
1995 平成7	1月17日 4月10日 11月1日 11月26日	阪神、淡路大震災起こる アントニイ石動神父、離任 石垣修復 イオフ馬場登神父、着任 クリメント兄玉慎一、誦経者に祝福 維持財団名義の元町、栄町、堀川町の3物件を函館正教会名義に変更
1996 平成8	6月 10月 10月23日	「函館ハリストス正教会の鐘」が環境庁による「残したい日本の音風景100選」に選ばれる 通路舗装工事(西門から聖堂に加え、信徒会館前から司祭館前まで延長、敷設) クリメント兄玉慎一、副輔祭及び伝教者祝福

	12月8日	上磯正教会開教120年記念式典 正門石垣修復 函館正教会の景況(戸数98戸、信徒338人、洗礼3人) 函館市、ユジノサハリンスク市と姉妹都市提携
1997 平成9		石垣修復
1998 平成10	8月15日 8月27日 9月23日	道立函館美術館にて「山下りんとその時代展」開催(~9月13日) 境内地排水工事終了 ロシア・サハリン州知事イーゴリ・ファルフトジーノフ氏一行、来会 ベラルーシ共和国ペトル・クラウチェンカ駐日大使、来会 「聖人ニコライ事蹟伝」(復刻版)刊行
1999 平成11	5月7日 7月初旬 7月 10月 10月20日 11月	フェオドシイ永島府主教、永眠 石垣修復(チャチャ登り側)終了 臨時公会開催 キリル有原神父、イウダ主代神父、アンドレイ辻永神父が主教候補 に選立され、ロシアへ赴き修道誓願、剪髪式を受ける 正門石垣修復 掌院ペトル有原師、「横浜の主教、東京の副主教」に叙聖 ロシアのインノケンティ主教座下、ペトル有原主教、ダニイル主代典 院一行、来会 掌院ダニイル主代師、「京都の主教」に叙聖
2000 平成12	1月15日 4月12日 5月6日 5月12日 5月14日 5月15日 6月18日 8月20日 10月20日	掌院セラフィム辻永師、「仙台の主教」に叙聖 函館ハリストス正教会復活聖堂が北海道ふるさと切手「雪世界Ⅱ」 として発行 仙台のセラフィム辻永主教巡回 臨時公会開催(~7日)。ダニイル主代主教、日本正教会首座主教 候補に選立 ロシアのアレクシイ二世総主教聖下一行、来会 ダニイル主代主教、「東京の大主教、全日本の府主教」として着 座 ペトル有原主教、永眠 ペトル有原主教、40日祭パニヒダ 教会墓地納骨小聖堂完成 成聖式 函館正教会信徒一行、ロシア巡礼(~27日)
2001 平成13	5月 5月10日 7月 12月16日	聖堂保存修理工事起工 正門左側の石垣修復 クリメント児玉副輔祭、輔祭叙聖 仙台正教会へ転任 聖堂修復成聖式(セラフィム辻永主教司禱)
2002 平成14	2月16日	聖ニコライ祭記念式典 セラフィム辻永主教及び東日本主教教 区神品による聖体礼儀・感謝祈禱

	5月19日 11月10日	セルギイ下田行孝、誦経者祝福 ベトル有原主教墓碑成聖式 在札幌ロシア連邦サブリン総領事夫妻、来会 市立函館博物館、沿海地方国立アルセニエフ博物館と姉妹博物館提携
2003 平成15	2月16日 5月3日 11月25日 11月30日	聖ニコライ祭開催(セラフィム辻永主教司禱) セラフィム辻永主教巡回(～4日) 聖堂内の花ゴザ敷設工事(～27日) 信徒会館建設委員会発足 在札幌ロシア連邦総領事館函館事務所開所
2004 平成16	2月14日 5月24日 7月31日 9月	聖ニコライ祭開催(セラフィム辻永主教司禱)(～15日) サハリ州マラホフ知事、来会 「キャンプだホイ 2004 in 函館」開催(～8月2日) 台風により境内東側垣根の倒壊、聖堂の壁剥落修理 函館市、戸井町、恵山町、鍛法華村、南茅部町、編入合併し、新生「函館市」誕生 イオアン厨川神父、永眠
2005 平成17	4月7日 5月15日 5月24日 6月29日 10月2日	セラフィム辻永主教巡回 信徒会館基礎成聖式執行(セラフィム辻永主教司禱) 旧信徒会館裏の石垣補強工事 日ロ修好150周年記念日ロ友好の船参加者来会 ロシア人墓地にてリティア 新信徒会館成聖式執行(セラフィム辻永主教司禱) ウラジオストク市建都145周年記念市民訪問団、ウラジオストク市を訪問
2006 平成18	9月27日 11月	聖堂屋根の塗装、鐘楼の補修工事、墓地フェンス設置 信徒会館が「第12回函館市都市景観賞」に選定 全国近代遺産(ヘリテージング)100選に選定
2007 平成19	4月21日	セラフィム辻永主教巡回(～22日)
2008 平成20	2月14日 6月22日 7月31日 8月3日 9月 10月25日 11月4日 12月5日 12月6日	ロシア大統領全権代表オレグ・サフォーノフ、来会 ロシア人墓地通路舗装工事 アキラ吉川昭、副輔祭祝福 イオフ馬場神父、退職 「キャンプだホイ 2009 in 大沼」開催(於:上磯)(～5日) ニコライ・ドミートリエフ神父、着任 セラフィム辻永主教巡回(～26日) ロシア連邦ラブロフ外相、来会 ロシア・モスクワ総主教アレクシイ二世聖下、永眠 アレクシイ二世総主教聖下追悼式(函館)

	11月4日	ロシア極東国立総合大学函館校内に「函館ロシアセンター」を開設 函館正教会の景況(戸数103戸、信徒391人、洗礼5人) 全国公会の統計(教会数68、主教品2人、神品42人、伝教者2人、信徒総数9,958人)
2009 平成21	2月19日 4月～5月 8月5日 11月	道ブロック聖歌研修会開催 セラフィム辻永主教巡回(～21日) 「イースターエッグ展覧会」開催(信徒会館) チャイコフスキーコンサート開催(信徒会館) 公式ホームページ開設 http://orthodox-hakodate.jp 函館開港150周年記念式典
2010 平成22	1月17日 6月22日 8月18日 8月20日 12月24日	セラフィム辻永主教、叙聖10周年記念祝賀会 アキラ吉川副輔祭、輔祭叙聖 アレキセイ松平神父、永眠 聖歌コンサート開催(信徒会館) 降誕祭(セラフィム辻永主教司祷)、セラフィム辻永主教巡回(～25日)
2011 平成23	3月11日 7月 9月 9月17日 12月25日 12月26日	東北地方太平洋沖地震起こる 聖ニコライ来函150年を迎える ロシア文化フェスティバル IN 函館で、聖ニコライ渡来150周年記念ロシア人墓地慰霊祭を行う 聖歌コンサート開催(ロシア極東連邦総合大学函館校講堂) 函館ハリストス正教会聖歌隊による聖歌CDが「正教会聖歌Ⅱ」として東日本主教々区より出る 聖歌コンサート開催(旧函館区公会堂) 「函館ハリストス正教会史」刊行 境内地聖堂南側に亜使徒日本の大主教聖ニコライのイコンの碑を設置

函館ハリストス正教会復活聖堂聖鐘関係年表

西暦	和暦	関 連 事 項														
1860	万延元	上大工町(現、元町)にロシア領事館建立、実行寺より初代聖堂移築 日本人鋳物師による大鐘1個、小鐘4個を鐘楼に設置														
1907	明治40	函館大火により聖堂焼失、鐘も失う														
1916	大正 5	10月15日 2代目の聖堂建立 箱根塔の沢にあった神学校避暑館付設置聖堂にあった大鐘1個を移設 この大鐘は1884年にモスクワで製造されたもので、直径、高さともに約1.5メートル、重量約2トンの青銅														
1923	大正12	関東大震災														
1928	昭和 3	11月28日 東京復活大聖堂再建に伴い函館正教会の大鐘を移す 交換として松山ハリストス聖堂で使用していた組鐘(大小6個)が届く。大鐘は朝顔型 直径、高さともに約82cm 12月18日 設置 12月22日 聖鐘成聖式														
1942	昭和17	戦時中の金属類供出により鐘を失う														
1968	昭和43	12月19日 ギリシャ人船主ジョン・リバノス氏より大鐘献納、設置。 高さ、直径ともに95cm、重量575kg 12月28日 聖鐘成聖式														
1973	昭和48	破損のため、打鐘中止。鐘楼から降ろされる														
1983	昭和58	6月2日 三重県桑名市の鋳物師中川正知氏より大鐘1個献納 6月5日 聖鐘成聖式														
1985	昭和60	3月10日 中川正知氏より中小鐘5個献納 合計6つの鐘(大鐘1、小鐘5)の直径と重量 <table style="margin-left: auto; margin-right: auto; border: none;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">直径</th> <th style="text-align: center;">重量</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">1 : 940mm</td> <td style="text-align: center;">500kg</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2 : 490mmと517mmの間</td> <td style="text-align: center;">85kg</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">3 : 450mmと468mmの間</td> <td style="text-align: center;">65kg</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">4 : 418mmと436mmの間</td> <td style="text-align: center;">55kg</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">5 : 305mm</td> <td style="text-align: center;">25kg</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">6 : 248mm</td> <td style="text-align: center;">16kg</td> </tr> </tbody> </table> 4月7日 聖鐘成聖式(フェオドシイ永島府主教、セラフィム主教巡回)	直径	重量	1 : 940mm	500kg	2 : 490mmと517mmの間	85kg	3 : 450mmと468mmの間	65kg	4 : 418mmと436mmの間	55kg	5 : 305mm	25kg	6 : 248mm	16kg
直径	重量															
1 : 940mm	500kg															
2 : 490mmと517mmの間	85kg															
3 : 450mmと468mmの間	65kg															
4 : 418mmと436mmの間	55kg															
5 : 305mm	25kg															
6 : 248mm	16kg															
1996	平成 8	「函館ハリストス正教会の鐘」が環境庁(現、環境省)による「日本の音風景100選」に選ばれる														

参考・引用文献

函館ハリストス正教会 記録・会報他

- 「教会記録」函館復活教会 一九〇八年～一九一二年
- 「現在銘度利加」函館復活教会 一九〇七年
- 「類焼義捐金品簿」函館復活教会 一九〇七年
- 「教会附属物品簿」函館復活教会 一九〇八年
- 「聖堂部原簿」函館復活教会 一九〇八年
- 「書籍目録簿」函館復活教会 一九〇八年
- 「婦人会記録」函館復活正教婦人会 一九〇八年～一九一二年
- 「婦人会記録」函館正教婦人会 一九一八年～一九四一年
- 「青年会日誌」函館正教青年会 一九一七年十一月～一九一八年六月
- 「教務雑録 会議・会合」ニキタ近藤昇太郎神父 一九五五年一月～一九五九年八月
- 「教務雑録 巡回・回家」ニキタ近藤昇太郎神父 一九五九年一月～七月
- 「会議関係書類綴 第一号」函館正教会 一九四六年九月～一九五八年一二月
- 「会議関係書類綴 第二号」函館正教会 一九五九年一月～一九六〇年七月
- 「発信書類綴」函館正教会 一九四六年～一九六〇年
- 「聖堂敷地買収関係書類綴」函館正教会 一九四七年二月～一九五〇年六月
- 「聖堂修理関係書類綴」函館復活会 一九五五年一月～九月

「記録」函館ハリストス正教会 一九〇七年～一九六一年

「記録」函館ハリストス正教会 一九六一年～一九六五年

「ヨロコビ」第九号 函館ハリストス正教会日曜学校 一九三〇年

「ひつじ」第二号 函館正教青年会 一九四九年四月

「恩寵」綠塔会 一九五一年

「函館ハリストス正教会だより」函館ハリストス正教会

第一号（一九八一年一月発行）～第六二号（一九九一年八月発行） ニコライ築茂三郎神父管轄時代

（但し、第一号～第二号のタイトルは「函館教会だより」ロマン大川満神父臨時管轄時代に発行）

「週報」函館ハリストス正教会 第一号（一九八九年二月発行）～第二一七号（一九九一年七月発行）

ニコライ築茂三郎神父管轄時代

「函館ハリストス正教会」函館ハリストス正教会

第一号（一九九一年一月発行）～第一八号（一九九四年九月発行） アレキセイ松平康博神父管轄時代

「函館管轄区たより」函館ハリストス正教会

第一号（一九九四年九月発行）～第七号（一九九五年三月発行） アントニイ石動昌夫神父管轄時代

「函館ハリストス正教会」函館ハリストス正教会

第一号（一九九五年一月発行）～第一二六号（二〇〇八年八月発行） イオフ馬場登神父管轄時代

「函館ハリストス正教会」函館ハリストス正教会

第一号（二〇〇八年九月発行）～第一九号（二〇一一年八月発行） ニコライ・ドミートリエフ神父管

轄時代

「重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂保存修理工事報告書」

文化財建造物保存技術協会 函館ハリストス正教会 一九八九年

日本ハリストス正教会及び教団教区 刊行書籍・会報他

「公会議事録」正教会 一八七六年～二〇一〇年

「教会報知」正教会 第一号（一八七七年二月発行）～第五一号（一八八〇年一月発行）

「正教新報」愛々社 第一号（一八八〇年二月発行）～第七六四号（一九二二年一〇月発行）

「正教時報」正教時報社 第一号（一九一二年一月発行）～第一四五一号（二〇一一年八月発行）

「日本正教傳道誌」卷之一卷之二 石川喜三郎編纂 日本正教会編輯局 一九〇一年

「ニコライ大主教宣教五十年記念集」正教神学校 一九一一年

「松山ハリストス復活聖堂」水島行楊編 一九一一年

「大主教尼閣頼師紀念写真帖」水谷写真場 一九一二年

「アケボノ」大主教セリギイ編 第一号（一九二五年一月発行）～第一九号（一九二八年二月発行）

「大主教ニコライ師事蹟」柴山準行編 日本ハリストス正教会総務局 一九三六年

「聖人ニコライ事蹟伝」（復刻版）柴山準行編 日本ハリストス正教会教団府主教庁 一九九八年

「ニコライ師渡来九十年追憶」望月富之助 日本ハリストス正教会 一九五一年

「日本正教史」牛丸康夫 日本ハリストス正教会教団 一九七八年

「日本正教会 一九七〇年～一九八〇年 —— 聖自治独立教会後の十年の歩み ——」

牛丸康夫 一九八〇年

- 「東京復活大聖堂修復成聖記念誌」東京復活大聖堂修復成聖記念誌刊行委員会編 一九九八年
- 「永遠の記憶」日本ハリストス正教会教団府主教庁 一九九九年
- 「聖ニコライ祭に寄せて 『アメリカ号』からの手紙 主教セラフイム」(「正教時報」二〇〇八年二月号)
- 「東日本主教々区 公会議事録」東日本主教々区宗務局 一九七二年～二〇一〇年
- 「日本ハリストス正教会教団 東日本主教々区 教区報」東日本主教々区宗務局
- 「第一号(一九七一年二月発行)」第九五号(二〇一一年六月発行)
- 「仙台正教だより」仙台ハリストス正教会
- 「第一号(一九七七年六月発行)」第四一〇号(二〇一一年八月発行)
- 「仙台基督正教会創立五十年記念」仙台基督正教会 一九二三年
- 「仙台ハリストス正教会史」仙台ハリストス正教会 二〇〇四年
- 「北海の正教」札幌ハリストス正教会
- 「第一巻第一号(一九一九年六月発行)」第五巻第一号(一九二三年一月発行)
- 「會報」札幌ハリストス正教会 一九五九年～一九七七年 イアコフ日比義夫神父管轄時代
- 「札幌正教会小史」札幌ハリストス正教会 厨川勇編 一九七一年
- 「豊橋ハリストス正教会一〇〇周年記念誌」豊橋ハリストス正教会 一九七九年
- 「札幌正教会百年史」札幌ハリストス正教会 一九八七年
- 「道央宣教セミ・ブロック機関紙(札幌・小樽・苫小牧)会報」札幌ハリストス正教会
- 「第一号(一九七七年九月発行)」第二五五号(二〇一一年八月発行)
- 「苫小牧正教会八十年の歩み」苫小牧ハリストス正教会 一九九八年

「小樽ハリストス正教会開教百周年記念誌」小樽ハリストス正教会 一九九一年
「釧路正教会百年の歩み」釧路ハリストス正教会 一九九二年
「九〇周年 斜里教会の足跡」斜里ハリストス正教会 二〇〇五年
「道東教会報」釧路ハリストス正教会

第一六二号（一九九四年一〇月発行） 第三六三号（二〇一一年八月発行）

「上磯ハリストス正教会一二〇周年記念誌」上磯ハリストス正教会 一九九六年

「白河ハリストス正教会史」白河ハリストス正教会 二〇〇六年

「小田原ハリストス正教会百二十年史」小田原ハリストス正教会 二〇〇二年

「前橋正教会百年の歩み」前橋ハリストス正教会 一九八五年

「浪華正教」大阪ハリストス正教会

第一巻第一号（一九二五年三月発行） 第一七八号（一九四〇年一月発行）

北海道史・市町村史・事典他

「箱館鎮臺史料 乙巻（其一）」（「江戸」第五巻第四綴 江戸旧事采訪会 一九一七年三月）

「笹流露国人の農業」（「函館支庁管内町村誌」渡島教育会 一九一八年）

「函館大正史郷土新聞資料集一」元木省吾 一九六八年

「函館大正史郷土新聞資料集二」元木省吾 一九六九年

「函館教育史」神山茂 函館文化会 一九七一年

「目で見る函館のうつりかわり」市制施行五十周年記念歴史写真集 函館市 一九七二年

- 「函楯紀行」新島襄（「函館市史」史料編第一卷 函館市 一九七四年）
- 「函館市史」史料編第一卷 函館市 一九七四年
- 「函館市史」史料編第二卷 函館市 一九七五年
- 「函館市史」通説編第一卷 函館市 一九七九年
- 「函館市史」通説編第二卷 函館市 一九九〇年
- 「函館市史」通説編第三卷 函館市 一九九七年
- 「函館市史」通説編第四卷 函館市 二〇〇二年
- 「函館市史」統計史料編 函館市 一九八七年
- 「函館市史」年表編 函館市 二〇〇七年
- 「団助沢に住み着いたロシア人旧教徒たち」清水恵（「函館市史」銭亀沢編 函館市 一九九八年）
- 「幕末・箱館ロシア病院に関連する史料」谷澤尚一
- （「地域史研究はこだて」第二号 函館市史編さん事務局 一九八五年）
- 「ロシア人の見た開港初期の函館」秋月俊幸
- （「地域史研究はこだて」第三号 函館市史編さん事務局 一九八六年）
- 「函館女紅場の実態とその意義」平朋子（「地域史研究はこだて」第六号 函館市史編さん室 一九八八年）
- 「祈りの日々に生きて——ハリストス正教会の鐘とともに——」加藤ワサ
- （「地域史研究はこだて」第七号 函館市史編さん室 一九八八年）
- 「ハイカラな街函館、謳歌した自由」平塚千鶴子
- （「地域史研究はこだて」第一二号 函館市史編さん室 一九九〇年）

「ロシア語通訳の見た北洋漁業」 斉藤一郎

（「地域史研究はこだて」第一四号 函館市史編さん室 一九九一年）

「日本もまた稔りが多い——箱館のロシア人からの手紙——」 中村健之介

（「地域史研究はこだて」第一六号 函館市史編さん室 一九九二年）

「二つの祖国・カロリヨフさんのこと」 大野吉雄

（「地域史研究はこだて」第一六号 函館市史編さん室 一九九二年）

「銭亀沢にユートピアを求めたロシア人たち——旧教徒たちの夢の跡をたずねて」 中村喜和

（「地域史研究はこだて」第一七号 函館市史編さん室 一九九三年）

「ニコライ・アムールスキイ日本におけるロシア人召使」 桧山真一

（「地域史研究はこだて」第一八号 函館市史編さん室 一九九三年）

「安政七年のロシア領事奥州街道通行に関する三つの史料」 清水恵

（「地域史研究はこだて」第一九号 函館市史編さん室 一九九四年）

「初代ロシア領事夫人の墓のなぞ」 厨川勇

（「地域史研究はこだて」第二〇号 函館市史編さん室 一九九四年）

「函館におけるロシア人商会の活動——セミヨーフ商会・デンビー商会の場合」 清水恵

（「地域史研究はこだて」第二一号 函館市史編さん室 一九九五年）

「二人のマホフとフィラレート司祭」 清水恵

（「地域史研究はこだて」第二二号 函館市史編さん室 一九九五年）

「函館最初の写真師（在日ロシア人の生活から）」 原暉之

- 〔地域史研究はこだて〕第三号 函館市史編さん室 一九九六年)
- 〔明治初年の函館正教会点描(上)〕長縄光男
- 〔地域史研究はこだて〕第二五号 函館市史編さん室 一九九七年)
- 〔日露戦争及び明治四〇年大火とロシア帝国領事館——在ロシア史料より〕
清水恵、A・トリヨフスビヤツキ (〔地域史研究はこだて〕第二五号 函館市史編さん室 一九九七年)
- 〔長谷川家の人々と函館〕長谷川玉江 (〔地域史研究はこだて〕第二五号 函館市史編さん室 一九九七年)
- 〔明治初年の函館正教会点描(下)〕長縄光男
- 〔地域史研究はこだて〕第二六号 函館市史編さん室 一九九七年)
- 〔実業家デンビー一族〕アミール・ヒサムトデーノフ著／沢田和彦訳
- 〔地域史研究はこだて〕第二八号 函館市史編さん室 一九九八年)
- 〔箱館写真史考〕桑嶋洋一 (〔地域史研究はこだて〕第一八号 函館市史編さん室 一九九三年)
- 〔初代ロシア領事ゴシケーヴィチの「全権証明書」〕清水恵
- 〔地域史研究はこだて〕第二九号 函館市史編さん室 一九九九年)
- 〔覚書・モイセイ馬場脩の生涯——北方民族研究に捧げた人生〕清水恵
- 〔地域史研究はこだて〕第三一号 函館市史編さん室 二〇〇〇年)
- 〔レンセン博士と函館のこと〕清水恵 (〔地域史研究はこだて〕第三二号 函館市史編さん室 二〇〇〇年)
- 〔ロシア正教アレクシー二世総主教の来校〕宮永敏明
- 〔地域史研究はこだて〕第三二号 函館市史編さん室 二〇〇〇年)
- 〔ゴシケーヴィチ文書を探索して(一)〕伊藤一哉

- 〔地域史研究はこだて〕第三三号 函館市史編さん室 二〇〇一年
- 〔ゴシケーヴィチ文書を探索して(完)〕伊藤一哉
- 〔地域史研究はこだて〕第三四号 函館市史編さん室 二〇〇二年
- 〔北海道史人名辞典〕第一巻 北海道文化資料保存協会 一九五三年
- 〔北海道史人名辞典〕第二巻 北海道文化資料保存協会 一九五五年
- 〔北海道教育史〕地方編一 北海道教育委員会 一九五五年
- 〔函館郷土史話〕元木省吾 函館郷土史研究会 一九六五年
- 〔東亜先覚志士記伝〕下巻 明治百年史叢書 原書房 一九六六年
- 〔北海道キリスト教史〕福島恒雄 日本基督教団出版局 一九八二年
- 〔函館・道南大事典〕南北北海道史研究会 株式会社国書刊行会 一九八五年
- 〔函館／都市の記憶〕市制施行七〇周年記念写真集 函館市史編さん室編
- 財団法人函館市文化・スポーツ振興財団 一九九二年
- 〔来日西洋人名事典〕(増補改訂普及版) 竹内博編 日本アソシエーツ株式会社 一九九五年
- 〔北海道医学教育史年表〕小竹英夫(「北海道医報」第一〇三一号 北海道医師会 二〇〇四年)
- 〔函館歴史文化観光検定——はこだて検定——公式テキストブック〕
- 函館歴史文化観光検定公式テキスト作成委員会編 函館商工会議所 二〇〇六年
- 〔函説 函館・渡島・檜山の歴史〕郷土出版社 二〇〇八年

図録・写真集・論文他

- 「函館駐劄露國領事ゴスケウキツチ」上・中・下 阿部正己（「歴史地理」第三六卷 一九二〇年）
- 「百年前の日本 セイラム・ピーボディ博物館蔵、モースコレクション／写真編」小学館 一九八三年
- 「一八五八年〜一八六八年 箱館ロシア病院の医療活動をめぐって」谷澤尚一
（第八十六回日本医史学会学術大会 一九八五年）
- 「一九世紀ロシア絵画展 レーピン、スーリコフ、クラムスコイとその時代」北海道新聞社 一九九〇年
- 「ロシアビザンチン——黄金の環を訪ねて」建築巡礼一九 内井昭蔵 丸善 一九九一年
- 「馬場コレクション研究」長谷部一弘（「市立函館博物館研究紀要」第二号 市立函館博物館 一九九二年）
- 「資料受入調査余滴 描かれたデンビー一族——幻の北洋の覇者——」岡田一彦
（「市立函館博物館研究紀要」第三号 市立函館博物館 一九九三年）
- 「新島襄 その時代と生涯」新島襄生誕一五〇年記念写真集 同志社大学 一九九三年
- 「マクシモヴィッチと須川長之助——日露植物学界の交流史——」井上幸三 岩手植物の会 一九九六年
- 「開拓使による官立学校の設立」井上高聡
（「北海道大学教育学部紀要」第七四号 北海道大学教育学部 一九九七年）
- 「山下りんとその時代展」読売新聞社 一九九八年
- 「市立函館図書館所蔵ロシア語資料目録Ⅰ」函館日口交流史研究会 一九九八年
- 「在サントペテルブルグアイヌ資料の研究——M A ㊦所蔵アイヌコレクションについて——」
長谷部一弘（「市立函館博物館 研究紀要」第八号 一九九八年）
- 「日本における白系ロシア人史の断章（一）」沢田和彦

- 〔「スラヴ研究」四七号 北海道大学スラヴ研究センター 二〇〇〇年〕
- 〔北方文化と二つのコレクション——馬場コレクション・児玉コレクションについて——〕長谷部一弘
 〔「馬場・児玉コレクションにみる北の民アイヌの世界」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
 二〇〇〇年〕
- 〔サハリンから日本への亡命者——シュウエツ家を中心に〕清水恵
- 〔「ロシアと日本」第四集 横浜国立大学教育人間科学部長縄研究室 二〇〇一年〕
- 〔要塞地帯法の成立と治安体制（Ⅳ）要塞動員・戒厳令下の函館を中心に〕遠藤芳信
 〔「北海道教育大学紀要」第五二巻 二〇〇二年〕
- 〔高井義喜久とスリコフの名画〕清水恵〔「異郷」一七号 来日ロシア人研究会 二〇〇三年〕
- 〔函館とロシアの交流〕函館日口交流史研究会創立一〇周年記念誌 函館日口交流史研究会 二〇〇四年
- 〔函館・ロシアその交流の軌跡〕清水恵 函館日口交流史研究会 二〇〇五年
- 〔むかし、『露探』という言葉があつた——函館の場合〕奥武則
 〔「会報」第二八号 函館日口交流史研究会 二〇〇六年〕
- 〔函館で生まれ育つたロシア人 オリガさんを迎えて〕函館日口交流史研究会 二〇〇七年
- 〔最初の駐日ロシア領事、ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケヴィチ〕ワジム・Yu・クリモフ
 〔「東京大学史料編纂所研究紀要」第一七号 二〇〇七年〕
- 〔サントクトペテルブルク国立ロシア美術展 二〇〇七〕産経新聞社 二〇〇七年
- 〔はこだて記憶の街〕熊谷孝太郎撮影 はこだて写真図書館 二〇〇七年
- 〔函館の歴史と風土〕函館の歴史的風土を守る会 二〇〇八年

「函館物語 昭和の函館から」 金丸大作 五稜郭出版社 二〇〇九年

「市立函館博物館所蔵千島関連資料」 大矢京右

（第二四回特別展図録 環北太平洋の文化IV 千島列島に生きる アイヌと日露・交流の記録」 北海道立北方民族博物館 二〇〇九年）

「稀代のプラントハンター須川長之助翁」 須田裕

（「北海道大学総合博物館企画展示図録 マキシモヴィツチ・長之助・官部」 北海道大学北海道総合博物館 二〇一〇年）

「はこだて写真帳」 北海道新聞社 二〇一〇年

「まるでそっくり…」 ニコライ・アムールスキイ著 沢田和彦解説・訳

（「ウラジオストク建都一五〇周年記念事業報告 函館——ウラジオストク交流の諸相」 函館日口交流史研究会 二〇一一年三月二一日）

原本・新聞他

「ロシヤノイロハ」 イワン・マホフ 一八六一年 函館市中央図書館所蔵

「サルトフ氏函館露学校教師として雇傭契約書」 北海道大学附属図書館所蔵

「御雇魯学校教師 変死一件書類 明治七」 函館市中央図書館所蔵

「函館新聞」 明治三十七年二月一〇日・一三日・一四日・一八日・二四日・二五日・五月三日

函館市中央図書館所蔵

「北海タイムス」 明治三十七年二月一三日 函館市中央図書館所蔵

「浦野大蔵の生涯わかる」（北海道新聞）一九八九年八月四日夕刊

一般書籍他

「樺太と漁業」樺太定置漁業水産組合編 一九三一年

「余が将来せるウエ・イ・スリコフの名画『王女・女子修道院を訪ふ』」高井義喜久 一九三三年

「函館百珍と函館史実」岡田健蔵 一九五六年

「函館脱出の記」新島襄（「新島研究」第一三三号 同志社新島研究会 一九五七年）

「新島襄先生詳年譜」森中章光編 同志社・同志社校友会 一九五九年

「はこだての文化財 古建築編」川島龍司 函館市文化財保護協会 一九六四年

「啄木と函館」阿部たつを ぷやら新書刊行会 一九六七年

「掌院セルギイ 北海道巡回記」宮田洋子訳 キリシタン文庫シリーズ（6） キリシタン文化研究会

一九七二年

「はこだて——文化財を訪ねて——」函館市教育委員会 一九七四年

「函館外人墓地」馬場脩 図書裡会 一九七五年

「大正から昭和初期の大阪正教会の追憶 長司祭ヤコフ永眠三〇周年を記憶して」藤平和雄 一九七六年

「北方民族の旅」馬場脩 北海道出版企画センター 一九七九年

「ドキュメント函館大火」合田一道 恒友出版 一九七九年

「沢辺琢磨の生涯」福永久寿衛 沢辺琢磨伝刊行会 一九七九年

「ニコライの見た幕末日本」ニコライ著／中村健之介訳 講談社 一九七九年

- 「函館の歴史」須藤隆仙 東洋書院 一九八〇年
- 「明治初年のギリシヤ正教迫害顛末」秋月俊幸（窓）第三四号 ナウカ社 一九八〇年
- 「箱館時代の新島襄」井上勝也（「新島研究」第六三号 同志社新島研究会 一九八三年）
- 「幕末教育史研究」二 倉沢剛 吉川弘文館 一九八四年
- 「新島襄全集」五ノ日記・紀行編 新島襄全集編集委員会 同朋社出版 一九八四年
- 「明治日本とニコライ大主教」ドミートリー・マトベービチ・ポズニエーエフ著 中村健之介編訳 講談社 一九八六年
- 「ニコライ堂の人びと」長縄光男 現代企画室 一九八九年
- 「蝦夷地末期の箱館ロシア病院」水島宣昭 週刊日本医事新報社 一九八九年
- 「西部地区の歴史の文化をまもり、そだて、つくりあげるために」
函館市都市建設部景観保全課 一九八九年
- 「竹隆生 随想集 徑」^{こみち}武岡武夫 一九八九年
- 「聖なるロシアを求めて 旧教徒のユートピア伝説」中村喜和 平凡社 一九九〇年
- 「寿都キリスト教史 実在した寿都ハリストス正教会」渡辺源次郎 一九九〇年
- 「江馬印刷株式会社百年史」江馬印刷株式会社百周年紀年事業委員会 一九九一年
- 「ニコライの塔 大主教ニコライと聖像画家山下りん」川又一英 中央公論社（中公文庫） 一九九二年
- 「光芒 伝教者望月富之助の生涯」村松不二夫 一九九三年
- 「ニコライ大主教の弟子 鈴木九八伝」金石仲華 一九九三年
- 「明治の日本ハリストス正教会」中村健之介 教文館 一九九三年

- 「蝦夷地の外国人ナチュラリストたち」村元直人 玄洋社 一九九四年
- 「外事月報」全一一巻 内務省警保局編 不二出版 一九九四年
- 「函館ガンガン寺物語」厨川勇 一九九四年
- 「函館らしい都市景観の形成をめざして——函館市都市景観条例のあらまし」
- 函館市都市建設部景観保全課 一九九五年
- 「宣教師ニコライと明治日本」中村健之介 岩波書店 一九九六年
- 「上磯ハリストス正教会由来記」坂口延幸（「箱館昔話」第八号 函館パルス企画 一九九六年）
- 「ロシア人宣教師の『蝦夷旅行記』セルギー著 佐藤靖彦訳 新読書社 一九九九年
- 「宣教師ニコライの日記抄」中村健之介他編訳 北海道大学図書刊行会 二〇〇〇年
- 「現代語で読む新島襄」現代語で読む新島襄編集委員会 丸善 二〇〇〇年
- 「ロシア語教師としてのニコライ大主教」サブリナ・エレオノーラ
- （「窓」第一一九号 ナウカ社 二〇〇二年）
- 「異教に生きる」成文社 二〇〇一年
- 「異教に生きるⅡ」成文社 二〇〇三年
- 「遙かなり、わが故郷 異教に生きるⅢ」成文社 二〇〇五年
- 「異教に生きるⅣ」成文社 二〇〇八年
- 「異教に生きるⅤ」成文社 二〇一〇年
- 「ロシア建築案内」リシャット・ムラギルディン著 高橋純平訳 TOTTO出版 二〇〇二年
- 「ニコライ堂の女性たち」中村健之介・中村悦子 教文館 二〇〇三年

「新島襄の手紙」新島襄・同志社編 岩波文庫 二〇〇五年

「坂本龍馬の系譜」土井晴夫 新人物往来社 二〇〇六年

「露探」奥武則 中央公論新社 二〇〇七年

「宣教師ニコライの全日記」中村健之介監修 教文館 二〇〇七年

「ニコライ堂遺聞」長縄光男 成文社 二〇〇七年

「箱館開港物語」須藤隆仙 北海道新聞社 二〇〇九年

「ロシア人の見た幕末日本」伊藤一哉 吉川弘文館 二〇〇九年

「函館開港と音楽」函館メサイア教育コンサート実行委員会 二〇一〇年

「箱館はじめて物語」中尾仁彦 二〇一〇年

「日本におけるポーランド人墓碑の探索」ポーランド文化・民族遺産省文化遺産局、ワルシャワ
二〇一〇年

「歳三の写真」土方愛（「英傑たちの肖像写真——幕末明治の真実——」渡辺出版 二〇一〇年）

「宣教師ニコライとその時代」中村健之介 講談社現代新書 二〇一一年

洋書（ロシア語・英語）

«ДНЕВНИКИ СВЯТОГО НИКОЛАЯ ЯПОНСКОГО» Санкт-Петербург 2003 г.

«Люди и судьбы» В. Г. Гузанов Москва 2001 г.

«ИЕРОМОНАХ» В. Г. Гузанов Москва 2002 г.

«Письма о духовной жизни Святитель Николай Японский» Москва 2009 г.

- «Семейная хроника. Зубовы и Полежаевы» Москва 2010 г.
- «Министерство иностранных дел Российской Федерации КАНЦЛЕР А.М.ГОРЧАКОВ 200 лет со дня рождения» Москва 1998 г.
- «НИКОЛАЙ-ДЮ Святитель Николай Японский Краткое жизнеописание Выдержки из дневников» Библиополис 2001 г.
- «ПРАВΟΣЛАВИЕ НА АМУРЕ» Благовещенск 2006 г.
- «Морской сборник» Санкт-петербург
- [Report from Hokkaido: The remains of Russian Culture in northern Japan] George A Lensen Praeger Pub 1974

写真・図版一覧

函館ハリストス正教会	1、2、3、6、8、10、14、16、18、26、37、39、45、47、49、51、55、
56、61、63、64、66、77、79、81、83、86、96、100	77、79、81、83、86、96、100
上磯ハリストス正教会	48、99
東京大学史料編纂所	5、19
函館市中央図書館	7、9、23、32、34、36、41、57、60、62、65、67、68、73、74、87、95、
101、102、106、108、114	101、102、106、108、114
市立函館博物館	22、28、31、103、112
北海道立函館美術館	113
北海道大学附属図書館	107
北海道立文書館（「函館支庁管内町村誌」渡島教育会 一九一八年）	110
須川長之助顕彰会	104、105
笠間日動美術館	98
北海道新聞社	80、84
伊藤一哉氏（北海道新聞）提供	20、21
個人蔵	4、38、40、42、69、72、75、85、88、91、92、109、111
「重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂保存修理工事報告書」文化財建造物保存技術協会	15、89、90、93、94
函館ハリストス正教会 一九八九年	

「目で見える函館のうつりかわり」市制施行五十周年記念歴史写真真集 函館市 一九七二年 25

「幕末・箱館ロシア病院に関する史料」谷澤尚 27

（「地域史研究はこだて」第二号 函館市史編さん室 一九八五年）

「函館ハリストス正教会」開教一〇〇年祭記念 一九六八年 29

「仙台ハリストス正教会史」仙台ハリストス正教会 二〇〇四年 30、33、35

「宣教師ニコライの全日記」中村健之介監修 教文館 二〇〇七年 44

「祈りの日々に生きて——ハリストス正教会の鐘とともに——」加藤ワサ 52

（「地域史研究はこだて」第七号 函館市史編さん室 一九八八年）

「大主教尼閣頼師記念写真真帖」水谷写真場 一九一二年 53、54

「函館ガンガン寺物語」厨川勇 一九九四年 76

「東京十字架聖堂記念画帖」水島行楊編 一九〇五年 97

あとがき

「函館ハリストス正教会史編集委員会」が発足したのは、私が函館に赴任した翌年、二〇〇九年（平成二一）九月のことであった。当時は二〇一一年（平成二三）七月に日本ハリストス正教会教団の行事として、函館正教会を会場に「亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来一五〇年記念式典」が行われる予定になっていた。函館にとつては「渡来」Ⅱ「来函」であり、信徒たちは二〇一一年を函館正教会にとつての記念すべき節目と考え、教会史の編集を決意したのである。

年史作業は資料集めに始まり、資料集めに終わった。資料にあたりながら、「この一五〇年間に何があったのか」を所謂「作業年表」にひたすら記していった。この「作業年表」が大体繋がり、前後関係が見えてきたのが、二〇一〇年（平成二二）の春頃であった。ここから時代を割振つての執筆作業が始まった。資料集めは併行してこの後も続けられた。

この間、教会全体の諸般の活動の中で、教会史編集作業にのみ集中して時間を割いている訳には当然いくはずもなく、二か年計画の予定で作成した作業日程は、予定通りに運ばないことばかりが続いた。「教会史の作業は続けていけるのだろうか……」と弱気になったことも一度ならずあった。しかし、歴史の中の先人たちの艱難辛苦とそれを凌ぐ熱切な信仰と忍耐を知れば知るほど、ここで投げ出すようないい加減なことを自分たちに許すわけにはいかなかった。

信徒たちは「教会において一番大切な行いは祈りであり、信徒の信仰生活である。教会における年史の編纂は、単なる出版活動ではなく、神を讚美し信仰を深めるきっかけとなる本を作成するという理解がなけれ

ばならない。また、争いの元であつてはならない。良いものは、善なる心と主・神への感謝の気持ちから生まれる」という第一回編集会議での管轄司祭の話をいつも覚えていてくれた。図書館での資料収集作業に追われていても、土曜日の徹夜禱の時間迄には切り上げて聖堂に戻り、参禱した。参禱できない理由に教会史編集作業を挙げるような雰囲気は一切なかった。

教会史を作っている間、私たちは心の中で常に先人たちと共にいた。私たちと共に聖ニコライがおり、アナトリー神父がおり、エレナ酒井姉がおり、小松神父がおり……。いづれもこの境内の土を踏み、この風景の中に住み、正教会の教えを守つて、自分と隣人の霊を救おうとした人たちである。この共通項の下には、生きた時代が違うことなどはあまり関係が無くなってしまうのだ。実に地上の教会と天上の教会とは神・聖神に司られ、霊(たましい)において繋がっていると感じられた。

資料集めは、ある意味で先人の調査や研究の成果を感謝して頂戴する行為であり、「我爾等ヲ遣シテ、爾等ガ勞セザリシ所ヲ穫ラシム、他人ハ勞シ、爾等ハ其勞ニ入レリ」(イオアン伝四章・三八節)という句を思い出すこと、しばしばであった。

教会史編集作業において「これでよし」ということは、おそらく無いのであろうが、それにしても通史に關しては山ほどあるやり残したこと全てに眼をつぶつて、ここで発行するのにはかなりの勇氣が必要であった。後世、これを材料として、より完璧なものを編集するための「たたき台」としてもらえれば、それが本書の役割になるかと思う。

一方、第三部の諸分野の専門家諸氏による寄稿は、この教会史に広がりを与えてくれている。

今回、教会史編集の作業を始めるにあつて祝福を与え、貴重な文献・写真をご紹介下さり、巻頭の挨拶をご執筆下さった仙台のセラフイム辻永主教座下、編集全般のアドバイスと蔵書の閲覧に便宜を図り、また

自ら執筆の労を執って下さった函館市中央図書館館長長谷部一弘氏はじめ、ご協力下さった皆様に心より感謝を申し上げます。

二〇一一年一〇月一四日（金）

生神女庇護祭の日に

函館ハリストス正教会 司祭 ニコライ・ドミートリエフ

【ご協力頂いた方々】(敬称略)

仙台ハリストス正教会 盛岡ハリストス正教会
札幌ハリストス正教会 大阪ハリストス正教会
函館市中央図書館 市立函館博物館
仙台の主教セラフイム辻永座下
兔内勇津流 (北海道大学スラブ研究センター)
イオアン釜谷幹雄輔祭 (北鹿ハリストス正教会)
伊藤一哉 (北海道新聞社)
植村隆 (朝日新聞社)
麓和善 (名古屋工業大学大学院)
大下智一 (北海道立函館美術館)
長谷部一弘 (函館市中央図書館)
奥野進 (函館市中央図書館)
佐藤理夫 保科智雄 大矢京右 (市立函館博物館)
佐藤智雄 (函館市教育委員会)
倉田有佳 (函館日口交流史研究会)
タイシヤ高井醇子 (函館ハリストス正教会)
アルカディ佐藤智美 (上磯ハリストス正教会)
西村さゆり

【編集委員会】

司 祭 ニコライ・ドミートリエフ
輔 祭 アキラ吉川昭
伝教者 イシドル中居真行
セルギイ下田行孝

パウエル村井正雄 (故人)

イオシフ落合良治

ニコライ松井靖介

ソフィヤ村井幸枝

アンナ森もと子

イリナ鈴木恵美子

【作業班】

マリヤ大谷孝子

エリザヴェータ加藤きくえ

ナデジダ高島昭子

アナスタシヤ村岸いづみ

【執筆班 (通史及び年表)】

安政く明治 スヴェトラナ山崎瞳

大正く平成 ユリヤ松井真佐子

函館ハリストス正教会史

亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来150年記念

発行日 2011年12月25日

編 集 函館ハリストス正教会史編集委員会

発 行 函館ハリストス正教会

〒040-0054 北海道函館市元町3-13

TEL 0138-23-7387

印 刷 阿部総合印刷株式会社

大日本正教會會略圖





圖中符号表
 ⊕ 本會位置
 ⊙ 司祭居住地
 ⊕ 教會
 ⊙ 教會
 例言
 圖中記ス所ノ會堂ハ聖堂會
 堂飯會堂ノ差別ナク公祈禱
 所ノアル所ヲ示スノミ但シ
 景況表ニ記載ナキハ省キ
 タリ
 東京府下ハ本會ノ外ニ聖堂
 七會堂アレド紙幅ノ狹隘ナ
 ルヲ以テ記セス



ХРАМ ВОСКРЕСЕНИЯ ХРИСТОВА · ХАКОДАТЕ

佐井繪巳十版

